大学院文学研究科
シラバス

平成29年度
［2017年度］

大阪市立大学大学院
文学研究科

www.lit.osaka-cu.ac.jp

平成 29 年度学年歴

学年開始	4月 1日（土）
新入生ガイダンス	4月 3日（月）
入学式	4月 5日（水）
新入生健康診断	4月 7日（金）
前期授業開始日	4月10日（月）
博士論文提出期間（9月修了）	5月 1日（月）～6月12日（月）
振替授業日	5月30日（火）金曜日の授業を実施
創立記念日	6月 1日（木）（通常通り授業実施）
授業・試験期間	7月24日（月）～8月 4日（金）
夏季休業	8月 5日（土）～9月15日（金）
研修期間	9月16日（土）～9月30日（土）
後期授業開始日	10月 2日（月）
博士論文提出期間	11月 1日（水）～12月11日（月）
振替授業日	11月21日（火）木曜日の授業を実施
振替授業日	11月22日（水）金曜日の授業を実施
冬季休業	12月23日（土）～1月 7日（日）
修士論文提出期限	1月10日（水）
授業・試験期間	1月30日（火）～2月13日（火）
振替授業日	2月13日（火）月曜日の授業・試験を実施
研修期間	2月14日（水）～3月19日（月）
春季休業	3月20日（火）～

※ 振替授業日 ― 各曜日に一定の授業回数を確保するため、授業回数が多い曜日に授業回数が少ない曜日の授業を行う。

※ 研修期間 ― 集中講義や補講などが行われることがある。

※ 授業・試験期間 ― 定期試験や授業を行う。

※ 卒業式 ― 日程確定後、ホームページ（ホーム＞教育・学生生活＞授業・履修関係＞行事予定・授業時間）に掲載します。

振替試験日及び試験期間について

近年、祝日の増加・変更や大学行事に伴う休講措置等により、授業・試験にあてることのできる日数が減少しています。そこで、本学では振替授業（・試験）日を設けるとともに、さらに回数が不足する場合は、休業期間や研修期間に授業・試験を実施する場合があります。

☆ 参考

・センター入試準備に伴う休講

平成30年1月12日（金）全時限

［センター試験：1月13日（土）・14日（日）］

平成 29 年度カレンダー（大学院）

4月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

3日（月）新入生ガイダンス
5日（水）入学式
7日（金）新入生健康診断
10日（月）前期授業開始

5月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30（金）	31			

30日（火）振替授業日
（金曜の授業を実施）

6月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

7月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

24日（月）～8月4日（金）
授業・試験期間

8月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

5日（土）～9月15日（金）
夏季休業期間

9月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

16日（土）～30日（土）
研修期間

10月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2日（月）後期授業開始

11月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21（木）	22（金）	23	24	25
26	27	28	29	30		

21日（火）振替授業日
（木曜の授業を実施）
22日（水）振替授業日
（金曜の授業を実施）

12月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

23日（土）～1月7日（日）
冬季休業期間

1月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

12日（金）センター試験に
伴う休講措置

30日（火）～2月13日（火）
授業・試験期間

2月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13（月）	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

13日（火）振替授業日
（月曜の授業・試験を実施）
14日（水）～3月19日（月）
研修期間

3月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

20日（火）～春季休業期間

目　　次

平成 29 年度学年暦 …… i

平成 29 年度カレンダー（大学院） …… ii

履修上の注意 …… 1

前期博士課程科目 …… 2

後期博士課程科目 …… 179

教　員　名　簿 …… 193

教 室 見 取 り 図 …… 198

杉本キャンパスマップ …… 204

前期博士課程

・哲学歴史学専攻

・人間行動学専攻

・言語文化学専攻

・アジア都市文化学専攻

・共　通　科　目

履修上の注意

●大学院科目表に整理番号を付与して、掲載番号順に授業概要（シラバス）を作成した。開講期欄に時間割を記入しているが、時間割表と違う場合は、時間割表が優先するので、必ず時間割表で確認すること。

●平成28（2016）年度より、大阪市立大学で開講されているすべての科目に９桁のアルファベットおよび数字によるナンバーづけ（ナンバリング）が行われている。文学研究科の科目に関するナンバリングの基本的な考え方は以下の通りである。なお、学部の科目や教職科目等については学部の『科目履修の手引き』などを参照のこと。

①最初のアルファベット２桁は、科目の提供主体である文学研究科と専攻を意味するLA（哲学歴史学専攻）・LB（人間行動学専攻）・LC（言語文化学専攻）・LD（アジア都市文化学専攻）とし、研究科共通科目はLXとする。

②３～５桁目のアルファベットは専修（ないしは専攻分野）を表す。

・哲学歴史学専攻：哲学＝PHL、日本史＝JPH、東洋史学＝WHE、西洋史学＝WHW

・人間行動学専攻：社会学＝SOC、心理学＝PSY、教育学＝EDU、地理学＝GEO

・言語文化学専攻：国語国文学＝JPN、中国語中国文学＝CHN、英米言語文化＝ENG、ドイツ語圏言語文化領域＝DFD、フランス語圏言語文化領域＝DFF、言語応用＝LNG、表現文化＝ART

・アジア都市文化学専攻＝ASA

・研究科で共通の科目、専攻で共通の科目は、GENとする。

③６桁目は、学修マップ上の位置づけを、以下の４段階で表示する。

・前期博士課程　専攻共通科目＝１　分野専門科目＝２　研究指導科目＝３

・後期博士課程　論文指導＝４　その他＝４

④７桁目は、標準履修年次の最小学年を表す。具体的には、Ｍ１＝５、Ｍ２＝６、Ｄ１～＝７とする。

⑤８～９桁目は科目特定番号であり、科目表の配列順になっている。

●大学院学生は、教育職員免許の専修免許状取得の前提となる、１種教育職員免許取得のために、学部提供科目を履修して不足単位を補うことができる。履修については、当該教授会での許可が必要である。履修登録を行うとともに、別途「学部提供科目履修願」を学生サポートセンター文学研究科教務担当に提出して学部科目を受講すること。後日、全学ポータルサイトへの掲載および、掲示により通知するので必ず確認すること。許可されなかった場合は、学部提供科目は履修できない。

●大学院学生は、学芸員資格に関する学部提供科目を履修することができる。履修については、当該教授会での許可が必要である。履修登録を行うとともに、別途「学部提供科目履修願」を学生サポートセンター文学研究科教務担当に提出して学部科目を受講すること。後日、全学ポータルサイトへの掲載および、掲示により通知するので必ず確認すること。許可されなかった場合は、学部提供科目は履修できない。

●他研究科の大学院生で履修を希望する者は、開講前に科目提供専修（アジア都市文化学は専攻）に相談すること。共通科目については、事務担当まで申し出ること。

●大学院科目表の［　］は特任教員、（　）は非常勤講師を表す。

前期博士課程科目

科目番号	科目名	科目ナンバー	教員名	単位数	備考
■哲学歴史学専攻					
M１	人間文化学研究Ⅰ	LAGEN1501	仲原	２単位	
M２	人間文化学研究Ⅱ	LAGEN1502	塚田・平田・北村	２単位	
M３	哲学研究	LAPHL2501	仲原	２単位	
M４	哲学研究演習	LAPHL2502	高梨	２単位	
M５	西洋哲学史研究	LAPHL2503	（脇坂）	２単位	学部と共通
M６	西洋哲学史研究演習	LAPHL2504	高梨	２単位	
M７	倫理学研究	LAPHL2505	土屋	２単位	
M８	倫理学研究演習	LAPHL2506	土屋	２単位	
M９	美学研究	LAPHL2507	高梨	２単位	
M10	美学研究演習	LAPHL2508	高梨	２単位	
M11	宗教学研究	LAPHL2509	仲原	２単位	
M12	宗教学研究演習	LAPHL2510	仲原	２単位	
—	論理学・科学哲学研究Ⅰ	LAPHL2511	（休）	２単位	
M13	論理学・科学哲学研究Ⅱ	LAPHL2512	土屋	２単位	学部と共通
M14	哲学総合研究Ⅰ	LAPHL2513	仲原・高梨	２単位	
M15	哲学総合研究Ⅱ	LAPHL2514	仲原・高梨・土屋	２単位	
M16	哲学研究指導Ⅰ	LAPHL3601	仲原・高梨	２単位	
M17	哲学研究指導Ⅱ	LAPHL3602	仲原・高梨	２単位	
M18	日本史学研究Ⅰ	LAJPH2501	磐下	２単位	
M19	日本史学研究演習１	LAJPH2502	磐下	２単位	
M20	日本史学研究Ⅱ	LAJPH2503	仁木	２単位	
M21	日本史学研究演習２	LAJPH2504	仁木	２単位	
M22	日本史学研究Ⅲ	LAJPH2505	塚田	２単位	
M23	日本史学研究演習３	LAJPH2506	塚田	２単位	
M24	日本史学研究Ⅳ	LAJPH2507	佐賀	２単位	
M25	日本史学研究演習４	LAJPH2508	佐賀	２単位	
M26	日本史学研究Ⅴ	LAJPH2509	（網）	２単位	学部と共通
M27	日本史学研究Ⅵ	LAJPH2510	（小野沢）	２単位	学部と共通
M28	考古学研究	LAJPH2511	岸本（直）	２単位	
M29	考古学研究演習	LAJPH2512	岸本（直）	２単位	
M30	日本史学総合研究Ⅰ	LAJPH2513	塚田・仁木・岸本・佐賀・磐下	２単位	
M31	日本史学総合研究Ⅱ	LAJPH2514	塚田・仁木・岸本・佐賀・磐下	２単位	
M32	日本史学研究指導Ⅰ	LAJPH3601	塚田・仁木・岸本・佐賀	２単位	
M33	日本史学研究指導Ⅱ	LAJPH3602	塚田・仁木・岸本・佐賀	２単位	
—	東洋史学研究Ⅰ	LAWHE2501	（休）	２単位	
—	東洋史学研究演習１	LAWHE2502	（休）	２単位	
M34	東洋史学研究Ⅱ	LAWHE2503	平田	２単位	
M35	東洋史学研究演習２	LAWHE2504	平田	２単位	
M36	東洋史学研究Ⅲ	LAWHE2505	平田	２単位	
M37	東洋史学研究演習３	LAWHE2506	平田	２単位	
M38	東洋史学研究Ⅳ	LAWHE2507	上野	２単位	
M39	東洋史学研究演習４	LAWHE2508	上野	２単位	
M40	東洋史学研究Ⅴ	LAWHE2509	（永田）	２単位	学部と共通
M41	東洋史学研究Ⅵ	LAWHE2510	（長縄）	２単位	学部と共通
M42	東洋史学総合研究Ⅰ	LAWHE2511	平田・野村	２単位	
M43	東洋史学総合研究Ⅱ	LAWHE2512	平田	２単位	
M44	東洋史学研究指導Ⅰ	LAWHE3601	平田	２単位	
M45	東洋史学研究指導Ⅱ	LAWHE3602	平田	２単位	
M46	世界史学研究	LAGEM2501	野村	２単位	学部と共通
M47	世界史学研究演習	LAGEM2502	（山根）	２単位	学部と共通
—	西洋史学研究Ⅰ	LAWEW2503	（休）	２単位	
M48	西洋史学研究演習１	LAWEW2504	（大清水）	２単位	学部と共通
M49	西洋史学研究Ⅱ	LAWEW2505	草生	２単位	

科目番号	科目名	科目ナンバー	教員名	単位数	備考
M50	西洋史学研究演習２	LAWEW2506	草生	２単位	
M51	西洋史学研究Ⅲ	LAWEW2507	大黒	２単位	
M52	西洋史学研究演習３	LAWEW2508	大黒	２単位	
M53	西洋史学研究Ⅳ	LAWEW2509	北村	２単位	
M54	西洋史学研究演習４	LAWEW2510	北村	２単位	
M55	西洋史学研究Ⅴ	LAWEW2511	（上垣）	２単位	学部と共通
—	西洋史学研究Ⅵ	LAWEW2512	（休）	２単位	
M56	西洋史学総合研究Ⅰ	LAWEW2513	大黒・北村・草生	２単位	
M57	西洋史学総合研究Ⅱ	LAWEW2514	大黒・北村・草生	２単位	
M58	西洋史学研究指導Ⅰ	LAWEW3601	大黒・北村	２単位	
M59	西洋史学研究指導Ⅱ	LAWEW3602	大黒・北村	２単位	

■人間行動学専攻

M60	人間行動学研究Ⅰ	LBGEN1501	進藤	２単位	
M61	人間行動学研究Ⅱ	LBGEN1502	（成田）	２単位	学部と共通
M62	人間行動学研究Ⅲ	LBGEN1503	（湯浅）	２単位	学部と共通
M63	人間行動学研究Ⅳ	LBGEN1504	（佐藤（廉））	２単位	学部と共通
M64	社会学基礎問題研究Ⅰ	LBSOC2501	進藤	２単位	
M65	社会学基礎問題研究演習１	LBSOC2502	進藤	２単位	
M66	社会学基礎問題研究Ⅱ	LBSOC2503	石田	２単位	
M67	社会学基礎問題研究演習２	LBSOC2504	石田	２単位	
M68	社会学特殊問題研究Ⅰ	LBSOC2505	伊地知	２単位	
M69	社会学特殊問題研究演習１	LBSOC2506	伊地知	２単位	
M70	社会学特殊問題研究Ⅱ	LBSOC2507	川野	２単位	
M71	社会学特殊問題研究演習２	LBSOC2508	川野	２単位	
—	社会学特殊問題研究Ⅲ	LBSOC2509	（休）	２単位	
—	社会学特殊問題研究演習３	LBSOC2510	（休）	２単位	
M72	社会学特殊問題研究Ⅳ	LBSOC2511	（藤代）	２単位	学部と共通
M73	社会学特殊問題研究Ⅴ	LBSOC2512	（藤原）	２単位	学部と共通
M74	社会学総合研究Ⅰ	LBSOC2513	進藤・石田・伊地知・川野	２単位	
M75	社会学総合研究Ⅱ	LBSOC2514	進藤・石田・伊地知・川野	２単位	
M76	社会学研究指導Ⅰ	LBSOC3601	進藤・石田・伊地知・川野	２単位	
M77	社会学研究指導Ⅱ	LBSOC3602	進藤・石田・伊地知・川野	２単位	
M78	心理学基礎問題研究	LBPSY2501	池上	２単位	
M79	心理学基礎問題研究演習	LBPSY2502	池上	２単位	
M80	実験心理学研究	LBPSY2503	山	２単位	
M81	実験心理学研究演習	LBPSY2504	山	２単位	
M82	心理学特殊問題研究Ⅰ	LBPSY2505	川邉	２単位	
M83	心理学特殊問題研究演習１	LBPSY2506	川邉	２単位	
M84	心理学特殊問題研究Ⅱ	LBPSY2507	佐伯	２単位	
M85	心理学特殊問題研究演習２	LBPSY2508	佐伯	２単位	
—	心理学特殊問題研究Ⅲ	LBPSY2509	（休）	２単位	
—	心理学特殊問題研究Ⅳ	LBPSY2510	（休）	２単位	
M86	心理学総合研究Ⅰ	LBPSY2511	池上・山・川邉・佐伯	２単位	
M87	心理学総合研究Ⅱ	LBPSY2512	池上・山・川邉・佐伯	２単位	
M88	心理学研究指導Ⅰ	LBPSY3601	池上・山	２単位	
M89	心理学研究指導Ⅱ	LBPSY3602	池上・山	２単位	
M90	教育学基礎問題研究	LBEDU2501	柏木	２単位	
M91	教育学基礎問題研究演習	LBEDU2502	柏木	２単位	
M92	学校教育学研究Ⅰ	LBEDU2503	島田	２単位	
M93	学校教育学研究演習１	LBEDU2504	島田	２単位	
M94	学校教育学研究Ⅱ	LBEDU2505	森	２単位	
M95	学校教育学研究演習２	LBEDU2506	森	２単位	
M96	教育学特殊問題研究Ⅰ	LBEDU2507	（辻野）	２単位	
M97	教育学特殊問題研究演習１	LBEDU2508	（辻野）	２単位	
M98	教育学特殊問題研究Ⅱ	LBEDU2509	添田	２単位	
M99	教育学特殊問題研究演習２	LBEDU2510	添田	２単位	

科目番号	科目名	科目ナンバー	教員名	単位数	備考
M100	教育学総合研究Ⅰ	LBEDU2511	柏木・添田・森・島田	2単位	
M101	教育学総合研究Ⅱ	LBEDU2512	柏木・添田・森・島田	2単位	
M102	教育学研究指導Ⅰ	LBEDU3601	柏木	2単位	
M103	教育学研究指導Ⅱ	LBEDU3602	柏木	2単位	
M104	地理学基礎問題研究	LBGEO2501	山﨑（孝）	2単位	
M105	地理学基礎問題研究演習	LBGEO2502	山﨑（孝）	2単位	
M106	地理情報論研究	LBGEO2503	木村	2単位	
M107	地理情報論研究演習	LBGEO2504	木村	2単位	
M108	人文地理学特殊問題研究Ⅰ	LBGEO2505	水内	2単位	学部と共通
M109	人文地理学特殊問題研究演習 1	LBGEO2506	水内	2単位	
M110	人文地理学特殊問題研究Ⅱ	LBGEO2507	大場	2単位	
M111	人文地理学特殊問題研究演習 2	LBGEO2508	大場	2単位	
M112	人文地理学特殊問題研究Ⅲ	LBGEO2509	祖田	2単位	
M113	人文地理学特殊問題研究演習 3	LBGEO2510	祖田	2単位	
M114	地理学総合研究Ⅰ	LBGEO2511	大場・水内・山﨑（孝）・祖田・木村	2単位	
M115	地理学総合研究Ⅱ	LBGEO2512	大場・水内・山﨑（孝）・祖田・木村	2単位	
M116	地理学研究指導Ⅰ	LBGEO3601	大場・水内・山﨑（孝）・祖田	2単位	
M117	地理学研究指導Ⅱ	LBGEO3602	大場・水内・山﨑（孝）・祖田	2単位	

■言語文化学専攻

—	言語文化学研究Ⅰ	LCGEN1501	（休）	2単位	
M118	言語文化学研究Ⅱ	LCGEN1502	高島	2単位	
M119	言語文化学研究Ⅲ	LCGEN1503	久堀	2単位	
—	言語文化学研究Ⅳ	LCGEN1504	（休）	2単位	
M120	国文学研究Ⅰ	LCJPN2501	久堀	2単位	
M121	国文学研究演習 1	LCJPN2502	久堀	2単位	
M122	国文学研究Ⅱ	LCJPN2503	小林	2単位	
M123	国文学研究演習 2	LCJPN2504	小林	2単位	
—	国文学研究Ⅲ	LCJPN2505	（休）	2単位	
—	国文学研究演習 3	LCJPN2506	（休）	2単位	
M124	国文学研究Ⅳ	LCJPN2507	奥野	2単位	
M125	国文学研究演習 4	LCJPN2508	奥野	2単位	
M126	国語学研究	LCJPN2509	丹羽	2単位	
M127	国語学研究演習	LCJPN2510	丹羽	2単位	
M128	国語国文学研究	LCJPN2511	（水谷）	2単位	学部と共通
M129	国語国文学研究演習	LCJPN2512	（水谷）	2単位	学部と共通
M130	国語国文学総合研究Ⅰ	LCJPN2513	丹羽・小林・久堀・奥野	2単位	
M131	国語国文学総合研究Ⅱ	LCJPN2514	丹羽・小林・久堀・奥野	2単位	
M132	国語国文学研究指導Ⅰ	LCJPN3601	丹羽・小林	2単位	
M133	国語国文学研究指導Ⅱ	LCJPN3602	丹羽・小林	2単位	
M134	中国文学研究	LCCHN2501	松浦	2単位	
M135	中国文学研究演習	LCCHN2502	松浦	2単位	
M136	中国文化学研究	LCCHN2503	張	2単位	
M137	中国文化学研究演習	LCCHN2504	張	2単位	
M138	中国語学研究	LCCHN2505	岩本	2単位	
M139	中国語学研究演習	LCCHN2506	岩本	2単位	
M140	中国文献文化学研究Ⅰ	LCCHN2507	大岩本	2単位	
M141	中国文献文化学研究演習 1	LCCHN2508	大岩本	2単位	
M142	中国文献文化学研究Ⅱ	LCCHN2509	（竹内）	2単位	
M143	中国語応用研究	LCCHN2510	松浦・張	2単位	
M144	中国語中国文学総合研究Ⅰ	LCCHN2511	松浦・張	2単位	
M145	中国語中国文学総合研究Ⅱ	LCCHN2512	松浦・岩本・張	2単位	
M146	中国語中国文学研究指導Ⅰ	LCCHN3601	松浦・岩本・張	2単位	
M147	中国語中国文学研究指導Ⅱ	LCCHN3602	松浦・岩本・張	2単位	
—	英文学研究Ⅰ	LCENG2501	（休）	2単位	
—	英文学研究演習 1	LCENG2502	（休）	2単位	
M148	英文学研究Ⅱ	LCENG2503	田中（孝）	2単位	

科目番号	科目名	科目ナンバー	教員名	単位数	備考
M149	英文学研究演習 2	LCENG2504	田中（孝）	2 単位	
M150	英文学研究Ⅲ	LCENG2505	杉井	2 単位	
M151	英文学研究演習 3	LCENG2506	杉井	2 単位	
M152	米文学研究	LCENG2507	古賀	2 単位	
M153	米文学研究演習	LCENG2508	古賀	2 単位	
M154	英米文化学研究	LCENG2509	リチャーズ	2 単位	
M155	英米文化学研究演習	LCENG2510	リチャーズ	2 単位	
M156	英語学研究Ⅰ	LCENG2511	豊田	2 単位	
M157	英語学研究演習 1	LCENG2512	豊田	2 単位	
—	英語学研究Ⅱ	LCENG2513	（休）	2 単位	
—	英語学研究演習 2	LCENG2514	（休）	2 単位	
M158	英米言語文化論	LCENG2515	（渡邊）	2 単位	学部と共通
M159	英語英米文学総合研究Ⅰ	LCENG2516	杉井・田中（孝）	2 単位	
M160	英語英米文学総合研究Ⅱ	LCENG2517	杉井・田中（孝）	2 単位	
M161	英語英米文学研究指導Ⅰ	LCENG3601	杉井・田中（孝）	2 単位	
M162	英語英米文学研究指導Ⅱ	LCENG3602	杉井・田中（孝）	2 単位	
—	ドイツ語フランス語圏言語文化研究Ⅰ	LCDFX2501	（休）	2 単位	
M163	ドイツ語フランス語圏言語文化研究Ⅱ	LCDFX2502	福島	2 単位	学部と共通
M164	ドイツ語圏文学研究Ⅰ	LCDFD2501	髙井	2 単位	
M165	ドイツ語圏文学研究演習 1	LCDFD2502	髙井	2 単位	
—	ドイツ語圏文学研究Ⅱ	LCDFD2503	（休）	2 単位	
M166	ドイツ語圏文学研究演習 2	LCDFD2504	（廣瀬（千））	2 単位	
—	ドイツ語圏文化学研究	LCDFD2505	（休）	2 単位	
M167	ドイツ語圏文化学研究演習	LCDFD2506	髙井	2 単位	
M168	ドイツ語学研究	LCDFD2507	神竹	2 単位	
M169	ドイツ語学研究演習	LCDFD2508	神竹	2 単位	
M170	フランス語圏文学研究	LCDFF2501	原野	2 単位	
M171	フランス語圏文学研究演習	LCDFF2502	原野	2 単位	
M172	フランス語圏文化学研究	LCDFF2503	白田	2 単位	
M173	フランス語圏文化学研究演習	LCDFF2504	白田	2 単位	
M174	フランス語学研究	LCDFF2505	福島	2 単位	
M175	フランス語学研究演習	LCDFF2506	福島	2 単位	
M176	フランス語圏言語文化論Ⅰ	LCDFF2507	原野	2 単位	
M177	フランス語圏言語文化論Ⅱ	LCDFF2508	白田	2 単位	
M178	ヨーロッパ言語文化学研究	LCDFX2503	神竹	2 単位	学部と共通
—	多文化学研究	LCDFX2504	（休）	2 単位	
—	地域社会文化学研究Ⅰ	LCDFX2505	（休）	2 単位	
M179	地域社会文化学研究Ⅱ	LCDFX2506	（粕谷）	2 単位	学部と共通
M180	ドイツ語フランス語圏言語文化学総合研究Ⅰ	LCDFX2507	神竹・高井・福島・白田・原野	2 単位	
M181	ドイツ語フランス語圏言語文化学総合研究Ⅱ	LCDFX2508	神竹・高井・福島・白田・原野	2 単位	
M182	ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ	LCDFX3601	神竹・福島	2 単位	
M183	ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ	LCDFX3602	神竹・福島	2 単位	
M184	言語応用学研究Ⅰ	LCLNG2501	関	2 単位	
M185	言語応用学研究演習 1	LCLNG2502	関	2 単位	
M186	言語応用学研究Ⅱ	LCLNG2503	井狩	2 単位	
M187	言語応用学研究演習 2	LCLNG2504	井狩	2 単位	
M188	言語応用学研究Ⅲ	LCLNG2505	山崎（雅）	2 単位	
M189	言語応用学研究演習 3	LCLNG2506	山崎（雅）	2 単位	
M190	言語応用学研究Ⅳ	LCLNG2507	田中（一）	2 単位	
M191	言語応用学研究演習 4	LCLNG2508	田中（一）	2 単位	
M192	言語応用学総合研究Ⅰ	LCLNG2509	関・井狩・山崎（雅）・田中（一）	2 単位	
M193	言語応用学総合研究Ⅱ	LCLNG2510	関・井狩・山崎（雅）・田中（一）	2 単位	
M194	言語応用学研究指導Ⅰ	LCLNG3601	関・井狩・山崎（雅）・田中（一）	2 単位	
M195	言語応用学研究指導Ⅱ	LCLNG3602	関・井狩・山崎（雅）・田中（一）	2 単位	
M196	表現文化学研究Ⅰ	LCART2501	小田中	2 単位	
M197	表現文化学研究演習 1	LCART2502	小田中	2 単位	
M198	表現文化学研究Ⅱ	LCART2503	野末	2 単位	
M199	表現文化学研究演習 2	LCART2504	野末	2 単位	

科目番号	科目名	科目ナンバー	教員名	単位数	備考
M200	表現文化学研究Ⅲ	LCART2505	三上	2単位	
M201	表現文化学研究演習3	LCART2506	三上	2単位	
M202	表現文化学研究Ⅳ	LCART2507	海老根	2単位	
M203	表現文化学研究演習4	LCART2508	海老根	2単位	
—	表現文化学研究Ⅴ	LCART2509	（休）	2単位	
M204	表現文化学研究演習5	LCART2510	高島	2単位	
—	表現文化学研究Ⅵ	LCART2511	（休）	2単位	
M205	表現文化学特殊研究	LCART2512	（土居）	2単位	学部と共通
M206	表現文化学総合研究Ⅰ	LCART2513	三上・小田中・野末	2単位	
M207	表現文化学総合研究Ⅱ	LCART2514	三上・小田中・野末	2単位	
M208	表現文化学研究指導Ⅰ	LCART3601	三上・小田中・野末	2単位	
M209	表現文化学研究指導Ⅱ	LCART3602	三上・小田中・野末	2単位	

■アジア都市文化学専攻

M210	アジア都市文化学基礎研究Ⅰ	LDASA1501	多和田	2単位	
M211	アジア都市文化学基礎研究Ⅱ	LDASA1502	野崎・増田	2単位	
M212	都市文化学研究	LDASA2501	増田	2単位	
M213	都市文化学研究演習	LDASA2502	増田	2単位	
M214	都市環境学研究	LDASA2503	菅原	2単位	
M215	都市環境学研究演習	LDASA2504	菅原	2単位	
—	アジア地域文化学研究Ⅰ	LDASA2505	（休）	2単位	
—	アジア地域文化学研究演習1	LDASA2506	（休）	2単位	
M216	アジア地域文化学研究Ⅱ	LDASA2507	野崎	2単位	
M217	アジア地域文化学研究演習2	LDASA2508	野崎	2単位	
—	アジア歴史文化学研究	LDASA2509	（休）	2単位	
—	アジア歴史文化学研究演習	LDASA2510	（休）	2単位	
M218	アジア民族文化学研究	LDASA2511	多和田	2単位	
M219	アジア民族文化学研究演習	LDASA2512	多和田	2単位	
M220	アジア比較文化学研究	LDASA2513	堀	2単位	
M221	アジア比較文化学研究演習	LDASA2514	堀	2単位	
—	アジア大阪比較都市文化学研究Ⅰ	LDASA2515	（休）	2単位	
—	アジア大阪比較都市文化学研究Ⅰ	LDASA2516	（休）	2単位	
—	アジア比較言語文化学研究	LDASA2517	（休）	2単位	
M222	アジア観光文化学研究	LDASA2518	天野	2単位	
M223	アジア観光文化学研究演習	LDASA2519	天野	2単位	
M224	アジア都市文化学特講Ⅰ	LDASA2520	（橋爪）	2単位	
—	アジア都市文化学特講Ⅱ	LDASA2521	（休）	2単位	
M225	アジア都市文化学総合研究Ⅰ	LDASA2522	野崎・多和田・増田・堀・天野	2単位	
M226	アジア都市文化学総合研究Ⅱ	LDASA2523	野崎・多和田・増田・堀・天野	2単位	
M227	アジア都市文化学研究指導Ⅰ	LDASA3601	野崎・多和田	2単位	
M228	アジア都市文化学研究指導Ⅱ	LDASA3602	野崎・多和田	2単位	

◆共通科目

—	比較文化交流論Ⅰ	LXGEN2501	（休）	2単位	
—	比較文化交流論Ⅱ	LXGEN2502	（休）	2単位	
M229	国際都市文化論Ⅰ	LXGEN2503	山・（ライ）・（ラングリー）	2単位	学部と共通
—	国際都市文化論Ⅱ	LXGEN2504	（休）	2単位	
—	国際都市社会論Ⅰ	LXGEN2505	（休）	2単位	
—	国際都市社会論Ⅱ	LXGEN2506	（休）	2単位	

哲学歴史学専攻

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN1501	開講期	単位数
M1	人間文化学研究 I Higher Studies in Human and Culture I			後月 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仲原 孝 教授			

●科目の主題

哲学の基本的な研究態度を身につけるとともに、受講者各自が主体的に問題を立て、必要な文献を探索して読解し、それを使って研究論文を構築するまでのプロセスを実践的に学ぶ。

●到達目標

受講者各自が哲学的な研究論文を構築する技能を身につけることを目標とする。

●授業内容・授業計画

今年はカントの『純粋理性批判』をとりあげ、それを原書講読しながら、受講者が各自の問題意識に応じたテーマを設定し、それについての研究論文的レポートを作成するところまでを指導する。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　原書講読 (1)
第 3 回　原書講読 (2)
第 4 回　原書講読 (3)
第 5 回　原書講読 (4)
第 6 回　原書講読 (5)
第 7 回　中間研究発表と講評
第 8 回　資料探索とレポート構築とのための指示
第 9 回　原書ないし資料講読 (1)
第 10 回　原書ないし資料講読 (2)
第 11 回　原書ないし資料講読 (3)
第 12 回　原書ないし資料講読 (4)
第 13 回　原書ないし資料講読 (5)
第 14 回　最終研究発表と講評
第 15 回　レポートへの評価。論文構成上の指導

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

遅刻は大幅に減点する。特段の理由なく欠席した者には単位を認めないので注意すること。

●参考文献・教材

必要な資料は印刷して授業中に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEN1502	開講期	単位数
M2	人間文化学研究 II Higher Studies in Human and Culture II			後火 1	2 単位
	授業形態 講義・演習	担当教員名 塚田 孝 教授／平田 茂樹 教授／北村 昌史 教授			

●科目の主題

歴史学の意義と研究法

●到達目標

各受講生が歴史研究を行うに際して、専門とする分野に限定されない広い視野を養う。

●授業内容・授業計画

人間文化を歴史的に把握する意義を、理念・学史・方法の視点から検討する。日本史、東洋史、西洋史を横断し、広く「歴史とは何か」を考え、歴史的世界に規定された人間文化の併存と現代社会における人間文化の統合について理解を深め、現代社会において歴史学研究を行なう意味を確認する。授業は、受講者の報告を受けて進める。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　歴史とは何か①
第 3 回　歴史とは何か②
第 4 回　歴史学の歴史―日本―①
第 5 回　歴史学の歴史―日本―②
第 6 回　歴史学の歴史―中国―①
第 7 回　歴史学の歴史―中国―②
第 8 回　歴史学の歴史―ヨーロッパ―①
第 9 回　歴史学の歴史―ヨーロッパ―②
第 10 回　現代歴史学の方法①
第 11 回　現代歴史学の方法②
第 12 回　現代歴史学の方法③
第 13 回　現代歴史学の方法④
第 14 回　現代歴史学の方法⑤
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前に指示された文献を読んでおくこと。授業を通して得られたことを総合レポートにまとめること。

●評価方法

平常点（出席、報告・レポート）。

●受講生へのコメント

具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

プリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2501	開講期	単位数
M3	**哲学研究** Advanced studies in Philosophy			前水 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 仲原 孝 教授			

●科目の主題

哲学の諸問題について、特定のテキストの読解を軸に哲学研究を行う。
哲学研究に必要な文献の調べ方・読み方・まとめ方、そして発表や議論の仕方などを実践的に学習する。

●到達目標

哲学研究に必要とされる、高度な能力の涵養と問題意識の進化を目指す。

●授業内容・授業計画

受講生の希望と必要に応じて、初回の授業でいくつかのオプションを提示する。
特に希望などがない場合、次のテキストにしたがって、物理学（physics）と形而上学（metaphysics）の関係について考察する。Tim Maudlin (2012) Philosophy of Physics: Space and Time, Princeton University Press.

第 1 回　導入：物理学を哲学する
第 2 回　第 1 章の講読 1 および「時間と空間に関する古典的な説明」についての講義 1
第 3 回　第 1 章の講読 2 および「時間と空間に関する古典的な説明」についての講義 2
第 4 回　第 2 章の講読 1 および「空間と時間の構造に関するエビデンス」についての講義 1
第 5 回　第 2 章の講読 2 および「空間と時間の構造に関するエビデンス」についての講義 2
第 6 回　第 3 章の講読 1 および「観察不可能な構造の消去」についての講義 1
第 7 回　第 3 章の講読 2 および「観察不可能な構造の消去」についての講義 2
第 8 回　第 4 章の講読 1 および「特殊相対性理論」についての講義 1
第 9 回　第 4 章の講読 2 および「特殊相対性理論」についての講義 2
第 10 回　第 5 章の講読 1 および「測定の物理学」についての講義 1
第 11 回　第 5 章の講読 2 および「測定の物理学」についての講義 2
第 12 回　第 6 章の講読 1 および「一般相対性理論」についての講義 1

第 13 回　第 6 章の講読 2 および「一般相対性理論」についての講義 2
第 14 回　第 7 章の講読 1 および「時間の向きとトポロジー」についての講義 1
第 15 回　第 7 章の講読 1 および「時間の向きとトポロジー」についての講義 1

●事前・事後学習の内容
授業で取り上げて欲しいテーマや進め方など、何か提案がないか各自で検討しておく。
●評価方法
平常点と課題の達成度を評価の対象とする。
●受講生へのコメント
積極的に質問し、自分自身の問題意識を明確にしていくことを期待する。
●参考文献・教材
授業中に提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2502	開講期	単位数
M4	**哲学研究演習** Advanced Seminar in Philosophy			後水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 高梨 友宏 教授			

●科目の主題
哲学の諸問題について、特定のテキストの読解を軸に哲学研究を行う。
哲学研究に必要な文献の調べ方・読み方・まとめ方、そして発表や議論の仕方などを実践的に学習する。
●到達目標
哲学研究に必要とされる、高度な能力の涵養と問題意識の進化を目指す。
●授業内容・授業計画
受講生の希望と必要に応じて、初回の授業でいくつかのオプションを提示する。
特に希望などがない場合、次のテキストにしたがって、物理学 (physics) と形而上学 (metaphysics) の関係について考察する。Tim Maudlin (2007) The Metaphysics within Physics, Oxford University Press.

第 1 回　導入：物理学と形而上学の関係を考える
第 2 回　第 1 章の講読 1 および「自然法則、反事実的条件法、説明」についての講義 1
第 3 回　第 1 章の講読 2 および「自然法則、反事実的条件法、説明」についての講義 2
第 4 回　第 2 章の講読 1 および「ヒューム主義のプロジェクト」についての講義 1
第 5 回　第 2 章の講読 2 および「ヒューム主義のプロジェクト」についての講義 2
第 6 回　第 3 章の講読 1 および「形而上学に向かうための物理学」についての講義 1
第 7 回　第 3 章の講読 2 および「形而上学に向かうための物理学」についての講義 2
第 8 回　第 4 章の講読 1 および「時間の経過」についての講義 1
第 9 回　第 4 章の講読 2 および「時間の経過」についての講義 2
第 10 回　第 4 章の講読 3 および「時間の経過」についての講義 3
第 11 回　第 5 章の講読 1 および「因果、反事実的条件法、第三の要因」についての講義 1
第 12 回　第 5 章の講読 1 および「因果、反事実的条件法、第三の要因」についての講義 1
第 13 回　第 5 章の講読 1 および「因果、反事実的条件法、第三の要因」についての講義 1
第 14 回　第 6 章およびエピローグの講読
第 15 回　全体のまとめ

●事前・事後学習の内容
授業のテーマや進め方について、何か提案がないか各自で検討しておく。
●評価方法
平常点と課題の達成度を評価の対象とする。
●受講生へのコメント
積極的に質問し、自分自身の問題意識を明確化していくことを期待する。
●参考文献・教材
授業中に提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2503	開講期	単位数
M5	**西洋哲学史研究** Advanced Studies in the History of Western Philosophy			後火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 脇坂 真弥 非常勤講師			

●科目の主題

フランス哲学から数人の哲学者の思想を選び、その原書の一部を精読・解説し（仏語だけではなく英訳も併用）、内容について議論する。

●到達目標

哲学原典に直接触れて読解力を養成し、同時に哲学の基本的な考え方や立論の仕方を修得することがこの授業の目標である。

●授業内容・授業計画

実際に授業内で読むのはデカルト、レヴィナス、アランあるいはシモーヌ・ヴェイユの原書の数頁だが、重要な箇所を取り上げて精読し思想内容を理解する。

仏語を学習していない人も受講できるように英訳も併用する予定である。語学的にも思想的にも不明な部分があれば、その場で質疑応答しながら授業を進める。

なお、以下の授業計画は受講者の状況に応じて適宜変更する可能性がある。

第 1 回　オリエンテーション。授業の内容（取り上げる原典など）及び進め方の説明。
第 2 回　Descartes, *Discours de la Méthode* ①
第 3 回　Descartes, *Discours de la Méthode* ②
第 4 回　Descartes, *Discours de la Méthode* ③
第 5 回　Descartes, *Discours de la Méthode* ④
第 6 回　Simone Weil あるいは Alain の著作 ①
第 7 回　Simone Weil あるいは Alain の著作 ②
第 8 回　Simone Weil あるいは Alain の著作 ③
第 9 回　Simone Weil あるいは Alain の著作 ④
第 10 回　Levinas, *Éthique et Infini* ①
第 11 回　Levinas, *Éthique et Infini* ②
第 12 回　Levinas, *Éthique et Infini* ③
第 13 回　Levinas, *Éthique et Infini* ④
第 14 回　Levinas, *Éthique et Infini* ⑤
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容

事前学習：
コピーで配布したフランス語原典、または英語訳の指定箇所を毎回読んで訳を作成する。
内容に関して不明な部分があれば、質問できるように準備をしておく。
事後学習：
授業で進んだ箇所を思想・語学の両面から見直して、理解を深める。

●評価方法

平常点と期末レポートの採点による。

●受講生へのコメント

予習は必ず行い、授業には辞書を持参すること。

状況に応じて文法的な説明もくわしく行いながら授業を進める（受講者にもよるが、主にフランス語を中心とした説明になる可能性があるので、英語で受講を予定している人はその旨了解しておいてほしい）。

●参考文献・教材

必要なテキストはコピーして授業中に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2504	開講期	単位数
M6	**西洋哲学史研究演習** Advanced Seminar in the History of Philosophy			前火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 高梨 友宏 教授			

●科目の主題

カントの目的論について概観する。

●到達目標

Immanuel Kant の *Kritik der Urteilskraft*,1790（判断力批判）の第 2 部「目的論的判断力の批判」におけるカントの目的論の概要を把握することを目指す。またこのことを踏まえて、カントの目的論と美学との関係、批判哲学体系における『判断力批判』の位置づけ、カントの目的論の哲学史上の位置づけと意義、等に関して、二次文献も視野に入れながら検討を加えたい。

●授業内容・授業計画

概ね以下のようなプランに沿って進める予定。ただしあくまで予定なので、実際にはこの通りに進められない場合があることをあらかじめ了承願いたい。なお、この主題を扱うのは半期のみとなるため、多くの時間を講述に割くことになるが、テキストの重要箇所については独語原文を呈示し、演習形式を導入する予定。

第 1 回　カント目的論についての概説（1）：客観的合目的性と主観的合目的性
第 2 回　カント目的論についての概説（2）：分析論①
第 3 回　カント目的論についての概説（3）：分析論②
第 4 回　カント目的論についての概説（4）：分析論③
第 5 回　カント目的論についての概説（5）：弁証論①
第 6 回　カント目的論についての概説（6）：弁証論②
第 7 回　カント目的論についての概説（7）：弁証論③
第 8 回　カント目的論についての概説（8）：方法論①
第 9 回　カント目的論についての概説（9）：方法論②
第 10 回　カント目的論についての概説（10）：方法論③
第 11 回　カントの目的論の諸問題（1）：目的論と美学の関係
第 12 回　カントの目的論の諸問題（2）：『判断力批判』の体系的意義①
第 13 回　カントの目的論の諸問題（3）：『判断力批判』の体系的意義②
第 14 回　哲学史上におけるカントの目的論の位置付けについて（1）
第 15 回　哲学史上におけるカントの目的論の位置付けについて（2）

●事前・事後学習の内容

事前学習 講述部分については、事前に配布する関連資料を読んで授業に臨まれたい。原書訳読演習部分については、訳読担当者を事前に決めるが、その日訳読を担当しない人も、必ず訳読準備をして授業に臨むこと。

事後学習 本研究演習で扱う『判断力批判』第 2 部は第 1 部「美的判断力の批判」（いわゆる「カント美学」）の知識を必ずしも前提しなくとも、独立の文献として読めるが、本研究演習では、カントの目的論を彼の「美学」との関連でも捉えたいので、美学についての講師の不十分な講述に拘わらず、第 1 部のテキストを授業と並行して計画的に独習されたい（本来の「事後学習」の意味には当たらないが）。

●評価方法

平常点による評価。

●受講生へのコメント

・独語原文の訳読を導入する場合があるので、受講者については独語中級程度の既修を前提に、授業を進める。
・授業中のディスカッションを歓迎。積極的な姿勢で臨むことを希望する。

●参考文献・教材

必要な教材、テキストなどは、コピーして配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2505	開講期	単位数
M7	**倫理学研究** Advanced Studies in Ethics			前火 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 土屋 貴志 准教授			

●科目の主題

現代英米倫理学の基本文献を原語で読み進めながら解説する。

●到達目標

現代倫理学の主要問題について基礎的知識と展望を得るとともに、倫理学を研究するために必要な英語力を身に付ける。

●授業内容・授業計画

テキストを読み進みながら解説する。

具体的には下記のように進める予定であるが、必要に応じて変更する可能性もある。

第 1 回　序論
第 2 回　第 1 章
第 3 回　第 1 章（続き）
第 4 回　第 2 章
第 5 回　第 2 章（続き）
第 6 回　第 3 章
第 7 回　第 3 章（続き）
第 8 回　第 4 章
第 9 回　第 4 章（続き）
第 10 回　第 5 章
第 11 回　第 5 章（続き）
第 12 回　第 6 章
第 13 回　第 6 章（続き）
第 14 回　第 7 章
第 15 回　第 7 章（続き）

●事前・事後学習の内容

事前学習として、テキストの課題部分を全員必ず精読してくること。

事後学習として、講義内容を踏まえて、テキストを読み直しておくこと。

●評価方法

毎回の読解課題の達成度を平常点として評価する。

●受講生へのコメント

内容の要点と論理を正確に把握することを重視する。全体を平板に訳すのではなく、重要な箇所を見極めて、アウトラインをしっかりつかむ読み方を心がけること。そのためには、重要箇所を正確に理解し翻訳できる語学力が前提になるので、日頃から英語力の向上に努めてほしい。

●参考文献・教材

下記の文献をテキストの候補とするが、受講者と相談の上で、これ以外のテキストを読むこともありうる。

A. Sen & B. A. O. Williams (eds.), *Utilitarianism and beyond*, Cambridge University Press, 1982.

参考文献については授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2506	開講期	単位数
M8	**倫理学研究演習** Advanced Seminar in Ethics			後火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 土屋 貴志 准教授			

●科目の主題

「倫理学研究」に引き続き、現代英米倫理学の基本文献を原語で読む。

●到達目標

現代倫理学の主要問題について基礎的知識と展望を得るとともに、倫理学を研究するために必要な英語力を身に付ける。

●授業内容・授業計画

テキストを読み進めながら内容を検討する。

具体的には下記のように進める予定であるが、必要に応じて変更する可能性もある。

第 1 回　第 8 章
第 2 回　第 8 章（続き）
第 3 回　第 9 章
第 4 回　第 9 章（続き）
第 5 回　第 10 章
第 6 回　第 10 章（続き）
第 7 回　第 11 章
第 8 回　第 11 章（続き）
第 9 回　第 12 章
第 10 回　第 12 章（続き）
第 11 回　第 13 章
第 12 回　第 13 章（続き）
第 13 回　第 14 章
第 14 回　第 14 章（続き）
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習として、テキストの課題部分を全員必ず精読してくること。

事後学習として、授業での検討内容を踏まえ、テキストを読み直しておくこと。

●評価方法

毎回の読解課題の達成度を平常点として評価する。

●受講生へのコメント

内容の要点と論理を正確に把握することを重視する。全体を平板に訳すのではなく、重要な箇所を見極めて、アウトラインをしっかりつかむ読み方を心がけること。そのためには、重要箇所を正確に理解し翻訳できる語学力が前提になるので、日頃から英語力の向上に努めてほしい。

なお「倫理学研究」を前期に履修しておくことが望ましい。

●参考文献・教材

下記の文献をテキストの候補とするが、受講者と相談の上で、これ以外のテキストを読むこともありうる。

A. Sen & B. A. O. Williams (eds.), *Utilitarianism and beyond*, Cambridge University Press, 1982.

参考文献については授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2507	開講期	単位数
M9	**美学研究** Advanced Studies in Aesthetics			前木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 高梨 友宏 教授			

●科目の主題

カント美学についての理解し、その諸論点を吟味する。

●到達目標

Immanuel Kant の *Kritik der Urteilskraft*,1790（判断力批判）の論点を整理して、第 1 部「美的判断力の批判」におけるいわゆる「カント美学」の概要を把握したうえで、実際にテキストを読みながら、そこで論じられる内容に関して、他の『純粋理性批判』や『実践理性批判』における関連事項も参照しつつ、吟味を加える。これらのプロセスを通じて、「カント美学」の総合的理解を目指す。

●授業内容・授業計画

できるかぎり、以下のプランに沿って進めたい。ただし、必ずしもこのプラン通りにならない可能性がある点、了承願いたい。

第 1 回　導入
第 2 回　趣味判断の諸相（1）：四つの契機
第 3 回　趣味判断の諸相（2）：アプリオリな総合判断
第 4 回　趣味判断の諸相（3）：趣味の体系的意義
第 5 回　天才論

第 6 回　崇高論（1）：美学史における意義
第 7 回　崇高論（2）：現代との関連
第 8 回　目的論（1）：主観的合目的性と客観的合目的性
第 9 回　目的論（2）：目的論的世界観へ
第 10 回　総括：目的論としての美学
第 11 回　『判断力批判』の独語原書講読演習（以下、演習と略記）（1）
第 12 回　演習（2）
第 13 回　演習（3）
第 14 回　演習（4）
第 15 回　演習（5）

●事前・事後学習の内容

事前学習：講述部分については、事前に配布する関連資料を読んで授業に臨まれたい。原書訳読演習部分については、訳読担当者を事前に決めるが、その日訳読を担当しない人も、必ず訳読準備をして授業に臨むこと。

事後学習：すでに数年来読み続けているテキストであるため、演習部分では前年度の続きから読み進めることになる。本演習で既読のテキスト箇所については、講師の講述に拘わらず、少なくとも翻訳書を用いて独習されたい（本来の「事後学習」の意味には当たらないが）。

●評価方法

平常点による評価。

●受講生へのコメント

・ドイツ語原書の講読演習も含むので、受講に当たってはドイツ語中級程度の読解力が条件となる。
・授業中のディスカッションを歓迎。積極的な姿勢で臨むことを希望する。

●参考文献・教材

適宜コピー等を配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2508	開講期	単位数
M10	**美学研究演習** Advanced Seminar in Aesthetics			後木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 高梨 友宏 教授			

●科目の主題

Immanuel Kant の *Kritik der Urteilskraft*,1790（判断力批判）の研究演習。同書を読みながら、カント美学の諸問題について考える。

●到達目標

できるだけ先まで進むように努力し、「カント美学」の総合的理解を深めたい。ただし、参加者間の議論を重視し、毎回できる限り疑問を払拭しながら、読み進めることとしたい。

●授業内容・授業計画

前期「美学研究」で読んだ箇所以降を読む。ドイツ語原文の読解と、内容に関する議論にほとんどの時間を充てる予定。なお、『判断力批判』第 1 部「美的判断力の批判」を読了した後は、第 2 部「目的論的判断力の批判」には進まず、同書「第一序論」を読むこととする。

第 1 回　導入
第 2 回　『判断力批判』の独語原書講読演習（以下、演習と略記）（1）
第 3 回　演習（2）
第 4 回　演習（3）
第 5 回　演習（4）
第 6 回　演習（5）
第 7 回　演習（6）
第 8 回　演習（7）
第 9 回　演習（8）
第 10 回　演習（9）
第 11 回　演習（10）
第 12 回　演習（11）

第 13 回　演習（12）
第 14 回　演習（13）
第 15 回　演習（14）

●事前・事後学習の内容

事前学習：講述部分については、事前に配布する関連資料を読んで授業に臨まれたい。原書訳読演習部分については、訳読担当者を事前に決めるが、その日訳読を担当しない人も、必ず訳読準備をして授業に臨むこと。

事後学習：本演習は、本年度前期「美学研究」と連続する科目であるため、前期に読んだ箇所の続きから読み進めることになる。本演習で既読のテキスト箇所については、講師の講述に拘わらず、少なくとも翻訳書を用いて独習されたい（本来の「事後学習」の意味には当たらないが）。

●評価方法

平常点による評価。

●受講生へのコメント

受講に当たっては、ドイツ語中級程度の読解力が必要。また前期に開講する「美学研究」もあわせて受講することが望ましい。

●参考文献・教材

テキストや参考文献については適宜コピーを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2509	開講期	単位数
M11	宗教学研究 Advanced Studies in the Study of Religion			前月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仲原 孝 教授			

●科目の主題

宗教学・宗教哲学の基礎的文献を原書講読する。さらに、当該文献に関する出席者の研究発表の機会も随時もうける予定である。

●到達目標

外国語の文献を正確に読解した上で、それに関する研究を行なうために必要な手法を修得することを目標とする。

●授業内容・授業計画

ハイデガーの主著『存在と時間』を原書により研究的に読解しながら、そこに含まれる哲学的問題について、議論の中で思考を深めることを目指す。

授業計画は以下の通り。研究 I では「世界」の分析を中心に読解・検討する。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。

第 1 回　§ 14 (1)
第 2 回　§ 14 (2)
第 3 回　§ 14 (3)
第 4 回　§ 15 (1)
第 5 回　§ 15 (2)
第 6 回　§ 15 (3)
第 7 回　§ 16 (1)
第 8 回　§ 16 (2)
第 9 回　§ 16 (3)
第 10 回　§ 17 (1)
第 11 回　§ 17 (2)
第 12 回　§ 17 (3)
第 13 回　§ 18 (1)
第 14 回　§ 18 (2)
第 15 回　§ 18 (3)

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは

適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

欠席・遅刻は大幅に減点する。特段の理由なく欠席した者には単位を認めないので注意すること。

●参考文献・教材

テキストは、Martin Heidegger: *Sein und Zeit,* Max Niemeyer Verlag を使用する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2510	開講期	単位数
M12	**宗教学研究演習** Advanced Seminar in the Study of Religion			後月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仲原 孝 教授			

●科目の主題

宗教学・宗教哲学の基礎的文献を原書講読する。さらに、当該文献に関する出席者の研究発表の機会も随時もうける予定である。

●到達目標

外国語の文献を正確に読解した上で、それに関する研究を行なうために必要な手法を修得することを目標とする。

●授業内容・授業計画

前期の「宗教学研究」に引きつづき、ハイデガーの『存在と時間』を原書講読する。後期は「内存在」の分析論のところを講読する。

授業計画は以下の通り。ただし、授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。

第 1 回　§ 28 (1)
第 2 回　§ 28 (2)
第 3 回　§ 29 (1)
第 4 回　§ 29 (2)
第 5 回　§ 30 (1)
第 6 回　§ 30 (2)
第 7 回　§ 31 (1)
第 8 回　§ 31 (2)
第 9 回　§ 32 (1)
第 10 回　§ 32 (2)
第 11 回　§ 33 (1)
第 12 回　§ 33 (2)
第 13 回　§ 34 (1)
第 14 回　§ 34 (2)
第 15 回　§ 34 (3)

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

欠席・遅刻は大幅に減点する。特段の理由なく欠席した者には単位を認めないので注意すること。

●参考文献・教材

テキストは、Martin Heidegger: *Sein und Zeit,* Max Niemeyer Verlag を使用する（初回授業時にテキストのコピーを配布する）。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2512	開講期	単位数
M13	**論理学・科学哲学研究Ⅱ** Advanced Studies in Logic and Philosophy of Science Ⅱ			後木 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 土屋 貴志 准教授			

●科目の主題

メタ倫理学の基本文献を原語で読み進めながら解説する。

●到達目標

メタ倫理学の主要問題について基礎的知識と展望を得るとともに、哲学を研究するために必要な英語力を身に付ける。

●授業内容・授業計画

テキストを読み進めながら解説する。

具体的には下記のように進める予定であるが、必要に応じて変更する可能性もある。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　第 1 章
第 3 回　第 2 章
第 4 回　第 3 章
第 5 回　第 4 章
第 6 回　第 5 章
第 7 回　第 6 章
第 8 回　第 7 章
第 9 回　第 8 章
第 10 回　第 9 章
第 11 回　第 10 章
第 12 回　第 11 章
第 13 回　第 12 章
第 14 回　第 13 章
第 15 回　第 14 章

●事前・事後学習の内容

事前学習として、テキストの課題部分を全員必ず精読してくること。

事後学習として、講義内容を踏まえ、テキストを読み直すこと。

●評価方法

毎回の読解課題の達成度を総合し平常点として評価する。

●受講生へのコメント

内容の要点と論理を正確に把握することを重視する。全体を平板に訳すのではなく、重要な箇所を見極めて、アウトラインをしっかりつかむ読み方を心がけること。そのためには、重要箇所を正確に理解し翻訳できる語学力が前提になるので、日頃から英語力の向上に努めてほしい。

●参考文献・教材

下記の文献をテキストの候補とするが、受講者と相談の上で、これ以外のテキストを読むこともありうる。

Joseph Raz (ed.), *Practical Reasoning*, Oxford University Press, 1978.

参考文献については授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2513	開講期	単位数
M14	**哲学総合研究Ⅰ** Comprehensive Studies in Philosophy Ⅰ			前金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仲原 孝 教授／高梨 友宏 教授			

●科目の主題

哲学研究に要する基本的事項を総合的に研究、講義する。

●到達目標

哲学研究を行うための基本的な方法の習得を目標とする。

●授業内容・授業計画

総合研究Ⅰでは、研究のために必要な基本的事項を、哲学の様々な領域（哲学、哲学史、倫理学、宗教哲学、美学）にわたって教授する。問題領域に応じて、資料収集から問題点の設定に至るまで幅広く指導する一方で、適宜、研究発表会を開催し、発表の仕方、論文の書き方についての具体的な指導も行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

積極的に質問し、自分自身の問題意識を明確にするよう努めること。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL2514	開講期	単位数
M15	**哲学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Philosophy Ⅱ			後金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仲原 孝 教授／高梨 友宏 教授／土屋 貴志 准教授			

●科目の主題

哲学研究に要する基本的事項を総合的に研究、講義する。

●到達目標

哲学研究を行うための基本的な方法の習得を目標とする。

●授業内容・授業計画

総合研究Ⅱでは、各受講生の研究テーマに応じて、個別的指導を含め、具体的な研究の進め方を教授する。受講生の研究経過について適宜報告を求め、議論を深めながら、研究を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

積極的に質問し、自分自身の問題意識を明確にするよう努めること。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3601	開講期	単位数
M16	**哲学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in Phirosophy Ⅰ			前金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仲原 孝 教授／高梨 友宏 教授			

●科目の主題

哲学、哲学史、倫理学、宗教哲学、美学を主たるテーマとする修士論文の作成に必要な研究上の指導を行う。

●到達目標

受講生各自の具体的な研究テーマに則しながら、哲学的な考え方、論述構成の手法、基礎的な資料の扱い方などについて、論文作成のための指導を行う。

●授業内容・授業計画

研究指導Ⅰでは、研究発表を通じて、テーマの絞り込みにつとめる。各担当者の指導内容は以下のとおり。

（仲原　孝教授）哲学を宗教との関連で考察することに比重を置きながらも、それにとどまらず広く哲学・哲学史・宗教哲学・倫理学全般の研究に関して、文献の精密な読解にもとづいた修士論文の作成のための指導を行う。

（高梨友宏教授）ドイツ近現代美学・芸術学、京都学派の芸術論に比重を置きながらも、それにとどまらず広く哲学・哲学史・美学・倫理学全般の研究に関して、文献の精密な読解にもとづいた修士論文の作成のための指導を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

研究発表を始めとする担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

積極的に質問し、自分自身の問題意識を明確にするよう努めること。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL3602	開講期	単位数
M17	**哲学研究指導Ⅱ** Supervision of Master's Thesis in Phirosophy Ⅱ			後金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仲原 孝 教授／高梨 友宏 教授			

●科目の主題

哲学、哲学史、倫理学、宗教哲学、美学を主たるテーマとする修士論文の作成に必要な研究上の指導を行う。

●到達目標

受講生各自の具体的な研究テーマに則しながら、哲学的な考え方、論述構成の手法、基礎的な資料の扱い方などについて、論文作成のための指導を行う。

●授業内容・授業計画

研究指導Ⅱでは、それぞれのテーマに応じて、論述の仕方などについての具体的な指導を行う。各担当者の指導内容は以下の通り。

（仲原　孝教授）哲学を宗教との関連で考察することに比重を置きながらも、それにとどまらず広く哲学・哲学史・宗教哲学・倫理学全般の研究に関して、文献の精密な読解にもとづいた修士論文の作成のための指導を行う。

（高梨友宏教授）ドイツ近現代美学・芸術学、京都学派の芸術論に比重を置きながらも、それにとどまらず広く哲学・哲学史・美学・倫理学全般の研究に関して、文献の精密な読解にもとづいた修士論文の作成のための指導を行う

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

研究発表を始めとする担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

積極的に質問し、自分自身の問題意識を明確にするよう努めること。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2501	開講期	単位数
M18	**日本史学研究Ⅰ** Advanced Studies in Japanese History Ⅰ			前火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 磐下 徹 准教授			

●科目の主題

古記録の読解

●到達目標

平安末期に源俊房が書き残した日記である『水左記』の読解を通し、古記録読解に必要な基本知識やスキルを身につける

●授業内容・授業計画

『水左記』の記事を 2 ～ 3 日分ずつ割り振り、その読解と記述内容に関する考察を発表してもらう。本年度は自筆本の残る康平 7 年を読み進める予定。

なお、学修効果を考慮して授業内容や予定が変更されることもある。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　発表①
第 3 回　発表②
第 4 回　発表③
第 5 回　発表④
第 6 回　発表⑤
第 7 回　発表⑥
第 8 回　発表⑦
第 9 回　発表⑧
第 10 回　発表⑨
第 11 回　発表⑩
第 12 回　発表⑪
第 13 回　発表⑫
第 14 回　発表⑬
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

講読範囲をあらかじめ精読しておくこと。

●評価方法

平常点（発表内容 80%、出席状況 20%）

●受講生へのコメント

幅広い視野を持ちながら発表・討議に参加してほしい

●参考文献・教材

必要に応じて配布・指示

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2502	開講期	単位数
M19	**日本史学研究演習 1** Advanced Seminar in Japanese History 1			後火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 磐下 徹 准教授			

●科目の主題

日本古代史の研究発表

●到達目標

研究発表とそれにもとづく討議を行い、各自の研究の深化をはかる

●授業内容・授業計画

受講者が自分の取り組んでいるテーマについての研究発表を行い、それにもとづき討議を進める。討議内容を踏まえ、再報告が行われることもある。

なお、学修効果を考慮し、授業内容や計画が変更されることがある。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　発表①
第 3 回　発表②
第 4 回　発表③
第 5 回　発表④
第 6 回　発表⑤
第 7 回　発表⑥
第 8 回　発表⑦
第 9 回　発表⑧
第 10 回　発表⑨

第 11 回　発表⑩
第 12 回　発表⑪
第 13 回　発表⑫
第 14 回　発表⑬
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前に示される参考文献や資料を読んでおくこと。
●評価方法
平常点（発表内容 80%、出席状況 20%）
●受講生へのコメント
幅広い視野を持ちながら発表・討議に積極的に臨んでほしい
●参考文献・教材
必要があれば適宜指示する

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2503	開講期	単位数
M20	**日本史学研究Ⅱ** Advanced Studies in Japanese History Ⅱ			前木 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仁木 宏 教授			

●科目の主題
中世文書（活字）の読解能力を高めるとともに、中世社会を考察する基本的力量を身につける。
●到達目標
戦国時代の各地の戦国大名が発給した法令を素材にする。文書を読解した上で、その歴史的意義や背景、関連する文書・事項などについて総合的に検討し、報告することで、中世史研究能力を涵養する。
戦国時代の社会的特質を多面的に考察し、中世社会の本質を解明する。
●授業内容・授業計画
佐藤進一・百瀬今朝雄編『中世法制史料集』第 5 巻・武家家法Ⅲを輪読する。以下の番号は仮番号であり、第 1 回の授業時に指示する。

第 1 回　文書番号 845 ／ 846
第 2 回　同 847 ／ 848
第 3 回　同 849 ／ 850
第 4 回　同 851 ／ 852
第 5 回　同 853 ／ 854
第 6 回　同 855 ／ 856
第 7 回　同 857 ／ 858
第 8 回　同 859 ／ 860
第 9 回　同 861 ／ 862
第 10 回　同 863 ／ 864
第 11 回　同 865 ／ 866
第 12 回　同 867 ／ 868
第 13 回　同 869 ／ 870
第 14 回　同 871 ／ 872
第 15 回　同 873 ／ 874

●事前・事後学習の内容
担当者は、テキストの読み下し、現代語訳をおこなうとともに、歴史的背景を説明するためのレジメを準備する。授業中に指摘された点を復習し、次回の報告に備える。（くりかえし）
●評価方法
担当回の報告内容、ならびに史料をめぐる議論における発言によって評価する。
●受講生へのコメント
毎回、地図を用意することを求める。歴史環境の中で法の本質を読みとる工夫をしてほしい。
●参考文献・教材
『中世法制史料集』第 5 巻（上述）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2504	開講期	単位数
M21	日本史学研究演習 2 Advanced Seminar in Japanese History 2			後木 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仁木 宏 教授			

●科目の主題

各人の研究内容について、史資料をもとに発表し、関連する文書・事項などについても総合的に検討し、報告する能力を養う。

●到達目標

史資料をもとに実証的に研究を進めるとはどういうことか。具体的な事例の中で学ぶ。

●授業内容・授業計画

毎回、1 ～ 2 人ずつ、順番に報告してゆく。初めの 4 回分で、中世史専攻の院生が報告し、次の 3 回分で、他の時代専攻の院生が報告する。これを 2 度くり返す。以下は仮の順番であり、第 1 回の授業時に指示する。

第 1 回　中世史専攻院生の報告
第 2 回　中世史専攻院生の報告
第 3 回　中世史専攻院生の報告
第 4 回　中世史専攻院生の報告
第 5 回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第 6 回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第 7 回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第 8 回　中世史専攻院生の報告
第 9 回　中世史専攻院生の報告
第 10 回　中世史専攻院生の報告
第 11 回　中世史専攻院生の報告
第 12 回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第 13 回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第 14 回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

担当者は、報告するために史料収集・読解をおこない、レジメを用意する。事後には、指摘された点を再度確認する。

●評価方法

担当回の報告内容が、いかにオリジナルなものであるか、説得性をもつかを評価する。
担当回以外の授業中の発言内容も評価対象に入れる。

●受講生へのコメント

担当回の報告が不十分である場合、「宿題」として、次回、あらためてよりレベルの高い報告を求めることになる。

●参考文献・教材

特になし。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2505	開講期	単位数
M22	日本史学研究Ⅲ Advanced Studies in Japanese History Ⅲ			前水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 塚田 孝 教授			

●科目の主題

近世大坂の都市社会史―《法と社会》の視点から－

●到達目標

近年の大坂の都市社会史研究は、日本全体の都市史研究を牽引し、新しい視野を拓いている。その際、都市民衆の生活世界を社会構造の深みからつかみだすことが目指され、その分析方法として《法と社会》の視角が重要な意味を持っている。これまでの、近世大坂の都市史研究の到達点を確認し、今後の研究方向を展望する。その際、巨大都市・三都（大坂・江戸・京都）の比較社会史を意図する。

●授業内容・授業計画

これまで近世大坂研究会で積み重ねてきた共同研究によって、論集『近世大坂の法と社会』『身分的周縁の比較史―法と社会の視点から―』『近世身分社会の比較史―法と社会の視点から―』の 3 冊を刊行してきた。この授業では、この 3 著に収録された大坂の都市社会の形成と構造に関する論文を精読することを通して、近世大坂の都市社会史の研究状況とその基盤にある問題意識や分析方法を考え、今後の研究の発展方向を探っていく。授業は、受講生の報告によって進める。

第 1 回　「近世大坂の都市社会史―《法と社会》の視点から」
第 2 回　『近世大坂の法と社会』①
第 3 回　『近世大坂の法と社会』②
第 4 回　『近世大坂の法と社会』③
第 5 回　『近世大坂の法と社会』④
第 6 回　『近世大坂の法と社会』⑤
第 7 回　『身分的周縁の比較史―法と社会の視点から―』①
第 8 回　『身分的周縁の比較史―法と社会の視点から―』②
第 9 回　『身分的周縁の比較史―法と社会の視点から―』③
第 10 回　『身分的周縁の比較史―法と社会の視点から―』④
第 11 回　『近世身分社会の比較史―法と社会の視点から―』①
第 12 回　『近世身分社会の比較史―法と社会の視点から―』②
第 13 回　『近世身分社会の比較史―法と社会の視点から―』③
第 14 回　『近世身分社会の比較史―法と社会の視点から―』④
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容

事前に、各回で取り上げる文献を精読して、授業に参加すること。授業全体を通して、近世の都市社会史研究の展開方向について、自分なりの見通しを得るよう努めること。

●評価方法

授業における報告や発言、および最終レポートで総合的に評価する。

●受講生へのコメント

論文を読むとはどういうことなのか。それをしっかり考えてほしい。

●参考文献・教材

テキスト　塚田孝編『近世大坂の法と社会』清文堂出版、2007 年
塚田孝編『身分的周縁の比較史―法と社会の視点から―』清文堂出版、2010 年
塚田孝・八木滋・佐賀朝編『近世身分社会の比較史－法と社会の視点から－』清文堂出版、2014 年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2506	開講期	単位数
M23	**日本史学研究演習 3** Advanced Seminar in Japanese History 3			後水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 塚田 孝 教授			

●科目の主題

地域社会史研究－和泉地域に即して－

●到達目標

近年、各地で多様な地域史の模索が行なわれている。それは地域のもつ全体性に依拠しながら、歴史学の全体性の回復を求めるものでもある。こうした動向に学びつつ、地域史について実践的に考える。それを通して、地域史の思想と方法の発展をめざすとともに、史料の深い読解力・分析力を養成する。

●授業内容・授業計画

受講者各人が和泉地域の一次史料（時代は限定しない）を用いた研究報告を行い、討論する。但し、近世以前の報告では近世への展望を、近代以降の報告では近世からの展開を、必ず意識すること。

第 1 回　地域史研究の動向
第 2 回　地域史研究の意義
第 3 回　研究報告①
第 4 回　研究報告②
第 5 回　研究報告③
第 6 回　研究報告④
第 7 回　研究報告⑤

第 8 回　研究報告⑥
第 9 回　研究報告⑦
第 10 回　研究報告⑧
第 11 回　研究報告⑨
第 12 回　研究報告⑩
第 13 回　研究報告⑪
第 14 回　研究報告⑫
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容
事前に、受講者それぞれが関心を持つ和泉地域の一次史料を選択し、分析を行い、報告に臨む。授業で受けた指摘・コメントを踏まえて、補充の史料収集・分析を行い、学期末のレポートを作成する。

●評価方法
授業における報告や発言、および最終レポートで総合的に評価する。

●受講生へのコメント
〈地域史の思想と方法〉に自覚的に取り組んでほしい。

●参考文献・教材
テキスト　プリント配布

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2507	開講期	単位数
M24	日本史学研究Ⅳ Advanced Studies in Japanese History Ⅳ			前火 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 佐賀 朝 教授			

●科目の主題
「近現代の都市社会史研究・性売買問題史の再検討」をテーマに、近年の主要な研究成果について批判的に検討する。
都市社会史については、政治史や経済史、建築史などの成果にも目配りしながら、性売買問題史については、「従軍慰安婦」問題にも留意しながら、いずれも都市社会構造分析や「遊廓社会史」の視点から、近年の研究成果を批判的に吟味し、今後の研究課題を追求したい。
各研究分野から、いくつかの論文や著作を取り上げ、一つ一つの論文を可能な限り精読していく。

●到達目標
近年の研究成果を批判的に検討することを通じて、史料に即して研究を深化させる方向性を明らかにし、課題を整理することを目ざす。

●授業内容・授業計画
主要成果を論文単位で取り上げる（1 回に 2 本ていど）。受講生が順番に報告（要約・論評）を担当し、全員で合評する。
報告者には、次の授業の際、前回の議論の要旨をまとめた、簡単な確認の報告もしてもらう。
第 1 回　ガイダンス・打ち合わせ
第 2 回　論文の検討と討論（その 1）
第 3 回　論文の検討と討論（その 2）
第 4 回　論文の検討と討論（その 3）
第 5 回　論文の検討と討論（その 4）
第 6 回　論文の検討と討論（その 5）
第 7 回　論文の検討と討論（その 6）
第 8 回　論文の検討と討論（その 7）
第 9 回　論文の検討と討論（その 8）
第 10 回　論文の検討と討論（その 9）
第 11 回　論文の検討と討論（その 10）
第 12 回　論文の検討と討論（その 11）
第 13 回　論文の検討と討論（その 12）
第 14 回　論文の検討と討論（その 13）
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前に配布される論文テキストは精読のうえ授業に出席すること。
取り上げる論文は、相互に関連するものが多いため、事後も随時、各論文の論点や課題を整理しながら、授業での討議に参加すること。

●評価方法

授業における報告や発言、レポートなどを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

日本史学研究演習 4 とあわせて受講してください。

●参考文献・教材

授業のなかで随時、提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2508	開講期	単位数
M25	**日本史学研究演習 4** Advanced Seminar in Japanese History 4			後火 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 佐賀 朝 教授			

●科目の主題

「近現代地域史研究の実践」をテーマに、近現代の大阪（都市・農村を含め）を主な対象に、地域史研究を実践的に学ぶ。受講生が各自でテーマを設定し、近現代の地域史料を用いた研究報告を実践し、全員で質疑・討論を行う形で進める。

●到達目標

多様な史料にもとづいて地域の社会構造を明らかにするための視点や方法の修得をめざす。

●授業内容・授業計画

扱う史料や報告内容・報告順などについては、第 1 回目に受講生と相談のうえ決める。
必要に応じて、授業で取り上げた地域のフィールドワーク（まち歩き）なども実施する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　報告その 1
第 3 回　報告その 2
第 4 回　報告その 3
第 5 回　報告その 4
第 6 回　報告その 5
第 7 回　報告その 6
第 8 回　報告その 7
第 9 回　報告その 8
第 10 回　報告その 9
第 11 回　報告その 10
第 12 回　報告その 11
第 13 回　報告その 12
第 14 回　報告その 13
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、取り上げるべき史料や先行研究を随時、収集し精読・検討しながら報告の準備を行うとともに、報告後も次の報告や学期末の最終レポートに向けて先行研究や史料の検討を継続的に行うこととする。

●評価方法

授業における報告や発言、レポートなどを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

日本史学研究Ⅳとあわせて受講してください。

●参考文献・教材

授業のなかで随時、提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2509	開講期	単位数
M26	日本史学研究Ⅴ Advanced Studies in Japanese History V			後木 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 網 伸也 非常勤講師			

●科目の主題

考古学のなかでも、歴史考古学は文献史学との学際的研究によって多くの成果を挙げてきた。この授業では、飛鳥時代から平安時代を中心とした歴史的課題について、大阪および京都の古代寺院と都城を中心に考古学の立場から考えていく。それぞれの課題については、テキストとする論文を検討し、内容についてのより深い議論を行っていく。

●到達目標

最近の調査成果も含めて、発掘調査で明らかとなってきた難波・河内・山城の古代寺院や都城の実態を理解し、考古学から歴史叙述を行うスキルが取得できるようになるとともに、将来的には文献史学も視野に入れた歴史的思考能力を身につけることができる。

●授業内容・授業計画

考古学からみた古代寺院と都城の研究

第 1 回　飛鳥時代の難波と四天王寺の源流
第 2 回　四天王寺と古代都城
第 3 回　考古学からみた広隆寺の創建問題
第 4 回　在地寺院の様相と実態
第 5 回　同笵瓦が語るもの
第 6 回　道昭の足跡を訪ねて
第 7 回　瓦積基壇の成立と展開
第 8 回　古代都城の成立過程と生産基盤
第 9 回　祭祀場から古代庭園へ
第 10 回　百済王氏と王権
第 11 回　紀伊道成寺と古代都城
第 12 回　山背遷都と長岡京
第 13 回　平安宮の構造とその実態
第 14 回　平安京の邸宅と寝殿造り
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習としてテーマに関連すると考えられる論文を自分で探し出し、熟読して内容理解の準備を行っておく。講義後には、講義の中に出てきた遺跡を訪問し、遺跡の立地や出土遺物などを確認することで、講義内容を自分なりに検証するようにする。論文の熟読と遺跡での検証を通して、考古学的思考や歴史叙述のありかたを学ぶ。

●評価方法

講義では、講義中の議論への積極的な参加を評価し、講義内容に関連する課題を自分で考え、レポートを学期末に提出する。評価の比率は、講義への積極性が 30%、レポートが 70%とする。

●受講生へのコメント

考古学から古代史をいかにして叙述できるのか、楽しみながら学習してください。

●参考文献・教材

毎回、講義前にテキストとする資料や論文などを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2510	開講期	単位数
M27	日本史学研究Ⅵ Advanced Studies in Japanese History Ⅵ			前集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 小野沢 あかね 非常勤講師			

●科目の主題

「日本軍「慰安婦」問題と近代公娼制度」というテーマのもと、近代日本の公娼制度と日本軍「慰安婦」問題との関係を概観するとともに、各国との国際比較、戦後も引き続く軍隊と性的施設、性売買について考察する。

●到達目標

近代日本の公娼制度と日本軍「慰安婦」問題の基本的な構造とその問題性を理解し、そうした構造のもとに置かれた女性たちの主体の側から歴史を捉える視点を学ぶことで、現代も続く性売買をめぐる問題にも視野を開くことを目標とする。

●授業内容・授業計画

近代日本の公娼制度と日本軍「慰安婦」問題は別物であり、多くの「慰安婦」被害者は公娼制度とは何の関係もない人々であった。ただし、公娼制度下の娼妓、芸妓・酌婦など、もともと売春をしていた女性たちが、人身売買で「慰安婦」にされるケースが存在し、それは日本人の「慰安婦」に多かったことがわかってきている。そこで本講義ではまず、近代公娼制度の歴史を概観し、その上で、日本軍「慰安婦」問題の展開、とくに、日本人女性が「慰安婦」になっていった経緯に焦点をあて、近代日本の公娼制度が日本軍「慰安婦」問題の温床となった歴史を講義する。また、各国・各国軍の性的施設と日本軍慰安所の比較、さらには、現代日本の女性の貧困と性売買の状況についても言及し、「慰安婦」問題と性売買との関係について受講生と議論をしたい。

第 1 回　近代公娼制度と日本軍「慰安婦」問題――「売春婦」なら被害者ではないのか？
第 2 回　近代公娼制度の歴史――人身売買・性病検査・「大衆買春社会」(1)
第 3 回　近代公娼制度の歴史――人身売買・性病検査・「大衆買春社会」(2)
第 4 回　第一次世界大戦後の国際的婦女売買禁止の動向と日本の公娼制度
第 5 回　日本軍「慰安婦」問題とは何か（1）
第 6 回　日本軍「慰安婦」問題とは何か（2）
第 7 回　日本軍「慰安婦」問題とは何か（3）
第 8 回　芸妓・娼妓・酌婦から「慰安婦」へ――「慰安婦」問題の温床としての公娼制度（1）
第 9 回　芸妓・娼妓・酌婦から「慰安婦」へ――「慰安婦」問題の温床としての公娼制度（2）
第 10 回　各国軍の性的施設と日本軍「慰安所」との比較
第 11 回　戦後も引き続く軍隊と性的施設――RAA・沖縄の A サインバー・韓国軍「慰安所」・自衛隊（1）
第 12 回　戦後も引き続く軍隊と性的施設――RAA・沖縄の A サインバー・韓国軍「慰安所」・自衛隊（2）
第 13 回　現代日本における女性の貧困と性売買――「自己責任」論を批判する（1）
第 14 回　現代日本における女性の貧困と性売買――「自己責任」論を批判する（2）
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前・事後学習については、毎回の授業で事前・事後学習のポイントと課題を提示する。
主として配布プリント（レジュメと資料プリント）を用いた事後学習について指示する。

●評価方法

平常点、小レポート、学期末試験などにより総合的に評価する。

●受講生へのコメント

毎回のコメントカードへの記入内容を重視しますので、出席して話を聞いてください。

●参考文献・教材

・小野沢あかね「「慰安婦」問題と公娼制度」(「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンター編(西野瑠美子・金富子・小野沢あかね責任編集)『「慰安婦」バッシングを越えて』大月書店、2013 年)
・小野沢あかね「公娼制度廃止問題の国際的位置―1920 ～ 1930 年代―」(佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊廓社会 2 近世から近代へ』吉川弘文館、2014 年)
・小野沢あかね「戦間期の家族と女性」(『岩波講座日本歴史 17・近現代 3』岩波書店、2014 年)
・歴史学研究会・日本史研究会編『「慰安婦」問題を／から考える』(岩波書店、2014 年)
・「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクションセンター編（西野瑠美子・小野沢あかね責任編集)『日本人「慰安婦」―愛国心と人身売買と―』現代書館、2015 年)
・小野沢あかね「性奴隷制をめぐって―歴史的視点から」(『季刊戦争責任研究』84、2015 年)
・牧英正『人身売買』(岩波新書、1971 年)
・吉見義明『従軍慰安婦』(岩波新書、1995 年)
・林博史『日本軍「慰安婦」問題の核心』花伝社、2015 年。
・日本軍「慰安婦」問題 web サイト制作委員会編『Q & A「慰安婦」・強制・性奴隷』(お茶の水書房、2014 年)
・飯島裕子『ルポ　貧困女子』(岩波新書、2016 年)
・宮本節子『AV 出演を強要された彼女たち』(ちくま新書、2016 年)

以上のほか、授業のなかで随時、提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2511	開講期	単位数
M28	考古学研究 Advanced Studies in Archaeology			前月 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 岸本 直文 教授			

●科目の主題

修士論文の研究内容を固めることを意識し、各自の研究テーマに即して関連ある考古学的成果を取り上げ、先行研究について理解を深める。

●到達目標

各自の研究テーマとしている時代や地域あるいは分野についての考古学研究について、先行研究の成果を学習し、どういった研究があるのか、どのような資料があるのか、研究上の課題は何かといった点を整理する。

●授業内容・授業計画

3 回程度の発表を予定する。その内容について参加者で討論し、そのなかから次回の発表について考えていく。

第 1 回　受講者の研究テーマによる考古学的課題の相談
第 2 回　受講者の研究についての発表と質疑 (1)
第 3 回　受講者の研究についての発表と質疑 (2)
第 4 回　受講者の研究についての発表と質疑 (3)
第 5 回　受講者の研究テーマによる考古学的課題の設定
第 6 回　先行研究の把握 (1)
第 7 回　先行研究の把握 (2)
第 8 回　先行研究の把握 (3)
第 9 回　先行研究の把握 (4)
第 10 回　先行研究を踏まえての課題設定の相談
第 11 回　研究課題の整理 (1)
第 12 回　研究課題の整理 (2)
第 13 回　研究課題の整理 (3)
第 14 回　研究課題の整理 (4)
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

発表に際して、1 回ごとに取り組む課題を十分に計画し、それにむかって準備すること。発表に際して、冒頭で、自分の目的意識と今回の発表内容の選択について説明すること。発表後、質疑をふまえ発表内容について振り返り、理解や認識について整理しておくこと。

●評価方法

発表内容、質疑への参加状況を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

修士論文を意識し、発表機会を生かして自分の研究を深めていくよう、意欲的に取り組んでほしい。

●参考文献・教材

とくになし

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2512	開講期	単位数
M29	考古学研究演習 Advanced Seminar in Archaeology			後月 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 岸本 直文 教授			

●科目の主題

考古学研究を承けて、各自の研究テーマに即して関連ある考古学的課題を設定し、研究発表を通じて、考古学的な肉付けをすることを主題とする。

●到達目標

各自の研究テーマについて、地理情報など空間的な分析や、具体の遺跡や遺物の検討により、考古学的な観点を加味した総合化を試みる。

●授業内容・授業計画

設定した考古学的課題について、関連する考古資料を取り上げ、関係する遺跡や遺物の先行研究に学びつつ、

発掘調査報告書などを用いて独自に吟味し研究発表を行う。その内容について参加者で討論し、そのなかから次回の発表について考えていく。3 回の発表を予定している。

第 1 回　受講者との課題に関する相談
第 2 回　受講者の発表 1 回目 (1)
第 3 回　受講者の発表 1 回目 (2)
第 4 回　受講者の発表 1 回目 (3)
第 5 回　受講者の発表 1 回目 (4)
第 6 回　和泉市合同調査のまとめ (1)
第 7 回　受講者の発表 2 回目 (1)
第 8 回　受講者の発表 2 回目 (2)
第 9 回　受講者の発表 2 回目 (3)
第 10 回　受講者の発表 2 回目 (4)
第 11 回　和泉市合同調査のまとめ (2)
第 12 回　受講者の発表 3 回目 (1)
第 13 回　受講者の発表 3 回目 (2)
第 14 回　受講者の発表 3 回目 (3)
第 15 回　受講者の発表 3 回目 (4)

●事前・事後学習の内容

発表に際して、1 回ごとに取り組む課題を十分に計画し、それにむかって準備すること。発表に際して、冒頭で、自分の目的意識と今回の発表内容の選択について説明すること。発表後、質疑をふまえ発表内容について振り返り、理解や認識について整理しておくこと。

●評価方法

発表内容質疑への参加状況を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

修士論文を意識し、発表機会を生かして自分の研究を深めていくよう、意欲的に取り組んでほしい。途中、和泉市合同調査の成果についての討議の場を設ける。

●参考文献・教材

とくになし、適宜、参考文献を示す。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2513	開講期	単位数
M30	**日本史学総合研究 I** Comprehensive Studies in Japanese History I			前月 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 塚田 孝 教授／仁木 宏 教授／岸本 直文 教授／佐賀 朝 教授／磐下 徹 准教授			

●科目の主題

日本史学研究法（研究計画立案)。

●到達目標

日本史学研究法の基礎を学び、考古学から古代・中世・近世・近現代にわたる日本史の総合的な研究遂行能力を養成することをめざす。

●授業内容・授業計画

受講生各自が研究テーマの設定と研究計画を立案する基礎能力を獲得するため、担当教員が分担して各時代・分野の研究状況について講ずる。その上で、受講生の関心にしたがっていくつかの研究テーマを設定し、それに関する専門書や学術論文の体系的かつ批判的検討を行う。

●事前・事後学習の内容

受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、取り上げるべき先行研究を収集し精読しながら報告の準備を行う。報告後も研究史と課題の整理を行い、学期末の最終レポートとして、自らの研究計画を提出することとする。

●評価方法

平常点（出席と研究報告・レポート)。

●受講生へのコメント

具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

必要な資料はコピー等で配付する。
参考文献は授業時間に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH2514	開講期	単位数
M31	**日本史学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Japanese History Ⅱ			後月 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 塚田 孝 教授／仁木 宏 教授／岸本 直文 教授／佐賀 朝 教授／磐下 徹 准教授			

●科目の主題

日本史学研究法（史料）。

●到達目標

日本史学研究法を史料の点から論じ、考古学から古代・中世・近世・近現代にわたる日本史の基礎的な史料分析能力を養成することをめざす。

●授業内容・授業計画

受講生が日本史の研究能力の基盤をなす史料分析能力を広く身につけるため、担当教員が分担して各時代・分野の史資料の特徴について講ずる。その上で、受講生の関心を考慮して対象史料を選定し、具体例を通じて各時代・分野の歴史史料の調査・読解・分析の基礎能力の高度化をはかる。

●事前・事後学習の内容

受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、取り上げるべき一次史料を収集・分析して報告の準備を行う。報告後も関連史料の収集・分析を行い、学期末の最終レポートとして、自らの研究ノートを提出することとする。

●評価方法

平常点（出席と研究報告・レポート）。

●受講生へのコメント

日本史学総合研究Ⅰを履修していることが望ましい。

具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

必要な資料はコピー等で配付する。

参考文献は授業時間に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3601	開講期	単位数
M32	**日本史学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in Japanese HIstory Ⅰ			前金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 塚田 孝 教授／仁木 宏 教授／岸本 直文 教授 ／佐賀 朝 教授			

●科目の主題

日本史に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

修士論文へ向けた中間レポートを完成させる。

●授業内容・授業計画

論文テーマの設定、文献・史料の調査・収集、史料の分析、主題とそれを論じる研究方法の適合性、論文の構成、主題に即した論述の一貫性、論文の形式的な統一など、修士論文作成に必要な事項について指導する。学期末には、修士論文へ向けた中間レポートと今後の研究計画を提出すること。

学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（岸本直文教授） 主に、考古学分野と古代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

（仁木　宏教授） 主に、古代から中世にかけての時代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

（塚田　孝教授） 主に、中世から近世にかけての時代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

（佐賀　朝教授） 主に、近世から近代にかけての時代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、研究を進め、随時報告を行い、修士論文に向けた中間レポートを作成する。

●評価方法

平常点（出席と研究報告、および中間レポート）。

●受講生へのコメント

修士論文は長丁場の取り組みであり、山もあれば谷もある。そこを乗り越えて頑張ってほしい。

●参考文献・教材
プリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH3602	開講期	単位数
M33	日本史学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Japanese HIstory Ⅱ			後金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 塚田 孝 教授／仁木 宏 教授／岸本 直文 教授／佐賀 朝 教授			

●科目の主題
日本史に関する修士論文作成の指導を行う。
●到達目標
修士論文を完成させる。
●授業内容・授業計画
各自の研究計画に基づき、それぞれの研究を遂行する。具体的には、研究テーマに関わる史料の収集を行い、その分析に基づく研究報告を順次行うとともに、その上に立って当該研究テーマに関する先行研究の問題点の摘出を試みる。これにより修士論文の完成をめざす。
学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。
（岸本直文教授） 主に、考古学分野と古代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。
（仁木　宏教授） 主に、古代から中世にかけての時代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行う。
（塚田　孝教授） 主に、中世から近世にかけての時代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行う。
（佐賀　朝教授） 主に、近世から近代にかけての時代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行う。
●事前・事後学習の内容
受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、研究を進め、随時報告を行い、修士論文を完成させる。
●評価方法
平常点（出席と研究報告）。
●受講生へのコメント
自分で納得のいく修士論文を完成させた喜びはひとしおである。そこへ向けて頑張ってほしい。
●参考文献・教材
プリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2503	開講期	単位数
M34	東洋史学研究Ⅱ Advanced Studies in Oriental History Ⅱ			前水 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 平田 茂樹 教授			

●科目の主題
「南宋文集を用いた政治史研究」
●到達目標
宋代には数多くの文集が残されており、当時の政治や社会の実態を読み解く上での重要な史料となっている。今回は洪咨夔『平齋集』の「書」（手紙）を読み解く作業を通じて、南宋後半期の社会の実態を解析して行く。
●授業内容・授業計画
洪咨夔『平齋集』をテキストとし、担当を決め、順次、史料を読んでいくとともに、宋代政治構造の変化について講義する。
第 1 回　宋代史概観
第 2 回　洪咨夔とは？
第 3 回　理宗時代の政治
第 4 回　手紙の選読 1
第 5 回　手紙の選読 2
第 6 回　手紙の選読 3
第 7 回　手紙の選読 4
第 8 回　手紙の選読 5

第 9 回　手紙の選読 6
第 10 回　手紙の選読 7
第 11 回　手紙の選読 8
第 12 回　手紙の選読 9
第 13 回　手紙の選読 10
第 14 回　宋代の社会構造の変化
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
毎回、授業で読む箇所を指定し、事前に予習することを求めます。
●評価方法
平常点（100%）
●受講生へのコメント
文集を読んでいくことを通じて、漢文読解方法を身につけるとともに、宋代の社会構造の変化について学ぶことを目指してください。
●参考文献・教材
テキストはプリント配布。
参考文献は、『世界歴史大系中国史 3　五代－元』（山川出版社）、平田茂樹『宋代政治構造研究』（汲古書院）。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2504	開講期	単位数
M35	東洋史学研究演習 2 Advanced Seminar in Oriental History 2			後水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 平田 茂樹 教授			

●科目の主題
呂中「皇朝中興大事記」選読。
●到達目標
宋代には数多くの歴史評論の史料が残されており、当時の政治実態を読み解く上での重要な史料となっている。今回は南宋の呂中が書き残した『皇朝中興大事記』を読み解く作業を通じて、南宋前半期の政治の実態を解明して行く。
●授業内容・授業計画
『皇朝中興大事記』をテキストとし、担当を決め、順次、史料を読んでいくとともに、南宋初期の政治構造について講義する。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『皇朝中興大事記』第一部選読
第 3 回　『皇朝中興大事記』第二部選読
第 4 回　『皇朝中興大事記』第三部選読
第 5 回　『皇朝中興大事記』第四部選読
第 6 回　『皇朝中興大事記』第五部選読
第 7 回　『皇朝中興大事記』第六部選読
第 8 回　『皇朝中興大事記』第七部選読
第 9 回　『皇朝中興大事記』第八部選読
第 10 回　『皇朝中興大事記』第九部選読
第 11 回　『皇朝中興大事記』第十部選読
第 12 回　『皇朝中興大事記』第十一部選読
第 13 回　『皇朝中興大事記』第十二部選読
第 14 回　『皇朝中興大事記』第十三部選読
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
毎回、授業で読む箇所を指定し、予習することを求めます。
●評価方法
平常点（100%）
●受講生へのコメント
白文の漢文史料を読んでいくことを通じて、漢文読解方法を身につけるとともに、宋代の政治構造の変化につい

て学ぶことを目指してください。

●参考文献・教材

テキストはプリント配布。参考文献は、『世界歴史大系中国史３ 五代－元』（山川出版社）、平田茂樹『宋代政治構造研究』（汲古書院）。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2505	開講期	単位数
M36	東洋史学研究Ⅲ Advanced Studies in Oriental History Ⅲ			前水 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 平田 茂樹 教授			

●科目の主題

外国の中国史学の研究方法

●到達目標

担当報告者は自己の研究テーマに即して、代表的な研究者の研究成果を選び、報告を行うと共に、参加者と討論を行う。この作業を繰り返すことを通じて、外国の中国史学の研究方法を修得させる。

●授業内容・授業計画

外国の中国史学の研究方法

第 1 回　外国の中国史学の研究方法概観
第 2 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論一回目
第 3 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論二回目
第 4 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論三回目
第 5 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論四回目
第 6 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論五回目
第 7 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論六回目
第 8 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論七回目
第 9 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論八回目
第 10 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論九回目
第 11 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論十回目
第 12 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論十一回目
第 13 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論十二回目
第 14 回　外国の中国史学の研究方法について報告・討論十三回目
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

担当報告者は事前に入念な準備を行うと共に、授業終了後は教員の個人指導を受け、その指示に従いそれぞれの課題に取り組む。

●評価方法

報告（70%）と討論（30%）

●受講生へのコメント

入念な報告の準備を行うと共に、他の報告者の報告に対して、自己の意見を積極的に述べるよう努めてください。

●参考文献・教材

適宜指示

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2506	開講期	単位数
M37	東洋史学研究演習 3 Advanced Seminar in Oriental History 3			後水 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 平田 茂樹 教授			

●科目の主題

中国史の歴史学研究法

●到達目標

担当報告者に日本の中国史学における著名な研究者の研究成果を報告させ、参加者との議論を通じて、中国史学の研究方法を修得する。

●授業内容・授業計画

中国史の歴史学研究法

第 1 回　歴史学の研究法概観
第 2 回　内藤湖南の歴史学
第 3 回　桑原 隲蔵の歴史学
第 4 回　宮崎市定の歴史学
第 5 回　宇都宮清吉の歴史学
第 6 回　西嶋定生の歴史学
第 7 回　増淵龍夫の歴史学
第 8 回　谷川道雄の歴史学
第 9 回　川勝義雄の歴史学
第 10 回　渡辺信一郎の歴史学
第 11 回　森正夫の歴史学
第 12 回　浜下武志の歴史学
第 13 回　岸本美緒の歴史学
第 14 回　日本の宋代史研究の新しい潮流
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

担当報告者は事前に入念な準備を行うとともに、授業終了後は、教員の個人指導を受け、その指示に従ってそれぞれの課題に取り組む。

●評価方法

報告（70%）と討論（30%）

●受講生へのコメント

入念な報告の準備を心がけると共に、他の報告者の報告に対して積極的に自己の意見を述べるように努めてください。

●参考文献・教材

適宜指示。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2507	開講期	単位数
M38	東洋史学研究Ⅳ Advanced Studies in Oriental History Ⅳ			前水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 上野 雅由樹 准教授			

●科目の主題

オスマン帝国史に関する専門的な英文の研究を輪読する。

●到達目標

オスマン帝国史研究において、近年どのような研究がなされているかを把握する。

●授業内容・授業計画

主に 18 世紀のイスタンブルとオスマン権力の関係を扱うことを予定しているが、履修者の興味関心を考慮する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　18 世紀の危機
第 3 回　18 世紀の危機
第 4 回　18 世紀の危機
第 5 回　イスタンブル統制
第 6 回　イスタンブル統制
第 7 回　イスタンブル統制
第 8 回　イスタンブル統制
第 9 回　18 世紀末の調査台帳
第 10 回　18 世紀末の調査台帳
第 11 回　18 世紀末の調査台帳
第 12 回　18 世紀末の調査台帳
第 13 回　公序と街区
第 14 回　公序と街区
第 15 回　公序と街区

●事前・事後学習の内容
事前にテキストの指定された範囲を事前に読み、疑問点を明確にしておくこと。
事後学習として、講読した箇所を読み返し、理解を確認すること。
●評価方法
演習形式の授業であり、各回の取り組みで評価する。
●受講生へのコメント
新たな知見に触れることを楽しんで下さい。
●参考文献・教材
参考文献：Betul Basaran, Selim III, Social Control and Policing in Istanbul at the end of the Eighteenth Century (Leiden: Brill, 2014).

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2508	開講期	単位数
M39	東洋史学研究演習 4			後水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 上野 雅由樹 准教授			

●科目の主題
オスマン帝国近代史に関する研究文献の輪読。
●到達目標
オスマン近代史の最新の研究状況を把握することとともに、研究を批判的に読む技術を身につける。
●授業内容・授業計画
オスマン帝国とその周辺における人の移動を主題とした研究を読むことを予定しているが、履修者の興味関心も考慮する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　通行証制度の導入
第 3 回　通行証制度の導入
第 4 回　通行証制度の導入
第 5 回　通行証制度の導入
第 6 回　検疫制度の導入
第 7 回　検疫制度の導入
第 8 回　検疫制度の導入
第 9 回　近代の巡礼
第 10 回　近代の巡礼
第 11 回　近代の巡礼
第 12 回　観光業の発展
第 13 回　観光業の発展
第 14 回　観光業の発展
第 15 回　観光業の発展

●事前・事後学習の内容
事前に、各回に扱う研究文献を読み、疑問点を明確にしておくこと。
事後学習として、講読箇所を読み返し、自信の理解を確認すること。
●評価方法
演習形式の授業であるため、平常点のみで評価する。
●受講生へのコメント
講読文献で扱われている内容を自分の興味関心に引き付けて読んでいって下さい。
●参考文献・教材
授業時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2509	開講期	単位数
M40	**東洋史学研究Ⅴ** Advanced Studies in Oriental History Ⅴ			後月 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 永田 拓治 非常勤講師			

●科目の主題

歴史学を学ぶうえで不可欠な資料 / 史料を精査する重要性を『三国志』という史料を中心に学ぶことを主題とする。

●到達目標

中国史を現在の国家・国境の枠組みではなく世界史という文脈のなかでとらえる力、また古代の日中関係について両国間だけの関係としてとらえるのではなく、朝鮮半島・東南アジアなどをふくむ広域でとらえる視野を身につける。

●授業内容・授業計画

2 世紀中後期から 7 世紀初の東アジア世界の国際関係について、おもに民族・中華意識という視点を中心として学習する。また現在の東アジア情勢にもふれつつ、いま 2 ～ 7 世紀の歴史を学ぶ意義についても考えていく。

第 1 回　ガイダンス「歴史を学ぶ意味とは」
第 2 回　史料 / 資料から何を読み解くか
第 3 回　三国志の見方―歴史事実と歴史認識
第 4 回　三国志の見方―歴史認識の変化と歴史認識の導入―
第 5 回　三国志の見方―資料としての人物①
第 6 回　三国志の見方―資料としての人物②
第 7 回　三国志の見方―資料としての人物③－史料批判の重要性－
第 8 回　三国 (魏・呉・蜀) の国際情勢―地政学という視点①
第 9 回　三国 (魏・呉・蜀) の国際情勢―地政学という視点②
第 10 回　三国志東夷伝－東夷伝はなぜ編まれたのか？－
第 11 回　消し去られた第四極－公孫氏と孫呉の外交－「残されない」という資料
第 12 回　中国からみた倭国①－魏志倭人伝からみた倭国－
第 13 回　中国からみた倭国②－『宋書』倭国伝
第 14 回　中国からみた倭国③－『隋書』倭国伝
第 15 回　まとめ－「歴史を学ぶ意味とは」再考

●事前・事後学習の内容

前もって配付したレジュメを熟読すること。また授業で紹介した参考文献を読み、授業内容の理解を深めること。

●評価方法

授業への取り組む姿勢、レポートで評価する
1) 授業に取り組む姿勢 (20%)
2) 授業後の感想 [感想の書き方についてはガイダンスで紹介する](30%)
3) 50 分の授業、ないしは報告を想定した内容 (内容は任意) のレポート 2000 字程度を作成し提出 (口頭報告の場合もありうる) (50%)

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

授業中に適宜紹介する

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2510	開講期	単位数
M41	**東洋史学研究Ⅵ** Advanced Studies in Oriental History Ⅵ			前集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 長縄 宣博 非常勤講師			

●科目の主題

・帝国の歴史としてロシア史の流れを理解する。
・イスラーム地域研究の対象としてロシアを捉える目を養う。

●到達目標

・ロシアのムスリムには多様な歴史と文化を持っている人々が含まれていることを認識する。
・ロシアが国内外のムスリムと結んできた歴史を世界史の文脈で理解できる。

・ロシアとイスラームに関する欧米中心の情報を批判的に分析することができる。

●授業内容・授業計画

この講義では、現在のロシア連邦の領域にイスラームが到達した 7 世紀後半から最近のロシアによるクリミア併合・シリア内戦への介入に至るまでの歴史を概観する。各回の授業では、最新の研究状況や論点も紹介する。

第 1 回　ロシアとイスラーム世界
第 2 回　帝国とナショナリズム：ロシア近現代史の捉え方
第 3 回　イスラームとの邂逅
第 4 回　ユーラシア草原からヨーロッパへ（16-18 世紀）
第 5 回　ロシア帝国の膨張
第 6 回　植民地統治：コーカサスと中央アジア
第 7 回　ムスリム社会の変容
第 8 回　帝国の黄昏：19 世紀後半から 20 世紀初頭
第 9 回　革命とイスラーム
第 10 回　無神論とイスラーム
第 11 回　ペレストロイカ：ナショナリズムとイスラーム
第 12 回　文明の対話？　ヴォルガ・ウラル地域
第 13 回　文明の衝突？　チェチェン戦争
第 14 回　9.11 以降：グローバルなテロとの戦いとロシア
第 15 回　メッカ巡礼から見るイスラーム大国ロシア

●事前・事後学習の内容

授業の前と後に、「参考文献・教材」で示した文献で用語や時代背景を確認しておくこと。
専門性の高い論文や外国語の重要文献の参照については、適宜指示する。

●評価方法

平常点（質問の内容や議論への参加度も含む）(40%)、一日の最後にまとめる小論文 (60%)。
この小論文を通じて、予習・復習で得た知識の定着度も測る。

●受講生へのコメント

幅広い専門の学生が比較と連関の視点をもって出席することを期待する。

●参考文献・教材

秋葉淳、橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史：オスマン帝国からの展望』昭和堂、2014 年。
小澤実、長縄宣博編『北西ユーラシア歴史空間の再構築：前近代ロシアと周辺世界（スラブ・ユーラシア叢書 12)』北海道大学出版会、2016 年。
小杉泰編『イスラームの歴史2：イスラームの拡大と変容』山川出版社、2010 年。
小松久男『イブラヒム、日本への旅：ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房、2008 年。
小松久男編『中央ユーラシア史（世界各国史4)』山川出版社、2000 年。
塩川伸明『多民族国家ソ連の興亡 I-III』岩波書店、2004-2007 年。
濱本真実『共生のイスラーム：ロシアの正教徒とムスリム』山川出版社、2011 年。
堀川徹、大江泰一郎、磯貝健一編『シャリーアとロシア帝国：近代中央ユーラシアの法と社会』臨川書店、2014 年。
松戸清裕『ソ連史』ちくま新書、2011 年。
山内昌之『神軍　緑軍　赤軍』ちくま学術文庫、1996 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2511	開講期	単位数
M42	**東洋史学総合研究 I** Comprehensive Studies in Oriental History I			前火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 平田 茂樹 教授／野村 親義 准教授			

●科目の主題

東洋史学の特徴を理解し、その長所を生かした研究について考える。

●到達目標

それぞれの研究テーマに即して、研究目的や方法を明確化する。

●授業内容・授業計画

東洋史学を総合的に理解するよう、基本的諸問題および史学史について、担当教員がそれぞれの専門分野にしたがって講ずる。あわせて、研究目的・方法を明確にし、修士論文の研究テーマの設定と研究計画の立案ができるよう、受講生にレポートや研究報告を求め、それに基づく討論を行う。

●事前・事後学習の内容

担当報告者は、事前に報告内容を準備させる。また、授業終了後、個別に報告者に指導を行い、課題について指示を与えて、取り組ませる。

●評価方法

出席（30%）と報告内容（70%）

●受講生へのコメント

自分の研究テーマだけでなく、ほかの受講生のテーマにも関心をもって、ディスカッションに参加できるようにしてください。

●参考文献・教材

随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE2512	開講期	単位数
M43	**東洋史学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Oriental History Ⅱ			後火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 平田 茂樹 教授			

●科目の主題

受講生各自が研究テーマの特徴を理解したうえで、研究に取り組むことを考える。

●到達目標

研究状況の把握や史料収集方法に関する能力を高められるようにする。

●授業内容・授業計画

東洋史学の研究手法を総合的に理解するよう、基本的な専門書・論文の収集・読解・分析の仕方を、担当教員がそれぞれの専門分野にしたがって講ずる。あわせて、受講生各自のテーマにかんする史料の所在の確認・収集の仕方を指導し、受講生各自のレポートに基づいて、より高度な基礎能力を獲得できるよう討論を行う。終了時に、研究計画書の提出を求める。

●事前・事後学習の内容

担当報告者は、事前に報告内容を準備させる。また、授業終了後、個別に報告者に指導を行い、課題について指示を与えて、取り組ませる。

●評価方法

出席（30%）と報告内容（70%）

●受講生へのコメント

自分の研究テーマだけでなく、ほかの受講生のテーマにも関心をもって、ディスカッションに参加できるようにしてください。

●参考文献・教材

随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3601	開講期	単位数
M44	**東洋史学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in Oriental HIstory Ⅰ			前木 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 平田 茂樹 教授			

●科目の主題

それぞれの研究計画に基づき史料の収集・読解・分析を行う。その際、史料解析の問題点を指摘し、データの整理の仕方を会得するよう努める。

●到達目標

修士論文の作成に必要とされる史料解析能力を習得させる。

●授業内容・授業計画

学生は研究テーマに応じて、授業並びに授業以外においても適宜、教員の指導を受ける。

●事前・事後学習の内容

報告担当者は入念な準備を行うと共に、授業終了後は、教員の個人指導を受け、その指示に従い、課題に取り組むようにさせる。

●評価方法

出席（30%）と報告内容（70%）

●受講生へのコメント
自分の研究テーマを相対化できるよう、幅広い知見をもってください。
●参考文献・教材
随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE3602	開講期	単位数
M45	東洋史学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Oriental HIstory Ⅱ			後木 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 平田 茂樹 教授			

●科目の主題
論文の構成、執筆上の問題点などを指摘しながら、論文の完成度を高める。
●到達目標
論文の完成に至るまで、緊密な個別指導と報告会を通じての共同指導を行う。
●授業内容・授業計画
学生はその研究テーマに応じて、授業（報告会）並びに授業以外も適宜、教員の指導を受ける。
●事前・事後学習の内容
報告担当者は入念な準備を行うと共に、授業（報告会）終了後は、教員の個人指導を受け、その指示に従い、課題に取り組むようにさせる。
●評価方法
出席（30%）と報告内容（70%）
●受講生へのコメント
自分の研究テーマを相対化できるよう、幅広い知見をもってください。
●参考文献・教材
随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEM2501	開講期	単位数
M46	世界史学研究 Advanced Studies in World History			前木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野村 親義 准教授			

●科目の主題
インド経済史に関する一次史料を、輪読形式で読みます。本年度は一次史料として、Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars(1930)を用いる予定ですが、受講生の関心に基づき、他の一次史料も用いる予定です。
●到達目標
本講義の達成目標はインド経済史の初歩的な一次史料の読み方を習得することです。
●授業内容・授業計画
Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars(1930)ほかを輪読形式で読み進めます。

第 1 回　導入
第 2 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.1-20.
第 3 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.21-40.
第 4 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.41-60.
第 5 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.61-80.
第 6 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.81-100.
第 7 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.101-120.
第 8 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.121-140.
第 9 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.141-160.
第 10 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.161-180.
第 11 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.181-200.
第 12 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.201-220.

第 13 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.221-240.
第 14 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.241-260.
第 15 回　Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars, pp.261-280.

●事前・事後学習の内容
史料をしっかり読み込んでから授業に参加してください。また、授業中に紹介する二次資料も、授業前後、各自、読み進めてください。
●評価方法
平常点で評価します。
●受講生へのコメント
インド経済史の初歩的な一次史料の読み方を体得してください。
●参考文献・教材
Report of Royal Commission on Labour in India: Assam and the Dooars(1930)、このほかの参考文献・教材は、授業中に紹介します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAGEM2502	開講期	単位数
M47	世界史学研究演習 Advaced Seminar in World History			後集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 山根 聡 非常勤講師			

●科目の主題
南アジアは 5 億人に達するといわれる世界最大のムスリム人口を抱える地域でありながら、多数派のヒンドゥーに対する少数派としてとらえられ、またイスラーム世界においては非アラブ圏としての周縁的地位に置かれている。しかし、同地域のイスラーム文化の歴史や文化、政治運動は、独自の文化的発展を遂げつつも、イスラーム世界のみならず、国際情勢全体にも多大な影響を与えてきた。本講義では、南アジアの歴史的発展を文献資料や映像資料を用いながら概観しつつ、現代的課題についても検討していく。
●到達目標
南アジアのイスラームについて、イスラーム的な思考回路や政治的実践が地域文化にいかに影響を与えてきたかに関する知識を習得するともに、それが現代社会においていかなる意義を持つかについて自ら考え、議論できるようにする。
●授業内容・授業計画
講義ではあるが、文献や映像資料を見ながら、互いに議論しあう時間を持つ。
第 1 回　イスラーム史における南アジアの位置づけ
第 2 回　南アジアのイスラームの歴史
第 3 回　南アジアのイスラーム文化―文学の展開
第 4 回　19 世紀以降の近代化とイスラーム復興運動
第 5 回　近現代におけるイスラーム運動とパキスタン独立
第 6 回　パキスタン独立運動におけるイスラーム
第 7 回　メディアの発展と宗教復興
第 8 回　南アジアのムスリムの人的ネットワークの拡大と移民社会
第 9 回　現代イスラーム国家間の連携における南アジア
第 10 回　パキスタン政府を支える軍、宗教、メディアの歴史
第 11 回　南アジアのムスリムにける向心性の歴史的展開
第 12 回　対テロ戦争と南アジア
第 13 回　低テロ戦争後の南アジア世界
第 14 回　印パ関係の歴史と今後の展望
第 15 回　総括的議論
●事前・事後学習の内容
講義開始 1 週間前までに資料をウェブサイトで公開するので、これを読み、自らの見解を発言できるようにしておくこと。
●評価方法
平常点 20%　授業中の議論 30%　レポート 50%
●受講生へのコメント
南アジアの歴史をイスラームから解読しようとする講義です。関心のある方はどうぞ。

●参考文献・教材
山根聡 2011『四億の少数派　南アジアのイスラーム』山川出版社

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2504	開講期	単位数
M48	西洋史学研究演習 1			前金 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大清水 裕 非常勤講師			

●科目の主題
ローマ帝国支配下の古代地中海世界の文化変容について，北アフリカを主たる舞台として考察する。
●到達目標
現代ヨーロッパ社会の基礎の一つとされる古代ギリシア・ローマの文化が，少なくとも同時代においては「ヨーロッパ」だけのものではなかったことを理解し，その現代的意味について自分なりに意見を持てるようになることを目標とする。
●授業内容・授業計画
北アフリカにおけるローマ支配の始まりからその終焉まで，すなわち，ポエニ戦争終結からイスラーム勢力による征服までの北アフリカ社会の変容について，できる限り同時代史料に基づいて辿る。
第 1 回　イントロダクション：「古典」としてのギリシア・ローマ文化
第 2 回　ポエニ戦争とは？
第 3 回　ヌミディア王国とユグルタ戦争
第 4 回　カエサルの見た北アフリカ
第 5 回　アウグストゥスとクレオパトラ
第 6 回　カルタゴ再建
第 7 回　ローマ支配への抵抗：タクファリナスの乱
第 8 回　北アフリカにおけるローマ皇帝礼拝の展開
第 9 回　軍隊と都市：ランバエシスとティムガドを例に
第 10 回　バナサ青銅板に見るローマ支配の実態
第 11 回　セプティミウス・セウェルス帝の即位
第 12 回　「アフリカ的ローマ人」の世界
第 13 回　北アフリカにおけるキリスト教の展開
第 14 回　ヴァンダルとビザンツ
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
事前には，古代ローマ史の基礎知識として，高校世界史 B の教科書程度の内容を復習のうえ，理解しておくことが望ましい。また，事後には，配布資料の内容を踏まえて，古代地中海世界における文化変容の意義について自分なりの考えをまとめておくこと。
●評価方法
授業中の参加姿勢・発言等（50%），期末試験（50%）
●受講生へのコメント
授業形態は「演習」としていますが，受講生と相談のうえ，受講生の関心や専門知識を勘案したうえで，「講義」形式とするかもしれません。気軽に相談してください。
●参考文献・教材
古山正人ほか編訳『西洋古代史料集（第 2 版）』東京大学出版会，2002 年。
本村凌二編著，池口守ほか『ラテン語碑文で楽しむ古代ローマ』研究社，2011 年。
歴史学研究会編『世界史史料 1：古代のオリエントと地中海世界』岩波書店，2012 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2505	開講期	単位数
M49	西洋史学研究Ⅱ Advanced Studies in Western History Ⅱ			前木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 草生 久嗣 准教授			

●科目の主題
中世東地中海世界における異端問題（I）

●到達目標
西洋におけるキリスト教異端問題が、中世ヨーロッパ・ビザンツの信仰・社会について理解するカギとなることを学ぶ。
●授業内容・授業計画
西洋中世異端史の古典とされている書籍を選択し、とくに東方ビザンツ世界を題材としたものについて講読してゆく。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　イントロダクション（1）参加者自己紹介、参考資料の確認、教材の確定
第 3 回　イントロダクション（2）報告作業内容の確認、報告の役割分担
第 4 回　イントロダクション（3）準備から報告、記録作成までの模擬演習
第 5 回　中世異端史という枠組み 1（グルントマン）
第 6 回　中世異端史という枠組み 2（グルントマン）
第 7 回　中世異端史という枠組み 3（グルントマン）
第 8 回　まとめ（1）
第 9 回　初期キリスト教世界の異端 1（ヨナス）
第 10 回　初期キリスト教世界の異端 2（ヨナス）
第 11 回　初期キリスト教世界の異端 3（ヨナス）
第 12 回　まとめ（2）
第 13 回　東方諸教会 1（アティーヤ）
第 14 回　東方諸教会 2（アティーヤ）
第 15 回　まとめ（3）

●事前・事後学習の内容
日本語のテキストを中心としつつ、その内容把握にとどまらず、学会動向・技術的な知見も習得するために、参加者は担当部位以外でもテキストの精読を求められる。
●評価方法
参加の姿勢および報告、提出課題に対する評価
●受講生へのコメント
西洋のキリスト教異端問題は、これまで西ヨーロッパにおける事例を軸に検討されてきましたが、同時期の東方世界、ビザンツ正教会世界にあっては別質の特徴ある姿をとっていました。思想・信仰に対する審判や弾圧、差別を再生産してゆく異端レッテルの機能など、歴史人類学および歴史社会学にもおよぶテーマとして扱います。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2506	開講期	単位数
M50	**西洋史学研究演習 2** Advanced Seminar in Western History 2			後木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 草生 久嗣 准教授			

●科目の主題
中世東地中海世界における異端問題（II）
●到達目標
西洋におけるキリスト教異端問題が、中世ヨーロッパ・ビザンツの信仰・社会について理解するカギとなることを学ぶ。
●授業内容・授業計画
西洋中世異端史の古典とされている書籍を選択し、とくに東方ビザンツ世界を題材としたものについて講読してゆく。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　中世のマニ教 1（ランシマン）
第 3 回　中世のマニ教 2（ランシマン）
第 4 回　中世のマニ教 3（ランシマン）
第 5 回　中世のマニ教 4
第 6 回　中世のマニ教 5
第 7 回　中世のマニ教 6

第 8 回　中世二元論異端 1（ストヤノフ）
第 9 回　中世二元論異端 2（ストヤノフ）
第 10 回　まとめ（1）
第 11 回　中世異端学 1（アンゲロフ・渡邊昌美）
第 12 回　中世異端学 2（アンゲロフ・渡邊昌美）
第 13 回　中世異端学 3（アンゲロフ・渡邊昌美）
第 14 回　総括
第 15 回　予備

●事前・事後学習の内容
日本語のテキストを中心としつつ、その内容把握にとどまらず、学会動向・技術的な知見も習得するために、参加者は担当部位以外でもテキストの精読を求められる。

●評価方法
参加の姿勢および報告、提出課題に対する評価

●受講生へのコメント
西洋のキリスト教異端問題は、これまで西ヨーロッパにおける事例を軸に検討されてきましたが、同時期の東方世界、ビザンツ正教会世界にあっては別質の特徴ある姿をとっていました。思想・信仰に対する審判や弾圧、差別を再生産してゆく異端レッテルの機能など、歴史人類学および歴史社会学にもおよぶテーマとして扱います。

●参考文献・教材
Steven Runciman, The Medieval Manichee, Cambridge, 1991 (=1947).
堀米庸三『正統と異端』中央公論新社
渡邊昌美『異端者の群れ』八坂書房、2008 年。その他、授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2507	開講期	単位数
M51	**西洋史学研究Ⅲ** Advanced Studies in Western History Ⅲ			後水 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 大黒 俊二 教授			

●科目の主題
中世末期イタリアにおける「限界リテラシー」と「エゴ・ドキュメント」

●到達目標
中世末期イタリアを対象に「限界リテラシー」と「エゴ・ドキュメント」の発現形態を探り、両者を比較対照することで中世末期に言語を用いる主体に生じた変化を明らかにし、「近代的個人」形成の前提を言語面から明らかにする。

●授業内容・授業計画
講義を 3 部に分け、歴史的背景、限界リテラシー、エゴ・ドキュメント、について順に検討し、最後に限界リテラシーとエゴ・ドキュメントを比較対照し、両者の関係について総括を行う。

第 1 回　序論：限界リテラシー、エゴ・ドキュメント
第 2 回　歴史的背景 (1)：二重言語体制
第 3 回　歴史的背景 (2)：俗語の発展
第 4 回　歴史的背景 (3)：イタリア語の形成
第 5 回　歴史的背景 (4)：ラテン語とイタリア語
第 6 回　歴史的背景 (5)：マクロ流通本とミクロ流通本
第 7 回　歴史的背景 (6)：代筆と限界リテラシー
第 8 回　限界リテラシー分析 (1)：レーナ・ストロッツィとラーパ・アッチャイオーリの手紙
第 9 回　限界リテラシー分析 (2)：ベネデット・デル・マッサリツィアの会計帳簿
第 10 回　限界リテラシー分析 (3)：ベレッツェ・オルシーニの「告白」
第 11 回　エゴ・ドキュメント分析 (1)：ジョヴァンニ・モレッリの『覚書』
第 12 回　エゴ・ドキュメント分析 (3)：ジョヴァンニ・ダ・ファイエの自伝
第 13 回　エゴ・ドキュメント分析 (3)：マッダレーナ・ナルドゥッチの遺言書
第 14 回　限界リテラシーとエゴ・ドキュメント：比較分析
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容
「参考文献・教材」に挙げた拙著を事前に通読しておくことが望ましい。

●評価方法
レポート。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
大黒俊二『声と文字』岩波書店、2010 年。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2508	開講期	単位数
M52	西洋史学研究演習 3 Advanced Seminar in Western History 3			前水 2	2 単位
	授業形態 講読	担当教員名 大黒 俊二 教授			

●科目の主題
中世ラテン語講読
●到達目標
中世ラテン語史料を読み進めていくことにより、西洋中世史研究には不可欠のラテン語史料読解力を養う。
●授業内容・授業計画
テキストとして 12 世紀の修道士が書き残した自伝 Guibert de Nogent, *Autobiographie*, Paris, 1981 を用い、毎回原則として 1 セクションずつ読み進める。

第 1 回 授業の進め方についての説明
第 2 回 *Autobiographie*, libellus primus I
第 3 回 *Autobiographie*, libellus primus II
第 4 回 *Autobiographie*, libellus primus III
第 5 回 *Autobiographie*, libellus primus IV
第 6 回 *Autobiographie*, libellus primus V
第 7 回 *Autobiographie*, libellus primus VI
第 8 回 *Autobiographie*, libellus primus VII
第 9 回 *Autobiographie*, libellus primus VIII
第 10 回 *Autobiographie*, libellus primus IX
第 11 回 *Autobiographie*, libellus primus X
第 12 回 *Autobiographie*, libellus primus XI
第 13 回 *Autobiographie*, libellus primus XII
第 14 回 *Autobiographie*, libellus primus XIII
第 15 回 *Autobiographie*, libellus primus XIV

●事前・事後学習の内容
古典ラテン語をしっかり学んでおくことが前提である。古典ラテン語の素養があってはじめて中世ラテン語の特徴も理解しうる。
●評価方法
平常点。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
Guibert de Nogent, *Autobiographie*, Paris, 1981.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2509	開講期	単位数
M53	西洋史学研究Ⅳ Advanced Studies in Western History Ⅳ			前月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 北村 昌史 教授			

●科目の主題
西洋史をめぐる諸問題。前半 3 分の 2 は受講生の語学力や関心に応じて、英語ないしはドイツ語の研究書をもとに討論を行う授業をおこない、その後参加者による自由発表をおこなう。

●到達目標
高度な研究書を読み込んで議論を展開する能力を身につけ、自由発表によりその能力を実践する。
●授業内容・授業計画
研究書は未定。研究書ないしは論文を読む際には、毎回担当者を決めレジュメを作成してきていただいて、それをもとに報告していただく。それを受けて出席者で討論する。自由発表は受講生が現在関心を持っているテーマについて報告していただく。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 3 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 4 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 5 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 6 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 7 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 8 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 9 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 10 回　英語ないしはドイツ語の研究書
第 11 回　自由発表
第 12 回　自由発表
第 13 回　自由発表
第 14 回　自由発表
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容
前半 3 分の 2 の事前学習は、予習をして、自分なりに内容を整理し、事後学習は、授業で議論された研究手法や歴史的事実について文献やインターネットなどで確認すること。自由発表の回については具体的な内容は指示できないが、他人の報告を聞いて自分の研究について様々な角度から見つめなおすこと。
●評価方法
平常点：100%
●受講生へのコメント
研究書に基づいて討論する授業では予習は必須。自由発表では、出席者は必ず質問すること。
●参考文献・教材
授業で適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2510	開講期	単位数
M54	**西洋史学研究演習 4** Advanced Seminar in Western History 4			後月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 北村 昌史 教授			

●科目の主題
西洋史をめぐる諸問題。歴史研究の土台である「史料」について検討する。担当教員および受講生が現在取り組んでいる史料をそれぞれ紹介し、その史料の持つ研究上の可能性を議論する。
●到達目標
「史料」のもつ可能性と限界についての議論を通じて、「史料」から何がわかるかについての感覚を身につける。
●授業内容・授業計画
担当教員がまず自分の「史料」をいくつか紹介し、それを受けて受講生による「史料」の紹介を行う。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　担当教員が検討している史料
第 3 回　担当教員が検討している史料
第 4 回　担当教員が検討している史料
第 5 回　担当教員が検討している史料
第 6 回　受講生が検討している史料
第 7 回　受講生が検討している史料
第 8 回　受講生が検討している史料
第 9 回　受講生が検討している史料

第 10 回　受講生が検討している史料
第 11 回　受講生が検討している史料
第 12 回　受講生が検討している史料
第 13 回　受講生が検討している史料
第 14 回　総括的議論
第 15 回　総括的議論

●事前・事後学習の内容
事前・事後学習は、他人の「史料」をめぐる議論を聞いて自分の研究を様々な角度から見つめなおしてほしい。
●評価方法
平常点：100％
●受講生へのコメント
授業を自分が作るくらいの気概で臨んでほしい。
●参考文献・教材
とくになし。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2511	開講期	単位数
M55	西洋史学研究Ⅴ Advanced Studies in Western History Ⅴ			後火 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 上垣 豊 非常勤講師			

●科目の主題
近代フランスの教育社会史研究の諸問題を、エリート教育を中心に、考察する。イギリスやドイツなどと比較しながら 中等教育、高等教育を中心に述べ、第二次世界大戦後動向、フランスの教育が抱えている課題についても触れることにする。
●到達目標
1) 近代フランス教育社会史の課題を一つ以上あげて説明できる。
2) 中等教育と高等教育を中心に近代フランス教育史の主要な出来事のいくつかをとりあげて、説明することができる。
3) 日本やほかの西欧諸国との比較史的観点から、近代フランスの青年期教育や教養教育などの特質を説明することができる。
4) 青年期教育や教養教育のあり方について関心を抱き、自分なりの考えを述べることができる。
●授業内容・授業計画
最初にナポレオン時代から第三共和政末までの、フランスの公教育制度について大まかに説明してから、中等教育、大学、グランド・ゼコール、女子教育の順番に論じることにする。
第 1 回　はじめに
第 2 回　初等教育と中等教育の関係
第 3 回　古典人文学の伝統 --- 中等教育と教養教育をめぐって
第 4 回　アグレガシオン --- 中等教員養成システム
第 5 回　中等教育における自由と規律
第 6 回　青年運動
第 7 回　コロニー・ド・ヴァカンス
第 8 回　19 世紀前半の高等教育
第 9 回　第三共和政期の大学改革
第 10 回　大学の自治と学生運動
第 11 回　グランド・ゼコール (1)
第 12 回　グランド・ゼコール (2)
第 13 回　女子中等教育・女性高等教育の発展 (1)
第 14 回　女子中等教育・女性高等教育の発展 (2)
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
次回の授業で扱う資料、テキストを配布あるいは指定する。あらかじめ目を通して内容を把握しておくことが望ましい。
●評価方法

平常点とレポートで総合的に評価する。

●受講生へのコメント

新聞・雑誌やインターネットを通して、日本の中等教育・高等教育や科学・技術に関する記事を読み、教育問題に日ごろから関心を抱いておくように努めてほしい。

●参考文献・教材

谷川稔・渡辺和行編　『近代フランスの歴史 --- 国民国家形成の彼方に ---』 ミネルヴァ書房
前田更子　『私立学校から見る近代フランス』 昭和堂
南川高志編　『知と学びのヨーロッパ史 --- 人文学・人文主義の歴史的展開 ---』 ミネルヴァ書房
香川せつ子・河村貞枝編　『女性と高等教育 --- 機会拡張と社会的相克 ---』 昭和堂
R.D. アンダーソン　『近代ヨーロッパ大学史 -- 啓蒙期から 1914 年まで』 昭和堂
上垣豊　『規律と教養のフランス近代 』 ミネルヴァ書房

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2513	開講期	単位数
M56	**西洋史学総合研究Ⅰ** Comprehensive Studies in Western HIstory Ⅰ			前火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大黒 俊二 教授／北村 昌史 教授／草生 久嗣 准教授			

●科目の主題

西洋史学研究法の基礎を学ぶ

●到達目標

参考図書の使い方、文献探索・収集の方法、史料読解法などについての基本的な技術を習得することをめざす。

●授業内容・授業計画

西洋史学に関する基本的な問題について、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマ（「ビザンツ史」、「イタリア中・近世文化史」「近・現代ドイツ社会史」など）について、総合的に講じる。それと並行して各種研究方法について概説し、歴史資料の扱いについても講じる。また受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討論をする。

●事前・事後学習の内容

担当教員の指示する文献を事前に通読しておくこと。

●評価方法

平常点（出席と研究報告）。

●受講生へのコメント

具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

必要な資料はコピー等で配付する。
参考文献は授業時間に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW2514	開講期	単位数
M57	**西洋史学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Western HIstory Ⅱ			後火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大黒 俊二 教授／北村 昌史 教授／草生 久嗣 准教授			

●科目の主題

西洋史研究法をより具体的に論じる。

●到達目標

西洋史学総合研究Ⅰで学んだ西洋史学研究法を各自の研究テーマに適用しつつ、修士論文作成へ向けて準備作業を進める。

●授業内容・授業計画

担当教員がそれぞれの専門分野における個別的テーマ（「ビザンツ帝国における異端問題」「ルネサンス期イタリア都市における書字文化」「19 世紀ベルリン都市史」など）を取り上げて、研究史・研究方法について具体的に講じる。それと並行して受講生から、予定している修士論文のテーマとその概要について、あるいはそれに関わる研究について報告を求め、それに基づく討論をする。終了時に、研究計画書の提出を求める。

●事前・事後学習の内容

担当教員の指示する文献を事前に通読しておくこと。

●評価方法

平常点（出席と研究報告）

●受講生へのコメント

西洋史学総合研究１を履修していることが望ましい。
具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

必要な資料はコピー等で配付する。
参考文献は授業時間に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW3601	開講期	単位数
M58	**西洋史学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in Western HIstory Ⅰ			前月 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大黒 俊二 教授／北村 昌史 教授			

●科目の主題

西洋史学に関する修士論文作成の指導を行なう。

●到達目標

学界が要求する水準の論文を完成することを目指す。

●授業内容・授業計画

論文テーマの設定、文献・史料の調査・収集、資料の分析、主題とそれを論じる研究方法の適合性、論文の構成、主題に即した論述の一貫性、論文の形式的な統一など、修士論文作成に必要な事項について指導し、論文完成に至らしめる。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（大黒俊二教授） 主に、古代から中世にかけての研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。
（北村昌史教授） 主に、近代から現代にかけての研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

報告前に資料の作成法について教員の指導を受けること。報告後は報告内容に対する教員の指摘に従って論文内容を再考すること。

●評価方法

平常点（出席と研究報告）。

●受講生へのコメント

論文内容とともに口頭によるプレゼンテーションの方法にも工夫してほしい。

●参考文献・教材

随時指示。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWEW3602	開講期	単位数
M59	**西洋史学研究指導Ⅱ** Supervision of Master's Thesis in Western HIstory Ⅱ			後月 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大黒 俊二 教授／北村 昌史 教授			

●科目の主題

西洋史学に関する修士論文作成の指導を行なう。

●到達目標

学界が要求する水準の論文を完成することをめざす。

●授業内容・授業計画

論文テーマの設定、文献・史料の調査・収集、資料の分析、主題とそれを論じる研究方法の適合性、論文の構成、主題に即した論述の一貫性、論文の形式的な統一など、修士論文作成に必要な事項について指導し、論文完成に至らしめる。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（大黒俊二教授）主に、古代から中世にかけての研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。
（北村昌史教授）主に、近代から現代にかけての研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

報告前に資料の作成法について教員の指導を受けること。報告後は報告内容に対する教員の指摘に従って論文

内容を再考すること。

●評価方法

平常点（出席と研究報告）。

●受講生へのコメント

論文内容とともに口頭によるプレゼンテーションの方法にも工夫してほしい。

●参考文献・教材

随時指示。

人間行動学専攻

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN1501	開講期	単位数
M60	人間行動学研究Ⅰ Specific Lecture in Human Behavioral Sciences Ⅰ			前火 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 進藤 雄三 教授			

●科目の主題

人間行動、および人間行動の背後にある社会的なものに関する基礎的理論を、社会学理論に焦点を合わせて概観する。

●到達目標

1 20世紀から現代にいたるの社会理論の概要を理解する。
2 個々の理論家の業績、個々の理論の具体的内容を理解する。

●授業内容・授業計画

以下のスケジュールに従って進める。

第 1 回 オリエンテーション（報告スケジュールの確定）
第 2 回 視点：二つの思想革命
第 3 回 20 世紀の社会理論概観
第 4 回 現代的転回点：ポスト・モダンターン
第 5 回 サイード：オリエンタリズム
第 6 回 ボードリアール：消費社会論、メディア論
第 7 回 フーコー：エピステーメ、近代社会論
第 8 回 カステル：情報社会論、都市論
第 9 回 ホール：プロクシミクスとカルチュラル・スタディーズ
第 10 回 ウォーラスティン：世界システム理論、グローバリゼーション
第 11 回 ベック：リスク社会論、個人化論
第 12 回 ギデンズ：再帰的近代化論
第 13 回 バウマン：ポスモダンからリキッドモダンへ、ホロコースト
第 14 回 フェミニズム、フランクフルト学派、歴史人口学
第 15 回 現代社会の位相

●事前・事後学習の内容

事前学習は要請しない。事後学習として、授業での個々の内容とともに、授業内で提起される問題点から、各自の問題意識を掘り下げるようにして欲しい。

●評価方法

出席（2）コメント（2）、小レポート（2）、期末レポート（4）の総合評価（10 点満点）で行う。

●受講生へのコメント

授業をレポート作成に向けての、問題関心の涵養の契機としてください。

●参考文献・教材

指定しない。授業中に随時提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN1502	開講期	単位数
M61	人間行動学研究Ⅱ Specific Lecture in Human Behavioral Sciences Ⅱ			前集中	2 単位
	授業形態 講義形式	担当教員名 成田 健一 非常勤講師			

●科目の主題

パーソナリティ，認知スタイルなどに代表される心理学における個人差（個人内差，個人間差）の問題に焦点をあてて講義を行います。特に，自己，適応，測定，生涯発達などをキーワードに，多様な理論と実証的研究方法に基づいて，人の心理学的個人差に関する理解を深められればと思います。

●到達目標

本講義では様々な心理学的な個人差に関わる問題を扱います。それらの全てを完全に理解することは難しいかもしれません。このため，本講義で扱った多面的な視点のいくつかを，各自が興味・関心をもつ研究にうまく適用す

ることができることを目指したいと考えています。

●授業内容・授業計画

主に以下の内容で，講義形式で行います。ただし，要望に応じて前後させたり，特定のトピックを深めたり，柔軟に対応できればと考えています。

第 1 回　パーソナリティ心理学 / 個人差心理学の概観
第 2 回　パーソナリティ心理学の諸理論 1―特性論・5 因子モデル
第 3 回　パーソナリティ心理学の諸理論 2―人・状況論争と相互作用モデル
第 4 回　個人差の生涯発達 1―乳幼児期から青年期まで―
第 5 回　個人差の生涯発達 2―成人期から老年期まで―
第 6 回　自己と個人差 1―自己の諸側面
第 7 回　自己と個人差 2―自尊感情・自己効力感
第 8 回　精神的健康・不健康と個人差 1―ネガティブ感情・ポジティブ感情―
第 9 回　精神的健康・不健康と個人差 2―レジリエンス―
第 10 回　感情と個人差 1―自己意識的感情
第 11 回　感情と個人差 2―感情の自己制御と加齢
第 12 回　知能 / 認知能力と個人差
第 13 回　個人差の測定 1―質問紙法
第 14 回　個人差の測定 2―投影法・潜在指標
第 15 回　パーソナリティ心理学 / 個人差心理学の課題と展望

●事前・事後学習の内容

事前知識は特に必要ありません。参考書籍の内容そのものを講義する訳ではありませんが，参考書籍のいくつかを参照しておくと，背景知識が集積されるため，本講義の理解が深まると思います。

事後学習として，自身が興味を持つ心理学分野の個人差について，どのような研究がなされているのかを検討し，その内容を本講義に関連づけることを目指してください。それができるならば，講義の内容を自分なりに理解したと言えるかと思います。

●評価方法

講義への出席状況並びに提出されたレポートを総合的に勘案して評価する予定です。

●受講生へのコメント

本科目は文学部人間行動学科専門教育科目「心理学特講 II」との共通科目です。講義で取り扱うトピックは比較的ソフトですが，内容はちょっとハードになるかもしれません。このため，どんな講義であっても，それを楽しめることを目指して欲しいなと思います。

●参考文献・教材

適宜資料を配布する予定です。

参考書籍としては以下をあげておきたいと思います。（教科書的書籍）

岸本陽一（編）(2010) パーソナリティ (現代心理学シリーズ 8)　培風館

丹野義彦 (2003). 性格の心理―ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティ (コンパクト新心理学ライブラリ)　サイエンス社

杉浦義典・丹野義彦 (2008). パーソナリティと臨床の心理学―次元モデルによる統合 (心理学の世界 教養編) 培風館

鈴木公啓 (編)(2012). パーソナリティ心理学概論―性格理解への扉 ナカニシヤ出版 （ハンドブック）

日本パーソナリティ心理学会 (企画) 二宮克美ほか (編) (2013). パーソナリティ心理学ハンドブック　福村出版

Chamorro-Premuzic, T., von Stumm, S., & Furnham, A. (Eds.). (2011). The Wiley-Blackwell Handbook of Individual Differences. Chichester,UK: Wiley-Blackwell.

Diehl, M., Hooker, K., & Sliwinski, M. J. (Eds.) (2015). Handbook of Intraindividual Variability Across the Life Span. New York, NY: Routledge/Taylor & Francis.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN1503	開講期	単位数
M62	**人間行動学研究Ⅲ** Specific Lecture in Human Behavioral Sciences Ⅲ			後集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 湯浅 恭正 非常勤講師			

●科目の主題

インクルーシブ教育を中心にして、現代の教育方法学研究の課題を探究する。講義では、通常の学校の生活指導・教科指導とインクルーシブ教育の課題について、学校教育全般に亘って取り上げる。

●到達目標
現代の学校において問われているインクルーシブ教育論の課題をめぐる基礎的な知識を習得すめとともに、インクルーシプ教育実践をめぐる発達観・子ども観・教育観を確かなものとして修得する。これらを通してインクルーシプ教育論を中心にした教育方法学研究の方法を身につける

●授業内容・授業計画
インクルーシブ教育をめぐって、理論的な基礎を提示するとともに、教育実践の記録を分析する。

第 1 回　講義のガイダンス
第 2 回　教育方法学のテーマ群としてのインクルーシブ教育の概要
第 3 回　インクルーシブ教育、特にインクルーシブ授業のビジョン
第 4 回　現代の学び論の動向の検討
第 5 回　現代の学び論とインクルーシプ授業
第 6 回　インクルーシブ授業実践の分析 – 小学校
第 7 回　インクルーシブ授業実践の分析 – 中学校
第 8 回　インクルーシブ教育と生活指導の課題
第 9 回　学級論とインクルーシブ教育
第 10 回　生活指導をめぐるインクルーシブ教育実践の分析 – 小学校
第 11 回　生活指導をめぐるインクルーシブ教育実践の分析 – 中学校
第 12 回　思春期・青年期におけるインクルーシブ教育の課題
第 13 回　幼児期におけるインクルーシブ教育の課題
第 14 回　インクルーシブ教育の研究方法論
第 15 回　講義の総括

●事前・事後学習の内容
第 1 回に指示する諸文献について、第 2 回から第 5 回の授業では、事前にインクルーシブ教育論の基礎について予習を行い、毎回の講義の後に講義の概要とポイントを整理すること。第 6 回から第 7 回の授業では、インクルーシブ授業の実践記録を事前に予習するとともに講義の後では実践分析の要点を整理すること。第 8 回と第 9 回では、生活指導とインクルーシブ教育をめぐって講義の予習を行い、講義の後では、講義の要点を整理すること。第 10 回と第 11 回では、インクルーシブ教育と生活指導の実践記録を事前に予習するとともに、講義の後では実践分析の要点を整理すること。第 12 回から第 13 回では、講義するインクルーシプ教育の新しい課題について事前に資料を講読するとともに、事後には講義の要点を整理すること。第 14 回の研究方法論をめぐっては、その視点を整理すること。第 15 回の事前にはこれまでの整理を見直し、講義の後では総括を通した今後の学習・研究の課題を鮮明にすること。

●評価方法
最終のレポート(80%)、受講の参加態度 (20%) によって評価する。

●受講生へのコメント
教育方法学研究の現代的な課題と論点について新しい知見を得るべく積極的に講義に参加することが期待される。

●参考文献・教材
インクルーシプ授業研究会編『インクルーシブ授業をつくる』ミネルヴァ書房、2015
広島大学教育方法学研究室 / 深澤・吉田編『いま求められる授業づくりの転換』渓水社、2016

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEN1504	開講期	単位数
M63	人間行動学研究Ⅳ Specific Lecture in Human Behavioral Sciences Ⅳ			前火 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 佐藤 廉也 非常勤講師			

●科目の主題
本講義では、人間と環境との関わりを研究する学問としての地理学の研究課題を、アフリカ（エチオピア）、東南アジア（ラオス）、中国（黄土高原）におけるローカルな社会のフィールド研究を主な事例としながら、森林や乾燥地の環境利用・環境動態、環境問題、地域紛争、人口史、食文化といった題材を取り上げつつ紹介し、地域性とそれを超えた普遍的な人間性を理解するための地理学的な方法を学びます。主として、生業・世帯経済、人口（出生・死亡）、健康・栄養摂取、生物環境、集落立地などの諸変数の関係を動態的にとらえる生態学的アプローチをとり、あわせてフィールド研究における地理情報の活用法の紹介もおこないます。

●到達目標
(1) ローカルな社会・経済の動態を環境への適応としてロジカルに理解する力を養うこと、(2) フィールドにおけ

る地理情報・GISの活用法を習得すること、(3) 地球環境問題に対して表面的に理解するだけでなくローカルな現場から批判的な眼を養う力を身につけること。

●授業内容・授業計画

イントロダクションで本講義の概念やアプローチの方法について説明し、続いて事例研究を通して主題に記した内容の講義を以下のような順序ですすめます。最後に、到達度を見るために期末筆記試験をおこないます。

第 1 回　イントロダクション：講義の概要とアプローチの方法
第 2 回　ラオス中部・熱帯モンスーン地域における生業・人口・栄養摂取 (1)
第 3 回　ラオス中部・熱帯モンスーン地域における生業・人口・栄養摂取 (2)
第 4 回　ラオス中部・熱帯モンスーン地域における生業・人口・栄養摂取 (3)
第 5 回　焼畑とはどういう農法か：焼畑と環境問題 (1)
第 6 回　焼畑とはどういう農法か：焼畑と環境問題 (2)
第 7 回　フィールド研究と地理情報：エチオピア南西部の焼畑民研究 (1)
第 8 回　フィールド研究と地理情報：エチオピア南西部の焼畑民研究 (2)
第 9 回　フィールド研究と地理情報：エチオピア南西部の焼畑民研究 (3)
第 10 回　小さな社会の人口誌：エチオピア南西部の出生力動態
第 11 回　小規模社会の紛争・現代アフリカの紛争
第 12 回　中国・黄土高原の環境問題と退耕還林政策：村落調査によるアプローチ (1)
第 13 回　中国・黄土高原の環境問題と退耕還林政策：村落調査によるアプローチ (2)
第 14 回　中国・黄土高原の土地被覆動態：アメリカ公文書館所蔵の U2 空中写真
第 15 回　全体のまとめ

●事前・事後学習の内容

講義はスライドを用いておこないます。電子媒体あるいは紙媒体いずれかの方法で、事前に（原則として 1 週間前まで）資料を配付しますので、これを予習・復習に利用してください。スライドの内容が理解できていれば試験には十分対応できますので、講義中はスライドの説明を理解することに集中してください。

●評価方法

期末試験の成績を 9 割、平常点を 1 割とします。平常点には、講義中におこなう小レポートの評価を含みます。

●受講生へのコメント

この講義の内容は大半が海外における事例研究です。ほとんどの人が訪れたことのない場所ですので、本講義を受講するに当たってまず大事なのは「未知の世界に対する好奇心」です。ただし、それを単なる遠い世界の珍しいお話、で終わらせるか、それとも、講義内容を私たちの生きる世界につながる同時代の現象として理解し、現代世界を、そして人間の本性を説明・理解するための一つのモジュールとして皆さんが活かせるようになるか、それがこの講義の成否の分かれ目かと思っています。

●参考文献・教材

講義資料は配付します。テキストはありません。参考文献は講義中に紹介します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2501	開講期	単位数
M64	**社会学基礎問題研究 I** Fundamental Topics of Scociology I			前月 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 進藤 雄三 教授			

●科目の主題

社会学理論の基礎的知見を獲得すること、およびその理論を現実上の問題に応用する能力を涵養することを目的とする。

●到達目標

1. 各自のテーマに関連した基本的理論的文献を読み、理解する。
2. その理論を、各自のテーマ即して実際に応用する。

●授業内容・授業計画

以下のスケジュールに従って、報告・発表方式で進める。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　社会学理論文献講読 1
第 3 回　社会学理論文献講読 2
第 4 回　社会学理論文献講読 3
第 5 回　社会学理論文献講読 4

第 6 回　社会学理論文献講読 5
第 7 回　社会学理論文献講読 6
第 8 回　中間報告
第 9 回　理論応用実践報告 1
第 10 回　理論応用実践報告 2
第 11 回　理論応用実践報告 3
第 12 回　理論応用実践報告 4
第 13 回　理論応用実践報告 5
第 14 回　理論応用の総括 1
第 15 回　理論応用の総括 2

●事前・事後学習の内容
事前学習：レジュメを作成する。
事後学習：指摘された点を確認する。
●評価方法
文献講読発表および応用報告の内容 (50)、提示方法 (20)、議論への貢献度 (30) の総合評価 (100 点満点) によって評価する。
●受講生へのコメント
受講生には講読発表と、応用報告が課される。討論への積極的参加が求められる。
●参考文献・教材
開講時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2502	開講期	単位数
M65	**社会学基礎問題研究演習 1** Advanced Seminar in Fundamental Topics of Sociology 1			後月 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 進藤 雄三 教授			

●科目の主題
特定の研究主題に対して、報告者の問題関心を掘り下げ、問題設定、理論枠組み、分析手法、解釈にいたる研究進展過程を、演習形式によって習得することを目的とする。
●到達目標
1. 修士論文作成にむけて、論文作成の具体的手順、技法、論理展開などの習得。
2. 特に、理論の展開と実証データの関係づけ方、方法論的問題意識の涵養。
●授業内容・授業計画
以下のスケジュールに従って、発表・討議方式で進める。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　研究演習方法概説
第 3 回　研究演習実践報告 1
第 4 回　研究演習実践報告 2
第 5 回　研究演習実践報告 3
第 6 回　研究演習実践報告 4
第 7 回　研究演習実践報告 5
第 8 回　中間総括
第 9 回　研究演習実践報告 6
第 10 回　研究演習実践報告 7
第 11 回　研究演習実践報告 8
第 12 回　研究演習実践報告 9
第 13 回　研究演習実践報告 10
第 14 回　総括 I
第 15 回　総括 II
●事前・事後学習の内容
事前学習：報告前にレジュメを作成する。
事後学習：報告後の討論内容を確認する。
●評価方法

研究演習報告の内容（50)、提示方法（20)、議論への貢献度（30）の総合評価（100 点満点）によって評価する。

●受講生へのコメント

研究演習での 2 回以上の報告が課される。討論への積極的参加が求められる。

●参考文献・教材

随時指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2503	開講期	単位数
M66	**社会学基礎問題研究Ⅱ** Fundamental Topics of Scociology Ⅱ			前火 4	2 単位
	授業形態 講義（受講生参加型）	担当教員名 石田 佐恵子 教授			

●科目の主題

知識社会学、文化社会学、カルチュラル・スタディーズの理論や方法、分析、実践などを幅広く学ぶ。

●到達目標

社会学的研究の問題設定について、報告や討論を通じて、各自の考えを深める。受講生は大学院生として必須の主体的な文献・情報収集の能力、プレゼンテーション能力を身につけていくことを目標とする。

●授業内容・授業計画

知識社会学、文化社会学、カルチュラル・スタディーズを主題とした最新のテキストを講読する。後半には、各自の関心に従って報告と討議を行う。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　文献・資料の探し方と大学院における学習方法について
第 3 回　基本文献の購読（1)
第 4 回　基本文献の購読（2)
第 5 回　基本文献の購読（3)
第 6 回　基本文献の購読（4)
第 7 回　基本文献の購読（5)
第 8 回　基本文献の購読（6)
第 9 回　基本文献の購読（7)
第 10 回　基本文献の購読（8)
第 11 回　各自の関心に基づく現代文化研究の探求（1)
第 12 回　各自の関心に基づく現代文化研究の探求（2)
第 13 回　各自の関心に基づく現代文化研究の探求（3)
第 14 回　第 14 回 各自の関心に基づく現代文化研究の探求（4)
第 15 回　レポートの作成と提出について

●事前・事後学習の内容

事前学習：課題図書のみならず、関連図書を十分に読み、報告者はレジュメを用意してくること。報告者以外の参加者は討議に参加する準備を整えてくること。

事後学習：議論となったさまざまな論点について、自分なりのノートを作成し、自らの研究展開に活かす。

●評価方法

毎回の出席と参加態度、報告水準、および、学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

受講生には、毎回の予習と復習、インターネットの積極的な活用、掲示板での議論など、熱心な参加を求める。

●参考文献・教材

テキスト：開講時に相談の上、決定する。

参考書：随時指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2504	開講期	単位数
M67	**社会学基礎問題研究演習 2** Advanced Seminar in Fundamental Topics of Sociology 2			後火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 石田 佐恵子 教授			

●科目の主題

ミクロな社会理論、特に、文化社会学、映像社会学、メディア文化研究に関係する専門領域について、学説研究や理論、方法などについて幅広く学ぶ。

●到達目標

修士論文のテーマ設定を意識しながら、各自の関心領域についての知識を深める。演習の後半には、それぞれの関心に応じた個人報告を求める。学会発表における報告スタイル、プレゼンテーション能力を身につける。

●授業内容・授業計画

映像社会学・メディア文化研究等を主題とした最新のテキストを講読する。後半には、各自の関心に従って報告と討議を行う。

第 1 回　ガイダンス（報告・発表スケジュールの決定）
第 2 回　映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読（1）
第 3 回　映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読（2）
第 4 回　映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読（3）
第 5 回　映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読（4）
第 6 回　映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読（5）
第 7 回　映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読（6）
第 8 回　学会発表における報告スタイルについて
第 9 回　各自の関心に基づく報告と議論（1）
第 10 回　各自の関心に基づく報告と議論（2）
第 11 回　各自の関心に基づく報告と議論（3）
第 12 回　各自の関心に基づく報告と議論（4）
第 13 回　各自の関心に基づく報告と議論（5）
第 14 回　各自の関心に基づく報告と議論（6）
第 15 回　レポートの作成と提出

●事前・事後学習の内容

事前学習：課題図書のみならず、関連図書を十分に読み、報告者はレジュメを用意してくること。報告者以外の参加者は討議に参加する準備を整えてくること。

事後学習：議論となったさまざまな論点について、自分なりのノートを作成し、自らの研究展開に活かす。

●評価方法

毎回の出席、参加態度、報告水準、および学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

受講生には、毎回の予習と復習、インターネットの積極的な活用、掲示板での議論など、熱心な参加を求める。

●参考文献・教材

テキスト：開講時に相談の上、決定する。
参考書：随時指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2505	開講期	単位数
M68	**社会学特殊問題研究 I** Advanced Studies in Special Sociological Fields I			前水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 伊地知 紀子 教授			

●科目の主題

質的調査の理論と実践技法について基礎と応用力を会得することを目的としている。

●到達目標

フィールドワーク、参与観察法、インタビュー調査、ライフヒストリー分析、エスノグラフィーといった質的社会調査の手法と実践について事例を踏まえながら演習形式で学習する。

●授業内容・授業計画

地域社会学や実践人類学を主題とした最新のテキストを講読する。後半には、各自の関心に従って報告と討議を行う。

第 1 回　質的調査とフィールドワーク
第 2 回　対象選定と倫理
第 3 回　調査者と被調査者
第 4 回　対話と分析（1）
第 5 回　対話と分析（2）
第 6 回　参与観察（1）
第 7 回　参与観察（2）
第 8 回　インタビュー調査（1）
第 9 回　インタビュー調査（2）
第 10 回　ライフヒストリー（1）
第 11 回　ライフヒストリー（2）
第 12 回　エスノグラフィー（1）
第 13 回　エスノグラフィー（2）
第 14 回　エスノグラフィー（3）
第 15 回　質的調査の課題と可能性

●事前・事後学習の内容

授業で取り上げるテキストについては関連文献も含めて熟読すること。

●評価方法

平常点、学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

受講生には、毎回の予習と復習、熱心な参加を求める。

●参考文献・教材

テキスト：開講時に相談の上、決定する。
参考書：随時指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2506	開講期	単位数
M69	**社会学特殊問題研究演習 1** Advanced Seminar in Special Sociological Fields 1			後水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 伊地知 紀子 教授			

●科目の主題

エスノグラフィを学ぶ。

●到達目標

社会学、人類学などで蓄積されてきたエスノグラフィを購読し、理論、方法、記述などについて幅広く学ぶ。

●授業内容・授業計画

秀逸なエスノグラフィを丹念に読み解くことで、修士論文の方向性を模索し課題設定へと進める。後半には受講生各自の関心にもとづいた報告をする。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　エスノグラフィの購読（1）
第 3 回　エスノグラフィの購読（2）
第 4 回　エスノグラフィの購読（3）
第 5 回　エスノグラフィの購読（4）
第 6 回　エスノグラフィの購読（5）
第 7 回　エスノグラフィの購読（6）
第 8 回　エスノグラフィの課題と可能性について
第 9 回　受講生の報告と議論（1）
第 10 回　受講生の報告と議論（2）
第 11 回　受講生の報告と議論（3）
第 12 回　受講生の報告と議論（4）
第 13 回　受講生の報告と議論（5）
第 14 回　受講生のと議論（6）
第 15 回　レポートの作成と提出

●事前・事後学習の内容
授業で取り上げるテキストについては関連文献も含めて熟読すること。
●評価方法
学期末のレポートによる。
●受講生へのコメント
受講生には、毎回の予習と復習、演習での議論への熱心な参加を求める。
●参考文献・教材
テキスト：開講時に相談の上、決定する。
参考書：随時指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2507	開講期	単位数
M70	社会学特殊問題研究Ⅱ Advanced Studies in Special Sociological Fields Ⅱ			前火 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 川野 英二 教授			

●科目の主題
社会調査方法論
●到達目標
社会調査の企画・設計・実施を行い、分析・集計するための実践的な知識と能力を習得する。
●授業内容・授業計画
社会調査の一連の流れに沿って、社会調査におけるデータ収集と分析の技法を解説する。本授業では量的調査と質的調査の企画と設計を扱うが、授業ではデータ分析用のソフトウェアを使った実習も行う。

第 1 回　調査の企画と調査倫理
第 2 回　仮説構成
第 3 回　調査対象・方法の設定
第 4 回　統計ソフトウェアの使用法
第 5 回　サンプリングの実際と課題
第 6 回　サンプルサイズと標本誤差
第 7 回　尺度構成法
第 8 回　質問文の作成と調査票の構成
第 9 回　調査票の作成実習
第 10 回　実査、データの入力
第 11 回　調査データの整理（1）エディティング、コーディング
第 12 回　調査データの整理（2）クリーニング、コードブックの作成
第 13 回　集計とグラフ作成
第 14 回　クロス集計表の作成とエラボレーション
第 15 回　報告書の作成

●事前・事後学習の内容
事前学習：課題図書・文献を読む。
事後学習：課題をおこなう。
●評価方法
平常点
課題の提出
●受講生へのコメント
受講者は、授業の進行に合わせて、自身の調査企画案を構想することが求められる。
本授業は専門社会調査士認定科目（H）に相当する。
●参考文献・教材
鄭 躍軍・金 明哲著『社会調査データ解析』共立出版 2011 年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2508	開講期	単位数
M71	社会学特殊問題研究演習 2 Advanced Seminar in Special Sociological Fields 2			後火 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 川野 英二 教授			

●科目の主題

多変量解析の応用に関する演習

●到達目標

計量論文を読み書きするために必要な多変量解析の基本的な技法を習得する。

●授業内容・授業計画

授業では、各分析についての説明を行ったのち、ソフトウェアを用いて実際にデータの分析を行う。基本的な統計学的知識のあることが望ましいが、それよりもむしろ、統計ソフトを使いこなし、試行錯誤しながらデータを分析することに習熟することが目的である。

第 1 回　統計ソフトの使用法 1
第 2 回　統計ソフトの使用法 2
第 3 回　ソフトウェアを使った統計学の復習 1
第 4 回　ソフトウェアを使った統計学の復習 2
第 5 回　重回帰分析の復習 1
第 6 回　重回帰分析の復習 2
第 7 回　データを用いた演習
第 8 回　ロジスティック回帰分析 1
第 9 回　ロジスティック回帰分析 2
第 10 回　順序・多項ロジット分析
第 11 回　データを用いた演習
第 12 回　ネットワーク分析 1
第 13 回　ネットワーク分析 2
第 14 回　その他の分析手法
第 15 回　データを用いた演習

●事前・事後学習の内容

事前学習：テキストを読む。
事後学習：配布資料を確認する。

●評価方法

平常点、提出物（論文・レポートなど）、出席回数

●受講生へのコメント

この授業は専門社会調査士科目（I）に相当するため、学部の社会調査士科目A～Fを履修済もしくは履修中であるか、学部レベルの社会調査に関する知識を前提とする。

●参考文献・教材

鄭躍軍ほか『R で学ぶデータサイエンス 社会調査データ解析』共立出版、2011 年

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2511	開講期	単位数
M72	社会学特殊問題研究Ⅳ Advanced Studies in Special Sociological Fields Ⅳ			前集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 藤代 裕之 非常勤講師			

●科目の主題

ソーシャルメディアの登場により出現した「ソーシャルメディア社会」のあり方を考える。

●到達目標

1）ソーシャルメディア社会のあり方を理解する。2）発信の当事者としてメディア・リテラシーを身につける。

●授業内容・授業計画

ソーシャルメディアはメディアや社会に大きな変化をもたらしている。この授業では、ソーシャルメディアの歴史や構造、社会的な課題を検討し、私たちが身に付けるべきメディア・リテラシーについて考える。

第 1 回　ガイダンス、ソーシャルメディアとは何か
第 2 回　未来メディア予測動画「EPIC2014」は実現したか
第 3 回　ソーシャルメディアは何をつなげてきたか
第 4 回　技術の進化とオープンプライバシー社会
第 5 回　社会の制度と法律
第 6 回　ソーシャルメディアとニュース
第 7 回　ソーシャルメディアと広告
第 8 回　ソーシャルメディアと政治
第 9 回　ソーシャルメディアとキャンペーン
第 10 回　ソーシャルメディアと都市
第 11 回　ソーシャルメディアと権利
第 12 回　ソーシャルメディアとモノ（IoT）
第 13 回　ソーシャルメディアとテレビ
第 14 回　ソーシャルメディア社会の課題と解決
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

授業は教科書である『ソーシャルメディア論：つながりを再設計する』に沿い展開される。事前に対象範囲を予習すること。事後には教科書に設定された解いておくこと。

●評価方法

試験 60%、平常点 40%。平常点は、授業中の発言や質問、リアクションペーパーの内容で判断します。

●受講生へのコメント

リアクションペーパーを提出してもらい、授業への理解を確認する。リアクションペーパーは授業中に紹介することがある。現在進行形で起きるメディアの問題を扱うため授業計画を変更することがある。

●参考文献・教材

藤代裕之編『ソーシャルメディア論：つながりを再設計する』青弓社（2015 年）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2512	開講期	単位数
M73	**社会学特殊問題研究Ⅴ** Advanced Studies in Special Sociological Fields Ⅴ			前集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 藤原 翔 非常勤講師			

●科目の主題

現代社会における格差・不平等の生成・維持に関する議論を踏まえ、日本の実態について社会調査データの計量分析を通じた検討を行う。

●到達目標

格差や不平等が生成される基本メカニズムとそれに対して制度が与える影響を検討した上で、日本社会の現状を考察すること。また、計量分析を通じて、社会現象を読み解く力を身につけること。

●授業内容・授業計画

現代社会における格差・不平等に関する主要なトピックを取り上げ、その歴史的経緯と理論的・方法的発展について議論した後に、

社会移動、教育機会の不平等、学歴社会の趨勢と構造そしてメカニズムについて検討する。講義では理論の紹介だけではなく、社会調査データの計量分析から、日本の実態を明らかにする。以上の議論を踏まえた上で、第 5 世代の社会階層論の課題を考察する。

第 1 回　現代における格差・不平等研究
第 2 回　格差・不平等研究の歴史
第 3 回　階級・階層概念の理論的検討
第 4 回　階級・階層の操作化
第 5 回　社会移動の研究
第 6 回　社会移動の国際比較
第 7 回　社会移動における教育の役割
第 8 回　教育機会の不平等の趨勢とメカニズム
第 9 回　日本における教育機会の不平等
第 10 回　教育と職業

第 11 回　日本における教育と職業の関連
第 12 回　社会階層論と計量社会学
第 13 回　社会階層論と統計的因果推論
第 14 回　第 5 世代の社会階層研究とは何か
第 15 回　第 5 世代の社会階層研究の課題

●事前・事後学習の内容
社会階層は、他の様々な社会現象とか変わってくる。各自のテーマ関心において、社会階層はどのように扱われてきたのか、あるいはどのように関わってくる可能性があるのかを事前に考察するとよい。また事後においては、本講義の議論を踏まえた上で各自のテーマを読み解くことが期待される。
●評価方法
出席状況 60%、授業時のレポート等提出物 40% によって総合的に評価する。
●受講生へのコメント

●参考文献・教材
授業中に適宜紹介する。また資料は講義時に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2513	開講期	単位数
M74	社会学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Sociology Ⅰ			前火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 進藤 雄三 教授／石田 佐恵子 教授／伊地知 紀子 教授／ 川野 英二 教授			

●科目の主題
社会学の研究を行う上で必要となる基本的事項を担当教員全員で総合的に指導する。
●到達目標
修士論文の作成・完成を目標とする。
●授業内容・授業計画
社会学の理論、およびフィールド・ワークの方法、ならびにデータ処理のための分析法に関する広範な知識の技能を、基本的な課題において総合的に把握し、展開するために、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講じる。また、受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討論によって理解を深める。
●事前・事後学習の内容
事前学習：レジュメを作成しておく。
事後学習：指摘された点を確認する。
●評価方法
受講生による研究報告を評価の主な対象とする。
●受講生へのコメント
受講生による活発な議論を望む。
●参考文献・教材
随時指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC2514	開講期	単位数
M75	社会学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Sociology Ⅱ			後火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 進藤 雄三 教授／石田 佐恵子 教授／伊地知 紀子 教授／ 川野 英二 教授			

●科目の主題
社会学の研究を行う上で必要な基本的事項を実際に応用する具体的な方法について、担当教員全員で総合的に指導する。
●到達目標
修士論文の作成・完成を目標とする。

●授業内容・授業計画
社会学の理論と方法に関する広範な知識と技能を、特定の個別課題において総合的に把握し、展開するために、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講じる。また、受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討論によって理解を深める。これと並行して、受講生から予定している修士論文のテーマとその概要についての報告を求め、それに基づき討論を行う。
●事前・事後学習の内容
事前学習：レジュメを作成しておく。
事後学習：指摘された点を確認しておく。
●評価方法
受講者による研究報告を評価の主な対象とする。
●受講生へのコメント
受講生の積極的な討論を望む。
●参考文献・教材
随時指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3601	開講期	単位数
M76	社会学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Sociology Ⅰ			前月 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 進藤 雄三 教授／石田 佐恵子 教授／伊地知 紀子 教授／ 川野 英二 教授			

●科目の主題
修士論文の研究課題を考察するために必要な内外の論文の検討を行いながら、立案した調査計画に基づいて、文献収集やフィールド・ワークを実施し、得られた知識の整理検討とデータの分析を行う。
●到達目標
修士論文の作成・完成をめざす。
●授業内容・授業計画
学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受け、修論執筆の進行状況について報告する。また、少なくとも一回は修論の中間報告を行い、教員全員からの指導を受ける。
●事前・事後学習の内容
事前学習：レジュメを作成しておく
事後学習：指摘点を確認しておく
●評価方法
学生による研究報告を主な評価対象とする。
●受講生へのコメント
積極的な関与が望まれる。
●参考文献・教材
随時指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LBSOC3602	開講期	単位数
M77	社会学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Sociology Ⅱ			後月 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 進藤 雄三 教授／石田 佐恵子 教授／伊地知 紀子 教授／ 川野 英二 教授			

●科目の主題
修士論文の研究課題を考察するために必要な内外の論文の検討を行いながら、フィールド・ワークなどの調査等で得られた知識の整理検討とデータの分析を行い、知見と問題点を明確にし、議論を発展させる。
●到達目標
こうした研究遂行の指導を通して、修士論文の完成をめざす。
●授業内容・授業計画
学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受け、修論執筆の進行状況について報告する。また、

最終的な段階においては、論文報告会で修論の内容を報告し、教員全員からの指導を受ける。

●事前・事後学習の内容

事前学習：レジュメを作成しておく。

事後学習：指摘された点を確認する。

●評価方法

学生による研究報告を主な評価対象とする。

●受講生へのコメント

積極的な参与が求められる。

●参考文献・教材

随時指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2501	開講期	単位数
M78	**心理学基礎問題研究** Fundamental Topics of Psychology			前木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 池上 知子 教授			

●科目の主題

人間は自分を取り巻く社会的世界の成り立ちや、そこに生起する事象をどのように認識し理解しているのだろうか。また、それは人々にどのような感情を喚起し行動を引き起こすことになるのだろうか。これらは心理学全体に通底する問いである。このような問いに答えることを中心的学問課題としているのが社会的認知研究である。社会的認知研究は、成立当初は純粋に認知レベルの問題に焦点があてられていたが、今日では扱う問題も多岐にわたり理論も格段に深化した。本授業では、例年、社会的認知研究のこれまでの展開を踏まえ、当該分野の最新動向を把握することを主題としている。本年度は、潜在認知に焦点をあて、テキストに準拠しながら上記の議論を深めたい。

●到達目標

社会的態度における顕在性と潜在性をめぐる問題に焦点をあて、顕在的態度と潜在的態度の違い、両者の測定方法とその理論的背景に対する理解を深めることを通して、心理学専修の院生が修士論文を作成するに際し必要となる高度な専門的知識の習得を図る。

●授業内容・授業計画

下記のテキストを使用しながら、毎回、特定のトピックに焦点をあてて議論する。また、適宜、関連する英語文献の発表を求める。

第 1 回　潜在認知とは
第 2 回　潜在連合テストの仕組み
第 3 回　潜在連合テストを用いたステレオタイプ研究
第 4 回　潜在認知研究の展開
第 5 回　潜在的態度と行動
第 6 回　潜在的態度研究の現状
第 7 回　潜在的社会認知研究の変遷
第 8 回　潜在認知の測定方法 1
第 9 回　潜在認知の測定方法 2
第 10 回　心的表象における顕在性を潜在性
第 11 回　目標追求行動における顕在性と潜在性
第 12 回　意思決定における顕在性と潜在性
第 13 回　熟慮 – 衝動次元と潜在認知
第 14 回　社会神経科学と潜在認知
第 15 回　潜在的認知の適応的価値

●事前・事後学習の内容

前週の授業時に次回の授業内容に関係するテキスト内の該当箇所を事前に読んでおくように指示する。また、授業内容の発展的理解のために関連する英語文献を入手し、内容を次回以降に発表できるように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

少人数による授業であるので受講生の活発な議論を期待したい。

●参考文献・教材

潮村公弘（著）（2016）自分の中の隠された心　－非意識的態度の社会心理学－　サイエンス社

Gawronski, B. & Payne, B. K.(Eds.)(2010) *Handbook of implicit social cognition: Measurement, theory, and applicaitions.* Guilford Press

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2502	開講期	単位数
M79	**心理学基礎問題研究演習** Seminar in Fundamental Topics of Psychology			後木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 池上 知子 教授			

●科目の主題

前期の「心理学基礎問題研究」の内容を踏まえ、人間の行動の衝動性と熟慮性について、下記のテキストを講読しながら考察を深める。

●到達目標

人間の行動の衝動性と熟慮性について多角的かつ体系的にまとめられた英語の学術書を精読することにより、心理学の修士論文を作成するために必要な文献読解力と組織的な研究計画を立案するための素養を培う。

●授業内容・授業計画

受講生全員で下記のテキストを輪読しながら、毎回、特定のトピックに焦点をあて討論する。

第 1 回　導入：熟慮－衝動次元と行動科学
第 2 回　熟慮－衝動次元と比較行動
第 3 回　熟慮－衝動次元と接近・回避行動
第 4 回　熟慮－衝動次元と連合・命題学習
第 5 回　熟慮－衝動次元と行動制御
第 6 回　熟慮－衝動次元と直観
第 7 回　熟慮－衝動次元と態度
第 8 回　熟慮－衝動次元とセルフコントロール
第 9 回　熟慮－衝動次元とパーソナリティ
第 10 回　熟慮－衝動次元からみた健康行動
第 11 回　熟慮－衝動次元からみたアディクション
第 12 回　熟慮－衝動次元からみた不安障害
第 13 回　熟慮－衝動次元からみた経済行動
第 14 回　熟慮－衝動次元からみた性行動
第 15 回　熟慮－衝動次元からみた攻撃行動

●事前・事後学習の内容

発表者を含む受講者全員が、毎回の授業に関係するテキストの各章に事前に目を通し、質問事項を考えてくるように指示する。授業内容の発展的理解のために、事後に関連文献を入手し各自読んでおくように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

少人数の授業であるため、受講者の積極的な議論を期待する。

●参考文献・教材

Deutsch, R., Gawronski, B., & Hofmann, W. (2017) *Reflective and impulsive determinatns of human behavior.* Routledge.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2503	開講期	単位数
M80	**実験心理学研究** Advanced Studies in Experimental Psychology			前火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 山 祐嗣 教授			

●科目の主題

以下のテキストを読むことによって、進化心理学、文化心理学、認知心理学と科学的思考を理解することを目的とする。

●到達目標

心理学における重要な研究や最先端の研究は多くは英語で書かれている。本講では、英文の論文を読む訓練と、

さらには科学的思考についての心理学研究に触れることを目標とする。

●授業内容・授業計画

最初に、科学的心理学のパラダイムに触れ、次いで、Carruthers, P., Stich, S., & Siegal, M. (eds.), (2002). The cognitive basis of science. の以下の章を受講生による発表形式で読み進める。

第 1 回　Outline of cognitive, evolutionary, and cultural psychology.
第 2 回　Intriduction: What makes science possible?
第 3 回　Human evolution and the cognitive basis of science.
第 4 回　Modular and cultural factors in biological understanding.
第 5 回　The roots of scientific reasoning.
第 6 回　Understanding the role of cognition in science.
第 7 回　Thinking about causality.
第 8 回　Thepassionate sciencetist.
第 9 回　Social psychology and the theory of science.
第 10 回　研究発表
第 11 回　研究発表
第 12 回　研究発表
第 13 回　研究発表
第 14 回　研究発表
第 15 回　研究発表

●事前・事後学習の内容

自分の担当の章はレジメを作成して発表してください。

●評価方法

授業中の発表・討論にもとづく平常点とする。

●受講生へのコメント

単にテキストを読むだけではなく、そこで引用されたあるいは各自の研究と関連する論文を併せて読むことが推奨される。

●参考文献・教材

テキスト：Carruthers, P., Stich, S., & Siegal, M. (eds.), (2002). The cognitive basis of science. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2504	開講期	単位数
M81	**実験心理学研究演習** Advanced Seminar in Experimental Psychology			後火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 山 祐嗣 教授			

●科目の主題

認知心理学、進化心理学、文化心理学の代表的な以下の論文を読むことによって、基本的な概念、研究法を理解する。

●到達目標

心理学における重要な研究や最先端の研究は多くは英語で書かれている。本講では、英文の論文を読む訓練と、さらには代表的な研究に触れることを目標とする。

●授業内容・授業計画

授業では、各論文毎に受講者を割り当て、レジュメ発表と討議を行う。

第 1 回　認知心理学・進化心理学・文化心理学イントロダクション
第 2 回　Cheng, P. W., & Holyoak, K. J. (1985)
第 3 回　Cheng, P. W., & Holyoak, K. J. (1985)
第 4 回　Markus, H. R. and Kitayama, S. (1991)
第 5 回　Markus, H. R. and Kitayama, S. (1991)
第 6 回　Cummins, D. D. (1998)
第 7 回　Cummins, D. D. (1998)
第 8 回　Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001)
第 9 回　Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001)
第 10 回　Markovits, H., & Barrouillet, P. (2002)

第 11 回　Markovits, H., & Barrouillet, P. (2002)
第 12 回　Yama (2016)
第 13 回　Yama (2016)
第 14 回　研究発表
第 15 回　研究発表

●事前・事後学習の内容
紹介する文献について、精読したのち、わかりやすいレジュメを用意してください。
●評価方法
授業中の発表と討論にもとづく平常点とする。
●受講生へのコメント
単に割り当てられた論文を読むだけではなく、自分の研究テーマと関連する論文も読み、興味の範囲を広げていくことが望まれる。
●参考文献・教材

- Cheng, P. W., & Holyoak, K. J. (1985). Pragmatic reasoning schema. *Cognitive Psychology, 17*, 391-416.
- Markus, H. R. and Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review, 98*, 224-253.
- Cummins, D. D. (1998). Social norms and other minds; The evolutionary roots of higher cognition. In D. D. Cummins & C. Allen (Eds.), *The evolution of mind*. New York: Oxford University Press, Pp. 30-50.
- Markovits, H., & Barrouillet, P. 2002 The development of conditional reasoning: A mental model account. *Developmental Review, 22*, 5-36.
- Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001). Culture and system of thought: Holistic versus analytic cognition. *Psychological Review, 108*, 291-310.
- Yama, H. (2016): A perspective of cross-cultural psychological studies for global business. In N.Zakaria, A-N, Abdul-Talib, and N. Osman (eds.), *Handbook of research on impacts of international business and political affairs on the global economy*. Hershey, PA: IGI Global, Pp. 185-206.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2505	開講期	単位数
M82	**心理学特殊問題研究 I** Advanced Studies in Selected Topics in Psychology I			前月 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 川邉 光一 准教授			

●科目の主題
生理心理学・行動神経科学に関する基礎的なテキストの通読により、脳・神経系についての生物学的知識と、様々な精神機能・行動と脳・神経系の関係を学ぶ。
●到達目標
上記主題の内容を学ぶことにより、生理心理学・行動神経科学の基礎を習得する。
●授業内容・授業計画
テキストの各章について担当者を決め、その内容について発表してもらう。また、適宜その内容についての解説を加える。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　テキスト講読 (1)
第 3 回　テキスト講読 (2)
第 4 回　テキスト講読 (3)
第 5 回　テキスト講読 (4)
第 6 回　テキスト講読 (5)
第 7 回　テキスト講読 (6)
第 8 回　テキスト講読 (7)
第 9 回　テキスト講読 (8)
第 10 回　テキスト講読 (9)
第 11 回　テキスト講読 (10)
第 12 回　テキスト講読 (11)
第 13 回　テキスト講読 (12)

第 14 回　テキスト講読 (13)
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
受講者全員が、当日発表が予定されるテキストの各章に授業前に目を通しておくこと。授業後は、授業で論点となった点を踏まえ、テキストやその内容に関連する文献を読むこと。

●評価方法
平常点により評価する。

●受講生へのコメント
特になし。

●参考文献・教材
テキスト　授業中に指定する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2506	開講期	単位数
M83	**心理学特殊問題研究演習 1** Advanced Seminar in Selected Topics in Psychology 1			後月 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 川邉 光一 准教授			

●科目の主題
生理心理学・行動神経科学に関するより専門的なテキストの通読により、精神機能や行動と脳・神経系の関係を学ぶ。

●到達目標
精神機能や行動と脳・神経系の関係について理解を深める。

●授業内容・授業計画
テキストの各章について担当者を決め、その内容について発表してもらう。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　テキスト講読 (1)
第 3 回　テキスト講読 (2)
第 4 回　テキスト講読 (3)
第 5 回　テキスト講読 (4)
第 6 回　テキスト講読 (5)
第 7 回　テキスト講読 (6)
第 8 回　テキスト講読 (7)
第 9 回　テキスト講読 (8)
第 10 回　テキスト講読 (9)
第 11 回　テキスト講読 (10)
第 12 回　テキスト講読 (11)
第 13 回　テキスト講読 (12)
第 14 回　テキスト講読 (13)
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
受講者全員が、当日発表が予定されるテキストの各章に授業前に目を通しておくこと。授業後は、授業で論点となった点を踏まえ、テキストやその内容に関連する文献を読むこと。

●評価方法
平常点により評価する。

●受講生へのコメント
本演習の受講には脳・神経系についての生物学的知識が必要となるので、前期の「心理学特殊問題研究Ⅰ」とともに受講するのが望ましい。

●参考文献・教材
参考書　Andersen, P. et al. (Ed.) (2007) *The hippocampus book*. Oxford University Press.
Sweatt, J.D. (2010) *Mechanisms of memory*. 2nd ed. Academic Press.
Ward, J. (2009) *The student's guide to cognitive neuroscience*. 2nd ed. Psychology Press.
Ward, J. (2010) *The student's guide to social neuroscience*. Psychology Press.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2507	開講期	単位数
M84	**心理学特殊問題研究Ⅱ** Advanced Studies in Selected Topics in Psychology Ⅱ			前火 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 佐伯 大輔 准教授			

●科目の主題

ヒトや動物における「判断」、「意思決定」、「選択行動」の研究は、心理学、経済学、生物学等の研究分野においてなされてきた。この授業では、主に、学習心理学や認知心理学における研究を取り上げ、これまでに提案された理論とデータについて概観する。

●到達目標

ヒトや動物を対象とした「判断」、「意思決定」、「選択行動」の研究に関する知識を深め、研究対象や接近法の異なる研究領域間で、どのようにして理論やデータの比較ができるのかを理解することが到達目標である。

●授業内容・授業計画

主に以下の章立てで講義を進める。

第 1 回　1. はじめに
第 2 回　2. 確実状況下の意思決定（1）：Luce の選択公理
第 3 回　3. 確実状況下の意思決定（2）：多属性効用理論
第 4 回　4. 不確実状況下の判断（1）：ヒューリスティックとバイアス
第 5 回　5. 不確実状況下の判断（2）：基礎生起率判断の誤り
第 6 回　6. 不確実状況下の意思決定（1）：期待効用理論
第 7 回　7. 不確実状況下の意思決定（2）：プロスペクト理論
第 8 回　8. 学習理論に基づく選択行動研究
第 9 回　9. マッチング法則
第 10 回　10. 自己制御選択と遅延割引
第 11 回　11. リスク選択と確率割引
第 12 回　12. 選択行動における遅延と確率の関係
第 13 回　13. 協力選択と社会割引
第 14 回　14. 行動経済学
第 15 回　15. まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習：「参考文献」に上げた書籍の該当部分を読んでおく。
事後学習：授業で紹介した理論や研究例について理解度を確認する。

●評価方法

授業への出席と学期末のレポートにより成績評価を行う。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

参考文献

広田すみれ・増田真也・坂上貴之［編著］(2006)『心理学が描くリスクの世界：行動的意思決定入門 改訂版』慶應義塾大学出版会
Rachlin, H. (1989) *Judgment, decision, and choice: A cognitive/behavioral synthesis.* New York: Freeman.
坂上貴之［編］(2009)『意思決定と経済の心理学』朝倉書店
佐伯大輔［著］(2011)『価値割引の心理学―動物行動から経済現象まで―』昭和堂

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2508	開講期	単位数
M85	**心理学特殊問題研究演習 2** Advanced Seminar in Selected Topics in Psychology 2			後火 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 佐伯 大輔 准教授			

●科目の主題

ヒトや動物の「判断」、「意思決定」、「選択行動」に関して、学習心理学の立場から論じている Howard Rachlin の“*Judgment, decision, and choice*”を読み、認知的研究と行動的研究の融合可能性を探る。

●到達目標
各分野における研究内容の理解、さらに、異なる研究領域間における理論・データの比較の方法について理解することが到達目標である。
●授業内容・授業計画
前年度に引き続き、テキストを輪読形式で読んでいく。各受講者には、毎回の授業において、該当部分をその場で訳出することが求められる。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　Chapter 9: Rational thought (1)
第 3 回　Chapter 9: Rational thought (2)
第 4 回　Chapter 9: Rational thought (3)
第 5 回　Chapter 9: Rational thought (4)
第 6 回　Chapter 9: Rational thought (5)
第 7 回　Chapter 9: Rational thought (6)
第 8 回　Chapter 10: Decison and choice reconciled (1)
第 9 回　Chapter 10: Decison and choice reconciled (2)
第 10 回　Chapter 10: Decison and choice reconciled (3)
第 11 回　Chapter 10: Decison and choice reconciled (4)
第 12 回　Chapter 10: Decison and choice reconciled (5)
第 13 回　Chapter 10: Decison and choice reconciled (6)
第 14 回　Chapter 10: Decison and choice reconciled (7)
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前学習：次に授業で訳す部分を読み、理解する。
事後学習：授業で触れた概念・研究例について理解が不十分な部分を調べ、理解する。
●評価方法
出席と授業での発表により評価する。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
テキスト
Rachlin, H. (1989) *Judgment, decision, and choice: A cognitive/behavioral synthesis*. New York: Freeman.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2511	開講期	単位数
M86	**心理学総合研究 I** Comprehensive Studies in Psychology I			前火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授／川邉 光一 准教授／ 佐伯 大輔 准教授			

●科目の主題
心理学の各研究分野における基本的事項について理解を深める。
●到達目標
学術的テーマについて、各人が発表したり積極的に討論に参加することによって、プレゼンテーション能力の向上を図り、意見交換を行えるようなスキルを習得させる。
●授業内容・授業計画
担当教員全員で総合的に指導する。受講生が研究発表を行い、各発表内容に対して担当教員がそれぞれの専門分野の観点からテーマについて解説し、受講生全員と討論を行う。自分の専門分野のみならず他分野の研究内容の理解を図るとともに、自ら研究発表を行い討論することにより、互いに質問し批評し合う訓練の場としたい。
●事前・事後学習の内容
発表者は、発表内容に関するレジメを準備し、そのほかの受講者は、発表テーマについて予備知識を得て質問事項を考えておくように指示する。授業時に受けたコメントや議論の内容を受講者全員が次回の発表に生かすように指示する。
●評価方法
平常点により評価する。
●受講生へのコメント

積極的に発言することを期待する。

●参考文献・教材

特に使用しない。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY2512	開講期	単位数
M87	心理学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Psychology Ⅱ			後火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授／川邉 光一 准教授／ 佐伯 大輔 准教授			

●科目の主題

各研究分野の実験、調査などの研究方法やデータ解析法についての理解を深める。

●到達目標

学術的テーマについて、積極的に討論に参加し、意見交換を行えるようなスキルを習得させる。

●授業内容・授業計画

担当教員が全員で総合的に指導する。各担当教員がそれぞれの専門分野における方法論を具体的な事例を取り上げて解説するとともに、受講生にも研究発表を行わせ、討論を通して、自分の専門分野のみならず他分野の研究方法やデータ解析法への理解を深める。自ら研究発表を行い討論することにより、互いに質問し批評しあう訓練の場としたい。

●事前・事後学習の内容

発表者は、発表内容に関するレジメを準備し、そのほかの受講者は、発表テーマについて予備知識を得て質問事項を考えておくように指示する。授業時に受けたコメントや議論の内容を受講者全員が次回の発表に生かすように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

積極的に発言することを期待する。

●参考文献・教材

特に使用しない。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3601	開講期	単位数
M88	心理学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Psychology Ⅰ			前月 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授			

●科目の主題

修士論文の作成に必要な基本的事項を指導し、修士論文の完成を目指す。

●到達目標

修士論文作成のための系統だった研究計画を立て、実験もしくは調査を実施できるようにする。

●授業内容・授業計画

論文テーマの設定、テーマに関する理論、実験・調査などの研究方法並びにデータ解析法、さらに論文の構成、論文の形式など、心理学の各分野に応じた修士論文作成の指導を行う。研究指導の担当者は以下の通りである。

〔池上知子教授〕 社会的行動の基礎をなす認知と感情、自己と社会的アイデンティティなど、社会心理学の分野に関する修士論文の指導を行う。

〔山　祐嗣教授〕 思考と推論、認知の文化差など、認知心理学の分野に関する修士論文の指導を行う。

●事前・事後学習の内容

受講者は、研究テーマに関連する文献や研究計画の発表、研究結果の中間報告を行うため、事前にレジメを準備する。授業時に受けたコメントや議論の内容を次回の発表に生かすように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

主体的に研究課題を遂行することを期待する。

●参考文献・教材
適宜、紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY3602	開講期	単位数
M89	心理学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Psychology Ⅱ			後月 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授			

●科目の主題
心理学研究指導Ⅰに引き続いて、修士論文の作成に必要な基本的事項を指導し、修士論文の完成を目指す。
●到達目標
実験や調査により得られた成果を体系立てて提示し、先行研究と関連づけながら論旨の一貫した論文を作成できるようにする。
●授業内容・授業計画
論文テーマの設定、テーマに関する理論、実験・調査などの研究方法並びにデータ解析法、さらに論文の構成、論文の形式など、心理学の各分野に応じた修士論文作成の指導を行う。研究指導の担当者は以下の通りである。
〔池上知子教授〕 社会的行動の基礎をなす認知と感情、自己と社会的アイデンティティなど、社会心理学並びに関連分野に関する修士論文の指導を行う。
〔山　祐嗣教授〕 思考と推論、認知の文化差など、認知心理学並びに関連分野に関する修士論文の指導を行う。
●事前・事後学習の内容
受講者は、研究テーマに関連する文献や研究計画の発表、研究結果の中間報告を行うため、事前にレジメを準備する。授業時に受けたコメントや議論の内容を次回の発表に生かすように指示する。
●評価方法
平常点により評価する。
●受講生へのコメント
主体的に研究課題を遂行することを期待する。
●参考文献・教材
適宜、紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2501	開講期	単位数
M90	教育学基礎問題研究 Higher Studies of Fundamental Problems in Education			前木 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 柏木 敦 教授			

●科目の主題
初代文部大臣森有礼の言説を読み解く。『森有礼全集』に収録された文書をテキストとして、森の教育観や、教育政策で目指したものを検討してゆく。全体を三部に区分して言説の移り変わりを読み取ることを目的とする。
●到達目標
(1) 設定したテーマに関する知識を身につける。
(2) 日本の教育制度の形成期に関する資料の読解能力を身につける。
●授業内容・授業計画
以下のような内容で授業を進める。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　文部大臣就任以前 (1)
第 3 回　文部大臣就任以前 (2)
第 4 回　文部大臣就任以前 (3)
第 5 回　文部大臣就任以前 (4)
第 6 回　文部大臣就任前後 (1)
第 7 回　文部大臣就任前後 (2)
第 8 回　文部大臣就任前後 (3)
第 9 回　文部大臣就任前後 (4)

第 10 回　諸学校令以後（1）
第 11 回　諸学校令以後（2）
第 12 回　諸学校令以後（3）
第 13 回　諸学校令以後（4）
第 14 回　諸学校令以後（5）
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前：テキストの当該箇所を読んでおき、漢字の読み、用語の意味を調べておくこと。
事後：当該箇所と関連資料の関係について理解を深めること。
●評価方法
各回の報告に加え、授業への参加度合い（発言など）、出席率によって総合的に評価する。
●受講生へのコメント
片仮名、旧漢字によって構成された文書を読むので、漢和辞典、国語辞典がサブテキストとなる。
●参考文献・教材
参考文献：大久保利謙監修、上沼八郎・犬塚孝明編『新修　森有礼全集』第 2 巻、文泉堂書店、1998 年。
近代日本教育史料研究会編『編集復刻日本近代教育史料大系　公文記録 1　公文類聚』第 21 ～ 23 巻、龍渓書舎、2014 年。
その他、授業中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2502	開講期	単位数
M91	**教育学基礎問題研究演習** Higher Seminar：Studies of Fundamental Problems in Education			後木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 柏木 敦 教授			

●科目の主題
日本近代の教育制度政策史に関する諸研究を検討し、教育史研究における研究到達点、課題設定方法、研究論文作成に関わる基礎的な技術などを習得する。それらの作業を通して、履修者の課題意識、方法意識を明確にすることを本演習の目的とする。
●到達目標
履修者の興味関心の対象を明確にし、基礎的な研究手法を身につける。
●授業内容・授業計画
概ね以下の項目に従って検討する。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　1870 年代から 1890 年代まで（1）
第 3 回　1870 年代から 1890 年代まで（2）
第 4 回　1870 年代から 1890 年代まで（3）
第 5 回　1890 年代から 1910 年代まで（1）
第 6 回　1890 年代から 1910 年代まで（2）
第 7 回　1890 年代から 1910 年代まで（3）
第 8 回　1890 年代から 1910 年代まで（4）
第 9 回　1920 年代から 1940 年代半ばまで（1）
第 10 回　1920 年代から 1940 年代半ばまで（2）
第 11 回　1920 年代から 1940 年代半ばまで（3）
第 12 回　戦後教育改革に関する研究（1）
第 13 回　戦後教育改革に関する研究（2）
第 14 回　戦後教育改革に関する研究（3）
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
事前：テキストの該当箇所を読み、注記に挙げられた資料を調べておくこと。
事後：テキストと関連資料を読み、テキストの文脈を検証してみること。
●評価方法
受講者各自の問題意識に基づくレポートを主な評価対象とし、授業参加の程度を加味する。

●受講生へのコメント
授業の進め方、文献選択方法等については、受講者と相談の上方針を作る。
●参考文献・教材
米田俊彦編『教育改革』（論集、現代日本の教育史、第 1 巻）、日本図書センター、2013 年。
『東京茗渓会雑誌』（復刻版）、現代情報社、
『教育学術界』（大空社復刻版）明治編・大正編、1989 ～ 1999 年
その他の参考文献については、授業中に適宜紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2503	開講期	単位数
M92	学校教育学研究 I Higher Studies on Education Practicies in Schools I			前火 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 島田 希 准教授			

●科目の主題
知識社会の到来に伴い、学校における学習やカリキュラムの転換が求められている。今日の学校教育に求められている変化や各国において進展する教育改革の動向をふまえつつ、わが国における教育改革の方向性について検討する。
●到達目標
①知識社会における学校・学習・カリキュラムの転換について、その特徴や課題を説明することができる。
②各国において進展する教育改革の動向とそこにみられる特徴や課題について説明することができる。
③上記①②をふまえた上で、知識社会における学校教育のあり方に関して考えをまとめることができる。
●授業内容・授業計画
知識社会における学校・学習・カリキュラムの転換および各国における教育改革の動向について、以下のテーマを中心に考察を深めていく。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　知識社会とは―その特徴と課題―
第 3 回　知識社会の到来と学校教育に求められる変化
第 4 回　知識社会における学習・カリキュラムの転換①
第 5 回　知識社会における学習・カリキュラムの転換②
第 6 回　各国において進展する教育改革の動向①
第 7 回　各国において進展する教育改革の動向②
第 8 回　学習・カリキュラムの転換による教師の専門性の問い直し①
第 9 回　学習・カリキュラムの転換による教師の専門性の問い直し②
第 10 回　専門的な学習共同体としての学校①
第 11 回　専門的な学習共同体としての学校②
第 12 回　わが国における教育改革への示唆①
第 13 回　わが国における教育改革への示唆②
第 14 回　わが国における教育改革への示唆③
第 15 回　全体のまとめ
●事前・事後学習の内容
授業中に紹介・配布する資料や参考文献を授業の事前・事後に読むほか、関連する文献等を自ら収集し、授業内容のさらなる理解に努めること。
●評価方法
授業時の発表、ディスカッションへの参加、小レポート (60%) と期末レポート (40%) により、総合評価する。
●受講生へのコメント
以下に挙げる教材を読み進めるとともに、受講生相互によるディスカッションを中心に進めていく。教材となる文献を丁寧に読み解くこと、さらには、ディスカッションへの積極的な参加を求める。
●参考文献・教材
以下を主たる教材として進めていく。そのほか関連する文献については、授業中に適宜紹介する。
・アンディ・ハーグリーブス（2015）木村優ほか監訳『知識社会の学校と教師―不安定な時代における教育』金子書房 .
・ピーター・M・センゲほか（2014）リヒテルズ直子訳『学習する学校―子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する』英治出版 .

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2504	開講期	単位数
M93	**学校教育学研究演習 1** Higher Seminar on Education Practicies in Schools 1			後火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 島田 希 准教授			

●科目の主題

学校教育学研究 I の内容をふまえつつ、専門的な学習共同体としての学校を構想すべく関係する先行知見の検討を行う。具体的には、わが国における授業研究の蓄積と海外におけるその広がりについて、さらには、授業研究を基盤とした学校づくりに関して考察を深める。

●到達目標

①わが国における授業研究の歴史・実態・今日的課題や海外における広がりについて説明することができる。
②授業研究を基盤とした学校づくりに関するキーコンセプトについて説明することができる。
③上記①②をふまえた上で、授業研究の方法論および教育方法学研究としての今後の展開について考えをまとめることができる。

●授業内容・授業計画

わが国における授業研究の取り組みやその広がりについて検討することを通して、専門的な学習共同体としての学校について考察を深めていく。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　わが国における授業研究の蓄積①
第 3 回　わが国における授業研究の蓄積②
第 4 回　わが国における授業研究の実態と今日的課題①
第 5 回　わが国における授業研究の実態と今日的課題②
第 6 回　海外における授業研究の広がり①米国における展開
第 7 回　海外における授業研究の広がり②アジアにおける展開
第 8 回　海外における授業研究の広がり③北欧における展開
第 9 回　授業研究を基盤とした学校づくり①
第 10 回　授業研究を基盤とした学校づくり②
第 11 回　授業研究の方法論に関する理論的検討①
第 12 回　授業研究の方法論に関する理論的検討②
第 13 回　教育方法学研究としての授業研究の展開と展望①
第 14 回　教育方法学研究としての授業研究の展開と展望②
第 15 回　全体のまとめ

●事前・事後学習の内容

授業中に紹介・配布する資料や参考文献を授業の事前・事後に読むほか、関連する文献等を自ら収集し、授業内容のさらなる理解に努めること。

●評価方法

授業時の発表、ディスカッションへの参加、小レポート(60%)と期末レポート(40%)により、総合評価する。

●受講生へのコメント

以下に挙げる教材を読み進めるとともに、受講生相互によるディスカッションを中心に進めていく。教材となる文献を丁寧に読み解くこと、さらには、ディスカッションへの積極的な参加を求める。

●参考文献・教材

以下を主たる教材として進めていく。そのほか関連する文献については、授業中に適宜紹介する。

・水越敏行・吉崎静夫・木原俊行・田口真奈 (2012)『授業研究と教育工学』ミネルヴァ書房 .
・日本教育方法学会編 (2009)『日本の授業研究－授業研究の歴史と教師教育〈上巻〉』学文社 .
・日本教育方法学会編 (2009)『日本の授業研究－－授業研究の方法と形態〈下巻〉』学文社 .
・田中耕治・森脇健夫・徳岡慶一 (2011)『授業づくりと学びの創造』学文社 .

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2505	開講期	単位数
M94	**学校教育学研究Ⅱ** Higher Studies on Education Practicies in Schools Ⅱ			前水 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 森 久佳 准教授			

●科目の主題

教育方法学の前提となる教育思想（史）に関する基本的素養を身につけることで，教育方法学に対する専門的な知見の基礎を身につける。

●到達目標

(1) 教育方法学の前提となる教育思想に関する基本的素養を身につける
(2) 教育思想史について理解する
(3) 教育思想史の観点から教育方法学に対する専門的な理解を深める

●授業内容・授業計画

指定したテキストの講読が中心となるが、状況に応じて関連文献の講読も行う。

第 1 回　オリエンテーション（授業の進め方等についての説明）
第 2 回　古典古代と中世の教育思想（第 1 章・第 2 章）①
第 3 回　古典古代と中世の教育思想（第 1 章・第 2 章）②
第 4 回　近世の教育思想と「教育的世界」の誕生（第 3 章・第 4 章）①
第 5 回　近世の教育思想と「教育的世界」の誕生（第 3 章・第 4 章）②
第 6 回　啓蒙主義期の教育思想（第 5 章）①
第 7 回　啓蒙主義期の教育思想（第 5 章）②
第 8 回　第古典的陶冶論（人間形成論）の誕生（第 6 章）①
第 9 回　第古典的陶冶論（人間形成論）の誕生（第 6 章）②
第 10 回　古典的教育学の誕生（第 7 章）①
第 11 回　古典的教育学の誕生（第 7 章）②
第 12 回　アメリカの教育思想（第 10 章）①
第 13 回　アメリカの教育思想（第 10 章）②
第 14 回　第二次世界大戦後の教育思想と教育学（第 12 章）①
第 15 回　第二次世界大戦後の教育思想と教育学（第 12 章）②

●事前・事後学習の内容

テキスト及び参考文献の講読等。

●評価方法

平常点 40%（授業への参加状況、発表の様子）と期末レポート（60%）による。

●受講生へのコメント

学生自身が主体的、自律的に学んでいくことを重視する。

●参考文献・教材

＜使用するテキスト＞
・眞壁宏幹編（2016）『西洋教育思想史』慶應義塾大学出版会.
＜参考文献＞
・アルベルト・レーブレ（2015）『教育学の歴史』広岡義之・津田徹訳，青土社（Aobert Reble, *Geshichte der Padagogik*, 20. Auf. lage. Klett-Otta, 2002）.
・ダイアン・ラヴィッチ（2011）『教育による社会的正義の実現：アメリカの挑戦（1945 － 1980）』東信堂.
・ジョイ・A・パーマー他編著（2012）『教育思想の 50 人』広岡義之・塩見剛一他訳，青土社.
・橋本美保・田中智志編著（2015）『大正新教育の思想：生命の躍動』東信堂.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2506	開講期	単位数
M95	**学校教育学研究演習 2** Higher Seminar on Education Practicies in Schools 2			後水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 森 久佳 准教授			

●科目の主題

今日、学校を「ケアする場」としてのとらえ直す動きが、大きな流れの一つとしてある。そこで、本演習では、こ

うした「ケアする場としての学校」論の主要な提唱者の 1 人である J・R・マーティン（J. R. Martin）の『スクール・ホーム：＜ケア＞する学校』（*The Schoolhome: Rethinking Schools for Changing Families*）を講読し、「ケアする場としての学校」に関する基本的な理念等についての理解を深め、議論することを目指す。ただし、同書は、J・デューイ（J. Dewey）の『学校と社会』（*The School and Society*）に対する批判を前提に議論が進められているので、本演習は、まず前段階として、デューイの『学校と社会』の主要な箇所（第 1 章・第 2 章・第 3 章）を講読し、その上で、マーティンの『スクールホーム』の講読に進む予定である。

●到達目標

(1) デューイの教育理論について理解する
(2)「ケアする場としての学校」という考え方を理解する
(3) 学校という観点から教育学に対する専門的な理解を深める。

●授業内容・授業計画

デューイの『学校と社会』の主要な箇所を講読した上で、マーティンの『スクールホーム』を講読する。その際に、関連文献の講読も併せて行う予定である。なお、講読に際しては、随時原文も参照する予定である（原文はこちらで用意する）。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　学校と社会進歩（『学校と社会』第 1 章）
第 3 回　学校と子どもの生活（『学校と社会』第 2 章）
第 4 回　教育における浪費（『学校と社会』第 3 章）
第 5 回　学校と家庭（『スクールホーム』第 1 章）①
第 6 回　学校と家庭（『スクールホーム』第 1 章）②
第 7 回　文化とカリキュラム（『スクールホーム』第 2 章）①
第 8 回　文化とカリキュラム（『スクールホーム』第 2 章）②
第 9 回　生きることへの学び（『スクールホーム』第 3 章）①
第 10 回　生きることへの学び（『スクールホーム』第 3 章）②
第 11 回　抑圧された家庭的事柄（『スクールホーム』第 4 章）①
第 12 回　抑圧された家庭的事柄（『スクールホーム』第 4 章）②
第 13 回　家庭と世界（『スクールホーム』第 5 章）①
第 14 回　家庭と世界（『スクールホーム』第 5 章）②
第 15 回　まとめと総括

●事前・事後学習の内容

テキスト及び参考文献の講読等。

●評価方法

平常点 40%（授業への参加状況、発表の様子）と期末レポート（60%）による。

●受講生へのコメント

学生自身が主体的、自律的に学んでいくことを重視する。

●参考文献・教材

＜使用するテキスト＞

・J. デューイ（1998[1899]）『学校と社会・子どもとカリキュラム』（市村尚久訳）講談社学術文庫（J. Dewey (1990[1956]). *The School and Society and The Child and the Curriculum*. The University of Chicago Press.）.
・ジェーン・R・マーティン（2007）『スクールホーム：＜ケア＞する学校』生田久美子監訳・解説，東京大学出版会（Jane Roland Martin (1992) *The Schoolhome: Rethinking Schools for Changing Families*. Harvard University Press.）.

＜参考文献＞

・ジェーン・R・マーティン（2008）『カルチュラル・ミスエデュケーション：「文化遺産の伝達」とは何なのか』生田久美子監訳，東北大学出版会（Jane Roland Martin. (2002). *Cultural Miseducation: In Search of a Democratic Solution*.Teachers College Press.）.
・マイケル・W・アップル＆ジェームズ・A・ビーン編著（2013）『デモクラティック・スクール：力のある学校教育とは何か』澤田稔訳，上智大学出版（M. W. Apple & J. A. Beane eds. (2007). *Democratic Schools: Lessons in Powerful Education, 2nd ed*. Portsmouth, NH: Heinemann.）.
・ダイアン・ラヴィッチ（2013）『偉大なるアメリカ公立学校の死と生：テストと学校選択がいかに教育をだめにしてきたのか』本図愛実監訳，協同出版（Diane Ravitch. (2010). *The Death and Life of the Great American School System: How Testing and Choice Are Undermining Education*. New York: Basic Books.）.
・ダイアン・ラヴィッチ（2015）『アメリカ 間違いがまかり通っている時代：公立学校の企業型改革への批判と解決法』東信堂（Diane Ravitch. (2013). *Reign of Error: The Hoax of the Privatizationi Movement and the Danger to America's Public Schools*. New York: Alfred A. Knopf.）.

・ピーター・M・センゲ（2014）『学習する学校：子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する』リヒテルズ直子訳，英治出版（Peter M. Senge et. al. (2012). Schools that Learn: A Fifth Discipline Fieldbook for Educators, Parents, and Everyone Who Cares about Education. New York: Crown Business.）.
・デッカー・F・ウォーカー＆ジョナス・F・ソルティス（2015）『カリキュラムと目的：学校教育を考える』佐藤隆之・森山賢一訳，玉川大学出版部（Decker F. Walker & Jonas F. Soltis. (2009). *Curriculum and Aims*. 5th edition, Thinking About Education Series, Teachers College Press.）.
・佐藤学（1999）『学びの快楽』世織書房.
・日本教育方法学会編（2014）『教育方法学研究ハンドブック』学文社.
・藤田英典・大桃敏行編著（2010）『学校改革』（リーディングス 日本の教育と社会第 11 巻）日本図書センター.
・Connelly, F. Michael (ed.). (2008). *The SAGE Handbook of Curriculum and Instruction*. Sage Publications.
・Finders, David J. & Thornton, Stephen J. (ed.).(2013). *The Curriculum Studies Reader. Fourth Edition*, Routledge.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2507	開講期	単位数
M96	**教育学特殊問題研究 I** Higher Studies in Special Educational Fields I			前金3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 辻野 けんま 非常勤講師			

●科目の主題

現在、日本では、少子高齢化や人口減少がローカルな地域社会の退廃や消滅を進行させる一方で、政治・経済、科学技術、自然環境、国際平和をはじめ様々な領域で国境を超えたグローバル化が急速に拡大している。このような状況下において、国民国家が構築してきた近代教育制度は社会の変容に十分に対応しきれず、ときにその限界さえ露呈させつつある。その一方で、変動する社会の中でもそこに惑わされすぎずに公教育が安定して築いてきた価値もあるだろう。そこで本授業では、ポスト国民国家の時代における「公教育の正当性」と、そこにおける「教員の専門性」について教育行政学的な観点から考察を深めていく。

●到達目標

現代社会を特徴づける事象を捉えながら、公教育の課題を教育行政・制度の観点から考え、自分なりの見解を論理的に構成したり生産的に議論したりできる。

●授業内容・授業計画

本授業では、毎回の授業が、①事前の予習課題、②講義、③討議という 3 段階から構成される。授業は 4 回分を一連のまとまりとして構成し、(I)「公教育制度の概観」、(II)「教育行政の理念と制度」、(III)「教育経営としての学校経営」というテーマ領域について、制度理解を深めつつ具体的事例から考察を深めていく。

第 1 回　オリエンテーション（公教育を行政・制度から捉える視角）
第 2 回　公教育制度の概観 I：　国家と学校
第 3 回　公教育制度の概観 II：　教員と公権力
第 4 回　公教育制度の概観 III：　就学義務と子どもの権利
第 5 回　公教育制度の概観 IV：　公教育経営の視角
第 6 回　教育行政の理念と制度 I：　教育委員会制度の変容
第 7 回　教育行政の理念と制度 II：　教育における「規制緩和」と「地方分権」
第 8 回　教育行政の理念と制度 III：　学校選択と学校参加
第 9 回　教育行政の理念と制度 IV：　公教育と私学、株式会社立学校
第 10 回　教育経営としての学校経営 I：　教育経営と一般経営
第 11 回　教育経営としての学校経営 II：　「学力」政策と学校経営
第 12 回　教育経営としての学校経営 III：　インクルーシブな学校経営
第 13 回　教育経営としての学校経営 IV：　学校の自律性と内外「連携」
第 14 回　教育行政研究の課題：「学校教育行政研究」の限界
第 15 回　総括的討議

●事前・事後学習の内容

毎回の授業には、あらかじめ課題を出し、それを終えた上で参加していることを前提に授業を進める。

●評価方法

学期末レポート（8 割）と毎回の授業での平常成績（2 割）とを総合し評価する。

●受講生へのコメント

本演習では、自分の考えを先行研究等をふまえて相対化しつつ、忌憚のない議論を通して思考を深めていくことを重視する。人前での発言が得意でない方も、ぜひ積極的にトライしていただきたい。

●参考文献・教材

毎回の授業は、事前のテキスト配布や、授業時の資料配布などをもとに進めていく。参考文献等も適宜紹介していくが、基本的な文献としては以下が挙げられる。

- 井本佳宏・辻野けんま『学校経営への「地域」の参画形態に関する国際比較研究』（平成 26 ～ 27 年度上越教育大学研究プロジェクト（一般研究））
- 岩永定 (2012)「学校と家庭・地域の連携における子どもの位置」『日本教育経営学会紀要』第 54 号、13-22 頁。
- 篠原清昭編著 (2003)『ポストモダンの教育改革と国家』教育開発研究所。
- 園山大祐編著 (2016)『岐路に立つ移民教育：社会的包摂への挑戦』ナカニシヤ出版。
- 辻野けんま (2016)「ドイツの学校は国家とどう付き合ってきたか」末松裕基編著『現代の学校を読み解く―学校の現在地と教育の未来―』春風社、297-331 頁。
- 辻野けんま・榊原禎宏 (2016)「『教員の専門性』論の特徴と課題―2000 年以降の文献を中心に―」『日本教育経営学会紀要』第 58 号、164-174 頁。
- 堀内孜 (2011)『公教育経営の展開』東京書籍。
- 結城忠 (2012)『日本国憲法と義務教育』青山社。
- 結城忠 (2014)『憲法と私学教育』協同出版。
- I. イリッチ著／東洋・小沢周三訳 (1977)『脱学校の社会』東京創元社。
- W.A. ロブソン著／辻清明・星野信也 (1980)『福祉国家と福祉社会』東京大学出版会。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2508	開講期	単位数
M97	**教育学特殊問題研究演習 1** Higher Seminar in Special Educational Fields 1			後金2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 辻野　けんま　非常勤講師			

●科目の主題

現代という時代の状況を多角的にとらえながら、公教育のあり方に関して、先行研究や授業での討議などを通じて考察を深めていく。

●到達目標

自ら公教育の課題設定ができ、それを行政・制度的な観点から探究できる。

●授業内容・授業計画

本授業では、毎回の授業が、①事前の予習課題、②受講者による報告、③討議という 3 段階から構成される。（授業でとりあげる内容は、議論の流れや受講者の関心等をふまえて変更することがある。）

第 1 回　オリエンテーション（授業概要の説明と受講者の課題関心の把握、授業内容・分担の相談）
第 2 回　教育権
第 3 回　教育における権利
第 4 回　教育における公的責任
第 5 回　教育における管理と自律
第 6 回　学校特別権力関係論
第 7 回　「教師＝専門職」論をめぐって
第 8 回　「国民の教育権」論
第 9 回　「教育上の自由」論
第 10 回　内外事項区分論
第 11 回　就学義務と子どもの自由
第 12 回　学区制度と住民の権利 I：　理論
第 13 回　学区制度と住民の権利 II：　事例
第 14 回　公教育経営の位相
第 15 回　総括的討議

●事前・事後学習の内容

毎回の授業には、あらかじめ課題を出し、それを終えた上で参加していることを前提に授業を進める。

●評価方法

学期末レポート（7 割）と毎回の授業での平常成績（3 割）とを総合し評価する。

●受講生へのコメント

本演習では、自分の考えを先行研究等をふまえて相対化しつつ、忌憚のない議論を通して思考を深めていくこと

を重視する。人前での発言が得意でない方も、ぜひ積極的にトライしていただきたい。

●参考文献・教材

毎回の授業は、事前のテキスト配布や、授業時の資料配布などをもとに進めていく。参考文献等も適宜紹介していくが、基本的な文献としては以下が挙げられる。

・市川昭午(1986)『教師＝専門職論の再検討』教育開発研究所。
・遠藤孝夫(2004)『管理から自律へ』勁草書房。
・黒崎勲(2006)『教育の政治経済学』同時代社。
・齋藤純一(2005)『自由』岩波書店。
・篠原清昭(2010)「教育法の法理論―『国民の教育権』論の再考―」『小島弘道監修『現代の教育法制』学文社、10-29 頁。
・武川正吾(2011)『福祉社会〔新版〕―包摂の社会政策』有斐閣。
・仲正昌樹(2003)『「不自由」論―「何でも自己決定」の限界―』筑摩書房。
・西原博史(2009)「教師の＜教育の自由＞と子どもの思想・良心の自由」広田照幸編著『自由への問い　教育』岩波書店、130-169 頁。
・堀内孜(2002)『現代公教育経営学』学術図書出版社。
・堀尾輝久(2007)「『国民の教育権と教育の自由』論再考―西原博史氏の言説に応えて―」『世界』2007 年 12 号、242-255 頁。
・三上和夫(1988)『学区制度と住民の権利』大月書店。
・室井力(1975)『特別権力関係論』勁草書房。
・結城忠(2009)『教育の自治・分権と学校法制』東信堂、159-172 頁。
・Kemma Tsujino(2016), Professional Responsibilitiy of School Teachers in Public Education: An Analysis of German Educational Administration from a Japanese Perspective, *JISfTE*, Vol. 20, No. 1, pp. 32-42.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2509	開講期	単位数
M98	**教育学特殊問題研究Ⅱ** Higher Studies in Special Educational Fields Ⅱ			前月 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 添田 晴雄 准教授			

●科目の主題

文字言語と音声言語の視点から日本と西洋の学習文化を比較研究する

●到達目標

方法論としての比較教育を考える
文字言語と音声言語の視点から日本と西洋の学習文化を比較研究する
文字言語と音声言語の視点から学級活動の話合い活動を分析する

●授業内容・授業計画

文献による理論研究とフィールドワークによる教育実践の分析研究の両方を往還する

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　文字言語・音声言語からみた授業分析併置比較（1）
第 3 回　文字言語・音声言語からみた授業分析併置比較（2）
第 4 回　日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習（1）
第 5 回　日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習（2）
第 6 回　日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習（3）
第 7 回　日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習（4）
第 8 回　日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習（5）
第 9 回　アメリカの話合いにおける書字随伴型学習
第 10 回　日本の近世における書字随伴型学習（1）
第 11 回　日本の近世における書字随伴型学習（2）
第 12 回　日本の近世における書字随伴型学習（3）
第 13 回　西洋の中世・近代における音声中心型学習（1）
第 14 回　西洋の中世・近代における音声中心型学習（2）
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

小学校や中学校に出向いて授業を見学し、それを分析するなど、授業時間以外の学修を前提とする。

●評価方法

平常点

●受講生へのコメント

比較教育文化的視点にたち、日本の特別活動が果たす役割についても考察して欲しい。

●参考文献・教材

授業中に説明する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2510	開講期	単位数
M99	教育学特殊問題研究演習 2 Higher Seminar in Special Educational Fields 2			後月 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 添田 晴雄 准教授			

●科目の主題

文字言語と音声言語の視点から日本と西洋の学習文化を比較研究する

●到達目標

方法論としての比較教育を考える

文字言語と音声言語の視点から日本と西洋の学習文化を比較研究する

文字言語と音声言語の視点から学級活動の話合い活動を分析する

●授業内容・授業計画

文献による理論研究とフィールドワークによる教育実践の分析研究の両方を往還する

第 1 回　日本の文字教育観と西洋の文字教育観（1）
第 2 回　日本の文字教育観と西洋の文字教育観（2）
第 3 回　日本の文字教育観と西洋の文字教育観（3）
第 4 回　アメリカの国語・数学授業における書字随伴型学習（1）
第 5 回　アメリカの国語・数学授業における書字随伴型学習（2）
第 6 回　アメリカの国語・数学授業における書字随伴型学習（3）
第 7 回　文字言語・音声言語から見た西洋教育移入期関係比較（1）
第 8 回　文字言語・音声言語から見た西洋教育移入期関係比較（2）
第 9 回　文字言語・音声言語から見た西洋教育移入期関係比較（3）
第 10 回　文字言語・音声言語から見た西洋教育移入期関係比較（4）
第 11 回　学習・教育文化関係比較研究における「モノ」（1）
第 12 回　学習・教育文化関係比較研究における「モノ」（2）
第 13 回　学習・教育文化関係比較研究と「深層構造」と「表層構造」（1）
第 14 回　学習・教育文化関係比較研究と「深層構造」と「表層構造」（2）
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

小学校や中学校に出向いて授業を見学し、それを分析するなど、授業時間以外の学修を前提とする。

●評価方法

平常点

●受講生へのコメント

比較教育文化的視点にたち、日本の特別活動が果たす役割についても考察して欲しい。

●参考文献・教材

授業中に説明する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2511	開講期	単位数
M100	教育学総合研究 I Comprehensive Studies in Education I			前金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 柏木 敦 教授／添田 晴雄 准教授／森 久佳 准教授／ 島田 希 准教授			

●科目の主題

教育学研究を行う上で必要となる課題設定や研究方法などを概説するとともに、討論を通じて総合的に指導する。

●到達目標

教育学研究を行う上で必要となる基本的な事項と研究方法を学ぶ。

●授業内容・授業計画

教育の思想や制度、内容や方法に関する基本的・総合的な問題について、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講ずるとともに、受講生も研究発表を行い、討論を通して、教育学における論文作成に必要な基本的事項の理解を深める。

●事前・事後学習の内容

実施前に指示する。

●評価方法

出席と研究報告による。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU2512	開講期	単位数
M101	**教育学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Education Ⅱ			後金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 柏木 敦 教授／添田 晴雄 准教授／森 久佳 准教授／ 島田 希 准教授			

●科目の主題

各種の研究方法や研究資料・文献の取り扱いについて担当教員が概説するとともに、受講生に研究報告を求め、討論を行う。

●到達目標

研究の各分野に必要な基本的事項（理論と方法）について、総合的に習得する。

●授業内容・授業計画

教育学の各分野について実証的な手法を学び、また討論や資料調査、その分析手法などを習得する。

●事前・事後学習の内容

実施前に指示する。

●評価方法

出席と研究報告による。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3601	開講期	単位数
M102	**教育学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in Education Ⅰ			前木 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 柏木 敦 教授			

●科目の主題

教育学の各分野に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

研究テーマと課題を設定し、研究計画を立て、修士論文作成に必要な理論と方法を習得する。

●授業内容・授業計画

（柏木敦教授）主に、日本教育史、初等教育制度政策史に関する実証的研究について指導する。

●事前・事後学習の内容

個別に指示する。

●評価方法

出席と研究報告による。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

特になし。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU3602	開講期	単位数
M103	教育学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Education Ⅱ			後木 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 柏木 敦 教授			

●科目の主題

教育学の各分野に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

設定された研究の課題と計画に基づいて、それに必要な理論と方法を研鑽して、修士論文を作成する。

●授業内容・授業計画

各自の研究課題と計画に基づいて、それざれの研究を遂行する。得られた知識の整理と考察を行い、研究報告を行うとともに、討論等を通して考察を深め、修士論文の完成を目指す。

研究指導の担当分野は、「教育学研究指導Ⅰ」で記載の通りである。

●事前・事後学習の内容

個別に指示する。

●評価方法

出席と研究報告による。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

特になし。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2501	開講期	単位数
M104	地理学基礎問題研究 Graduate Studies on Basic Subjects in Geography			後火 3	2 単位
	授業形態 討論とフィールドワーク	担当教員名 山﨑 孝史 教授			

●科目の主題

この科目は地理学という学問がどのような課題と方法を持つのかについて、19 世紀初頭における近代地理学成立以来の発展過程を振り返りながら、考察することを目的とする。とりわけ 1950 年代以降の英語圏の地理学における諸スクールの研究分野と基本概念について詳細に検討します。

●到達目標

今年度は領土・境界問題に関する内外の諸研究を渉猟し、沖縄県における現地調査（予定）を通して、政治地理学における領域論と境界論を統合的な理解を図ります。

●授業内容・授業計画

前半は文献の精読、後半は沖縄県での現地調査（予定）を実施する。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　政治地理学における領域論 1
第 3 回　政治地理学における領域論 2
第 4 回　政治地理学における境界論 1
第 5 回　政治地理学における境界論 2
第 6 回　領土問題を理解する 1
第 7 回　領土問題を理解する 2
第 8 回　領土問題を理解する 3
第 9 回　沖縄県現地調査 1
第 10 回　沖縄県現地調査 2
第 11 回　沖縄県現地調査 3

第 12 回　沖縄県現地調査 4
第 13 回　沖縄県現地調査 5
第 14 回　領域論と境界論の統合：報告書作成 1
第 15 回　領域論と境界論の統合：報告書作成 2

●事前・事後学習の内容
事前学習として課題に関連する参考文献を読み、授業に臨む必要があります。現地調査の結果は簡単な報告書として刊行する予定です。

●評価方法
各週の課題文献へのコメント、現地調査報告書の作成から評価します。

●受講生へのコメント
課題文献は各自でダウンロードないしコピーしていただきます。沖縄県現地調査の日程は受講生と現地受入先と調整して決定します。

●参考文献・教材
課題文献は最初の授業時に指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2502	開講期	単位数
M105	**地理学基礎問題研究演習** Graduate Seminar on Basic Subjects in Geography			前火 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 山﨑 孝史 教授			

●科目の主題
この科目は地理学という学問がどのような課題と方法を持つのかについて、19 世紀初頭における近代地理学成立以来の発展過程を振り返りながら、考察することを目的とする。とりわけ 1950 年代以降の英語圏の地理学における諸スクールの研究分野と基本概念について詳細に検討します

●到達目標
今年度は担当教員が刊行したテキスト『政治・空間・場所―「政治の地理学」にむけて［改定版］』の各章および関連文献を精読した上で、受講生による討論を行い、政治地理学の理解を深めます。

●授業内容・授業計画
テキストは 4 部 14 章からなります。第 1 部は、近代における政治地理学の展開、つまり戦前の地政学から現代の政治地理学までの流れを、英米と日本においてあとづけ、「新しい地政学」および「場所の政治」研究の視角を示します。第 2 部は、空間や場所と権力との関係を明らかにしつつ、その関係を反映する領域の性質を理論的に解説した上で、グローバル化とナショナリズムについて政治地理学的に考えます。第 3 部は、「コンテクスト」、「スケール」、そして「言説」という政治地理学にとって鍵となる概念について説明し、それらを実証研究のなかでどのように活用しうるかを検討します。第 4 部は、第 3 部までの理論的・概念的な議論が、具体的な事例研究としてどのように展開できるかを解説しています。

第 1 回　政治地理学の起源と地政学の盛衰
第 2 回　戦後の政治地理学―その日本的展開
第 3 回　政治地理学の展開と課題
第 4 回　空間分析批判
第 5 回　場所の政治的意味
第 6 回　人間の領域性
第 7 回　グローバル化とナショナリズム
第 8 回　コンテクストの政治
第 9 回　スケールの政治
第 10 回　言説の政治
第 11 回　大都市圏行政と公共選択論
第 12 回　政党の編成と投票行動
第 13 回　領域と社会運動
第 14 回　安全と安心のまちづくり
第 15 回　総合討論

●事前・事後学習の内容
各週の授業日の前日午後 5 時までに、その週の章と課題文献について要約、論評、および疑問点を提示した 1200 字以内のショート・レポートを提出していただきます。その内容については、演習時に教員からコメントを返し、

受講生の議論の素材とします。

●評価方法

(1) 討論参加：毎週の演習では教員・受講生間で課題文献の内容について討議します。必ず出席し、積極的に討議に参加してください。出席数が 2/3 以上の受講生を評価対象とします。（評価配分 10%）

(2) リーディング・レポート：各週の課題について事前に上記のショート・レポートを教員と受講生に送付してください。（評価配分 50%）

(3) 期末レポート：テキストの特定の章（複数でも構いません）で言及された理論的視角について原著を参照して論評し、その章で「言及されていない」事例で理論の妥当性を考察してください。字数は 6000 字程度とします。（評価配分 40%）

(4) 最終評価：以上の評点が全体の 60%以上の受講生を合格とします。

●受講生へのコメント

登録受講生は下記テキストを生協で購入してください。

●参考文献・教材

テキスト：山﨑孝史『政治・空間・場所―「政治の地理学」にむけて［改訂版］』ナカニシヤ出版、2013 年

関連文献：テキストの参考文献リストから適宜指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2503	開講期	単位数
M106	**地理情報論研究** Graduate Studies in Geographical Information			前木 3	2 単位
	授業形態 演習・実習	担当教員名 木村 義成 准教授			

●科目の主題

地理情報と言えば、何か特殊な分野に聞こえるが、Google Map や Yahoo Map に代表されるように、地理情報は、誰にとっても身近にアクセスでき、日々の生活の中で役立つ情報となっている。近年の IT 技術の進展により、地理情報は、GIS（地理情報システム）で管理・分析できるようになり、GPS（全地球測位システム）で高精度の位置情報を取得できるようになった。カーナビゲーションは、それらの一例である。

●到達目標

本講義では、地理情報の取得・分析方法を中心に説明を行う。また、地理情報がどのような分野で、どのように活用されているかについて数多く紹介する。本講義により、自身でわかりやすい地図の作成や、空間分析のアイディが生まれるようにしてもらう。

●授業内容・授業計画

以下のような内容を想定している。第 1 回のイントロダクションは、必ず受講すること。

第 1 回　・イントロダクション
第 2 回　・GIS (Geographic Information System) とは？
第 3 回　・GPS (Global Positioning System) とは？
第 4 回　・地理情報の取得方法①
第 5 回　・地理情報の取得方法②
第 6 回　・地理情報の取得方法③
第 7 回　・地理情報の管理方法
第 8 回　・地理情報の表現方法
第 9 回　・地理情報を用いた空間分析法①
第 10 回　・地理情報を用いた空間分析法②
第 11 回　・地理情報を用いた空間分析法③
第 12 回　・地理情報科学からみた研究例①
第 13 回　・地理情報科学からみた研究例②
第 14 回　・地理情報科学からみた研究例③
第 15 回　・総括

●事前・事後学習の内容

本科目は GIS（地理情報システム）に関する実習を含むため、特に事後学習を求める。

事後学習としては、実習で説明した内容について GIS を用いて自分で地図製作や空間分析を行えるように課題を課す。

●評価方法

講義中の小課題やレポート等から総合的に評価する。

評価の比率は、小課題提出が 30%、レポート提出が 70% を想定している。

●受講生へのコメント
地理情報の技術的な側面のみならず、地理情報の活用事例を中心に判り易く説明するので受講されたい。
地理情報論研究演習と必ず同時に受講すること。
また、第１回のイントロダクションは必ず参加すること。
●参考文献・教材
講義の中で、定義参考文献を紹介する。なお、自習書としては以下の文献を推薦する。
岡部篤行著『空間情報科学の挑戦』岩波書店
マーク・モンモニア著『地図は嘘つきである』晶文社
Paul A. Longley, et al.『Geographic Information Systems and Science』John Wiley & Sons

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2504	開講期	単位数
M107	**地理情報論研究演習** Graduate Seminar on Basic Subjects in Human Geography			前木 4	2 単位
	授業形態 演習・実習	担当教員名 木村 義成 准教授			

●科目の主題
本演習の目的は修士論文や学術論文を作成していく上で必要な技術と知識を習得することである。
主に GIS を用いて自身で論文で用いる地図や、諸現象の空間分析を行えるようにしてもらう。
●到達目標
本演習では、GIS や GPS の考え方と使い方を習得する。本演習を受講後は、学会発表や修士論文などの論文作成で用いるマップや、空間分析について、自身で行えることを目標とする。
●授業内容・授業計画
地理学教室所有の GIS や GPS を利用した演習・実習を行う。
本演習は「地理情報論研究」と並行して開講されるので、必ず合わせて受講すること。
第 1 回　・イントロダクション
第 2 回　・空間データの作成と編集①
第 3 回　・空間データの作成と編集②
第 4 回　・空間データの作成と編集③
第 5 回　・空間データの作成と編集④
第 6 回　・各種マップの作成①
第 7 回　・各種マップの作成②
第 8 回　・各種マップの作成③
第 9 回　・各種マップの作成④
第 10 回　・空間解析①
第 11 回　・空間解析②
第 12 回　・空間解析③
第 13 回　・空間データの統合利用①
第 14 回　・空間データの統合利用②
第 15 回　・総括
●事前・事後学習の内容
本科目は GIS（地理情報システム）に関する実習を含むため、特に事後学習を求める。
事後学習としては、実習で説明した内容について GIS を用いて自分で地図製作や空間分析を行えるように課題を課す。
●評価方法
演習という講義の性格上、出席点を最重視する。
●受講生へのコメント
同時に「地理情報論研究」を必ず受講すること。演習だけの受講は認めない。
また、第 1 回のイントロダクションには、必ず参加すること。
●参考文献・教材
教材・参考文献については、随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2505	開講期	単位数
M108	**人文地理学特殊問題研究 I** Graduate Studies on Spacialized Subjects in Human Geography I			後月 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 水内 俊雄 教授			

●科目の主題

都市社会・政治地理学の実践：都市地域における生活困難問題、住宅困窮問題、ホームレス問題、中山間地域の生活継続や就労問題にどのように接近し、観察し、関係者と接し、問題の改善にあたっての仕組みづくり、施策づくりの後方支援に関与することを、国内外のフィールドワークに参加しながら、身につけてゆくことをめざす。という前期の演習 1 の課題に連結し、授業形式では、こうした実践に対して、より理論的、分析フレームワークの整理をお互いに考える授業として、問題整理と理論紹介を通じて、論文執筆の一道程と位置づける。

●到達目標

都市社会問題や地域問題に関心を有する受講生向けに構想された授業である。もちろん修士論文や投稿論文につながることをめざしていると同時に、こうした都市社会問題に対する研究者としてのアプローチに触れたいという受講生にも門戸は開いている。実践的でアクティブな研究スタイルをシェアし、そしてネットワークのひろがる環境を享受してもらうことを目標としている。

●授業内容・授業計画

都市問題研究プロジェクト「野宿生活者・生活保護者の就労、福祉、居住支援に関する政策支援研究」と、水内を代表とする科研プロジェクト「排除から包摂をめざしたホームレスの中間居住施設と地域定着事業の支援体系構築」「東アジアのホームレス支援が創り出すもうひとつのインナーシティ再生の試み」に連動して、前期の演習を行い、それと関連して後期の授業をおこなう。関連する文献紹介を通じた理論の理解と、関連研究者の招聘なども加えたレクチャーを組み込むことで、実践に基づいた理論的思考の鍛錬を深める予定である。大きくは都市再生にかかわる具体的な実践を身近に取り込みつつ、かつ研究者としてどのようにこうした事象に有機的に関わってゆくかの切磋琢磨の機会ともしたい。

第 1 回　日本のセーフティネットの重荷と大学生として、大学としてわれわれが考えるべきこと
第 2 回　セーフティネットのほころび：その 1　ホームレス問題とハウスレス問題
第 3 回　脱ホームレス支援が居住福祉支援につながる実践事例の紹介：その 1
第 4 回　脱ホームレス支援が居住福祉支援につながる実践事例の紹介：その 1
第 5 回　脱ホームレス支援が居住福祉支援につながる実践事例の紹介：その 2
第 6 回　居住福祉の支援と社会的不動産、NPO との関係
第 7 回　社会的企業、NPO 論と都市論との関係の整理
第 8 回　居住福祉の支援は都市再生につながるその実例紹介
第 9 回　現場訪問その 1：寄せ場、簡易宿所集中地域における脱ホームレス支援の実態
第 10 回　現場訪問その 2：中間施設としての無料低額宿泊所の役割と NPO の機能
第 11 回　現場訪問その 3：NPO による支援付住宅という中間施設を用いた脱ホームレス支援
第 12 回　現場訪問その 4：脱ホームレス支援におけるアフターケア支援の実態
第 13 回　現場訪問その 5：アートマネジメントを生かした新しいまちづくり現場
第 14 回　現場訪問その 6：社会的不動産業による新しいまちづくり現場
第 15 回　現場訪問その 7：社会的不動産管理業による新しいまちづくり現場

●事前・事後学習の内容

演習形式であり、講読および現地での共同調査は必修であり、事前事後の準備は必須となる

●評価方法

学部生と共通講義としているので、形式的には授業毎のミニレポートと、最低限 2 回課すフィールドワークでもフィールドレポートを評価対象とする。授業期間のレポートによる平常点とするが、院生には別途具体のフィールドワークでの主体的参与が求められる。

●受講生へのコメント

単なる授業だけでなく、都市社会問題に接し、調査し、論文を書いてゆくという、院生の研究プロセスの実践そのものを実現し、プロジェクトと平行した形で、授業に参与していただきたい。

●参考文献・教材

『モダン都市の系譜―地図から読み解く社会と空間―』（ナカニシヤ出版）を参考書とする。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2506	開講期	単位数
M109	**人文地理学特殊問題研究演習 1** Graduate Seminar on Specialized Subjects in Human Geography 1			前月 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 水内 俊雄 教授			

●科目の主題

都市社会・政治地理学の実践：広義の都市問題に取り組む社会的企業、NPO 研究に関する演習でもある。都市地域における生活困窮問題、住宅貧困問題、ホームレス問題、インナーシティでのまちづくり、中山間地域の生活継続や就労問題にどのように接近し、観察し、関係者と接し、問題の改善にあたっての仕組みづくり、施策づくりの後方支援に関与することを、国内外のフィールドワークに参加しながら、身につけてゆくことをめざす。関連する都市論や NPO 研究の論文や著書の輪読も行う。

●到達目標

都市社会問題や地域問題に関心を有する受講生向けに構想された演習である。もちろん修士論文や投稿論文につながることをめざしていると同時に、こうした都市社会問題や地域問題に対する研究者としてのアプローチに触れたいという受講生にも門戸は開いている。実践的でアクティブな研究スタイルをシェアし、理論面でのフォローアップも兼ね備え、そしてネットワークのひろがる環境を享受してもらうことを目標としている。

●授業内容・授業計画

水内が進めているプロジェクトにマッチングする受講生の指向を育成する演習をきめ細かく行う。そのプロジェクトとは、戦略的研究プロジェクト「自治体・NPO と協働する都市困窮地域のリジェネレーションと参加型 GIS 実践」、水内を代表とする科研プロジェクト「東アジアの広義のホームレス支援に基づく包摂型都市生成と支援の地理学の構築」、「自治体・NPO と協働する都市困窮地域の再成と居住福祉ビジネスの社会化」、COC プラスプロジェクト「紀伊半島地域の再生：命と生活のインフラプロジェクト」に連動した演習をおこなう。生活支援、居住支援 NPO 研究も学ぶことにもなる。演習と直結することになるフィールドワークについては、受講生の関心を十分に尊重しながら、国内は、全国のホームレス支援やまちづくりの現場や、紀伊半島の中山間地域、国外は、韓国内大都市、香港、台北のいずれかを選択してもらう予定である。あわせて後期の研究 I も連動してとることを勧める。授業計画はプロジェクト毎に記しているが、受講生の関心を優先する柔軟な授業計画となることをも付記しておきたい。

- **第 1 回**　大きくは都市や地域再生にかかわる具体的な実践を身近に取り込みつつ、かつ研究者としてどのようにこうした事象に有機的に関わってゆくかの切磋琢磨の機会ともしたい。このかかわり方についてそれぞれのプロジェクトについて相談の上演習で主体的に取り組むガイダンスとする
- **第 2 回**　戦略的研究プロジェクト「自治体・NPO と協働する都市困窮地域のリジェネレーションと参加型 GIS 実践」の紹介
- **第 3 回**　戦略的研究プロジェクトについて具体的なテーマ設定
- **第 4 回**　対象地域のフィールドワーク　その 1
- **第 5 回**　対象地域のフィールドワーク　その 2
- **第 6 回**　科研プロジェクト「狭小低家賃住宅の社会住宅化を通じた日本的ジェントリフィケーションの唱導」の紹介
- **第 7 回**　上記科研プロジェクトについて具体的なテーマ設定
- **第 8 回**　対象地域のフィールドワーク　その 1
- **第 9 回**　対象地域のフィールドワーク　その 2
- **第 10 回**　科研プロジェクト「東アジアの広義のホームレス支援に基づく包摂型都市生成と支援の地理学の構築」の紹介
- **第 11 回**　上記科研プロジェクトについて集中フィールドワーク設定に関するディスカッション
- **第 12 回**　紀伊半島プロジェクト「命と生活のインフラプロジェクト」の紹介
- **第 13 回**　上記プロジェクトについてテーマ設定
- **第 14 回**　上記プロジェクトについての集中フィールドワーク設定に関するディスカッション　その 1
- **第 15 回**　上記プロジェクトについての集中フィールドワーク設定に関するディスカッション　その 2

●事前・事後学習の内容

演習形式であり、講読および現地での共同調査は必修であり、事前事後の準備は必須となる

●評価方法

集中フィールドワークへの参加や、その報告書や論文、書籍の一部執筆をもって、評価とする。したがって平常点評価となる。

●受講生へのコメント

都市問題研究や教員の科研プロジェクト、研究プロジェクトと連動しておこなうので、通常時間以外の国内外の

フィールドワークにも参加することが前提となるので、調査時間のフレキシブルさに対応できる体制をとっておくこと。フル参加を前提としているので、主体的参加を期待しています。

●参考文献・教材

演習時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2507	開講期	単位数
M110	**人文地理学特殊問題研究Ⅱ** Graduate Studies on Specialized Subjects in Human Geography II			前水 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 大場 茂明 教授			

●科目の主題

ハウジングと住宅政策をテーマとしてとりあげ、近年の経済・都市地理学ならびに隣接諸科学の研究動向とも関連づけながら、都市空間構造の変容を読み解いていく。

●到達目標

現代先進工業国における住宅政策の再編と、その背景にあるハウジング・システム（住宅割当てメカニズム）の変化について、具体的な事例にもとづき理解を深めるとともに、その意義と問題点、今後の課題について考えていく。

●授業内容・授業計画

本講義では、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、日本におけるハウジング・システムと住宅政策の特徴を紹介するとともに、その背景にある社会経済的動向や都市形成過程の差異に留意しつつ、施策の評価を試みる。

第 1 回　本講義のねらい
第 2 回　住宅政策の再編とその背景
第 3 回　住宅政策の発展動向 (1) イギリスの事例
第 4 回　イギリスにおけるハウジング・システムの課題
第 5 回　住宅政策の発展動向 (2) アメリカの事例
第 6 回　アメリカにおけるハウジング・システムの課題
第 7 回　住宅政策の発展動向 (3) フランスの事例
第 8 回　フランスにおけるハウジング・システムの課題
第 9 回　住宅政策の発展動向 (4) ドイツの事例
第 10 回　ドイツにおけるハウジング・システムの課題
第 11 回　住宅政策の発展動向 (5) 日本の事例
第 12 回　日本におけるハウジング・システムの課題
第 13 回　成長都市政策と住宅政策：ハンブルクの事例
第 14 回　住宅政策の展望：規制・築造・誘導をめぐって
第 15 回　まとめと今後の課題

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、担当教員の指示に基づき、指定された文献を精読するなど、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、講義の要点や指摘されたコメントを整理し、復習を欠かさないようにすること。

●評価方法

講義で扱ったテーマの中から、各自が関心のある文献（授業内で紹介）を読んで、自分の意見を交えつつ作成してもらう期末レポートにより評価する。

●受講生へのコメント

授業では当該テーマに関わる内外の学術文献を使用しながら、あわせて受講者にも意見を求めるので、積極的に議論に参加する姿勢が求められる。

●参考文献・教材

テキスト：使用しない。資料は別途プリントを配布する。
参考書：必要に応じて授業中に適宜紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2508	開講期	単位数
M111	**人文地理学特殊問題研究演習 2** Graduate Seminar on Specialized Subjects in Human Geography 2			後水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大場 茂明 教授			

●科目の主題

前年度にひきつづき、人口構造の変化にともなって先進工業国で顕在化しつつある都市縮退（shrinking city）現象に関する研究論文を熟読し、その概念と実態、欧米における近年の都市居住の動向、都市更新施策とその効果・問題点について、日本との比較を交えつつ検討を行う。

●到達目標

都市縮退にともなう空間構造の変化、日常生活圏の再編など、人口減少と超高齢化社会を前提とした都市のあり方について理解を深めるともに、都市政策の新たな課題について総合的に議論していく。

●授業内容・授業計画

都市縮退現象の定義と実態、欧米における近年の都市居住の動向、都市更新施策とその効果と問題点をめぐる議論等を順次とりあげていく。その際には、日本での動向も念頭に置きながら、これまでの郊外開発を中心とした都市居住のあり方をいかに評価するかが併せて検討の対象となるが、この授業では、第二次大戦後の都市拡張期と今日との社会経済的条件の違いに留意しながら、政策の意図を読み取っていくことに重点を置く。

第 1 回　授業の進め方と基本文献の紹介
第 2 回　人口構造の変化 (1) 少子高齢化の現状
第 3 回　人口構造の変化 (2) 人口移動の動向
第 4 回　都市縮退現象とは何か？
第 5 回　「郊外の 20 世紀」をめぐって (1) 都市拡張の時代
第 6 回　「郊外の 20 世紀」をめぐって (2) 郊外化の功罪
第 7 回　近年の都市居住の動向 (1) 産業構造の変化にともなう既成市街地の衰退
第 8 回　近年の都市居住の動向 (2) ジェントリフィケーションの選択的進行
第 9 回　都市更新事業とその評価 (1) 地区再開発
第 10 回　都市更新事業とその評価 (2) 地区修復
第 11 回　都市更新事業とその評価 (3) 地区保全
第 12 回　都市再生のコンセプト (1) コンパクト・シティ論
第 13 回　都市再生のコンセプト (2) 創造都市と文化政策
第 14 回　都市再生のコンセプト (3) ローカル・エンパワーメント
第 15 回　まとめと今後の課題

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、担当教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、指摘されたコメントをもとに内容の修正を行い、次回の報告に備えること。

●評価方法

平常点と期末に作成してもらうレポートによる総合評価を行う。

●受講生へのコメント

授業では当該テーマに関わる内外の学術文献を使用するので、発表者には十分な準備が、参加者には積極的に討論に参加する姿勢が求められる。

●参考文献・教材

テキスト：プリントを配布する。
参考書：授業時に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2509	開講期	単位数
M112	**人文地理学特殊問題研究Ⅲ** Graduate Studies on Specialized Subjects in Human Geography Ⅲ			前木 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 祖田 亮次 教授			

●科目の主題

本授業では、「災害」や「環境問題」といったテーマを通じて、人間－環境関係について考察するものである。近年、

自然災害や環境問題を人文・社会科学的観点から捉えなおそうという試みが活発になっている。地理学においても、従来の自然地理学的な災害研究・環境研究だけではなく、災害や環境問題を社会的・文化的な側面から考察する必要性が指摘されている。このような観点から人間－環境関係を捉えようとする研究は、地理学の本来的な姿勢であると同時に、1980 年代以降活発に議論されてきた政治生態学の考え方と通じるものがある。本授業では、こうした研究の流れや関連諸分野の動向もおさえつつ、災害研究・環境研究の現在について考察したい。授業のキーワードは、「災害」「環境問題」「開発」「社会関係」「脆弱性」「回復力（resilience）」などである。

●到達目標

災害、環境といった視点から、地理学の人間－環境関係論を理解できるようになる。

●授業内容・授業計画

この授業では、教員側からいくつかの話題提供を行いつつ、学生が指示された国内外の文献を読み、それを紹介することで、積極的な議論の場を設けたい。こうした作業を通して、研究を行う上でのフレームワークの作り方についても学べるようにしたい。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　話題提供 1
第 3 回　話題提供 2
第 4 回　フィールド・トリップ
第 5 回　日本語文献講読 1
第 6 回　日本語文献講読 2
第 7 回　日本語文献講読 3
第 8 回　日本語文献講読 4
第 9 回　フィールド・トリップ
第 10 回　英語文献講読 1
第 11 回　英語文献講読 2
第 12 回　英語文献講読 3
第 13 回　フィールド・トリップ
第 14 回　フィールド・トリップ
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前・事後の学習としては、論文の検索と選定、それらの読解、およびレジュメの作成のほか、具体的な事例について自ら調査するという作業も含まれる。

●評価方法

この授業では、数回の課題提出および発表を求める。評価は、発表、数回の課題提出、フィールド・トリップへの参加、および最終レポートを総合的に判断して行う。

●受講生へのコメント

幅広い対象に目を向ける努力をしてもらいたい。

●参考文献・教材

授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2510	開講期	単位数
M113	**人文地理学特殊問題研究演習 3** Graduate Seminar on Specialized Subjects in Human Geography 3			後木 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 祖田 亮次 教授			

●科目の主題

この授業では、地理学の独自性と、隣接諸分野との関係性について、具体的な文献の読解を通じて考察する。

●到達目標

地理学は、経済学や文化人類学、社会学、政治学、都市工学など、多様な分野との接点を持つが、それら隣接分野との異同について、各学生の専門分野の立場から発表を行い、それをもとに議論する。そうした議論を通じて、自分自身の研究のオリジナリティを自覚できるようにする。

●授業内容・授業計画

各学生は、まず、地理学の主要雑誌を広くレビューし、自身の研究が学界内においてどのような位置づけにあるのかを発表する。次に、教員が指定した地理学雑誌のなかから、特に重要な最新の論文を選定し、その要旨を紹介したうえで、論点を提示する。さらに、隣接他分野における類似の成果と比較しながら、地理学的な意味につい

て考察する。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　文献選定 1
第 3 回　文献選定 2
第 4 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 1
第 5 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 2
第 6 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 3
第 7 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 4
第 8 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 5
第 9 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 6
第 10 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 7
第 11 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 8
第 12 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 9
第 13 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 10
第 14 回　文献の要旨発表、論点提示、議論 11
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前・事後の学習としては、論文の検索と選定、それらの読解、およびレジュメの作成のほか、具体的な事例について自ら調査した内容を発表するための準備作業も含まれる。

●評価方法

発表の内容、形式、および議論への参加を総合して評価する。

●受講生へのコメント

幅広い対象に目を向ける努力をしてもらいたい。

●参考文献・教材

授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2511	開講期	単位数
M114	**地理学総合研究 I** Graduate Studies in Geography I			前木 5	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 大場 茂明 教授／水内 俊雄 教授／山﨑 孝史 教授／ 祖田 亮次 教授／木村 義成 准教授			

●科目の主題

地表上の空間と景観にかかわる諸問題の総合的および分析的研究を志向する地理学について、基礎的素養を深める。

●到達目標

本科目では、地理学に関する個別的テーマを取り上げて講義し、地理学研究に対する知見を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

地理学の個別的テーマ（都市構造、国土開発、景観変遷、社会運動、グローバル化、地理情報システムなど）に関する講義のほか、受講生からレポートや報告を求め、それに基づいた討論を行う。

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、担当教員の指示に基づき、指定された文献を精読するなど、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、講義の要点や指摘されたコメントを整理し、復習を欠かさないようにすること。

●評価方法

平常点による。

●受講生へのコメント

受講者は、日ごろから地理学的想像力を養い、社会のさまざまの部分で生起している問題や事象について注視することが求められる。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO2512	開講期	単位数
M115	**地理学総合研究Ⅱ** Graduate Studies in Geography II			後木 5	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 大場 茂明 教授／水内 俊雄 教授／山﨑 孝史 教授／ 祖田 亮次 教授／木村 義成 准教授			

●科目の主題

地表上の空間と景観にかかわる諸問題の総合的および分析的研究を志向する地理学について、基礎的素養を深める。

●到達目標

本科目では、地理学に関する個別的テーマを取り上げて講義し、修士論文作成に向けて地理学研究に対する知見を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

地理学の個別的テーマ（都市構造、国土開発、景観変遷、社会運動、グローバル化、地理情報システムなど）に関する講義のほか、受講生から予定している修士論文のテーマと研究成果について報告を求め、それに基づいた討論を行う。

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、担当教員の指示に基づき、指定された文献を精読するなど、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、講義の要点や指摘されたコメントを整理し、復習を欠かさないようにすること。

●評価方法

平常点による。

●受講生へのコメント

受講者は、日ごろから地理学的想像力を養い、社会のさまざまの部分で生起している問題や事象について注視することが求められる。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3601	開講期	単位数
M116	**地理学研究指導Ⅰ** Preparation for Master's Thesis in Geography I			前月 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大場 茂明 教授／水内 俊雄 教授／山﨑　孝史 教授／ 祖田 亮次 教授			

●科目の主題

地理学の各分野に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

内外の先行研究の検討を行いながら、自らの研究課題を具体的に絞り込む。

●授業内容・授業計画

設定した研究課題に対する内外の先行研究のレヴューを行いながら、立案した調査計画に基づいて、文献収集やフィールドワークを実施し、得られた知識の整理、検討とデータの分析を行う。受講者は、その研究テーマに応じて、主担・副担の研究指導教員の指導を受けるものとする。

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、研究指導教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、指導の終了後には、指摘されたコメントをもとに研究計画の修正を行い、次回の報告に備えること。

●評価方法

研究テーマに関する先行研究の整理、研究課題の設定、調査実施計画など、研究の進捗状況に基づき、総合的に評価する。

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO3602	開講期	単位数
M117	**地理学研究指導Ⅱ** Preparation for Master's Thesis in Geography II			後月 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大場 茂明 教授／水内 俊雄 教授／山﨑 孝史 教授／ 祖田 亮次 教授			

●科目の主題

地理学の各分野に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

研究の中間報告に基づき、テーマと研究方法の適合性、論文の構成など、論文作成に必要な事項について議論し、修士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

研究指導Ⅰに引き続き、立案した調査計画に基づいて、文献収集やフィールドワークを実施し、得られた知識の整理、検討とデータの分析を行う。受講者は、その研究テーマに応じて、主担・副担の研究指導教員の指導を受けるものとする。

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、研究指導教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、指導の終了後には、指摘されたコメントをもとに研究計画の修正を行い、次回の報告に備えること。

●評価方法

研究テーマに関する先行研究の整理、研究課題の設定、調査実施計画など、研究の進捗状況に基づき、総合的に評価する。

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

言語文化学専攻

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCGEN1502	開講期	単位数
M118	言語文化学研究Ⅱ Advanced Studies in Languages and Cultures II			前月 2	2 単位
	授業形態 講義（一部演習形式）	担当教員名 高島 葉子 准教授			

●科目の主題

民間説話と文化・社会の関係。異類婚姻譚を中心として、東アジア（日本、韓国、中国、アイヌ）、ヨーロッパ、北米（エスキモー、ネイティヴ・アメリカン）等複数地域の民間説話と社会・文化の関係を比較検討する。

●到達目標

異なる文化・社会背景を持つ民話を比較検討することを通して、文化・社会と民話の関係を研究する視点、方法を身につける。

●授業内容・授業計画

講義を中心に行うが、演習形式も取り入れて進める。2 回～ 10 回では、ヨーロッパ、東アジア、北米それぞれの例話を取り上げて、その特徴と文化・社会背景について講義する。なお、随時、質疑応答や討論も行う。11 回以後は、講義内容を踏まえて、受講生に、関心のある地域の類話を事例として文化・社会がどのように民話に反映しているかを考察し、報告してもらう。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　ヨーロッパの民話（1）
第 3 回　ヨーロッパの民話（2）
第 4 回　東アジアの民話（1）
第 5 回　東アジアの民話（2）
第 6 回　東アジアの民話（3）
第 7 回　北米の民話（1）
第 8 回　北米の民話（2）
第 9 回　北米の民話（3）
第 10 回　まとめ
第 11 回　受講生の報告・発表
第 12 回　受講生の報告・発表
第 13 回　受講生の報告・発表
第 14 回　受講しの報告・発表
第 15 回　まとめ／レポート提出

●事前・事後学習の内容

講義の前には、配布された、あるいは指定された文献をあらかじめ読んでおく。授講後は、講義内容の復習を通して、基本的な知識を定着させる。報告・発表前には、必要な文献を読み、考察をまとめる。発表後あるいは他の受講生の発表後は、各自の関心に応じてさらに考察を深めて最終レポート作成に備える。

●評価方法

出席 20%、報告・発表 30%、学期末レポート 50%で評価する。

●受講生へのコメント

一方的な講義形式をとらない予定なので、積極的な態度で授業に参加してほしい。

●参考文献・教材

教材：資料のプリントを配布する。

参考文献：スティス・トンプソン『民間説話　世界の昔話とその分類』（八坂書房）、鵜野祐介編著『日中韓の昔話』（みやび出版）、小澤俊夫『昔話のコスモロジー』（講談社）、D.L.Ashliman, *Folk and Fairy Tales: A Handbook*（Greenwood Press）、ハンス・イェルク・ウター『国際昔話話型カタログ』小澤俊夫・加藤耕義訳（小澤昔ばなし研究所）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCGEN1503	開講期	単位数
M119	**言語文化学研究Ⅲ** Advanced Studies in Languages and Cultures Ⅲ			後月 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 久堀 裕朗 教授			

●科目の主題

古典芸能（伝統芸能）の伝承と変容

●到達目標

・歌舞伎・文楽の伝承と歴史的変容について考察を深める。

・広く古典芸能（伝統芸能）と呼ばれるものの現代におけるあり方ついて考察を深める。

●授業内容・授業計画

日本で古典芸能（伝統芸能）と言うと、近世（江戸時代）以前に創始され、現在も伝承されている芸能を指すが、それらは概ね成立時の様式を保持し、演出等に大きな変化がないことを一つの特徴とする。しかし子細に伝承過程を辿ると、どんな芸能でもかなり大きな歴史的変化があることがわかる。この授業では、歌舞伎・文楽における具体的作品を取り上げ、それらが伝承過程においてどのような変容を遂げているのか、なぜそのように変化したのかを分析することによって、広く伝統芸能の伝承のあり方について考察する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　文楽（人形浄瑠璃）の歴史
第 3 回　古典芸能の伝承と変容　文楽の場合①
第 4 回　古典芸能の伝承と変容　文楽の場合②
第 5 回　古典芸能の伝承と変容　文楽の場合③
第 6 回　古典芸能の伝承と変容　文楽の場合④
第 7 回　古典芸能の伝承と変容　文楽の場合⑤
第 8 回　歌舞伎の歴史
第 9 回　古典芸能の伝承と変容　歌舞伎の場合①
第 10 回　古典芸能の伝承と変容　歌舞伎の場合②
第 11 回　古典芸能の伝承と変容　歌舞伎の場合③
第 12 回　古典芸能の伝承と変容　歌舞伎の場合④
第 13 回　古典芸能の伝承と変容　歌舞伎の場合⑤
第 14 回　まとめ
第 15 回　レポート提出

●事前・事後学習の内容

事前学習

適宜次回の授業内容について予告するので、関連事項についてあらかじめ自分で調べておくこと。

事後学習

授業時に紹介した問題点について、各自考察を深めること。

●評価方法

授業時間に書いてもらう小レポートを平常点とし（30%）、期末レポート（70%）と合わせて評価する。

●受講生へのコメント

配布した資料を事前・事後学習としてよく読んでほしい。

●参考文献・教材

教材

プリントを配布する。

参考文献

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2501	開講期	単位数
M120	**国文学研究 I** Higher Studies in Japanese Literature I			前月 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 久堀 裕朗 教授			

●科目の主題

江戸時代中期、大坂では「操り段々流行して歌舞伎は無きが如し」（浄瑠璃譜）と言われるほど、人形浄瑠璃が活況を呈した。中にも延享 3 年（1746）から寛延元年（1748）にかけての三年間は、今日でも三大名作として有名な『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』が相次いで初演され、人形浄瑠璃が最盛期を迎えた時期であった。一体、人形浄瑠璃という芸能はどのような史的過程を経て、このような盛期を迎えたのか。本授業では、この時期の浄瑠璃作品を精読・分析するとともに、当期の人形浄瑠璃を巡る諸問題について考察し、人形浄瑠璃という芸能とそれを生み出した時代との関わりについて理解を深める。

●到達目標

1. 人形浄瑠璃の資料（浄瑠璃本・番付・絵尽等）に関する知識を身につける。
2. 浄瑠璃作品を精読しながら、作品注釈能力を高める。

●授業内容・授業計画

授業は講義と演習とを組み合わせて進めるが、まず研究上の問題の所在について講義をし、その後具体的な作品分析に入っていく。前期は宝暦 7 年（1757）豊竹座初演『祇園祭礼信仰記』を取り上げる。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『祇園祭礼信仰記』について
第 3 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 4 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 5 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 6 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 7 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 8 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 9 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 10 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 11 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 12 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 13 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 14 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 15 回　まとめ／レポート提出

●事前・事後学習の内容

事前学習
作品のテキストをあらかじめよく読んでおくこと。
事後学習
明らかになった問題点について、再度自身で考察すること。

●評価方法

授業時の発表と期末レポートによる。

●受講生へのコメント

芸能や演劇の研究は、一般の文学作品研究以上に、様々な周辺研究分野と交わる部分がある。本授業を通じてそのことを知り、専門に固執しない広い視野を獲得してほしい。

●参考文献・教材

教材
プリントを配布する。
参考文献
叢書江戸文庫『豊竹座浄瑠璃集（三）』（国書刊行会）、『上方文化講座　義経千本桜』（和泉書院）その他授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2502	開講期	単位数
M121	**国文学研究演習 1** Higher Studies and Seminar in Japanese Literature 1			後月 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 久堀 裕朗 教授			

●科目の主題

江戸時代中期、大坂では「操り段々流行して歌舞伎は無きが如し」（浄瑠璃譜）と言われるほど、人形浄瑠璃が活況を呈した。中にも延享 3 年（1746）から寛延元年（1748）にかけての三年間は、今日でも三大名作として有名な『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』が相次いで初演され、人形浄瑠璃が最盛期を迎えた時期であった。一体、人形浄瑠璃という芸能はどのような史的過程を経て、このような盛期を迎えたのか。本授業では、この時期の浄瑠璃作品を精読・分析するとともに、当期の人形浄瑠璃を巡る諸問題について考察し、人形浄瑠璃という芸能とそれを生み出した時代との関わりについて理解を深める。

●到達目標

1. 人形浄瑠璃の資料（浄瑠璃本・番付・絵尽等）に関する知識を身につける。
2. 浄瑠璃作品を精読しながら、作品注釈能力を高める。

●授業内容・授業計画

授業は講義と演習とを組み合わせて進めるが、まず研究上の問題の所在について講義をし、その後具体的な作品分析に入っていく。後期は宝暦 7 年（1757）竹本座初演『昔男春日野小町』を取り上げる。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　『昔男春日野小町』について
第 3 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 4 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 5 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 6 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 7 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 8 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 9 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 10 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 11 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 12 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 13 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 14 回　作品講読（関連講義＋受講者による発表）
第 15 回　まとめ／レポート提出

●事前・事後学習の内容

事前学習
作品のテキストをあらかじめよく読んでおくこと。
事後学習
明らかになった問題点について、再度自身で考察すること。

●評価方法

授業時の発表と期末レポートによる。

●受講生へのコメント

芸能や演劇の研究は、一般の文学作品研究以上に、様々な周辺研究分野と交わる部分がある。本授業を通じてそのことを知り、専門に固執しない広い視野を獲得してほしい。

●参考文献・教材

教材
プリントを配布する。
参考文献
『岩波講座 歌舞伎・文楽』（岩波書店）、『上方文化講座　義経千本桜』（和泉書院）その他授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2503	開講期	単位数
M122	**国文学研究Ⅱ** Higher Studies in Japanese Literature Ⅱ			前水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 小林 直樹 教授			

●科目の主題

中世説話文学の諸問題

●到達目標

中世の説話文学を、当該作品が成立した時代の文脈の中に位置づけて読み解こうとする基本姿勢の習得を目指す。

●授業内容・授業計画

中世期、東国の遁世僧・住信の手になる『私聚百因縁集』を精読する。

第 1 回　概説①
第 2 回　概説②
第 3 回　概説③
第 4 回　『私聚百因縁集』講読
第 5 回　『私聚百因縁集』講読
第 6 回　『私聚百因縁集』講読
第 7 回　『私聚百因縁集』講読
第 8 回　『私聚百因縁集』講読
第 9 回　『私聚百因縁集』講読
第 10 回　『私聚百因縁集』講読
第 11 回　『私聚百因縁集』講読
第 12 回　『私聚百因縁集』講読
第 13 回　『私聚百因縁集』講読
第 14 回　『私聚百因縁集』講読
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

授業までにテキストの下読みを十分に行い、事前に配布された担当者のレジュメにも目を通し、問題点を認識した上で授業に臨むこと。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

本科目は後期の研究演習 2 と併せて受講することが極めて望ましい。

●参考文献・教材

教材：プリントによる。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2504	開講期	単位数
M123	**国文学研究演習 2** Higher Studies and Seminar in Japanese Literature 2			後水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 小林 直樹 教授			

●科目の主題

中世説話文学の諸問題

●到達目標

中世の説話文学を、当該作品が成立した時代の文脈の中に位置づけて読み解こうとする基本姿勢の習得を目指す。

●授業内容・授業計画

『私聚百因縁集』を注釈的に読解する。担当者の報告と受講生全員による討議を経て、作品理解を深めていく。

第 1 回　『私聚百因縁集』講読
第 2 回　『私聚百因縁集』講読

第 3 回　『私聚百因縁集』講読
第 4 回　『私聚百因縁集』講読
第 5 回　『私聚百因縁集』講読
第 6 回　『私聚百因縁集』講読
第 7 回　『私聚百因縁集』講読
第 8 回　『私聚百因縁集』講読
第 9 回　『私聚百因縁集』講読
第 10 回　『私聚百因縁集』講読
第 11 回　『私聚百因縁集』講読
第 12 回　『私聚百因縁集』講読
第 13 回　『私聚百因縁集』講読
第 14 回　『私聚百因縁集』講読
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
授業までにテキストの下読みを十分に行い、事前に配布された担当者のレジュメにも目を通し、問題点を認識した上で授業に臨むこと。

●評価方法
平常点。

●受講生へのコメント
本科目は前期の研究Ⅱと併せて受講することが極めて望ましい。

●参考文献・教材
教材：プリントによる。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2507	開講期	単位数
M124	**国文学研究Ⅳ** Higher Studies in Japanese Literature Ⅳ			前月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 奥野 久美子 准教授			

●科目の主題
井川（恒藤）恭日記の翻刻、注釈（前半）。大阪市立大学初代学長で芥川龍之介の親友であった恒藤恭の松江中学時代の日記（明治 37 年）を題材に、原資料にもとづき翻刻と校注を行う。そこに書かれた書物や、日露戦争の戦況報告を新聞記事で確認するなどの細かな作業にあたり、明治期の青年の文学環境・社会環境を研究する。

●到達目標
本文校訂と注釈の作業を通じて、明治期の文学環境や恒藤恭の思想形成に対する理解を深める。あわせて近代文学研究の方法を身につける。

●授業内容・授業計画
受講生の人数に合わせて担当箇所を決めて調査研究を行い、発表する。発表者以外の受講生は質疑を行い全員で討論する。

第 1 回　ガイダンス 1
第 2 回　ガイダンス 2
第 3 回　発表と質疑、討論 1
第 4 回　発表と質疑、討論 2
第 5 回　発表と質疑、討論 3
第 6 回　発表と質疑、討論 4
第 7 回　発表と質疑、討論 5
第 8 回　発表と質疑、討論 6
第 9 回　発表と質疑、討論 7
第 10 回　発表と質疑、討論 8
第 11 回　発表と質疑、討論 9
第 12 回　発表と質疑、討論 10
第 13 回　発表と質疑、討論 11

第 14 回　発表と質疑、討論 12
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
発表の準備には 2 ～ 3 週間を要する。早めに準備にとりかかること。発表者以外の受講生も毎回の箇所を事前に下読みしておき、事後は疑問点などを整理し内容を検討しておくこと。

●評価方法
発表内容と討論への参加状況。

●受講生へのコメント
毎回の担当箇所は各授業前に再度熟読しておくこと。また、質疑、討論には積極的に参加すること。

●参考文献・教材
テキスト：原資料の画像コピーを配布する。
参考文献：関口安義『恒藤恭とその時代』（平一四・五　日本エディタースクール出版部）
山崎時彦編著『恒藤恭の青年時代』（平一五・一〇　未來社）
『向陵記―恒藤恭　一高時代の日記―』（平一五・三　大阪市立大学大学史資料室編）
『袖珍；翡翠記』（井川恭著、宍倉忠臣編及解説、山陰中央新報社、平一六）
『松江北高等学校百年史』（松江北高等学校百年史編集委員会編、昭五一）
『島根の百年』（NHK 松江放送局編、昭四三）
『松江市史研究』（松江市教育委員会編）（松江市歴史叢書、平二二～）
『島根県史』（島根県編　名著出版、昭四七）
『人物島根県史』（島根郷土研究会編、昭三四）
その他必要に応じて授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2508	開講期	単位数
M125	**国文学研究演習 4** Higher Studies and Seminar in Japanese Literature 4			後月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 奥野 久美子 准教授			

●科目の主題
井川（恒藤）恭日記の翻刻、注釈（後半）。大阪市立大学初代学長で芥川龍之介の親友であった恒藤恭の松江中学時代の日記（明治 37 年）を題材に、原資料にもとづき翻刻と校注を行う。そこに書かれた書物や、日露戦争の戦況報告を新聞記事で確認するなどの細かな作業にあたり、明治期の青年の文学環境・社会環境を研究する。

●到達目標
本文校訂と注釈の作業を通じて、明治期の文学環境や恒藤恭の思想形成に対する理解を深める。あわせて近代文学研究の方法を身につける。

●授業内容・授業計画
受講生の人数に合わせて担当箇所を決めて調査研究を行い、発表する。発表者以外の受講生は質疑を行い全員で討論する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　発表と質疑、討論 1
第 3 回　発表と質疑、討論 2
第 4 回　発表と質疑、討論 3
第 5 回　発表と質疑、討論 4
第 6 回　発表と質疑、討論 5
第 7 回　発表と質疑、討論 6
第 8 回　発表と質疑、討論 7
第 9 回　発表と質疑、討論 8
第 10 回　発表と質疑、討論 9
第 11 回　発表と質疑、討論 10
第 12 回　発表と質疑、討論 11
第 13 回　発表と質疑、討論 12
第 14 回　発表と質疑、討論 13
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
発表の準備には2～3週間を要する。早めに準備にとりかかること。発表者以外の受講生も毎回の箇所を事前に下読みしておき、事後は疑問点などを整理し内容を検討しておくこと。
●評価方法
発表内容と討論への参加状況。
●受講生へのコメント
内容は前期国文学研究Ⅳに続くものであるが、必ずしも前期の受講を必要とはせず、後期のみの履修も可。毎回の担当箇所は各授業前に再度熟読しておくこと。また、質疑、討論には積極的に参加すること。
●参考文献・教材
テキスト：原資料の画像コピーを配布する。
参考文献：関口安義『恒藤恭とその時代』（平一四・五　日本エディタースクール出版部）
山崎時彦編著『恒藤恭の青年時代』（平一五・一〇　未來社）
『向陵記―恒藤恭　一高時代の日記―』（平一五・三　大阪市立大学大学史資料室編）
『袖珍；翡翠記』（井川恭著、宍倉忠臣編及解説、山陰中央新報社、平一六）
『松江北高等学校百年史』（松江北高等学校百年史編集委員会編、昭五一）
『島根の百年』（NHK 松江放送局編、昭四三）
『松江市史研究』（松江市教育委員会編）（松江市歴史叢書、平二二～）
『島根県史』（島根県編　名著出版、昭四七）
『人物島根県史』（島根郷土研究会編、昭三四）その他必要に応じて授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2509	開講期	単位数
M126	国語学研究 Advanced Studies in Japanese Linguistics			前火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 丹羽 哲也 教授			

●科目の主題
日本語文法の研究。
●到達目標
日本語文法の諸領域についての基本的文献を精読しながら、研究の現状を把握し、今後の研究の方向について考察する。
●授業内容・授業計画
日本語を専門とする各受講生の研究テーマに即して、基本的文献をいくつか選び、毎回それを精読する。担当の受講生は、論文を要約し、例文を補ったり、反例を考えたりしながら、その論文の達成点と問題点を把握することが求められる。

第 1 回　発表と議論（1）
第 2 回　発表と議論（2）
第 3 回　発表と議論（3）
第 4 回　発表と議論（4）
第 5 回　発表と議論（5）
第 6 回　発表と議論（6）
第 7 回　発表と議論（7）
第 8 回　発表と議論（8）
第 9 回　発表と議論（9）
第 10 回　発表と議論（10）
第 11 回　発表と議論（11）
第 12 回　発表と議論（12）
第 13 回　発表と議論（13）
第 14 回　発表と議論（14）
第 15 回　発表と議論（15）

●事前・事後学習の内容
発表者は論文に基づいてレジュメを作成する。他の受講生もあらかじめ論文を精読しておく。必要に応じて関連論文も読む。
●評価方法
平常点による。

●受講生へのコメント
自分の研究テーマに関連する論文を各自でたくさん読んでいくこと。そういう中で、授業で重要文献を精読することが大切である。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2510	開講期	単位数
M127	国語学研究演習 Advanced Seminar in Japanese Linguistics			後火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 丹羽 哲也 教授			

●科目の主題
日本語文法の研究。
●到達目標
日本語文法の諸領域についての基本的文献や最先端の文献を精読しながら、研究の現状を把握し、受講生各自の研究の方向と課題について議論する。
●授業内容・授業計画
日本語を専門とする各受講生の研究テーマに即して、文献をいくつか選び、毎回それを精読する。担当の受講生は、論文を要約し、例文を補ったり、反例を考えたりしながら、その論文の達成点と問題点を把握するとともに、学説間の異同を把握し、今後の研究の方向性について提案していく。担当以外の受講生も、問題点を十分に把握し、議論に参加することが求められる。

第 1 回　発表と議論 (1)
第 2 回　発表と議論 (2)
第 3 回　発表と議論 (3)
第 4 回　発表と議論 (4)
第 5 回　発表と議論 (5)
第 6 回　発表と議論 (6)
第 7 回　発表と議論 (7)
第 8 回　発表と議論 (8)
第 9 回　発表と議論 (9)
第 10 回　発表と議論 (10)
第 11 回　発表と議論 (11)
第 12 回　発表と議論 (12)
第 13 回　発表と議論 (13)
第 14 回　発表と議論 (14)
第 15 回　発表と議論 (15)

●事前・事後学習の内容
発表者は論文に基づいてレジュメを作成する。他の受講生もあらかじめ論文を精読しておく。必要に応じて関連論文も読む。
●評価方法
平常点による。
●受講生へのコメント
論文をめぐる議論の中で、各自の研究方法を構築する足がかりを得るように努めることが重要である。
●参考文献・教材
参考文献は授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2511	開講期	単位数
M128	**国語国文学研究** Advanced Studies in Japanese Language and Literature			前木 3	2 単位
	授業形態 受講生による演習を主とする。	担当教員名 水谷 隆 非常勤講師			

●科目の主題

和歌作品の注釈的読解

●到達目標

平安時代の和歌テキストを、文法や表現技法に注意しながら、正確・精密に読み解く能力を身につける。

中古語で記されたテキストの包含する内容を、的確な現代語で説明する能力を身につける。

●授業内容・授業計画

はじめ、和歌史および和歌の表現技法について確認する。しかる後に、平安時代の歌を、受講生それぞれが担当して、文法や表現技法等に注意しながら調査・精読し、発表する。担当者以外の受講生も討議に加わり、理解を深めるという形式で授業を進める。

第 1 回　和歌史および『新撰和歌』についての概説
第 2 回　和歌の表現技法等の再確認 ①
第 3 回　和歌の表現技法等の再確認 ②
第 4 回　和歌テキストの読解と討議 ①
第 5 回　和歌テキストの読解と討議 ②
第 6 回　和歌テキストの読解と討議 ③
第 7 回　和歌テキストの読解と討議 ④
第 8 回　和歌テキストの読解と討議 ⑤
第 9 回　和歌テキストの読解と討議 ⑥
第 10 回　和歌テキストの読解と討議 ⑦
第 11 回　和歌テキストの読解と討議 ⑧
第 12 回　和歌テキストの読解と討議 ⑨
第 13 回　和歌テキストの読解と討議 ⑩
第 14 回　和歌テキストの読解と討議 ⑪
第 15 回　授業の総括

●事前・事後学習の内容

演習で扱う和歌は前もって示すので、担当者は無論のこと、各受講生が文法的事項に留意しつつ、自分なりに現代語訳をしてから授業に臨むこと。

また、授業時間中に明らかになった課題につき、自分なりに調査・考察を行うこと。

●評価方法

平常点（発表および討議への参加等）40%

学期末レポート 60%

●受講生へのコメント

担当者以外も、各回の授業で取り上げる歌について十分な予習をしてから授業に臨んでもらいたい。

●参考文献・教材

授業時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2512	開講期	単位数
M129	**国語国文学研究演習** Advanced Seminar in Japanese Language and Literature			後木 3	2 単位
	授業形態 受講生による演習を主とする。	担当教員名 水谷 隆 非常勤講師			

●科目の主題

『新撰和歌』の注釈的読解

●到達目標
平安時代の和歌テキストを、歌集という文脈の中において理解する能力を身につける。
文学史・文化史を視野に入れながら、個々の和歌テキストの価値を多面的に把握する態度と方法を身につける。
●授業内容・授業計画
『新撰和歌』に収載された歌を、歌集における位置に注意しながら精読する。受講生それぞれが担当した歌について、調査・検討した結果を発表する。担当者以外の受講生も討議に加わり、理解を深めるという形式で授業を進める。

第 1 回　『新撰和歌』の構成に関する概説 ①
第 2 回　『新撰和歌』の構成に関する概説 ②
第 3 回　『新撰和歌』の読解と討議 ①
第 4 回　『新撰和歌』の読解と討議 ②
第 5 回　『新撰和歌』の読解と討議 ③
第 6 回　『新撰和歌』の読解と討議 ④
第 7 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑤
第 8 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑥
第 9 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑦
第 10 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑧
第 11 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑨
第 12 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑩
第 13 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑪
第 14 回　『新撰和歌』の読解と討議 ⑫
第 15 回　授業の総括

●事前・事後学習の内容
演習で扱う和歌は前もって示すので、担当者は無論のこと、各受講生が文法的事項に留意しつつ、自分なりに現代語訳をしてから授業に臨むこと。
また、授業時間中に明らかになった課題につき、自分なりに調査・考察を行うこと。
●評価方法
平常点（発表および討議への参加等）40%
学期末レポート 60%
●受講生へのコメント
担当者が、担当する作品について十分に調査・検討することは当然であるが、担当者以外も自分なりの解釈をした上で授業に参加し、実質的な討議ができるよう努力してもらいたい。
●参考文献・教材
授業時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2513	開講期	単位数
M130	国語国文学総合研究 I Comprehensive Studies in Japanese Language and Literature I			前火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 丹羽 哲也 教授／小林 直樹 教授／久堀 裕朗 教授／ 奥野 久美子 准教授			

●科目の主題
国語学・国文学研究を進めるための基礎的な素養を身につける。それぞれの時代のそれぞれに特殊性を持った研究対象に深く分け入るだけでなく、そうした枠にとらわれることなく、総合的見地に立って、問題の核心に迫る方法を探り、対象を共時的・通時的座標の上に正確に位置づけるセンスを養う。
●到達目標
総合的な知見を深める。
●授業内容・授業計画
受講生は次のことが求められる。
・指定された課題研究文献について、指導教員と議論し、レポートを作成する。
・自らの研究領域について、指導教員と議論を重ね、研究の課題と方向を探る。
その他、大学院生の研究発表会に参加し、発表や議論の方法について学んだり、学部の授業を聴講し、議論に参加したりするなど、自分の専門領域にとらわれずに、学ぶ機会を見つけること。

●事前・事後学習の内容
課題文献を継続して読み、レポートを作成する。
●評価方法
平常点とレポートによる。
●受講生へのコメント
自分の研究領域だけでなく、どんなことでも貪欲に吸収していくことが大切です。
●参考文献・教材
課題文献は適宜指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN2514	開講期	単位数
M131	**国語国文学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Japanese Language and Literature Ⅱ			後火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 丹羽 哲也 教授／小林 直樹 教授／久堀 裕朗 教授／ 奥野 久美子 准教授			

●科目の主題
「国語国文学総合研究Ⅰ」と同様に、基礎的な素養を身につけるとともに、各自の研究の方向を見定め、修士論文作成に向けて具体的に課題を絞り込んでいく。
●到達目標
修士論文への目標を定める。
●授業内容・授業計画
受講生は次のことが求められる。
・指定された課題研究文献について、指導教員と議論し、レポートを作成する。
・自らの研究領域について、指導教員と議論を重ね、研究テーマを具体的に定めていく。
その他、大学院生の各種の研究発表会に参加し、発表や議論の方法について学んだり、学部の授業を聴講し、議論に参加するなど、自分の専門領域にとらわれずに、学ぶ機会を見つけること。
●事前・事後学習の内容
課題文献を継続して読み、レポートを作成する。
●評価方法
平常点とレポートによる。
●受講生へのコメント
研究テーマを絞っていきつつも、幅広い関心を持ち続けることが大切です。
●参考文献・教材
課題文献は適宜指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3601	開講期	単位数
M132	**国語国文学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in Japanese Language and Literature Ⅰ			前月 5	2 単位
	授業形態 個別指導または演習	担当教員名 丹羽 哲也 教授／小林 直樹 教授／久堀 裕朗 教授			

●科目の主題
国語学・国文学の修士論文作成のための指導を行う。
●到達目標
修士論文の構想を立て、具体化する。
●授業内容・授業計画
論文テーマの設定、テーマとそれを追究する方法の適合性、論文の構成など、論文作成に必要な事項について議論する。
学生はそれぞれの研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。
（小林直樹教授・久堀裕朗教授） 国文学に関する指導を行う。
（丹羽哲也教授） 国語学に関する指導を行う。

●事前・事後学習の内容
修士論文に向け、研究テーマについての考察を深める。
●評価方法
平常点と修士論文の中間報告による。
●受講生へのコメント
個々の問題に対する調査・考察を丹念に続けていくとともに、論文全体が何をめざすのか、その構想を常に自らに問い続けること。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN3602	開講期	単位数
M133	国語国文学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Japanese Language and Literature Ⅱ			後月 5	2 単位
	授業形態 個別指導または演習	担当教員名 丹羽 哲也 教授／小林 直樹 教授／久堀 裕朗 教授			

●科目の主題
国語学・国文学の修士論文作成のための指導を行う。
●到達目標
修士論文を完成する。
●授業内容・授業計画
論文のテーマ設定の妥当性、テーマとそれを追究する方法の適合性、論文の構成、論文細部の考察の妥当性など、論文作成に必要な事項について議論し、論文完成に至らしめる。
学生はそれぞれの研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。
（小林直樹教授・久堀裕朗教授） 国文学に関する指導を行う。
（丹羽哲也教授） 国語学に関する指導を行う。
●事前・事後学習の内容
研究テーマについての考察を深め、修士論文を完成させる。
●評価方法
平常点と修士論文の中間報告による。
●受講生へのコメント
個々の問題に対する調査・考察を丹念に続けていくとともに、論文全体が何をめざすのか、その構想を常に自らに問い続けること。論旨が明快であるか、表現が正確であるかといったことを十分に点検すること。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2501	開講期	単位数
M134	中国文学研究 Advanced Studies in Chinese Literature			前木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 松浦 恆雄 教授			

●科目の主題
中国文学はどのようにして中国 20 世紀の諸課題に向かい合おうとしたのかを 1920 ～ 1990 年代の代表的な作家・作品を通して考察する。
●到達目標
テクストに現れた表現の意味を多層的に理解する鑑賞力を養うことにより、中国文学の新しい課題を明確に認識することを目標とする。
●授業内容・授業計画
1980 年代以降に発表された重要な論文と論文で扱われている作家・作品を取り上げる。受講生に一篇ずつ担当してもらい、検討を加える。
第 1 回　ガイダンス

第 2 回　論文第一の検討 1
第 3 回　論文第一の検討 2
第 4 回　論文第二の検討 1
第 5 回　論文第二の検討 2
第 6 回　論文第三の検討 1
第 7 回　論文第三の検討 2
第 8 回　論文第四の検討 1
第 9 回　論文第四の検討 2
第 10 回　論文第五の検討 1
第 11 回　論文第五の検討 2
第 12 回　論文第六の検討 1
第 13 回　論文第六の検討 2
第 14 回　まとめ 1
第 15 回　まとめ 2

●事前・事後学習の内容
毎回、課題を出すので、事前の予習をしっかりして授業に臨むこと。
●評価方法
平常点（出席・授業への積極性・課題の提出内容）に拠る。
●受講生へのコメント
第一回の授業時に、プリントを配布し、授業の進め方を指示するので、受講生は必ず出席すること。
●参考文献・教材
プリントを配布する

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2502	開講期	単位数
M135	中国文学研究演習 Advanced Seminar in Chinese Literature			後木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 松浦 恆雄 教授			

●科目の主題
中国文学はどのようにして中国 20 世紀の諸課題に向かい合おうとしたのかを 1930-1940 年代の作家・作品を中心として考察する。
●到達目標
テクストに現れた表現の意味を多層的に理解する鑑賞力を養うことにより、中国文学の新しい課題を明確に認識することを目標とする。
●授業内容・授業計画
本年度は、汪曽祺、穆旦などを取り上げる。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　汪曽祺1
第 3 回　汪曽祺2
第 4 回　汪曽祺3
第 5 回　汪曽祺4
第 6 回　汪曽祺5
第 7 回　汪曽祺6
第 8 回　穆旦1
第 9 回　穆旦2
第 10 回　穆旦3
第 11 回　穆旦4
第 12 回　穆旦5
第 13 回　穆旦6
第 14 回　穆旦7
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
毎回、課題を出すので、事前にしっかり準備をして授業に臨むこと。

●評価方法
平常点（出席・授業への積極性・課題の提出内容）に拠る。
●受講生へのコメント
第一回の授業時に、プリントを配布し、授業の進め方を指示するので、受講生は必ず出席すること。
●参考文献・教材
プリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2503	開講期	単位数
M136	中国文化学研究 Advanced Studies in Chinese Culture			前木 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 張 新民 教授			

●科目の主題
日中戦争期における中国映画研究――華北映画を中心に
●到達目標
中国映画研究への基礎的な知見を培うための講義を行う。今期は当時の中国華北地域を中心に、映画制作および映画館設置などの映画普及を考察する。
●授業内容・授業計画
本講義は映画誌『華北映画』、『映画旬報』などを史料として講義を行う。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　新民映画協会 1
第 3 回　新民映画協会 2
第 4 回　新民映画協会 3
第 5 回　新民映画協会 4
第 6 回　華北電影股份有限公司 1
第 7 回　華北電影股份有限公司 2
第 8 回　華北電影股份有限公司 3
第 9 回　華北電影股份有限公司 4
第 10 回　華北電影股份有限公司 5
第 11 回　華北電影股份有限公司 6
第 12 回　華北電影股份有限公司 7
第 13 回　燕京影片公司 1
第 14 回　燕京影片公司 2
第 15 回　総括
●事前・事後学習の内容
毎回の授業の前に課題資料を読んでおくことが求められる。
●評価方法
平常点により評価する。
●受講生へのコメント
中国語ができることが望ましい。
●参考文献・教材
プリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2504	開講期	単位数
M137	中国文化学研究演習 Advanced Seminar in Chinese Culture			後木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 張 新民 教授			

●科目の主題
日中戦争期における中国映画研究――華北映画を中心に
●到達目標
中国映画研究への基礎的な知見を培うための講義を行う。今期は当時の中国華北地域を中心に、映画制作お

よび映画館設置などの映画普及を考察する。

●授業内容・授業計画

本講義は、映画作品を研究対象として考察する。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　京劇映画 1
第 3 回　京劇映画 2
第 4 回　京劇映画 3
第 5 回　京劇映画 4
第 6 回　劇映画 1
第 7 回　劇映画 2
第 8 回　劇映画 3
第 9 回　劇映画 4
第 10 回　日華合作映画 1
第 11 回　日華合作映画 2
第 12 回　日華合作映画 3
第 13 回　日華合作映画 4
第 14 回　日華合作映画 5
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容

毎回の授業の前に課題資料を読んでおくことが求められる。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

中国語ができることが望ましい。

●参考文献・教材

プリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2505	開講期	単位数
M138	**中国語学研究** Advanced studies in Chinese Linguistics			前火 4	2 単位
	授業形態 講義・演習	担当教員名 岩本 真理 教授			

●科目の主題

『人中画』の精読。明末小説の文体と琉球官話資料の比較を通して、口語の定着の過程を追いつつ、語彙・語法の変化の一端に触れ、言語変化のメカニズムについて考察する。

●到達目標

琉球資料にみられる特徴を、官話と福建語の両面から的確にとらえることを目標とする。

●授業内容・授業計画

次の内容を扱う。

第 1 回　ガイダンス　琉球官話資料についての概説
第 2 回　精読 1
第 3 回　精読 2
第 4 回　精読 3
第 5 回　精読 4
第 6 回　精読 5
第 7 回　精読 6
第 8 回　精読 7
第 9 回　精読 8
第 10 回　精読 9
第 11 回　精読 10
第 12 回　精読 11
第 13 回　精読 12
第 14 回　精読 13
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前学習：2 種の資料の異同を記し、日本語訳、現代漢語訳を作成する。索引を利用して他の琉球資料中の語彙、文法事項と比較して注記する
事後学習：誤訳、誤読箇所に関して、関連著作や論文を読解して、現代漢語との相違点を明確にする。
●評価方法
授業中の発表とレポートによる。
●受講生へのコメント
明代清代の資料群との連続性や、現代漢語との相違点に留意して、精読に取り組んでほしい。
●参考文献・教材
コピーを配布する。
木津祐子『琉球写本「人中画」「白姓」』臨川書店

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2506	開講期	単位数
M139	中国語学研究演習 Advanced Seminar in Chinese Linguistics			後火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 岩本 真理 教授			

●科目の主題
江戸時代における中国語学習の系譜と実態にふれる。
●到達目標
中国近世語のバリエーションとして、その内容を理解する。
●授業内容・授業計画
唐話語彙資料群の共通点・相違点をも視野に収めておきたい。前代からの継承という側面と、対象言語の転換・変化にともなって同時代的に即応する側面があることにも焦点をあてていきたい。今回は、ゆるやかな意義分類に基づき、単語・フレーズを列挙したタイプの資料「華語詳訳」を精読する。

第 1 回　ガイダンス―唐話資料の紹介
第 2 回　ガイダンス―唐話資料の類型、系譜
第 3 回　精読 1
第 4 回　精読 2
第 5 回　精読 3
第 6 回　精読 4
第 7 回　精読 5
第 8 回　精読 6
第 9 回　精読 7
第 10 回　精読 8
第 11 回　精読 9
第 12 回　精読 10
第 13 回　精読 11
第 14 回　精読 12
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前学習：写本を文字入力し標点符号を付し、現代漢語訳、日本語訳を付す。さらに近代漢語詞典類を参照して注釈を付す。
事後学習：写本の癖や、誤写への習熟のため、他の受講生の担当箇所も含めて精読に努める。
●評価方法
授業中の発表とレポートによる。
●受講生へのコメント
通事養成資料の特徴に習熟してほしい。
●参考文献・教材
プリントを配布する。
「華語詳訳」唐話辞書類集　第 17 集所収

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2507	開講期	単位数
M140	中国文献文化学研究 I Advanced Studies in Chinese Literature I			前月 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 大岩本 幸次 准教授			

●科目の主題
中国音韻学概説。
●到達目標
漢語の音韻史や音韻学史について、実際に原資料を検討しながら概説的な知識を得る。
●授業内容・授業計画
おおよその進捗計画は以下の通り。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　第 1 回
第 3 回　第 2 回
第 4 回　第 3 回
第 5 回　第 4 回
第 6 回　第 5 回
第 7 回　第 6 回
第 8 回　第 7 回
第 9 回　第 8 回
第 10 回　第 9 回
第 11 回　第 10 回
第 12 回　第 11 回
第 13 回　第 12 回
第 14 回　関連論文紹介
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
事前学習：対象資料について音や意味を調べ、用意された設問の答えを準備する。
事後学習：学習した内容を復習する。
●評価方法
期末のレポートに授業参加度を加味して評価を決定する。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
授業の際に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2508	開講期	単位数
M141	中国文献文化学研究演習 1 Advanced Seminar in Chinese Linguistics 1			後月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大岩本 幸次 准教授			

●科目の主題
近世音韻資料研究。
●到達目標
漢語音韻史に関わる資料について実際に整理や検討を行い、音韻研究の方法を具体的に知る。
●授業内容・授業計画
おおよその進捗計画は以下の通り。
第 1 回　ガイダンス
第 2 回　第 1 回
第 3 回　第 2 回
第 4 回　第 3 回

第 5 回　第 4 回
第 6 回　第 5 回
第 7 回　第 6 回
第 8 回　第 7 回
第 9 回　第 8 回
第 10 回　第 9 回
第 11 回　第 10 回
第 12 回　第 11 回
第 13 回　第 12 回
第 14 回　第 13 回
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前学習：対象資料について音や意味を調べ、用意された設問の答えを準備する。
事後学習：学習した内容を復習する。

●評価方法
毎回の発表による平常点。

●受講生へのコメント
特になし。

●参考文献・教材
授業の際に配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2509	開講期	単位数
M142	**中国文献文化学研究Ⅱ** Higher Studies in Chinese Philology Ⅱ			前集中	2 単位
	授業形態 講義・演習	担当教員名 竹内 誠 非常勤講師			

●科目の主題
中国語における文言と白話について考え、それぞれの特徴を理解する。

●到達目標
本授業で学んだことを中国における文言、白話テクストの読解に活用できるようになること。

●授業内容・授業計画
授業の主題に関する講義を聞いたのち、呂叔湘著『語文常談』第 6 章を講読し、中国語における文言と白話の違いを理解できるようにする。合わせて読解で必要となる語学的な基礎知識、工具書の利用法、研究資料に関する知識を身につけてもらう。

第 1 回　中国語史（1）古代
第 2 回　中国語史（2）近世
第 3 回　中国語史（3）近代
第 4 回　『語文常談』講読（1）
第 5 回　『語文常談』講読（2）
第 6 回　『語文常談』講読（3）
第 7 回　『語文常談』講読（4）
第 8 回　『語文常談』講読（5）
第 9 回　『語文常談』講読（6）
第 10 回　『語文常談』講読（7）
第 11 回　『語文常談』講読（8）
第 12 回　『語文常談』講読（9）
第 13 回　『語文常談』講読（10）
第 14 回　『語文常談』講読（11）
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前学習：受講に当たって、入念に予習して臨むこと。
事後学習：授業内容に基づきレポートを書くこと。詳細は授業時に説明する。

●評価方法

授業における発表と全授業終了後の提出物によって総合的に評価する。

●受講生へのコメント

本講義のテーマについて、主体的な問題意識を持って、受講に臨んでほしい。

●参考文献・教材

授業時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2510	開講期	単位数
M143	**中国語応用研究** Applied studies in Chinese			後金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 松浦 恆雄 教授／ 張 新民 教授			

●科目の主題

日本語・中国語による学術交流に積極的に参加することのできる人材育成。

●到達目標

学術的な報告や論文執筆ができるような日本語・中国語運用能力を身につける。

●授業内容・授業計画

日本語・中国語の運用能力を高めるため、中国語論文の日本語訳（松浦）と日本語論文の中国語訳（張新民）の基礎訓練を行う。毎回、事前に訳文を提出してもらい、授業では、提出してもらった訳文に、受講者全員で検討を加える。

第 1 回　ガイダンス。テキスト配布。
第 2 回　中国語論文の日本語訳（一）
第 3 回　中国語論文の日本語訳（二）
第 4 回　中国語論文の日本語訳（三）
第 5 回　中国語論文の日本語訳（四）
第 6 回　中国語論文の日本語訳（五）
第 7 回　中国語論文の日本語訳（六）
第 8 回　中国語論文の日本語訳のまとめ
第 9 回　日本語論文の中国語訳（一）
第 10 回　日本語論文の中国語訳（二）
第 11 回　日本語論文の中国語訳（三）
第 12 回　日本語論文の中国語訳（四）
第 13 回　日本語論文の中国語訳（五）
第 14 回　日本語論文の中国語訳（六）
第 15 回　日本語論文の中国語訳のまとめ

●事前・事後学習の内容

毎回、課題の翻訳を事前に提出し、授業での議論を踏まえ、事後に翻訳内容についての理解を深めること。

●評価方法

平常点（出席・授業への積極性・課題の提出内容）に拠る。

●受講生へのコメント

第 1 回の授業時にプリントを配布し、授業の進め方についての具体的な指示をするので、受講生は必ず出席すること。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2511	開講期	単位数
M144	**中国語中国文学総合研究 I** Comprehensive Studies in Chinese Literature I			前金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 松浦 恆雄 教授／岩本 真理 教授／張 新民 教授			

●科目の主題

中国語・中国文学・中国文化学の研究の手引き。

●到達目標

中国語・中国文学・中国文化学の研究を進める上で必要な基礎的知識、研究方法を総合的に修得し、修士論文作成に向けた基礎力を養うことを目標とする。

●授業内容・授業計画

中国語・中国文学・中国文化学のそれぞれの研究分野において、身につけるべき知識、研究方法を数回に分けて講義する。その上で、学生各自の専攻分野に即した課題を与えてレポートを提出してもらう。また、修士論文の構想発表会、ならびに大阪市立大学中国学会に参加して、若手研究者の問題意識や研究方法を学ばせる。

●事前・事後学習の内容

毎回用意された課題を事前に行い、授業での議論を踏まえて、事後にしっかり理解を深めること。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

研究の基礎を確立するための授業なので、積極的に取り組んでもらいたい。

●参考文献・教材

教材はプリントを配布する。

参考文献は適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN2512	開講期	単位数
M145	**中国語中国文学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Chinese Literature Ⅱ			後金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 松浦 恆雄 教授／岩本 真理 教授／張 新民 教授			

●科目の主題

中国語・中国文学・中国文化学の研究の手引き。

●到達目標

中国語・中国文学・中国文化学の研究を進める上で必要な基礎的知識、研究方法を総合的に修得し、修士論文作成に向けた基礎力を養うことを目標とする。

●授業内容・授業計画

学生各自に研究課題を設定させ、それにかかわる資料を収集させる。その上で、それぞれの研究課題に関する先行研究の状況等を整理させ、発表・討議させる。また、大阪市立大学中国学会、および『中国学志』の合評会に参加させ、先輩の研究方法やその成果に学ばせる。

●事前・事後学習の内容

毎回用意された課題を事前に行い、授業での議論を踏まえて、事後にしっかり理解を深めること。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

研究の基礎力を養成する授業なので、積極的に取り組んでもらいたい。

●参考文献・教材

教材はプリントを配布する。

参考文献は適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3601	開講期	単位数
M146	**中国語中国文学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in Chinese Literature Ⅰ			前木 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 松浦 恆雄 教授／岩本 真理 教授／張 新民 教授			

●科目の主題

修士論文作成に至る研究の指導。

●到達目標

中国語・中国文学・中国文化学に関する諸テーマを専門的に研究するために必要な知識や研究方法を身につけることを目標とする。また学術論文やレポートの書き方等も具体的に指導する。

●授業内容・授業計画

修士論文の研究課題を取り扱うために必要な基礎的知識、研究方法の修得に努めさせる。同時に、関連する

資料の調査、収集にも当たらせる。学生の研究課題に応じて、その分野の先行研究、関連書物の読解を行わせ、課題にかかわる問題点を整理、把握させる。またそれと並行して、主要なテクストの講読を行い、問題点に関する理解を深化させる。学生はその研究テーマに応じて、研究指導の教員の指導を受けるものとする。

（松浦恆雄教授） 中国近現代文学分野の課題に関して研究指導を行う。

（岩本真理教授） 中国語学分野の課題に関して研究指導を行う。

（張　新民教授） 中国文化学分野の課題に関して研究指導を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、前回の指導内容を踏まえ、修士論文執筆のための報告内容をしっかり用意すること。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN3602	開講期	単位数
M147	**中国語中国文学研究指導Ⅱ** Supervision of Master's Thesis in Chinese Literature Ⅱ			後木 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 松浦 恆雄 教授／岩本 真理 教授／張 新民 教授			

●科目の主題

修士論文作成に至る研究の指導。

●到達目標

中国語・中国文学・中国文化学に関して、専門的に研究する上で必須の知識や方法を身につけることを目標とする。また学術論文やレポートの書き方等を具体的に指導する。

●授業内容・授業計画

中国語中国文学研究指導Ⅰを受けて、収集した資料、文献の読解と整理を行わせ、主要なテクストの分析を進めさせると同時に、研究課題に即した論述のあり方を指導し、修士論文の完成を目指す。学生はその研究テーマに応じて、研究指導の教員の指導を受けるものとする。

（松浦恆雄教授） 中国近現代文学分野の課題に関して研究指導を行う。

（岩本真理教授） 中国語学分野の課題に関して研究指導を行う。

（張　新民教授） 中国文化学分野の課題に関して研究指導を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、前回の指導内容を踏まえ、修士論文執筆のための報告内容をしっかり用意すること。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2503	開講期	単位数
M148	**英文学研究Ⅱ** Advanced Studies in English Literature Ⅱ			前木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 田中 孝信 教授			

●科目の主題

19 世紀イギリス小説の系譜や背景の解説と個別作品の分析を行なう。

●到達目標

文学テクストの精読と多読を通して高度な読解力を培うとともに、文学研究の基本知識や論理的思考力、さらには資料収集法を身につける。

●授業内容・授業計画

チャールズ・ディケンズ文学の全体像を概観した上で、『大いなる遺産』（1860-61）を読む。主人公ピップの人間的成長が、語り手ピップのユーモアとペイソスの入り混じった繊細な回想的文体や、作者の巧妙なプロットによって、いかに展開しているかに注目する。特に、ヴィクトリア朝中期という「ジェントルマン」像が尊ばれた時代にあって、「男らしさ」とは何かを、同時代のさまざまな文献にも当たりながら考察する。

第 1 回　ディケンズとヴィクトリア朝社会
第 2 回　ディケンズ文学概観
第 3 回　『大いなる遺産』を読む①
第 4 回　『大いなる遺産』を読む②
第 5 回　『大いなる遺産』を読む③
第 6 回　『大いなる遺産』を読む④
第 7 回　『大いなる遺産』を読む⑤
第 8 回　『大いなる遺産』を読む⑥
第 9 回　『大いなる遺産』を読む⑦
第 10 回　『大いなる遺産』を読む⑧
第 11 回　『大いなる遺産』を読む⑨
第 12 回　『大いなる遺産』を読む⑩
第 13 回　『大いなる遺産』を読む⑪
第 14 回　『大いなる遺産』を読む⑫
第 15 回　全体のまとめ

●事前・事後学習の内容

授業までに、教科書の指定された箇所を自分の力で読み解き、要点を整理した上で、コメントを準備しておくこと。授業後はすみやかに、誤読や浅薄な読解しかしていなかった部分を中心に読み直し、理解を深めるようにする。そのため、各授業の前後にそれぞれ 2 時間程度の予習・復習を行うことが求められる。

●評価方法

レポート・平常点

●受講生へのコメント

訳書で構わないので、ディケンズの他の作品も読んでおくこと。特に、同じ一人称小説の『デイヴィッド・コパーフィールド』（1849-50）は必読書である。

●参考文献・教材

Charles Dickens, *Great Expectations* (Oxford Illustrated Dickens)

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2504	開講期	単位数
M149	**英文学研究演習 2** Advanced Seminar in English Literature 2			後木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 田中 孝信 教授			

●科目の主題

19 世紀イギリス小説が孕む様々な問題を、精神分析学、ディコンストラクション、ニューヒストリシズム、フェミニズムといった現代の批評理論を用いて分析し、作品の時代性とともに現代性を明らかにする。

●到達目標

さまざまな批評理論のテクストへの応用を通して、テクスト分析能力と論理的思考力を培う。

●授業内容・授業計画

前期に引き続きディケンズの『大いなる遺産』を読み、同時に批評論文を取り上げる。出版当時から現代に至るまでの批評の流れを概観しつつ、特に都市とジェンダーに着目した論文を検討し、最新のディケンズ研究の一端に触れる。それらを踏まえた上で、研究発表を通して受講生の問題意識を高める。

第 1 回　『大いなる遺産』について
第 2 回　『大いなる遺産』を読む①
第 3 回　『大いなる遺産』を読む②
第 4 回　『大いなる遺産』を読む③
第 5 回　『大いなる遺産』を読む④
第 6 回　『大いなる遺産』を読む⑤
第 7 回　『大いなる遺産』を読む⑥
第 8 回　『大いなる遺産』批評論文を読む（1）

第 9 回　『大いなる遺産』批評論文を読む（2）
第 10 回　ディケンズ文学批評論文の紹介と討論（1）
第 11 回　ディケンズ文学批評論文の紹介と討論（2）
第 12 回　ディケンズ文学批評論文の紹介と討論（3）
第 13 回　受講生の研究発表と質疑応答（1）
第 14 回　受講生の研究発表と質疑応答（2）
第 15 回　全体のまとめ

●事前・事後学習の内容
授業までに、指定された、教科書の個所や学術論文を自分の力で読み解き、要点を整理した上で、コメントを準備しておくこと。授業後は、誤読や浅薄な読解しかしていなかった部分を中心に読み直し、理解を深めるようにする。そのため、各授業の前後にそれぞれ 2 時間程度の予習・復習を行うことが求められる。さらに、学期後半には研究発表も控えているので、自分なりのテーマを見つける姿勢で予習・復習に臨むこと。

●評価方法
レポート・平常点

●受講生へのコメント
ディケンズをジェンダーの観点から論じる際、トロロプやエリオットといった同時代作家や、スティーヴンスンやコンラッドのような世紀末から 20 世紀初頭の作家たちとの比較検討も重要なので、彼らの作品についても訳書で構わないので読んでおくこと。

●参考文献・教材
Charles Dickens, *Great Expectations* (Oxford Illustrated Dickens) およびプリント

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2505	開講期	単位数
M150	**英文学研究Ⅲ** Advaced Studies in English Literature Ⅲ			前木 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 杉井 正史 教授			

●科目の主題
リチャード・シェリダンの喜劇　*The Scool for Scandal*

●到達目標
リチャード・シェリダンの喜劇、*The School for Scandal* を精読し、学生各自の視点から研究考察する。

●授業内容・授業計画
さまざまな観点から、シェリダンの劇を精読する。
第 1 回　シェリダンの時代の英語
第 2 回　*The School for Scandal* の上演史 (1)
第 3 回　*The School for Scandal* の上演史 (2)
第 4 回　*The School for Scandal* の批評 (1)
第 5 回　*The School for Scandal* の批評 (2)
第 6 回　シェリダンの経歴
第 7 回　感傷喜劇との関係 (1)
第 8 回　感傷喜劇との関係 (2)
第 9 回　18 世紀の文学・演劇状況 (1)
第 10 回　18 世紀の文学・演劇状況 (2)
第 11 回　シェリダンの機知 (1)
第 12 回　シェリダンの機知 (2)
第 13 回　登場人物の役割 (1)
第 14 回　登場人物の役割 (2)
第 15 回　レポート相談日

●事前・事後学習の内容
授業までに教材の当該箇所を辞書等を用いて一通り読んでおくこと。また、学習内容を理解し、身に着けるためには、授業内容を確認し、自分なりに考えてみることが重要である。そのため、各授業の前後にそれぞれ 2 時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法
平常点とレポート

●受講生へのコメント
きちんと予習に努めること。
●参考文献・教材
田島博編、*The School for Scandal*（大阪教育図書）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2506	開講期	単位数
M151	**英文学研究演習 3** Advaced Seminar in English Literature 3			後木 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 杉井 正史 教授			

●科目の主題
オリバー・ゴールドスミスの喜劇、*She Stoops to Conquer*.
●到達目標
She Stoops to Conquer の機知を理解する。
●授業内容・授業計画
さまざまな観点に注意しながら、*She Stoops to Conquer* を精読する。
第 1 回　・18 世紀の英語について (1)
第 2 回　・18 世紀の英語について (2)
第 3 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (1)
第 4 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (2)
第 5 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (3)
第 6 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (4)
第 7 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (5)
第 8 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (6)
第 9 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (7)
第 10 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (8)
第 11 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (9)
第 12 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (10)
第 13 回　・*She Stoops to Conquer* の精読 (11)
第 14 回　・*She Stoops to Conquer* の批評
第 15 回　・レポート相談日
●事前・事後学習の内容
授業までに教材の当該箇所を辞書等を用いて一通り読んでおくこと。また、学習内容を理解し、身に着けるためには、自分が解釈できず、教員によって解釈法を教わった箇所を、授業後に確認することが重要である。そのため、各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。
●評価方法
平常点とレポート
●受講生へのコメント
きちんと予習に努めること。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2507	開講期	単位数
M152	**米文学研究** Advaced Studies in American Literature			前火 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 古賀 哲男 准教授			

●科目の主題
［主題］米文学研究上の主要なテーマ（特に現代文学論・詩・批評）。ただし、本年度は昨年度に引き続き、文学史の新たなる構築例（*A New Literary History of America* [2007] eds. Greil Marcus Werner Sollors）を研究する。
●到達目標

［目標］米文学について主要な知識を教授し、受講生が博士課程前期を修了するのに適切な助言等を行う。

●授業内容・授業計画

［授業内容］

主として、講義形式により、テーマについての主要な解説を行うと同時に、演習計式でテーマを議論し、試験やレポート等で受講生のテーマについての理解を確認する。

第 1 回　第 1 回：イントロダクション：米文学とは何か
第 2 回　第 2 回：米文学研究のテーマ 1 の講義（現代文学論の概説 1）
第 3 回　第 3 回：米文学研究のテーマ 1 の講義（現代文学論の概説 2）
第 4 回　第 4 回：米文学研究のテーマⅠの演習（現代文学論の議論 1）
第 5 回　第 5 回：米文学研究のテーマⅠの演習（現代文学論の議論 2）
第 6 回　第 6 回：米文学研究のテーマⅡの講義（批評理論の概説 1）
第 7 回　第 7 回：米文学研究のテーマⅡの講義（批評理論の概説 2）
第 8 回　第 8 回：米文学研究のテーマⅡの演習（批評理論の議論 1）
第 9 回　第 9 回：米文学研究のテーマⅡの演習（批評理論の議論 2）
第 10 回　第 10 回：米文学研究のテーマⅢの講義（米詩研究の概説 1）
第 11 回　第 11 回：米文学研究のテーマⅢの講義（米詩研究の概説 2）
第 12 回　第 12 回：米文学研究のテーマⅢの演習（米詩研究の議論 1）
第 13 回　第 13 回：米文学研究のテーマⅢの演習（米詩研究の議論 2）
第 14 回　第 14 回：米文学研究のまとめ
第 15 回　試験

●事前・事後学習の内容

授業前は配布資料の該当部分について入念に下調べをする。授業後はレポート作成に向けて授業内容を確認する。

●評価方法

最終成績は平常点にするが、授業内における口頭発表ならびにレポートを参考とする。

●受講生へのコメント

専門的に米文学を研究する以外に、ひろく文学・文化研究の基礎を学ぶつもりで受講されたい。

●参考文献・教材

主としてプリントによる。参考文献については授業中に指示。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2508	開講期	単位数
M153	**米文学研究演習** Advaced Seminar in American Literature			後水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 古賀 哲男 准教授			

●科目の主題

［主題］米文学研究の応用的テーマとして個別の作家研究（「米文学研究」で取り上げたテーマの具体的実践）を行う。

●到達目標

［目標］「米文学研究」で行った講義・演習内容を受講生が研究するテーマに即して指導し、受講生が博士課程前期を修了するのに適切な助言等を行う。

●授業内容・授業計画

［授業内容］

主として、演習形式で受講生が選択した各応用テーマを議論し、受講生による口頭発表やレポート提出で研究テーマの遂行を確認する。

第 1 回　第 1 回：イントロダクション：修士論文の作成にむけて
第 2 回　第 2 回：米文学研究のテーマの応用的議論 1
第 3 回　第 3 回：米文学研究のテーマの応用的議論 2
第 4 回　第 4 回：米文学研究のテーマの応用的議論 3
第 5 回　第 5 回：米文学研究のテーマの応用的議論 4
第 6 回　第 6 回：米文学研究のテーマの応用的議論 5
第 7 回　第 7 回：米文学研究のテーマの口頭発表 1
第 8 回　第 8 回：米文学研究のテーマの口頭発表 2

第 9 回　第 9 回：米文学研究のテーマの口頭発表 3
第 10 回　第 10 回：米文学研究のテーマの口頭発表 4
第 11 回　第 11 回：米文学研究のテーマの口頭発表 5
第 12 回　第 12 回：米文学研究のテーマの口頭発表 6
第 13 回　第 13 回：米文学研究のテーマの口頭発表 7
第 14 回　第 14 回：米文学研究のテーマの口頭発表 8
第 15 回　まとめの議論

●事前・事後学習の内容
授業前には配布資料を入念に講読する。授業後は次回授業での議論ならびに口頭発表に備える。
●評価方法
平常点によるが、授業内での口頭発表ならびにレポートを参考とする。
●受講生へのコメント
専門的に米文学を研究する以外に、ひろく文学・文化研究の基礎を学ぶつもりで受講されたい。
●参考文献・教材
主としてプリントによる。参考文献については授業中に指示。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2509	開講期	単位数
M154	**英米文化学研究** Advanced Studies in English and American Culture			前月 4	2 単位
	授業形態 seminar	担当教員名 イアン・リチャーズ 准教授			

●科目の主題
To improve students' understanding of the themes and styles of classic British and American fiction
●到達目標
Students will be given prints to read each week.
●授業内容・授業計画
Students will be given a weekly reading assignment. There will be a written test on the assignment in class. The remainder of the class will be used for discussion of topics related to the reading assignment.

第 1 回　Introduction
第 2 回　Short Story 1
第 3 回　Short Story 2
第 4 回　Short Story 3
第 5 回　Short Story 4
第 6 回　Short Story 5
第 7 回　Short Story 6
第 8 回　Short Story 7
第 9 回　Short Story 8
第 10 回　Short Story 9
第 11 回　Short Story 10
第 12 回　Short Story 11
第 13 回　Short Story 12
第 14 回　Short Story 13
第 15 回　Review Test

●事前・事後学習の内容
You will need to bring a dictionary and writing materials to classes.
●評価方法
Attendance. Weekly written tests.
●受講生へのコメント

●参考文献・教材
プリント用

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2510	開講期	単位数
M155	英米文化学研究演習 Advanced Seminar in English and American Culture			後月 4	2 単位
	授業形態 seminar	担当教員名 イアン・リチャーズ 准教授			

●科目の主題

To improve students' understanding of the themes and styles of classic British and American fiction.

●到達目標

Students will be given prints to read each week.

●授業内容・授業計画

Students will receive a novel extract as a reading assignment each week. There will be a weekly written test and the remainder of the class will be used for discussion of topics related to the reading assignment.

第 1 回 Introduction
第 2 回 Novel Extract 1
第 3 回 Novel Extract 2
第 4 回 Novel Extract 3
第 5 回 Novel Extract 4
第 6 回 Novel Extract 5
第 7 回 Novel Extract 6
第 8 回 Novel Extract 7
第 9 回 Novel Extract 8
第 10 回 Novel Extract 9
第 11 回 Novel Extract 10
第 12 回 Novel Extract 11
第 13 回 Novel Extract 12
第 14 回 Novel Extract 13
第 15 回 Review Test

●事前・事後学習の内容

You will need to bring a dictionary and writing materials to classes.

●評価方法

Attendance. Weekly tests.

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

プリント用

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2511	開講期	単位数
M156	英語学研究 I Advaced Studies in English Linguistics I			前水 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 豊田 純一 准教授			

●科目の主題

英文法の歴史的変成をインド・ヨーロッパ語を中心とした類型論的に考察する。

●到達目標

現代英語は、類型論的に見るととても特異な性質を持っている。この点を、英語が祖インド・ヨーロッパ語からどの様に変化してきたかを理解し、なぜ現代英語が今のような文法形態になったのかを他の言語と比較しながら考察することに慣れることを目標とする。

●授業内容・授業計画

毎週特定のテーマを選び、まず重要事項を理解し、その内容に関連する例などを考察していきます。

第 1 回 Introduction
第 2 回 Agreement

第 3 回　Case
第 4 回　Tutorial: case
第 5 回　Perception
第 6 回　Tutorial: perception
第 7 回　Word order
第 8 回　Tense-aspect, grammatical voice
第 9 回　Tutorial: grammatical voice
第 10 回　Transitivity
第 11 回　Tutorial: transitivity
第 12 回　Alignment
第 13 回　Tutorial: alignment
第 14 回　Peculiarities of English
第 15 回　Summary

●事前・事後学習の内容
教科書で扱う部分を授業の前に目を通しておくこと。さらに、普段から読んだり耳にする英語に対して、授業で扱ったことがどのようにあてはまるかを考えるようにできればなおよいです。
●評価方法
試験・レポート（60%）、平常点（40%）
●受講生へのコメント
出席率が 70% に満たないものは、単位の対象外になります。出席点はありませんので、注意すること。
15 分以上遅刻したものは、欠席とみなしますので、お気を付けください。
試験、レポートは定期的にありますので、授業中の指示に従ってください。
●参考文献・教材
授業中に随時指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2512	開講期	単位数
M157	英語学研究演習 1 Advaced Seminar in English Linguistics 1			後火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 豊田 純一 准教授			

●科目の主題
言語の志向性（linguistic orientation）を考察し、英語という言語を英語とさせている文法的要素の通時的、共時的な考察に慣れることを目標とする。
●到達目標
英文法の特異性を構成している要素の通時的、共時的な考察に慣れることを目標とする。
●授業内容・授業計画
毎週、特定の項目を選び、講読を通し内容を確認しながら、英語はどのような言語かを考えていきます。
第 1 回　言語の志向性 I
第 2 回　言語の志向性 II
第 3 回　言語の志向性 III
第 4 回　言語の志向性 IV
第 5 回　まとめ
第 6 回　志向性と文脈・レジスター I
第 7 回　志向性と文脈・レジスター II
第 8 回　志向性と文脈・レジスター III
第 9 回　志向性と文脈・レジスター IV
第 10 回　まとめ
第 11 回　志向性と言語習得 I
第 12 回　志向性と言語習得 II
第 13 回　志向性と言語習得 III
第 14 回　志向性と言語習得 IV
第 15 回　全体のまとめ
●事前・事後学習の内容

講読箇所に必ず目を通しておくこと。さらに、普段から読んだり耳にする英語に対して、授業で扱ったことがどのようにあてはまるかを考えるようにできればなおよいです。

●評価方法

試験・レポート（60%）、平常点（40%）

●受講生へのコメント

出席率が 70% に満たないものは、単位の対象外になります。出席点はありませんので、注意すること。
15 分以上遅刻したものは、欠席とみなしますので、お気を付けください。
試験、レポートは定期的にありますので、授業中の指示に従ってください。

●参考文献・教材

授業中に随時指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2515	開講期	単位数
M158	**英米言語文化論** Studies in English and American Language and Culture			前集中	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 渡邊 克昭 非常勤講師			

●科目の主題

授業のテーマ：「楽園に死す―アメリカ的想像力と〈死〉のアポリア」

●到達目標

到達目標：本集中講義では、Saul Bellow、John Barth、Richard Powers、Steve Erickson、Don DeLillo といった現代アメリカ作家に焦点を絞り、彼らが楽園に埋もれた〈死〉のアポリアとどのように向き合い、そこからいかなるテクストを紡いできたか、〈死〉をめぐるアメリカ的想像力のしなやかな応答を浮き彫りにします。

●授業内容・授業計画

授業概要
序　論：「開かない扉、届かない手紙」
第Ⅰ部：「喪服の似合うベロー」
第Ⅱ部：「メタフィクショナルな「亡霊」の旅ーバース、パワーズ、エリクソン」
第Ⅲ部：「デリーロと「スペクタクルの日常」」
第Ⅳ部：「逆光のアメリカン・サブライム」
第Ⅴ部：「〈死〉の時間、時間の〈死〉」
まとめ：「楽園のこちら側ー〈死〉が滞留するところ」

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　この〈死〉を摑め―『この日を摑め』のパルマコン、タムキン
第 3 回　老人をして死者を葬らせよ―『サムラー氏の惑星』における「盲者の記憶」
第 4 回　贈与の死、〈死〉の贈与―蘇る『フンボルトの贈り物』
第 5 回　「神話」仕掛けのアダム―楽園の『旅路の果て』
第 6 回　複製という名の「亡霊」―〈死〉の『舞踏会へ向かう三人の農夫』
第 7 回　ホブズタウンより愛をこめて―『囚人のジレンマ』における「爆心地（グラウンド・ゼロ）」への旅
第 8 回　Z の悲劇―浮浪者の『黒い時計の旅』
第 9 回　〈死〉とメディアが交わるところ―ノイズから『ホワイト・ノイズ』へ
第 10 回　シミュラークルの暗殺―『リブラ』の「亡霊」、オズワルド
第 11 回　内破する未来へようこそ―9.11・『マオ II』・「コーク II」
第 12 回　廃物のアウラと世紀末―封じ込められざる冷戦の『アンダーワールド』
第 13 回　「崇高」という病―「享楽」の『コズモポリス』横断
第 14 回　9.11 と「灰」のエクリチュール―『フォーリング・マン』における“nots”の亡霊
第 15 回　試験

●事前・事後学習の内容

随時コメントシートを提出してもらい、その内容を授業にフィードバックすることにより、授業の事前・事後に学習を促し、インタラクティヴに講義を組み立てていきます。

●評価方法

成績評価：授業での質疑応答、最終試験を総合的に評価を行います。
評価基準：現代アメリカ文学についての知識を深めるとともに、講義を糧にしていかに視野を広げ、思考を深め

ることができたかを評価基準とします。

●受講生へのコメント

ざっくばらんに受講生と語り、楽しく授業を進めたいので、常に問題意識をもって授業に臨んでください。活発な質疑応答を通じて、毎回新たな発見があるクリエイティヴな授業を展開できれば幸いです。

●参考文献・教材

『楽園に死す―アメリカ的想像力と〈死〉のアポリア』(大阪大学出版会、2016 年)

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2516	開講期	単位数
M159	**英語英米文学総合研究Ⅰ** Comprehensive Studies in English and American Language and Literature Ⅰ			前金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 杉井 正史 教授／田中 孝信 教授			

●科目の主題

英語圏の文学・文化に関する各種研究方法の概説や研究資料の扱い方など。

●到達目標

英語圏の文学・文化に関する各種研究方法の概説や研究資料の扱い方など様々な観点からの講義やそれに基づく討論を通して、受講生が総合的見地に立った研究が行なえるように、その基本的姿勢を習得させることを目的とする。

●授業内容・授業計画

担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマ(「イギリス文学・文化における〈他者〉の諸相」「演劇とさまざまな文化背景との関係」)を取り上げて講じる。

●事前・事後学習の内容

授業までに、指定された学術論文等の教材の大要を把握し、それをハンドアウトを用いて発表できるように準備しておくこと。授業後は、教員や他の受講生の読みと比較して自分の読解が不十分だった点を整理し、再読することで教材の論点をより明確にしなければならない。そのためには、各授業の前後にそれぞれ 2 時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

研究報告・平常点。

●受講生へのコメント

積極的に参加し、自分自身の明確な問題意識を持つように希望する。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG2517	開講期	単位数
M160	**英語英米文学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in English and American Language and Literature Ⅱ			後金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 杉井 正史 教授／田中 孝信 教授			

●科目の主題

英語圏の文学・文化に関する個別のテーマを巡る講義や討論。

●到達目標

英語圏の文学・文化に関する個別のテーマを巡る講義や討論を通して、受講生に修士論文作成の方向性や自らの研究の位置づけを明確化させ、考察を深めさせる。

●授業内容・授業計画

担当教員が個別のテーマ(「ヴィクトリア朝小説と社会」「シェイクスピア演劇と政治・宗教」)を取り上げて論じる。

●事前・事後学習の内容

授業までに、指定された学術論文等の教材の大要を把握し、それをハンドアウトを用いて発表できるように準備しておくこと。同時に、関連文献にも目を向けることで、その教材の理解をより深くすることが求められる。授業後は、教員や他の受講生の読みと比較して自分の読解が不十分だった点を整理した上で再読し、教材の論点をより明確にしつつ、自分の考えを述べられるようにならなければならない。そのためには、各授業の前後にそれぞれ2時間

程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

研究報告・平常点。

●受講生へのコメント

積極的に参加し、自分自身の明確な問題意識を持つように希望する。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3601	開講期	単位数
M161	**英語英米文学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in English and American Language and Literature Ⅰ			前金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 杉井 正史 教授／田中 孝信 教授			

●科目の主題

英語圏の文学・文化に関する修士論文作成の指導を行なう。

●到達目標

具体的なテーマに則しつつ、論述の仕方などを含めて、論文作成の手法を獲得させる。

●授業内容・授業計画

論文テーマの設定、テーマと研究方法の適合性、テクストと先行研究の綿密な検証、論文の構成、論述の説得的展開法（論旨の明晰性、一貫性および説得性）など、修士論文執筆に際して体得すべき必要な事項を指導する。

（杉井正史教授） 英文学、特に演劇に関して、綿密な読みを基盤にし、その背景への十分な考察を深めた修士論文作成のための指導を行なう。

（田中孝信教授） 英文学、特に小説に関して、文学テクストの精緻な読みを主軸に、背景となる社会的・文化的事象を視野に入れた研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

授業までに、指定された学術論文等の教材の大要を把握し、それに対する自分の意見をまとめ、ハンドアウトを用いて発表できるように準備しておくこと。授業後は、教員や他の受講生の見解を参考に自らの考えを再構築し、それを文字化しなければならない。その作業を繰り返すことで、修士論文における論展開の方法を学ぶことができるのである。そのためには、各授業の前後にそれぞれ 2 時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

研究報告・平常点。

●受講生へのコメント

積極的に参加し、自分自身の明確な問題意識を持つように希望する。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG3602	開講期	単位数
M162	**英語英米文学研究指導Ⅱ** Supervision of Master's Thesis in English and American Language and Literature Ⅱ			後金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 杉井 正史 教授／田中 孝信 教授			

●科目の主題

英語圏の文学・文化に関する修士論文作成の指導を行なう。

●到達目標

研究指導Ⅰで獲得した能力をさらに発展させ、独自性のある論文作成の能力を獲得する。

●授業内容・授業計画

「英語英米文学研究指導Ⅰ」を継承し、さらに実践的な指導を行なう。

（杉井正史教授） 英文学、特に演劇に関して、綿密な読みを基盤にし、その背景への十分な考察を深めた修士論文作成のための指導を行なう。

（田中孝信教授） 英文学、特に小説に関して、文学テクストの精緻な読みを主軸に、背景となる社会的・文化

的事象を視野に入れた研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

授業までに、指定された学術論文等の教材の大要を把握し、それに対する自分の意見をまとめ、ハンドアウトを用いて発表できるように準備しておくこと。その際、教材と自分の考えとの相違を明確にするように留意しなければならない。授業後は、教員や他の受講生の見解を参考に自らの考えを再構築し、それを、複数の先行研究を取り上げつつ、文字化しなければならない。その際、修士論文における引証リストの作成といった技術面の学習も求められる。そのためには、各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

研究報告・平常点。

●受講生へのコメント

積極的に質問し、自分自身の明確な問題意識を持つように希望する。

●参考文献・教材

適宜指導する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFX2502	開講期	単位数
M163	ドイツ語フランス語圏言語文化研究Ⅱ Advanced Studies in German and Francophone Language and CulturesII			前月 4	2 単位
	授業形態 講義・演習	担当教員名 福島 祥行 教授			

●科目の主題

ドイツ語フランス語圏言語文化学専修に所属する学生に、ドイツ語圏もしくはフランス語圏にかんする事象を、言語、文化、社会、歴史などの面からみることで、世界の多様性、複文化性について思弁を深める機会をあたえる。II では、フランス語圏の事象をとりあつかう。

●到達目標

フランス語圏の言語、文化、社会、歴史について考察をほどこすことにより、フレンチ・ポップスの歌い手たちとその多様なバックグラウンドを分析することで、フランス共和国以外のフランス語圏とフランス語話者について多面的に考察する能力を身につけ、あらたな知識を創発する。また、フランス語力の向上をはかる。

●授業内容・授業計画

フレンチ・ポップスの歌い手たちの多様なバックグラウンドを説明し、グループごとに歌詞の読解をおこなう。ドイツ語履修者グループにはドイツ語または英語の歌詞を配布する。そののち、当該曲のミュージッククリップを見る。

第 1 回　フランス語圏とは
第 2 回　ミレーヌ・ファルメールとカナダ
第 3 回　セリーヌ・ディオンとケベック州
第 4 回　ナターシャ・サン＝ピエールとニューブランズウィック州
第 5 回　ストロマエとベルギー
第 6 回　ビソ・ナ・ビソとコンゴ民主共和国
第 7 回　ジェシー・マタドールとコンゴ共和国
第 8 回　マジック・システムとコート・ディヴォワール
第 9 回　ハレドとアルジェリア
第 10 回　レスリーとアフリカ
第 11 回　シャイムとマルティニーク
第 12 回　ワイクレフ＆ミュザイオンとアイティ
第 13 回　ディアムスと移民
第 14 回　リトルとヴェトナム
第 15 回　ふりかえりとまとめ

●事前・事後学習の内容

事前に前回の学習内容のノートを読み返すこと、および、事後のふりかえり等により、1 回の授業あたり 2 時間の自習時間をとること。

●評価方法

ほぼ毎回おこなわれるグループワークと、ポートフォリオによるふりかえり、および自己評価。

●受講生へのコメント

フランス語圏が多様であること、そして、その多様なフランス語圏にルーツをもつ歌手たちはさらに多様であり、その歌もまた多様であることを感じてもらいたい。

なお、学部と共通の授業であるため、院生諸氏には、随時、学部生のファシリテーターとなっていただく。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD2501	開講期	単位数
M164	**ドイツ語圏文学研究 I** Advanced Studies in German Literature I			前火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 髙井 絹子 准教授			

●科目の主題

戦後ドイツ文学を牽引した文学集団「47 年グループ」に関するテクストを読み、当時の文学状況について考察します。

●到達目標

中・上級程度のドイツ語を読み、戦後ドイツ語圏文学・文化について理解を深めます。

●授業内容・授業計画

ドイツ語テクストを精読しつつ、登場する作家たちの作品も適宜紹介します。

第 1 回　導入
第 2 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (1)
第 3 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (2)
第 4 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (3)
第 5 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (4)
第 6 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (5)
第 7 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (6)
第 8 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (7)
第 9 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (8)
第 10 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (9)
第 11 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (10)
第 12 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (11)
第 13 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (12)
第 14 回　Hermut Böttiger: *Die Gruppe 47.* (13)
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容

事前学習：指定した範囲の日本語訳を作る。
事後学習：授業中指示した関連事項について理解を深める。

●評価方法

平常点（50%）、試験（50%）で評価します。

●受講生へのコメント

事前に指定された範囲は必ず予習してきてください。

●参考文献・教材

授業中にプリントを配布します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD2502	開講期	単位数
M165	**ドイツ語圏文学研究演習 1** Advanced Studies and Seminar in German Literature 1			後木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 髙井 絹子 准教授			

●科目の主題

「47 年グループ」にかかわりのある作家 I. Bachmann の作品を読みます。

●到達目標

ドイツ語読解力を高め、ドイツ語圏の文化・文学に対する理解を深めます。

●授業内容・授業計画

文学テクストを精読します。そのあと作品論を読みます。

第 1 回　導入：作家紹介
第 2 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (1)
第 3 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (2)
第 4 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (3)
第 5 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (4)
第 6 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (5)
第 7 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (6)
第 8 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (7)
第 9 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (8)
第 10 回　I. Bachmann: *Unter Mördern und Irren.* (9)
第 11 回　作家・作品論講読 (1)
第 12 回　作家・作品論講読 (2)
第 13 回　作家・作品論講読 (3)
第 14 回　作家・作品論講読 (4)
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容
事前学習：指定した範囲の日本語訳を作る。
事後学習：授業中指示した関連事項を調べ、テキストの理解を深める。

●評価方法
平常点（50%、）試験（50%）による総合評価です。

●受講生へのコメント
事前に指定した範囲は必ず予習してきてください。

●参考文献・教材
授業中に指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD2504	開講期	単位数
M166	**ドイツ語圏文学研究演習 2** Advanced Studies and Seminar in German Literature 2			前水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 廣瀬 千一 非常勤講師			

●科目の主題
ドイツ語圏近代およびそれ以前の文学について研究する。

●到達目標
ドイツ語圏近代及びそれ以前の文学テクストの精読、研究方法の検討、文献の調査、作品分析、個別テーマによる研究、作家研究、作品の背景となる歴史・文化状況の研究などを行う。

●授業内容・授業計画
ドイツ近代の劇作家・小説家ハインリヒ・フォン・クライスト(Heinrich von Kleist 1777-1811)の小説『ミヒャエル・コールハース』*Michael Kohlhaas* を読む。この作品はルターの時代に実在した人物に関する年代記を基にしているが、クライストはこれを大幅に改変し、そこに彼独自の人間観や世界観を盛り込んだ。本授業では、この作品の主要箇所をドイツ語原文で精読し、クライストがこの作品に盛り込もうとしたイデーや作品の構想について考える。ドイツ語原文を読むことで、この作品の卓越した表現力（緊密で構築的な文体や斬新な表象など）も味わう。
以下の進行予定でテクストを読み、考察する。

第 1 回　クライストと『ミヒャエル・コールハース』について(1)
第 2 回　クライストと『ミヒャエル・コールハース』について(2)
第 3 回　*Michael Kohlhaas* (1)
第 4 回　*Michael Kohlhaas* (2)
第 5 回　*Michael Kohlhaas* (3)
第 6 回　*Michael Kohlhaas* (4)
第 7 回　*Michael Kohlhaas* (5)
第 8 回　*Michael Kohlhaas* (6)
第 9 回　*Michael Kohlhaas* (7)
第 10 回　*Michael Kohlhaas* (8)
第 11 回　*Michael Kohlhaas* (9)

第 12 回　*Michael Kohlhaas* (10)
第 13 回　*Michael Kohlhaas* (11)
第 14 回　*Michael Kohlhaas* (12)
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前に、クライストについて文学的記述その他を読んで、あらかじめ知識を得ておいてほしい。できれば彼の短編小説についても、日本語でよいから読んでおくことが望ましい。
事後学習としては、クライストのものの見方のどこに独自性があるのか、ゲーテ時代の一般的意識に照らして、考えてほしい。
●評価方法
平常点（50 点）、試験（50 点）
●受講生へのコメント
クライストの『ミヒャエル・コールハース』はドイツ文学史上屈指の小説であり、その緊迫するスリリングな事件展開と硬質な文体は、現代においてなお人を惹きつけてやみません。この作品を原文で読むことにチャレンジしましょう。
●参考文献・教材
テクスト：Heinrich von Kleist: : *Michael Kohlhaas*. Anmerkungen von P. Goldammer. Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1978.
参考資料：適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD2506	開講期	単位数
M167	ドイツ語圏文化学研究演習 Advanced Studies and Seminar in German Linguistics			後木 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 髙井 絹子 准教授			

●科目の主題
リヒャルト・アレヴィンの文学エッセイを読みます。
●到達目標
上級レベルのドイツ語読解力を身につけます。
●授業内容・授業計画
ドイツ語テクストを読むことが中心となります。内容について歴史的、文化的理解を深めるために適宜資料を配布します。
第 1 回　導入
第 2 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (1)
第 3 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (2)
第 4 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (3)
第 5 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (4)
第 6 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (5)
第 7 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (6)
第 8 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (7)
第 9 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (8)
第 10 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (9)
第 11 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (10)
第 12 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (11)
第 13 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (12)
第 14 回　Richard Alewyn: *Ursprung des Detektivromans.* (13)
第 15 回　総括
●事前・事後学習の内容
事前学習：指定された範囲の日本語訳を作る。
事後学習：授業中指示した関連事項について調べテキストの内容について理解を深める。
●評価方法
平常点 50%、試験 50%。
●受講生へのコメント
事前に指示した範囲は必ず予習して授業にのぞんで下さい。

●参考文献・教材
アレヴィン『推理小説の起源』郁文堂

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD2507	開講期	単位数
M168	ドイツ語学研究 Advanced Studies in German Linguistics			前水 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 神竹 道士 教授			

●科目の主題
本講義では、ドイツ語の言語学入門書を精読し、原典を通して言語学の基礎概念について説明する。
●到達目標
ドイツ語の言語学入門書を精読することによって、言語学の基礎概念について理解を深めることが、本講義の目標である。
●授業内容・授業計画
本講義では、主に次の様な項目について取り上げる。
第 1 回　導入：言語の役割と機能
第 2 回　言語学の諸分野
第 3 回　ソシュールの記号論
第 4 回　ビューラーのオルガノンモデル
第 5 回　シンタグマとパラディグマ
第 6 回　母語とアイデンティティー
第 7 回　地域方言
第 8 回　個人語と社会集団語
第 9 回　言語と思考
第 10 回　コミュニケーション理論（1）
第 11 回　コミュニケーション理論（2）
第 12 回　コミュニケーション理論（3）
第 13 回　発話行為理論（1）
第 14 回　発話行為理論（2）
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
授業中適宜参考文献や言語学辞典などを紹介しますので、言語学の基本概念など分かりにくい専門用語についてはよく調べて復習すること。
●評価方法
平常点により評価します。
●受講生へのコメント
ドイツ語の入門書を精読しますので、毎回必ず下調べをした上で授業に臨んでください。
●参考文献・教材
Peter Ernst: Einführung in die synchrone Linguistik. Wien 1998.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFD2508	開講期	単位数
M169	ドイツ語学研究演習 Advanced Studies and Seminar in German Linguistics			後水 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 神竹 道士 教授			

●科目の主題
本講義では、ドイツ語の言語学入門書を精読し、原典を通して言語学の基礎概念について説明する。
●到達目標
ドイツ語の言語学入門書を精読することによって、言語学の基礎概念ついて理解を深めることが、本講義の目標である。
●授業内容・授業計画
本講義では、主に次の様な項目について取り上げる。

第 1 回　ドイツ語音声学（1）
第 2 回　ドイツ語音声学（2）
第 3 回　ドイツ語音声学（3）
第 4 回　ドイツ語音韻論（1）
第 5 回　ドイツ語音韻論（2）
第 6 回　ドイツ語音韻論（3）
第 7 回　ドイツ語形態論（1）
第 8 回　ドイツ語形態論（2）
第 9 回　ドイツ語形態論（3）
第 10 回　造語法
第 11 回　派生
第 12 回　ドイツ語統語論（1）
第 13 回　ドイツ語統語論（2）
第 14 回　ドイツ語統語論（3）
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

授業中適宜参考文献や言語学辞典などを紹介しますので、言語学の基本概念など分かりにくい専門用語についてはよく調べて復習すること。

●評価方法

平常点により評価します。

●受講生へのコメント

ドイツ語の入門書を精読しますので、毎回必ず下調べをした上で授業に臨んでください。

●参考文献・教材

Peter Ernst: Einführung in die synchrone Linguistik. Wien 1998.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2501	開講期	単位数
M170	**フランス語圏文学研究** Advanced Studies in Francophone Literature			前水 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 原野 葉子 准教授			

●科目の主題

20 世紀は未曽有の世界大戦を二度経験したことで「戦争の世紀」と呼ばれる。近代産業社会システムの必然的帰結として現れたこの巨大な暴力は、ときには明らかな主題として、ときにはひそかな底流として、多くの作家たちのテクストに深く食い入り、文学空間を大きく変容させてきた。本講義では 現代フランス文学と戦争の関係を軸に、西欧近代の光と闇を見据えながら、1900 年から 1970 年ごろまでの文学の流れを時系列に沿って概観してゆく。

●到達目標

20 世紀フランス文学史の主要な流れをつかみ、各作家の布置を、時代状況および同時代の知の体系との連関において多角的に理解する。二度の大戦およびアウシュヴィッツをめぐる思想的考察に触れる。作品の具体的な分析・考察を通じて、文学テクストの多様な構成を精緻に解読するための基礎力を養う。

●授業内容・授業計画

以下のテーマに関連したテクストを読み、ディスカッション形式で考察を進めてゆく。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　「1913 年の奇蹟」をめぐって
第 3 回　第一次世界大戦とダダ：アポリネール、ツァラ、デュシャン
第 4 回　シュルレアリスムの文学と美術（1）：ブルトンと「野性の眼」
第 5 回　シュルレアリスムの文学と美術（2）：芸術と政治
第 6 回　行動する作家たち：サン゠テグジュペリ
第 7 回　実存主義時代における作家の位置（1）：サルトルとカミュ
第 8 回　実存主義時代における作家の位置（2）：ヴィアン
第 9 回　不条理演劇はなにを破壊したのか
第 10 回　批評の力：ロラン・バルト
第 11 回　視覚と映像の冒険（1）：ヌーヴォー・ロマン
第 12 回　視覚と映像の冒険（2）：デュラス

第 13 回　文学の形式を問い直す：クノーとウリポの言語遊戯
第 14 回　アウシュヴィッツと文学：ペレックと不可能な記憶
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
テクストの予習、および各テーマに関連した読書と考察の時間として毎回 2 時間程度をあててください。
●評価方法
平常点 60%およびレポート 40%。
●受講生へのコメント
事前に配布されるプリントを読んだ上で出席してください。
●参考文献・教材
授業中に指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2502	開講期	単位数
M171	フランス語圏文学研究演習 Advanced Seminar in Francophone Literature			後水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 原野 葉子 准教授			

●科目の主題
近現代のフランス文学作品の抜粋をフランス語で読む。さらに、それらを論じた複数の批評を比較検討しつつ、主要な現代文学理論について学ぶ。以上をふまえて学生による発表とディスカッションを行い、テクスト解釈の技術と方法を実践的に学んでゆく。
●到達目標
19 世紀後半から 20 世紀にかけてのフランス文学の主たる動向について、原文の精読を通じて理解を深める。現代文学理論についての知識を獲得し、また学生同士の討議を通じてさまざまな解釈の可能性に触れることで、修論執筆に必要な批評のセンスと独創的な分析力を磨く。
●授業内容・授業計画
前半で、文学研究の実際を学ぶ。後半は各受講生の関心のあるテーマについての発表とディスカッションにあてる。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　フロベール
第 3 回　ゾラ
第 4 回　ルーセル
第 5 回　サルトル
第 6 回　クノー
第 7 回　ロブ＝グリエ
第 8 回　発表と討議①
第 9 回　発表と討議②
第 10 回　発表と討議③
第 11 回　発表と討議④
第 12 回　発表と討議⑤
第 13 回　発表と討議⑥
第 14 回　発表と討議⑦
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
テクストの予習、各作家についての事前調査および各自の発表準備に毎回 2 時間程度をあててください。
●評価方法
平常点 60%および発表 40%。
●受講生へのコメント
前半で講読する作家・作品は、受講生の希望も取り入れながら初回に確定したいと思っています。講読については、事前に配布されるプリントを予習した上で出席してください。発表と討議については、発表者だけでなく、他の受講者にも質疑応答への積極的な参加と、自分なりの解釈の提示が求められます。発表者は自分のテーマを事前に予告し、他の受講者はそのテーマに関する情報収集をした上で授業に臨んでください。
●参考文献・教材

授業中に指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2503	開講期	単位数
M172	フランス語圏文化学研究 Advanced Studies in Francophone Linguistics			前水 2	2 単位
	授業形態 講義・演習	担当教員名 白田 由樹 准教授			

●科目の主題

Cours de Langue et de Culture Française (Niveau Intermédiaire).

フランス語とフランス現地の文化に関する知識とともに、アカデミック・コミュニケーションの基礎的技能を身につける。

この授業は、交流協定校セルジー・ポントワーズ大学の教員である Magali Noël-Linmer 氏と白田の共同授業として行い、日仏双方の教育方法をすりあわせながら、互いの文化交流とともに、履修生各自のフランス語をつかった研究スキルの養成を目指す。

●到達目標

Ce cours propose un travail d'appropriation, de consolidation et de réflexion permettant une meilleure maîtrise de la langue française. Ce cours a pour ambition de regrouper les quatre grandes compétences : aussi, l'accent sera mis à la fois sur la pratique de la compréhension et de l'expression orales et écrites.

フランス語の読み・書き・聴き・話す能力を身につけるだけでなく、各自が研究に必要な力や経験とそれを得るための方法を自ら模索し、実践に移せる自律性を身につける。

●授業内容・授業計画

Á partir de documents authentiques, actuels et ouverts sur la culture francophone, ce cours vise à donner aux étudiants les moyens linguistiques nécessaires pour aborder les problèmes d'ordre lexicaux, syntaxiques et grammaticaux.

·Enfin, le cours s'attachera tout particulièrement à encourager la production orale en insistant sur l'acquisition de techniques d'expression orale à l'aide de la simulation, des jeux de rôles, du débat et de l'exposé et sur les compétences que l'apprenant est censé acquérir.

第 1 回 Introduction du cours, présentation orale individuelle de chaque étudiant, autoévaluation
第 2 回 *Vivre Ensemble* (dossier 1 : Sous le même toit)
第 3 回 *Vivre Ensemble* (dossier 2 : À table !)
第 4 回 *Au Travail !* (dossier 1 : Ça va les études ?)
第 5 回 *Au Travail !* (dossier 2 : À chacun son métier)
第 6 回 *Faites passer le message !* (dossier 1 : C'est l'actualité)
第 7 回 *Faites passer le message !* (dossier 2 : Tous en ligne !)
第 8 回 *Entre nous…* (dossier 1 : C'est de famille)
第 9 回 *Entre nous…* (dossier 2 : Affaires de cœur)
第 10 回 *À l'horizon* (dossier 1 : Bon voyage !)
第 11 回 *Du nécessaire au superflu* (dossier 1 : Consommer et jeter)
第 12 回 *Du nécessaire au superflu* (dossier 2 : À loisirs)
第 13 回 *Perles de Culture* (dossier 1 : L'amour de l'art)
第 14 回 *Perles de Culture* (dossier 2 : La belle histoire)
第 15 回 Contrôle Terminal éctit (unités 8 à 14) et synthèse

●事前・事後学習の内容

Avant la reprise du cours, quelques sites pour vous entraîner en autonomie :

1. http://enseigner.tv5monde.com/collection/7-jours-sur-la-planete

Vous trouverez des reportages de journaux télévisés francophones, en lien direct avec l'actualité. Chaque semaine, deux nouveaux reportages vidéo sont proposés avec des activités en ligne pour pratiquer vos connaissances (vocabulaire, grammaire et conjugaison, selon les reportages).

Attention : chaque reportage reste disponible en ligne seulement deux semaines. Cela vous garantit des nouveautés chaque semaine. Vous choisissez votre niveau (A2, B1 ou B2) et vous commencez les activités.

2. http://savoirs.rfi.fr/fr/apprendre-enseigner/langue-francaise/journal-en-francais-facile

Sur le site RFI (Radio France Internationale), chaque jour, vous pouvez écouter un journal radio avec sa transcription complète.

3. https://savoirs.rfi.fr/fr/recherche/rubrique/apprendre/objectif/apprendre-et-perfectionner-le-francais-2707

Un moteur de recherche vous permet de choisir le type d'activité que vous souhaitez pratiquer (exercices, quiz, un test en français, etc.). Vous choisissez votre niveau (de A1 à B1) ainsi que le thème qui vous intéresse.

Je vous conseille particulièrement la rubrique ≪ EXERCICE ≫ : une dizaine de questions est proposée à partir du support audio, vous pouvez voir ensuite la transcription et un lexique.

●評価方法

Une épreuve de Contrôle Continu (50% de la moyenne finale) sous 1. la forme d'une compréhension et d'une expression écrite portant sur le matériel étudié en cours, et 2. une présentation orale individuelle et/ou en groupe (la forme et la fréquence seront déterminées en fonction des effectifs).

·Une épreuve de Contrôle Terminal écrit (50% de la moyenne finale). Il s'agit d'exercices de vocabulaire et de grammaire, avec une place prépondérante accordée à la compréhension et l'expression écrites, dans la lignée de ce qui a été fait en cours.

●受講生へのコメント

教材も授業とも使用言語はフランス語のみとなります。シラバスの記述内容はもちろん、教材の内容や構成、指示についてもあらかじめよく読んで把握しておいてください。

また、3 回以上の欠席および 5 回以上の遅刻をした者は原則として評価の対象としないので、じゅうぶんに注意してください。

●参考文献・教材

Le Nouvel Edito (Niveau B1). Ci-dessous, le lien :
http://www.editionsdidier.com/ article/le-nouvel-edito-b1- livre-cd-dvd/

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2504	開講期	単位数
M173	フランス語圏文化学研究演習 Advanced Seminar in Francophone Culture			後水 2	2 単位
	授業形態 演習・講義	担当教員名 白田 由樹 准教授			

●科目の主題

受講生各自のテーマに沿いながら、修士論文の執筆を視野に入れた基礎調査、文献の読解、先行研究の分析と報告の演習をおこなう。

●到達目標

各自の研究テーマに沿ってフランス語で書かれた先行研究や文献資料を読みこなす力、研究や論文の執筆に必要となる作法を身につける。

●授業内容・授業計画

先行研究や二次文献の収集と講読、それらの分析や検討をおこない、またそれを総合的に報告する実践をおこなう。

第 1 回　オリエンテーション、各自のテーマ紹介
第 2 回　フランス語資料の調査・検索ツール
第 3 回　基礎調査と文献リスト（先行研究等）、分野ごとの書式
第 4 回　文献の検討 1：フランス語学・教育系
第 5 回　講読 1：フランス語学系
第 6 回　講読 2：フランス語教育系
第 7 回　文献の検討 2：フランス文学・文化系
第 8 回　講読 3：フランス文学系
第 9 回　講読 4：フランス文化系
第 10 回　先行研究の分析・検討
第 11 回　報告 1：フランス語学系
第 12 回　報告 2：フランス語教育系
第 13 回　報告 3：フランス文学系
第 14 回　報告 4：フランス文化系
第 15 回　最終レポート・総括

●事前・事後学習の内容

毎回の課題準備（文献資料のリスト、テクストの入手、レジュメの作成、文献講読など）のほか、その回の課題のふり返りや修正を次回までにおこなうこと。

●評価方法

毎回の授業への参加と発表等の課題（70%）、最終レポート（30%）による。

●受講生へのコメント
情報収集や資料の検討、報告は大学以外の世界でも必要とされることが多くなっています。また、自分の専門だけでなく、他者の関心や研究内容を理解しようとする姿勢も大切です。そうした基本に立ち戻りつつ、それぞれの研究を進展させてください。

●参考文献・教材
授業の中で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2505	開講期	単位数
M174	フランス語学研究 Advanced Studies in French Linguistics			後水 4	2 単位
	授業形態 講義・演習	担当教員名 福島 祥行 教授			

●科目の主題
近代言語学者たちの足跡をたどりつつ、言語学研究の方法論と思想について考察するとともに、フランス言語学の方法論を学ぶ。

●到達目標
言語学の基礎的概念を身につけ、言語研究のよってたつ思想と方法論について深く思弁するなかで、人間存在についての思索方法を身につける。

●授業内容・授業計画
受講生とともに、言語研究者たちにかんする概説的なフランス語のテクストを読みつつ、その内容について考察し、各自の意見をのべてゆく。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　フェルディナン・ド・ソシュール
第 3 回　プラハ学派
第 4 回　ロマーン・ヤーコブソン
第 5 回　ルイ・イェルムスレウ
第 6 回　ギュスタヴ・ギヨーム
第 7 回　リュシアン・テニエール
第 8 回　レナード・ブルームフィールド
第 9 回　ノーム・チョムスキー
第 10 回　ミハイル・バフチン
第 11 回　ジョン・L・オースティン
第 12 回　ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン
第 13 回　ポール・グライス
第 14 回　ジル・フォーコニエ
第 15 回　ふりかえりとまとめ

●事前・事後学習の内容
事前に配布文章を読んでおくこと、および、事後のふりかえり等により、1 回の授業あたり 2 時間の自習時間をとること。

●評価方法
ポートフォリオと自己評価、相互評価

●受講生へのコメント
言語に憑かれたひとびとの姿をとおして、言語そのもの、そして人間そのものについて思弁されたい。
また、受講生の関心にあわせて、テキストを変更することもある。

●参考文献・教材
■参考文献
ソシュール『一般言語学講義』岩波書店
ポティエ『一般言語学』岩波書店
フォーコニエ『メンタル・スペース』白水社
レイコフ『認知意味論』紀伊國屋書店
チョムスキー『ミニマリスト・プログラム』翔泳社
ハートル『数詞と内部空間』勁草書房
グライス『論理と会話』勁草書房 .

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2506	開講期	単位数
M175	**フランス語学研究演習** Advanced Seminar in French Linguistics			前水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 福島 祥行 教授			

●科目の主題

近代言語学の歴史をたどりつつ、言語学の基礎を身につけるとともに、フランス言語学の方法論を学ぶ。

●到達目標

言語学の基礎的概念を身につけ、言語研究のよってたつ思想と方法論について深く思弁するなかで、人間存在についての思索方法を身につける。

●授業内容・授業計画

受講生とともに、言語学にかんする概説的なフランス語のテクストを読みつつ、その内容について考察し、各自の意見をのべてゆく。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　一般文法
第 3 回　歴史言語学・比較言語学
第 4 回　文献学
第 5 回　方言学・地理言語学
第 6 回　社会言語学
第 7 回　音声学
第 8 回　音韻論
第 9 回　語彙論
第 10 回　形態論
第 11 回　統辞論
第 12 回　意味論
第 13 回　語用論
第 14 回　神経言語学
第 15 回　ふりかえりとまとめ

●事前・事後学習の内容

事前に配布文章を読んでおくこと、および、事後のふりかえり等により、1 回の授業あたり 2 時間の自習時間をとること。

●評価方法

ポートフォリオと自己評価、相互評価

●受講生へのコメント

言語学の諸相から、言語そのもの、そして人間そのものについて思弁されたい。
また、受講生の関心にあわせて、テキストを変更することもある。

●参考文献・教材

■参考文献

ソシュール『一般言語学講義』岩波書店
ポティエ『一般言語学』岩波書店
フォーコニエ『メンタル・スペース』白水社
レイコフ『認知意味論』紀伊國屋書店
チョムスキー『ミニマリスト・プログラム』翔泳社
ハートル『数詞と内部空間』勁草書房
グライス『論理と会話』勁草書房

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2507	開講期	単位数
M176	フランス語圏言語文化論Ⅰ Advanced Studies in Francophone Language and Culture Ⅰ			前木 3	2 単位
	授業形態 演習・講義	担当教員名 原野 葉子 准教授			

●科目の主題

19 世紀の主要な芸術運動であるロマン主義、写実主義・自然主義、象徴主義について、それぞれの流派に関連するテクスト（詩、小説、戯曲、批評、歴史書等）の抜粋をフランス語で読む。文学と諸芸術（美術、音楽、バレエ等）との緊密な連関、さらにはヨーロッパ諸国における多彩な展開も視野におさめつつ、それぞれの流派が生まれた歴史的経緯とその意義をひろく考察する。

●到達目標

ロマン主義、写実主義・自然主義、象徴主義について、またそれらの流派を生み出した 19 世紀ヨーロッパの社会体制と感性風土の変遷について、多角的・総合的に理解する。さらに修論執筆を見据え、フランス語の多様な文献を論理的に読み解く力を身に着ける。

●授業内容・授業計画

基本的な授業計画は以下の通りだが、受講者からのリクエストも適宜取り入れながら、柔軟に進めてゆく予定である。また、受講生には各人の関心領域に応じた発表とディスカッションを行ってもらう。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　ロマン主義①：1850 年までの社会と文化
第 3 回　ロマン主義②：文学の解放を求めて
第 4 回　ロマン主義③：ロマン派の諸芸術
第 5 回　写実主義①：1850 年以降の社会と文化
第 6 回　写実主義②：レアリスム絵画
第 7 回　写実主義③：実証主義とレアリスム文学
第 8 回　自然主義①：「観察と実験」の文学と科学
第 9 回　自然主義②：絵画における転換――写実主義から印象主義へ
第 10 回　自然主義③：高踏派の詩
第 11 回　象徴主義①：象徴主義の詩
第 12 回　象徴主義②：象徴主義の演劇
第 13 回　象徴主義③：象徴主義の絵画と音楽
第 14 回　世紀末から 20 世紀へ――バレエ・リュスをめぐって
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

テクストの予習、各テーマについての事前調査および各自の発表準備に毎回 2 時間程度をあててください。

●評価方法

平常点 60%および発表 40%。

●受講生へのコメント

事前に配布されるプリントを予習した上で出席してください。

●参考文献・教材

授業中に指示します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFF2508	開講期	単位数
M177	フランス語圏言語文化論Ⅱ Advanced Studies in Francophone Language and Culture Ⅱ			後月 4	2 単位
	授業形態 演習・講義	担当教員名 白田 由樹 准教授			

●科目の主題

19 世紀末にフランスとベルギーで展開された装飾芸術運動のひとつ、アール・ヌーヴォーとそこで中心的な役割を担った S. ビングや、E. ピカールといった仲介者に関する近年の研究論文をいくつか取り上げながら、文化学の視点や方法を検討する。

●到達目標
フランス語の研究論文を読みこなす訓練とともに、文化学研究の方法や視点を学ぶことを通じて、それぞれの研究対象に対する視点の広がりを目指す。
●授業内容・授業計画
フランスとベルギーの歴史的関係、19 世紀末芸術におけるパリとブリュッセルの相互影響といった社会的背景を講じながら、両国におけるアール・ヌーヴォーとその仲介者となったビング、ピカールに関する論文を講読し、各々の論者の視点や手法について考察していく。

第 1 回　Introduction：19 世紀末パリとブリュッセル
第 2 回　Vers Art nouveau (1)：19 世紀の装飾芸術運動
第 3 回　Vers Art nouveau (2)：アール・ヌーヴォーとは何か
第 4 回　Vers Art nouveau (3)：芸術の転換期
第 5 回　Vers Art nouveau (4)：ベルギーの芸術運動
第 6 回　L'Art au cœur de la vie (1)：イギリスの影響とベルギー
第 7 回　L'Art au cœur de la vie (2)：S. ビングのブリュッセル訪問
第 8 回　L'Art au cœur de la vie (3)：ヴァン・デ・ヴェルデとアール・ヌーヴォー
第 9 回　L'Art au cœur de la vie (4)：セリュニエ＝ボヴィ、オルタ、アンカール
第 10 回　La Maison d'Art de Picard (1)：二十人組とエドモン・ピカール
第 11 回　La Maison d'Art de Picard (2)：自由美学と芸術の支援
第 12 回　La Maison d'Art de Picard (3)：ピカールの理念と実践
第 13 回　La Maison d'Art de Picard (4)：ビングの店への影響
第 14 回　アール・ヌーヴォー研究と文化学の可能性
第 15 回　レポート・総括

●事前・事後学習の内容
毎回、講義と平行してフランス語の関連論文を講読しながら進めるので、予習は必須である。また、最終レポートで総合的な理解の進度をはかるため、各回の内容をふり返り、そのつながりを把握しておくこと。
●評価方法
平常点（70%）とレポート（30%）による。なお、5 回以上の欠席があった場合は原則として評価の対象としない。
●受講生へのコメント
研究に必要な原文読解の訓練とともに、フランス語圏文化の教養・知識の幅を広げるつもりで受講してください。
●参考文献・教材
教材はプリント配布。参考文献は適宜、授業で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFX2503	開講期	単位数
M178	ヨーロッパ言語文化学研究 Advanced Studies in European Language and Culture			後木 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 神竹 道士 教授			

●科目の主題
本講義では、初習ドイツ語文法の授業では詳しく説明しないような文法事項について、詳しく説明する。
●到達目標
分析的言語だと言われるドイツ語の厳格な規則性の背後にある不規則性や曖昧性について知ることで、ドイツ語の理解力の向上をはかることが、本講義の目標である。
●授業内容・授業計画
本講義では、毎回取り扱う文法事項をひとつにしぼり、テーマごとに詳しく論じる予定である。

第 1 回　綴りと発音：硬音と軟音、ss と ß、非音節母音など
第 2 回　標準発音：変母音 <ä> の調音にみられる非対称性など
第 3 回　du と Sie の使い分け：双方向性と非可逆性の真偽
第 4 回　格変化（名詞、形容詞）：絶対的規則性の揺れ
第 5 回　動詞の人称変化：悩ましい歯茎摩擦音
第 6 回　前置詞の格支配：揺れの行き着く先
第 7 回　指示代名詞：秘められた言外の意味
第 8 回　nicht と kein の使い分け：重複的用法に見る意味の違いと配語法
第 9 回　定動詞の位置と枠構造：金科玉条はどこまで守れるか

第 10 回　möchte(n) は話法の助動詞か
第 11 回　未来形：時制と話法の板挟み
第 12 回　不変化詞（心態詞）は本当に重要か
第 13 回　接続法第 1 式：自説か引用か
第 14 回　接続法第 2 式：隠れた主文を見つける楽しさ
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
毎回授業で取り上げる文法事項について、少なくともその規則性と用法については事前に下調べをすることと、授業で配布されたプリントをもとにして、テーマごとにノートにまとめることが望ましい。
●評価方法
平常点と試験により、総合的に評価する。
●受講生へのコメント
ドイツ語未履修者は、受講不可とする。
●参考文献・教材
授業中、適宜プリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFX2506	開講期	単位数
M179	**地域社会文化学研究Ⅱ** Higher Area Studies in Society and Culture Ⅱ			前集中	2 単位
	授業形態 講義・GW	担当教員名 粕谷 雄一 非常勤講師			

●科目の主題
「アフリカ」の総体的把握を目指す。アフリカ系人が生活する地域をフィールドに、当該の地域・国における文化的・社会的事象をとりあげ、特定のテーマ（移民、言語、宗教、植民地、政治など）と関連させ、論じる。現代アフリカを総体的に把握するために欠かせない民衆音楽のあり方をよく理解する。いわゆるフランス語圏アフリカが中心となるが全アフリカ系人に関連する内容である。
●到達目標
当該のテーマに沿って、調べ、論じ、深め、拡げる力を、協働により身につける。また、アフリカ系人が生活する地域（フランス語圏中心）の事象にたいして多面的な分析をほどこすことによって日本社会、ひいては世界を多角的に見うる視点を身につける。
●授業内容・授業計画
講義にくわえグループワークによる作業と発表をおこなう。各グループは、それぞれにテーマを設定し、パワーポイントなどをもちいて発表、他グループはそれらにたいして意見を述べる。具体的には、以下のような内容を予定しているが、グループの数によっては、変更が生じることもある。
第 1 回　アフリカ、アフリカ系人、フランス語圏とは何か
第 2 回　フランス語圏論①北アフリカのアラブ圏（歴史）
第 3 回　フランス語圏論①北アフリカのアラブ圏（フランスとの関わり、移民）
第 4 回　フランス語圏論①北アフリカのアラブ圏（その現状と現代世界）
第 5 回　第 1 回グループ発表
第 6 回　フランス語圏論②トゥアレグ人とサハラ砂漠周辺諸国（地域紛争の本質）
第 7 回　フランス語圏論②コンゴ民主共和国とルワンダ、大湖沼地域（経済、資源、紛争）
第 8 回　フランス語圏論②ハイチ、マルチニク、ジャマイカ、キューバ、アメリカ合衆国（アフリカ系人の尊厳）
第 9 回　フランス語圏論②ジブチ、ソマリア、エチオピア、南北スーダン（文学、政治）
第 10 回　第 2 回グループ発表
第 11 回　フランス語圏論③コートディヴォワール周辺（経済、レゲエ）
第 12 回　フランス語圏論③マダガスカル、インド洋、東アフリカ（民族、生活文化）
第 13 回　フランス語圏論③セネガル周辺（アフリカの一体性、ラップ）
第 14 回　フランス語圏論③カーボヴェルデ、ブラジル、モザンビーク（ポルトガル語圏とフランス語圏の関係）
第 15 回　第 3 回グループ発表、まとめ
●事前・事後学習の内容
アフリカ系人についての基本的事実を確認したのち、この領域について日本語情報の乏しいのはどういうところか、およびフランス語や他の言語による情報にはない日本語情報のもつ独自の利点はなにかについて考える。
●評価方法

グループ発表（50%）、授業活動への参加度（50%）※授業活動＝グループ・ワークによる資料の解読、まとめ、報告。

●受講生へのコメント

当該のテーマについての情報収集、およびプレゼンテーションの準備をグループ毎に授業中および授業時間外におこなう必要があります。したがって、学期中はグループのメンバーと協力し合える体制を整えておいてください。なお、グループでの授業活動に支障がでないように、遅刻・欠席には充分注意してください。

フランス語圏中心の内容ですが、フランス語の知識・能力は受講の条件にはなりません。

●参考文献・教材

三浦信孝、西山教行編著『現代フランスを知るための 62 章』、私市正年編著『アルジェリアを知るための』など明石書店、エリアスタディ・シリーズのアフリカ、カリブ海関係各国版アンナ・エレル『ジハーディストのベールをかぶった私』（日経 BP 社、2015 年）

荻原和也『ポップ・アフリカ 800』（アルテス・パブリッシング、2014 年）

鈴木裕之『恋する文化人類学者』（世界思想社、2015 年）

高野秀行『謎の独立国家ソマリランド』（本の雑誌社、2013 年）

武内進一『現代アフリカの紛争と国家／ポストコロニアルの家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』（明石書店、2009 年）

吉本秀純『アフロ・ポップ・ディスク・ガイド』（シンコーミュージック・エンタテインメント、2014 年）

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCDFX2507	開講期	単位数
M180	**ドイツ語フランス語圏言語文化学総合研究Ⅰ** Advanced Studies in German and Francophone Language and Culture Ⅰ			前金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 神竹 道士 教授／高井 絹子 准教授／福島 祥行 教授／ 白田 由樹 准教授／原野 葉子 准教授			

●科目の主題

ドイツ語圏およびフランス語圏の文学・語学・文化に関する基本的な問題について、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講じる。それと平行して各種研究方法について概説し、研究資料の扱いについても講じる。また受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討議をする。

●到達目標

受講生が広い総合的見地に立った研究を行えるよう、その基礎を与えることを目的とする。

●授業内容・授業計画

Ⅰでは、主として、ドイツ語圏の文学・語学・文化に関する問題を取り上げる。

●事前・事後学習の内容

事前に発表の準備をすること、および、事後のふりかえり等により、1 回の授業あたり 2 時間以上の自習時間をとること。

●評価方法

平常点とレポートにより、総合的に評価する。

●受講生へのコメント

出席を重視します。

●参考文献・教材

適宜、プリントを配布し、参考文献を紹介する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCDFX2508	開講期	単位数
M181	**ドイツ語フランス語圏言語文化学総合研究Ⅱ** Advanced Studies in German and Francophone Language and Culture Ⅱ			後金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 神竹 道士 教授／高井 絹子 准教授／福島 祥行 教授／ 白田 由樹 准教授／原野 葉子 准教授			

●科目の主題

ドイツ語圏およびフランス語圏の文学・語学・文化に関する基本的な問題について、担当教員がそれぞれの専

門分野におけるテーマを取り上げて講じる。それと平行して各種研究方法について概説し、研究資料の扱いについても講じる。また受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討議をする。

●到達目標

受講生が広い総合的見地に立った研究を行えるよう、その基礎を与えることを目的とする。

●授業内容・授業計画

Ⅱでは、主として、フランス語圏の文学・語学・文化に関する問題を取り上げる。

●事前・事後学習の内容

事前に発表の準備をすること、および、事後のふりかえり等により、1 回の授業あたり 2 時間以上の自習時間をとること。

●評価方法

平常点とレポートにより、総合的に評価する。

●受講生へのコメント

出席を重視します。

●参考文献・教材

適宜、プリントを配布し、参考文献を紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFX3601	開講期	単位数
M182	**ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ** Reserch Guidance in German and Francophone Language and Culture Ⅰ			前火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 神竹 道士 教授／福島 祥行 教授			

●科目の主題

ドイツ語圏およびフランス語圏の文学・語学・文化に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

論文テーマの設定、論文の構成、主題とそれを論じる研究方法の適合性、主題に即した論述の一貫性、論文の形式的統一（表題、目次、章立てなどの論文全体の体裁の統一、注や文献資料の表記の統一）など、修士論文作成に必要な事項について指導し、論文完成に至らしめる。

●授業内容・授業計画

（神竹道士教授） ドイツ語圏学に関して、歴史的あるいは現代的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文が作成できるよう、適切な指導を行う。

（福島祥行教授） フランス語圏学に関して、社会的、文化的、歴史的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文が作成できるよう、適切な指導を行う。

●事前・事後学習の内容

事前に発表の準備をすること、および、事後のふりかえり等により、1 回の授業あたり 2 時間以上の自習時間をとること。

●評価方法

平常点とレポートにより総合的に評価する。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜、参考文献を紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFX3602	開講期	単位数
M183	**ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ** Reserch Guidance in German and Francophone Language and Culture Ⅱ			後火 5	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 神竹 道士 教授／福島 祥行 教授			

●科目の主題

ドイツ語圏およびフランス語圏の文学・語学・文化に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

論文テーマの設定、論文の構成、主題とそれを論じる研究方法の適合性、主題に即した論述の一貫性、論文の形式的統一（表題、目次、章立てなどの論文全体の体裁の統一、注や文献資料の表記の統一）など、修士論文作成に必要な事項について指導し、論文完成に至らしめる。

●授業内容・授業計画

（神竹道士教授） ドイツ語圏学に関して、歴史的あるいは現代的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文が作成できるよう、適切な指導を行う。

（福島祥行教授） フランス語圏学に関して、社会的、文化的、歴史的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文が作成できるよう、適切な指導を行う。

●事前・事後学習の内容

事前に発表の準備をすること、および、事後のふりかえり等により、1 回の授業あたり 2 時間以上の自習時間をとること。

●評価方法

平常点とレポートにより総合的に評価する。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜、参考文献を紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2501	開講期	単位数
M184	**言語応用学研究 I** Advaced Studies in Linguistics Applied I			前火 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 関 茂樹 教授			

●科目の主題

英語の意味論の分野を対象とする。講義を通じて、論文の構成、議論の組み立て、言語資料の収集およびその利用法といった基本的な事柄を確認することと各自の研究分野に積極的に取り組むことを課題とする。

●到達目標

新しい言語理論とともに伝統的な文法論の成果を取り入れ、基本的な方法論の理解を深めることを目標とする。同時に、文の統語構造と情報伝達機能の双方をバランスよく考察できるような能力を身につけることを目標とする。

●授業内容・授業計画

意味論の分野で、情報構造を分析した文献 (Lambrecht (1994)) を精読し、様々な観点から分析の妥当性を検討する。

第 1 回 オリエンテーション
第 2 回 第 2 章を精読する。
第 3 回 第 2 章を精読する。
第 4 回 第 2 章を精読する。
第 5 回 第 2 章を精読する。
第 6 回 第 2 章を精読する。
第 7 回 第 3 章を精読する。
第 8 回 第 3 章を精読する。
第 9 回 第 3 章を精読する。
第 10 回 第 3 章を精読する。
第 11 回 第 3 章を精読する。
第 12 回 第 3 章を精読する。
第 13 回 第 3 章を精読する。
第 14 回 第 3 章を精読する。
第 15 回 第 3 章を精読する。

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、予め配布した文献資料を十分に読み込むこと。
資料内容の要点および疑問点を整理し、次の授業で確認に努めること。

●評価方法

平常点とレポートにより評価する。

●受講生へのコメント

関連する文献を読んで、積極的に議論に参加すること。

●参考文献・教材
プリント配布。参考文献は授業で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2502	開講期	単位数
M185	言語応用学研究演習 1 Advaced Seminar in Linguistics Applied 1			後火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 関 茂樹 教授			

●科目の主題
主として、英語の意味論の分野の文献を取り上げ、その議論の組み立てとその妥当性および言語資料の提示の方法について理解を深めることを課題とする。
●到達目標
基本的文献の精読により、文の統語構造と意味の対応関係が個別の言語でどのように反映されているかを考察する。同時に、個別言語の分析から得られた知見をもとに、諸言語に共通と考えられる情報伝達の一般的な特性を、新しい言語理論の成果を取り入れながら検討し、理解を深めることを目標とする。
●授業内容・授業計画
Dixon (1991) をを取り上げ、資料の分析方法、論文の構成、資料の提示方法について、多様な観点から検討する。また関連する論文も取り上げる。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　第 3 章を精読する。
第 3 回　第 3 章を精読する。
第 4 回　第 3 章を精読する。
第 5 回　第 3 章を精読する。
第 6 回　第 3 章を精読する。
第 7 回　第 3 章を精読する。
第 8 回　第 4 章を精読する。
第 9 回　第 4 章を精読する。
第 10 回　第 4 章を精読する。
第 11 回　第 4 章を精読する。
第 12 回　第 4 章を精読する。
第 13 回　論文紹介とその検討。
第 14 回　論文紹介とその検討。
第 15 回　論文紹介とその検討。

●事前・事後学習の内容
受講に際しては、予め配布した文献資料を十分に読み込むこと。
資料内容の要点および疑問点を整理し、次の授業で確認に努めること。
●評価方法
平常点およびレポートによる。
●受講生へのコメント
関連する文献を読んで、議論に積極的に参加すること。
●参考文献・教材
プリント配布。授業で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2503	開講期	単位数
M186	言語応用学研究Ⅱ Advaced Studies in Linguistics Applied Ⅱ			前火 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 井狩 幸男 教授			

●科目の主題
神経心理学と心理言語学の学際領域である神経心理言語学分野の問題を取り上げ、人間と言語の関係を、脳における言語処理の共時的観点、並びに言語発達の通時的観点から考察し、人間にとって言語とは何かという問題を検討しながら、従来の言語研究とは異なった視点から、言語の本質に迫ることを目的とする。

●到達目標
主に次の 2 つを目標とする。
(1) 神経心理言語学に関わる様々な問題について、基本的な知識を得る。
(2) 修士論文のテーマとの関係性を探る。
●授業内容・授業計画
博士論文 1 本と関連書籍 1 冊を使用し、神経心理言語学に関する問題について深く考察する。
第 1 回　授業の進め方について
第 2 回　母語獲得における脳内原理の解説
第 3 回　言語習得のための神経基盤 - 同期 -
第 4 回　言語習得のための神経基盤 - 統合 -
第 5 回　言語習得のための神経基盤 - 調整 -
第 6 回　「同期」「統合」「調整」と英語教育
第 7 回　前半の授業のまとめ
第 8 回　アフォーダンス・非線形力学系理論の解説
第 9 回　運動と自己組織
第 10 回　歩行における脳と環境の強結合
第 11 回　身体の自由度問題と脳のバインディング問題
第 12 回　初期発達過程における U 字型現象
第 13 回　脳と身体のデザイン原理
第 14 回　後半の授業のまとめ
第 15 回　本講義の総括
●事前・事後学習の内容
事前に、授業で扱う章をしっかり読み込む。事後に、扱った章の理解度のチェックを怠らない。
●評価方法
出席・発表・レポートを総合的に評価する。
●受講生へのコメント
テキストを読み進める中で、言語現象に関わる諸相を多面的に深く考察することに習熟して欲しい。
●参考文献・教材
井狩幸男 (2009)『生きたことばを習得するための英語教育－母語獲得と脳科学の研究成果を踏まえて－』
多賀厳太郎 (2002)『脳と身体の動的デザイン - 運動・知覚の非線形力学と発達』金子書房

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2504	開講期	単位数
M187	言語応用学研究演習 2 Advaced Seminar in Linguistics Applied 2			後火 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 井狩 幸男 教授			

●科目の主題
本科目では、気づきに焦点を当てながら、母語獲得研究と脳科学研究から得られる知見に基づき、言語習得の諸条件を検討すると共に、その条件を可能とする脳内神経機構について考察する。
●到達目標
母語獲得と脳科学の研究成果から得られる知見を基に、言語応用学の諸相を深く考察する。
●授業内容・授業計画
神経心理言語学の関連書籍 2 冊を読み進める。
第 1 回　本講義の進め方について
第 2 回　早期のカテゴリー表象と概念
第 3 回　初期の語彙
第 4 回　脳と認知の発達
第 5 回　子どもの文法理解の発達
第 6 回　子どもの文法理解の発達
第 7 回　数学的・科学的思考
第 8 回　学習と認知発達における社会認知的見解
第 9 回　意識の実験、無意識の深さを測る
第 10 回　意識は何のためにあるのか？

第 11 回　意識的思考のしるし
第 12 回　意識を理論化する
第 13 回　究極のテスト
第 14 回　意識の未来
第 15 回　本講義の総括

●事前・事後学習の内容
事前に、授業で扱う章をしっかり読み込む。事後に、扱った章の理解度のチェックを怠らない。
●評価方法
出席・発表・レポートを総合的に評価する。
●受講生へのコメント
言語現象を多面的に深く考察する姿勢を身につけ、修士論文、博士論文の執筆に繋がることを期待する。
●参考文献・教材
ジョン・オーツ 他 (2010)『子どもの認知と言語はどう発達するか』松柏社
スタニスラス・ドゥアンヌ (2015)『意識と脳』紀伊國屋書店

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2505	開講期	単位数
M188	言語応用学研究Ⅲ Advaced Studies in Linguistics Applied Ⅲ			前水 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 山崎 雅人 教授			

●科目の主題
講義の内容については、できるだけ受講生の要望に柔軟に対応できるようにするが、修士課程の大きな目標である修士論文の研究方法をいかに理解・習得するかについて、言語応用学専修の修士論文の分析（特にそこで用いられている研究手段の分析）等を通じて、受講生自身の論文作成に資するように、講義を行う。
●到達目標
修士論文に要求されるレベルとはどのようなものかを、具体的に理解することを到達目標とする。
●授業内容・授業計画
本講義では、当専修で過去に執筆された修士論文の分析により、扱われているさまざまな課題を横断的に検討する作業を行い、当該学問の核となる問題意識を映し出すよう努めて行く。受講生には、各自が興味を抱いた言語学・言語応用論上のテクニカル・タームを手がかりとして、それに関連する論文や研究書を紹介することで、共有知識を増やすよう解説及び議論を行う。さらに最終段階では、各自の研究計画書に基づいた方針を発展させることで、その後の研究方向を発展させる手がかりを得られるよう努める。
第 1 回　講義の進め方
第 2 回　修士論文の分析 1
第 3 回　修士論文の分析 2
第 4 回　修士論文の分析 3
第 5 回　修士論文の分析 4
第 6 回　修士論文の分析 5
第 7 回　修士論文の研究テーマを見出すために 1
第 8 回　修士論文の研究テーマを見出すために 2
第 9 回　修士論文の研究テーマを見出すために 3
第 10 回　修士論文の研究テーマを見出すために 4
第 11 回　修士論文の研究テーマを見出すために 5
第 12 回　研究計画書に基づく発展研究 1
第 13 回　研究計画書に基づく発展研究 2
第 14 回　研究計画書に基づく発展研究 3
第 15 回　補遺とまとめ
●事前・事後学習の内容
事前学習としては、当専修の修士論文を指定された観点から分析した結果をレジュメにまとめて準備する。事後学習としては、発表と質疑応答で得た理解を次の発表の技術向上に資するよう、整理する。
●評価方法
上記の計画にそって、報告担当者には資料を伴った発表が求められる。講義は、その内容への解説と報告者以外の受講生によるコメントを主軸に進められる。こうした平常の講義への参画により、成績評価を行う。

●受講生へのコメント
言語応用学専修の大学院生のみならず、言語学・言語応用学を通じて、各自の学問的地平を広げようと思う他専修の大学院生の求めにも応じる体制を思量している。
●参考文献・教材
教室で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2506	開講期	単位数
M189	言語応用学研究演習 3 Advaced Seminar in Linguistics Applied 3			後水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 山崎 雅人 教授			

●科目の主題
修士論文の雛型もしくは習作となる小論文の作成を通じて、翌年の修士論文の作業手順を学ぶ。
●到達目標
研究課題の検討やデータの取扱など、論文執筆で直面するさまざまな問題について自ら考察し、解決策を案出することを到達目標とする。
●授業内容・授業計画
全十五回を、前半と後半の二期に分け、前半では先行研究をよい意味で「換骨奪胎」してみることで、修士論文の骨格を組み立てる。後半ではデータ部分を仮想的に扱いつつ、方法論を組み立てることで修士論文の習作を作り上げ、二年次での実際の研究作業を進める手がかりとする。

第 1 回　演習の進め方について
第 2 回　先行研究の分析　その 1
第 3 回　先行研究の分析　その 2
第 4 回　先行研究の分析　その 3
第 5 回　仮想データの操作　その 1
第 6 回　仮想データの操作　その 2
第 7 回　方法論の研究　その 1　仮説が実証されない場合
第 8 回　方法論の研究　その 2　実証方法の再検討
第 9 回　方法論の研究　その 3　実験環境の変更
第 10 回　レジュメ期　その 1
第 11 回　レジュメ期　その 2
第 12 回　文章期　その 1
第 13 回　文章期　その 2
第 14 回　プレゼン予行演習
第 15 回　補遺とまとめ

●事前・事後学習の内容
事前学習としては、序論・本論（仮説提示・実証）・結論という、論文を構成する各部分の特徴に応じた発表の準備を行うこと。事後学習としては、発表した内容を振り返って、次の回の発表技術の向上に資するため知識と理解を整理をすること。
●評価方法
出席・課題作業・コメントや質疑応答など、受講生に求められることをどれだけ積極的にこなしたかで、総合的に判断する。
●受講生へのコメント
修士論文の完成度が修士課程の満足度に比例する。全力を尽くしてほしい。
●参考文献・教材
教室で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2507	開講期	単位数
M190	言語応用学研究Ⅳ Advaced Studies in Linguistics Applied Ⅳ			前火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 田中 一彦 教授			

●科目の主題
英語、日本語の意味論、語用論に関する講義、および文献講読を通じて、ことばの分析力を養う。
●到達目標
講義、および文献の精読により、事実観察の仕方、データ収集、およびその分析方法を理解する。
●授業内容・授業計画
英語の完了時制に関する論文を批判的に検討する。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　Klein(1992) 1
第 3 回　Klein(1992) 2
第 4 回　Klein(1992) 3
第 5 回　Klein(1992) 4
第 6 回　Klein(1992) 5
第 7 回　Klein(1992) 6
第 8 回　Schaden(2009)1
第 9 回　Schaden(2009)2
第 10 回　Schaden(2009)3
第 11 回　Schaden(2009)4
第 12 回　Schaden(2009)5
第 13 回　Schaden(2009)6
第 14 回　Schaden(2009)7
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前に論文を精読し、必要に応じて、参考文献も参照する。
●評価方法
平常点 (出席点を含む) ならびにレポートの成績を総合的に評価する。
●受講生へのコメント
十分な予習を行い、授業中の議論に積極的に参加することが望ましい。
●参考文献・教材
プリント配布
Klein, W. (1992) The Present Perfect Puzzle, *Language* vol.68, 525-552.
Schaden, J. (2009) Present Perfect Compete, *Linguistics and Philosophy*, vol.31, 115-141.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2508	開講期	単位数
M191	言語応用学研究演習 4 Advaced Seminar in Linguistics Applied 4			後水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 田中 一彦 教授			

●科目の主題
英語、日本語の意味論、語用論に関する文献の読解を通じて、論文の構成法を含めたことばの分析力を養う。
●到達目標
特定のテーマに絞ったことばのデータ収集を行い、その問題点を発見し、その解決策を探る。
●授業内容・授業計画
廣瀬 (1995, 2000)、廣瀬・長谷川 (2001, 2007) を精読しながら、日本人の中の「集団主義」を問い直し、具体的な日本語の表現データを元に、彼らの主張の是非を問う。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　Hirose(1995) 1

第 3 回　Hirose(1995) 2
第 4 回　Hirose(1995) 3
第 5 回　Hirose(2000) 1
第 6 回　Hirose(2000) 2
第 7 回　Hirose(2000) 3
第 8 回　廣瀬・長谷川 (2001) 1
第 9 回　廣瀬・長谷川 (2001) 2
第 10 回　廣瀬・長谷川 (2001) 3
第 11 回　廣瀬・長谷川 (2001) 4
第 12 回　廣瀬・長谷川 (2007) 1
第 13 回　廣瀬・長谷川 (2007) 2
第 14 回　廣瀬・長谷川 (2007) 3
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
事前に論文を精読し、必要に応じて、参考文献も参照する。
●評価方法
平常点 (出席点を含む) ならびにレポートの成績を総合的に評価する。
●受講生へのコメント
十分な予習を行い、授業中の議論に積極的に参加することが望ましい。
●参考文献・教材
プリントを配布
Hirose, Y. (1995), "Direct and indirect speech as quotations of public and private expression", *Lingua* 95.
Hirose, Y. (2000) "Public and private self as two aspects of the speaker:A contrastive study of Japanese and English", *Journal of Pragmatics* 32.
廣瀬・長谷川 (2001)「日本語から見た日本人―日本人は『集団主義的』か〈上・下〉」『月刊言語』30 巻 1 号 .
廣瀬・長谷川 (2007)「ダイクシスの中心をなす日本的自己」『月刊言語』36 巻 2 号 .

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2509	開講期	単位数
M192	**言語応用学総合研究 I** Advanced Comprehensive Studies in Linguistics Applied I			前金 1	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 関 茂樹 教授／井狩 幸男 教授／山崎 雅人 教授／田中 一彦 教授			

●科目の主題
前期博士課程入学初年度において、言語応用学に関わる諸分野について総合的な知見が得られるような講義を行う。担当教員の専門分野は意味論、語用論、心理言語学、比較言語文化学であり、それぞれの分野の基本文献と方法論について習熟することを目標とする。
●到達目標
修士論文を書くための構想の土台をつくることを目標とする。
●授業内容・授業計画
各教員の研究対象は主として英語であり、参考用書物にはもっぱら英語のものを用いる。教員のそれぞれの専門分野について、これまでの研究内容を講義し、議論の組み立て方、資料の収集方法、その適切な引用の仕方、効果的な表現法などに習熟してもらうことを目標とする。その過程で、修士論文のテーマを見出し、各自の構想発表へつなげることを期待している。
第 1 回：研究にあたっての心構え
第 2 回から第 4 回：各自の研究テーマをもとに基本論文の紹介
第 5 回から第 10 回：各自の研究テーマをもとに基本論文の考察
第 11 回から第 14 回：各自の研究テーマをもとに基本論文について議論を深める
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
受講に際しては、指定された文献を精読するなど、十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、授業の要点や指導教員からのコメントを整理し、理解に努めること。
●評価方法

レポートおよび平常点による。

●受講生へのコメント

さまざまな分野の文献を多く読むことが必要であり、各自が研究対象とする分野、テーマについて、積極的に取り組むことが必要である。

●参考文献・教材

主にプリントを使用する。参考文献は授業中に指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCLNG2510	開講期	単位数
M193	**言語応用学総合研究Ⅱ** Advavced Comprehensive Studies in Linguistics and Information Ⅱ			後金 1	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 関 茂樹 教授／井狩 幸男 教授／山崎 雅人 教授／田中 一彦 教授			

●科目の主題

前期博士課程入学初年度において、言語応用学に関わる諸分野について総合的な知見が得られるような講義を行う。担当教員の専門分野は意味論、語用論、心理言語学、比較言語文化学であり、それぞれの分野の基本文献と方法論について習熟することを目標とする。

●到達目標

様々な分野の論文を読み、自分の修士論文の研究テーマを決定する。

●授業内容・授業計画

各教員の研究対象は主として英語であり、参考用書物にはもっぱら英語のものを用いる。教員のそれぞれの専門分野について、議論の組み立て方、資料の収集方法、その適切な引用の仕方、効果的な表現法などに習熟してもらうことを目標とする。その過程で、修士論文のテーマを見出し、各自の構想発表へつなげることを期待している。

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、指定された文献を精読するなど、十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、授業の要点や指導教員からのコメントを整理し、理解に努めること。

●評価方法

レポートと平常点による。

●受講生へのコメント

それぞれの研究課題を明確にし、研究課題と研究の方向についてわかりやすく表現できるように心がけること。

●参考文献・教材

主としてプリントを使用する。授業中に参考文献を指示する。

掲載No.	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3601	開講期	単位数
M194	**言語応用学研究指導Ⅰ** 担当教員名			前金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 関 茂樹 教授／井狩 幸男 教授／山崎 雅人 教授／田中 一彦 教授			

●科目の主題

言語応用学の分野に関する修士論文作成の指導を行う。具体的には、論文の主題の設定の妥当性、議論の組み立て方、参考文献の取り扱い方、資料の収集方法の妥当性、およびその分析の妥当性について指導を行う。

●到達目標

すぐれた修士論文にむけて、分析資料を整理し、論考を完成させる。

●授業内容・授業計画

（関　茂樹教授）　主に、語用論の立場から、関連する専攻分野について指導する。先行研究の中で重要な文献については、議論の構成、展開の仕方、資料の妥当性などについて詳しく検討し、論文作成へと導く。

（井狩幸男教授）　神経心理言語学の立場から、母語獲得、第二言語習得、バイリンガリズム、失語症、失読症において観察されるさまざまな言語現象を通して、人間にとって言語とは何かという問題を検討し、同時に、言語への応用を探る。

（山崎雅人教授）　言語類型論と認知言語学の視点から諸言語の多様性を貫く原理の分布状況を考察し、様々なデータを一貫した論理に基づいて分析する論考を構築できるように指導する。

（田中一彦教授）　伝統的な言語理論を考慮しつつ、現代の代表的な言語理論を考察する。主に、小説・新聞・雑誌などを言語資料として、特定の言語現象を意味論、語用論、さらには談話といった多角的側面から分析できるように指導する。

●事前・事後学習の内容

受講の前に、必要な参考文献を収集し、各自の課題と関連する内容および疑問点を整理すること。受講後に各自の疑問点、教員からのコメントをまとめ次に備えること。

●評価方法

平常点による。

●受講生へのコメント

論論文作成のための資料の妥当性、論述の方法、文章表現について絶えず注意を心がけたい。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG3602	開講期	単位数
M195	**言語応用学研究指導Ⅱ** Supervision of a Master's Thesis in Linguistics Applied Ⅱ			後金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 関 茂樹 教授／井狩 幸男 教授／山崎 雅人 教授／田中 一彦 教授			

●科目の主題

言語応用学の分野に関する修士論文作成の指導を行う。具体的には、論文の主題の設定の妥当性、議論の組み立て方、参考文献の取り扱い方、資料の収集方法の妥当性、およびその分析の妥当性について指導を行う。

●到達目標

すぐれた修士論文にむけて、分析資料を整理し、論考を完成させる。

●授業内容・授業計画

（関　茂樹教授）　主に、語用論の立場から、関連する専攻分野について指導する。先行研究の中で重要な文献については、議論の構成、展開の仕方、資料の妥当性などについて詳しく検討し、論文作成へと導く。

（井狩幸男教授）　神経心理言語学の立場から、母語獲得、第二言語習得、バイリンガリズム、失語症、失読症において観察されるさまざまな言語現象を通して、人間にとって言語とは何かという問題を検討し、同時に、言語への応用を探る。

（山崎雅人教授）　言語類型論と認知言語学の視点から諸言語の多様性を貫く原理の分布状況を考察し、様々なデータを一貫した論理に基づいて分析する論考を構築できるように指導する。

（田中一彦教授）　伝統的な言語理論を考慮しつつ、現代の代表的な言語理論を考察する。主に、小説・新聞・雑誌などを言語資料として、特定の言語現象を意味論、語用論、さらには談話といった多角的側面から分析できるように指導する。

第 1 回から第 3 回　先行研究についての調査と考察

第 4 回から第 7 回　具体的な独自の研究成果の発表と考察

第 8 回から第 11 回　議論をふまえた独自の研究成果の再考と考察

第 12 回から第 15 回　論文の完成にむけての考察と推敲

●事前・事後学習の内容

受講の前に、必要な参考文献を収集し、各自の課題と関連する内容および疑問点を整理すること。受講後に各自の疑問点、教員からのコメントをまとめ次に備えること。

●評価方法

平常点による。

●受講生へのコメント

論文作成のための資料の妥当性、論述の方法、文章表現について絶えず注意を心がけたい。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2501	開講期	単位数
M196	表現文化学研究Ⅰ Advaced Studies in Culture and Representation Ⅰ			後集中	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 小田中 章浩 教授			

●科目の主題

アダプテーションの理論に関する検討

●到達目標

文学や演劇、映画、ゲームなど、異なる表現メディア間におけるアダプテーション（翻案）の様態とその背後にある理論的な問題について理解を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

本講ではリンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』（片渕悦久，鴨川啓信，武田雅史訳，晃洋書房，2012 年）をテキストとして用い、その各章を精読する。そこで用いられている理論的な背景を参照、解説すると共に、紹介されている実作のアダプテーションのいくつかを読む（見る）ことによって理解を深める。

第 1 回　『アダプテーションの理論』第 1 章の精読と解説
第 2 回　『アダプテーションの理論』第 1 章の精読と解説
第 3 回　『アダプテーションの理論』第 2 章の精読と解説
第 4 回　『アダプテーションの理論』第 2 章の精読と解説
第 5 回　『アダプテーションの理論』第 2 章の精読と解説
第 6 回　『アダプテーションの理論』第 3 章の精読と解説
第 7 回　『アダプテーションの理論』第 3 章の精読と解説
第 8 回　『アダプテーションの理論』第 3 章の精読と解説
第 9 回　『アダプテーションの理論』第 4 章の精読と解説
第 10 回　『アダプテーションの理論』第 4 章の精読と解説
第 11 回　『アダプテーションの理論』第 4 章の精読と解説
第 12 回　『アダプテーションの理論』第 5 章の精読と解説
第 13 回　『アダプテーションの理論』第 5 章の精読と解説
第 14 回　『アダプテーションの理論』第 5 章の精読と解説
第 15 回　『アダプテーションの理論』第 6 章の精読と解説

●事前・事後学習の内容

受講者はテキストの各章を事前に読み、そこで展開されている理論的な問題について理解しておくことが求められる。

●評価方法

講義後に提出を求めるレポート（4000 字）によって評価する。

●受講生へのコメント

無し。

●参考文献・教材

教科書としてリンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』晃洋書房，2012 年を用いるので，受講者は予め適宜の方法で入手しておくこと。

ただしハッチオン以外にも，アダプテーションについて書かれた文献について適宜参照する。これらは授業中に紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2502	開講期	単位数
M197	表現文化学研究演習 1 Advaced Seminar in Culture and Representation1			後水 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 小田中 章浩 教授			

●科目の主題

フィクションにおける物語の構造

●到達目標

文学や映画、演劇（さらにはマンガやゲーム）のようなフィクションに見られる物語の基本的な構造とは何か。本講は、表現文化学的な研究を行うために必要な、物語論の基礎的な知識を与えることを目的とする。

●授業内容・授業計画

David Herman (ed.), *The Cambridge Companion to Narrative*, Cambridge University Press, 2007 をテキストとする。教員が予め指定した部分について、受講者にその内容を報告してもらい、次に全員でディスカッションを行って、そこで論じられている問題の理解を図る。

第 1 回　授業ガイダンス
第 2 回　テクスト講読とディスカッション (1)
第 3 回　テクスト講読とディスカッション (2)
第 4 回　テクスト講読とディスカッション (3)
第 5 回　テクスト講読とディスカッション (4)
第 6 回　テクスト講読とディスカッション (5)
第 7 回　テクスト講読とディスカッション (6)
第 8 回　テクスト講読とディスカッション (7)
第 9 回　テクスト講読とディスカッション (8)
第 10 回　テクスト講読とディスカッション (9)
第 11 回　テクスト講読とディスカッション (10)
第 12 回　テクスト講読とディスカッション (11)
第 13 回　テクスト講読とディスカッション (12)
第 14 回　テクスト講読とディスカッション (13)
第 15 回　授業のまとめ

●事前・事後学習の内容

受講生はテキストの指定された章を予め読み、内容を理解した上で日本語に翻訳しておくことが求められる。

●評価方法

毎回の講読における受講者の理解度に基づいて評価する。

●受講生へのコメント

無し。

●参考文献・教材

テクスト　David Herman (ed.), *The Cambridge Companion to Narrative,* Cambridge University Press, 2007
必要に応じて他の参考文献も紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2503	開講期	単位数
M198	表現文化学研究 II Advaced Studies in Culture and Representation II			後木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野末 紀之 教授			

●科目の主題

前期に引き続き、John Addington Symonds の回想記を精読する。これにより、現代のさまざまな（ホモ）セクシュアリティにかかわる表現を分析するさいのバックグラウンドを提供する。

●到達目標

自己のセクシュアリティはどうすれば言語化できるのか。はたして言語化しうるものなのか。その根源は生来の気質なのか、教育や環境なのか。社会的規範との葛藤にさらされながら、現代にも通じるこれらの問題と格闘したひとりの文学者の表現を分析し考察する。

●授業内容・授業計画

演習形式でテキストを読み進める。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　テキスト読解 (1)
第 3 回　テキスト読解 (2)
第 4 回　テキスト読解 (3)
第 5 回　テキスト読解 (4)
第 6 回　テキスト読解 (5)
第 7 回　テキスト読解 (6)
第 8 回　テキスト読解 (7)
第 9 回　テキスト読解 (8)
第 10 回　テキスト読解 (9)

第 11 回　テキスト読解（10）
第 12 回　テキスト読解（11）
第 13 回　テキスト読解（12）
第 14 回　先行研究、補助的資料の読解
第 15 回　総括

●事前・事後学習の内容
授業までに、指示された範囲の英文について、語学的に正確な読解、引用や文化的背景の調査を行ない、表現や展開上の問題点を整理しておくこと。事前事後の学習に 2.5 時間程度が必要。
●評価方法
平常点（30%）、レポート（35%）、試験（35%）。
●受講生へのコメント
とくになし
●参考文献・教材
Memoirs of John Addington Symonds, ed. Phyllis Grosskurth (University of Chicago Press, 1986). プリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2504	開講期	単位数
M199	**表現文化学研究演習 2** Advaced Seminar in Culture and Representation2			前火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野末 紀之 教授			

●科目の主題
19 世紀後半、ルネサンス研究やギリシャ詩人の研究、それに男性同性愛の擁護などで名高い John Addington Symonds の回想記を精読する。これは作者の死後 90 年以上たってようやく一部が陽の目を見たもので、そこには、刑事罰への不安や社会的規範との葛藤にさらされながら、みずからの（ホモ）セクシュアリティの根源を探ろうとしたシモンズの苦闘と解放の痕跡が刻まれている。そのありようを分析し考察する。
●到達目標
自己のセクシュアリティの根源は、どうすれば言語化できるのか。そもそも言語化しうるものなのか。それを規定するのは生来の気質なのか、教育や環境なのか。これらの問題と格闘したひとりの文学者の表現を分析し考察を行なうことにより、現代のセクシュアリティの考察にも通じる視点を獲得する。
●授業内容・授業計画
テキストを演習形式で読みすすめる。適宜、サブテキストを使用する。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　テキスト読解（1）
第 3 回　テキスト読解（2）
第 4 回　テキスト読解（3）
第 5 回　テキスト読解（4）
第 6 回　テキスト読解（5）
第 7 回　テキスト読解（6）
第 8 回　テキスト読解（7）
第 9 回　テキスト読解（8）
第 10 回　テキスト読解（9）
第 11 回　テキスト読解（10）
第 12 回　テキスト読解（11）
第 13 回　テキスト読解（12）
第 14 回　論文読解
第 15 回　総括
●事前・事後学習の内容
授業までに、指示された範囲の英文について、語学的に正確な読解、引用や文化的背景の調査を行ない、表現や展開上の問題点を整理しておくこと。事前事後の学習に 2.5 時間程度が必要。
●評価方法
平常点（30%）、レポート（35%）、試験（35%）。
●受講生へのコメント
とくになし

●参考文献・教材
Memoirs of John Addington Symonds, ed. Phyllis Grosskurth (University of Chicago, 1986). プリントを配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2505	開講期	単位数
M200	**表現文化学研究Ⅲ** Advaced Studies in Culture and Representation Ⅲ			前水 3	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 三上 雅子 教授			

●科目の主題
performance という語は現代では、身体による演技・演劇的行為のみならずさまざまな文化現象や日常的行動を評するときに使用される。本授業では、狭義の意味の performance を取り扱うのみならず、こんにち我々をとりまく文化的・社会的現象を performance として捉えその演技性に着目して考察していく。
●到達目標
特定の芸術作品・文化的営為を、社会的・歴史的観点から複合的に分析・研究する方法論の習得を目指す。
●授業内容・授業計画
Richard Schechner: *Performance Studies.An Introduction* を参考文献として使用し、その他の performance に関する議論をあわせて紹介していく。さらに受講生各自の研究テーマに関連する諸問題についても講じる。

第 1 回　イントロダクション、アイスブレーキング。
第 2 回　Richard Schechner: *Performance Studies.An Introduction* の紹介（1）
第 3 回　Richard Schechner: *Performance Studies.An Introductio*n の紹介（2）
第 4 回　Richard Schechner: *Performance Studies.An Introductio*n の紹介（3）
第 5 回　Richard Schechner: *Performance Studies.An Introduction* の紹介（4）
第 6 回　Richard Schechner: *Performance Studies.An Introduction* の紹介（5）
第 7 回　中間総括（1 回目）
第 8 回　事例研究（1）
第 9 回　事例研究（2）
第 10 回　事例研究（3）
第 11 回　中間総括（2 回目）
第 12 回　受講生による事例研究（1）
第 13 回　受講生による事例研究（2）
第 14 回　受講生による事例研究（3）
第 15 回　全体総括、レポート作製に関する注意

●事前・事後学習の内容
授業までに、指示された範囲の英文について、語学的に正確な読解、引用や文化的背景の調査を行っておくこと。事前事後の学習に 2 時間程度が必要。
●評価方法
出席、発表、レポートを総合的に評価する。
●受講生へのコメント
自己の関心領域との関連で、授業テーマに関する事例を考えてきてほしい。授業中の討論への積極的参加が望まれる。
●参考文献・教材
Richard Schechner: *Performance Studies.An Introduction* を参考文献として使用する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2506	開講期	単位数
M201	**表現文化学研究演習 3** Advaced Seminar in Culture and Representation 3			後木 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 三上 雅子 教授			

●科目の主題
本授業では参加者による事例研究に基づいた発表を中心とする。
●到達目標
表現文化学研究に必要な方法論を確認するとともに、学会発表や論文執筆にあたって必要とされるスキルについ

ても、学んでいく。

●授業内容・授業計画

20 世紀の諸芸術ジャンルに関して、受講生に個別発表を行ってもらう。

第 1 回　イントロダクション、アイスブレーキング
第 2 回　受講生各自の発表テーマについて確認、参考文献指示
第 3 回　第 1 回発表ならびに討論
第 4 回　第 2 回発表ならびに討論
第 5 回　第 3 回発表ならびに討論
第 6 回　中間総括（1 回目）
第 7 回　第 4 回発表ならびに討論
第 8 回　第 5 回発表ならびに討論
第 9 回　第 6 回発表ならびに討論
第 10 回　小レポート提出にあたっての注意、討論
第 11 回　中間総括（2 回目）
第 12 回　小レポートに関して総括
第 13 回　最終発表（1）
第 14 回　最終発表（2）
第 15 回　総合総括

●事前・事後学習の内容

授業開始前に発表内容について教員と面談し、発表時の資料等を作成する。授業終了後は発表時に受けたコメント等を踏まえて、発表内容について教員と面談を行う。

●評価方法

出席、発表、レポートを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

討論における積極的参加が望まれる。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2507	開講期	単位数
M202	**表現文化学研究Ⅳ** Advaced Studies in Culture and Representation Ⅳ			前月 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 海老根 剛 准教授			

●科目の主題

近年の視聴覚文化を観察すると、メディアテクノロジーとライヴ感覚の関係を再編成するような動きが見出される。仮想現実や拡張現実のような発展著しい分野だけでなく、映画や舞台表現などの分野でも、メディアとライヴ感覚を結びつける新たな試みが登場している（MX4 Dシアター、ボーカロイドや声優によるライヴ、2.5 次元ミュージカルなど）。今年度の授業では、メディアテクノロジーに媒介された文化環境における「ライヴ性」の諸相を理論的に考察したフィリップ・アウスランダーの著作 “Liveness. Performance in a mediatized culture.” を講読する。

●到達目標

“Liveness” はパフォーマンス・スタディーズの古典とされる著作だが、今日の視聴覚文化（映画、アニメーション、音楽、舞台表現）を考察するうえでヒントとなるアイデアを豊富に含んでいる。本書の講読を通して、各自の研究にとって有益な視点や知見を獲得することを目指す。

●授業内容・授業計画

テクストの講読が中心であるが、必要に応じて具体的な事例を取りあげて議論する。受講者による事例の提供を歓迎する。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　Introduction
第 3 回　Live Performance in A Mediatized Culture (1)
第 4 回　Live Performance in A Mediatized Culture (2)
第 5 回　Live Performance in A Mediatized Culture (3)
第 6 回　Live Performance in A Mediatized Culture (4)
第 7 回　Live Performance in A Mediatized Culture (5)

第 8 回　Live Performance in A Mediatized Culture (6)
第 9 回　Live Performance in A Mediatized Culture (7)
第 10 回　Live Performance in A Mediatized Culture (8)
第 11 回　Live Performance in A Mediatized Culture (9)
第 12 回　Tryin' to Make It Real (1)
第 13 回　Tryin' to Make It Real (2)
第 14 回　Tryin' to Make It Real (3)
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容
各回の授業の前にテクストの当該箇所を読んでおくことが求められる。
●評価方法
授業での発表で評価する。
●受講生へのコメント
現在の視聴覚文化全般に関心を持つ学生の授業を歓迎します。他専修の院生の受講も歓迎します。
●参考文献・教材
Philip Auslander: Liveness. Performance in a mediatized culture. Second Edition, London and New York, 2008.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2508	開講期	単位数
M203	**表現文化学研究演習 4** Advaced Seminar in Culture and Representation 4			後火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 海老根 剛 准教授			

●科目の主題
近年の視聴覚文化を観察すると、メディアテクノロジーとライヴ感覚の関係を再編成するような動きが見出される。仮想現実や拡張現実のような発展著しい分野だけでなく、映画や舞台表現などの分野でも、メディアとライヴ感覚を結びつける新たな試みが登場している（MX4 Dシアター、ボーカロイドや声優によるライヴ、2.5 次元ミュージカルなど）。この授業では、前期の授業に続いて、メディアテクノロジーに媒介された文化環境における「ライヴ性」の諸相を理論的に考察したフィリップ・アウスランダーの著作“Liveness. Performance in a mediatized culture.”を講読する。
●到達目標
“Liveness”はパフォーマンス・スタディーズの古典とされる著作だが、今日の視聴覚文化（映画、アニメーション、音楽、舞台表現）を考察するうえでヒントとなるアイデアを豊富に含んでいる。本書の講読を通して、各自の研究にとって有益な視点や知見を獲得することを目指す。
●授業内容・授業計画
テクストの講読が中心であるが、必要に応じて具体的な事例を取りあげて議論する。受講者による事例の提供を歓迎する。
第 1 回　イントロダクション
第 2 回　Tryin' to Make It Real (4)
第 3 回　Tryin' to Make It Real (5)
第 4 回　Tryin' to Make It Real (6)
第 5 回　Tryin' to Make It Real (7)
第 6 回　Legally Live (1)
第 7 回　Legally Live (2)
第 8 回　Legally Live (3)
第 9 回　Legally Live (4)
第 10 回　Legally Live (5)
第 11 回　Legally Live (6)
第 12 回　Legally Live (7)
第 13 回　Legally Live (8)
第 14 回　Conclusion
第 15 回　まとめ
●事前・事後学習の内容
各回の授業の前にテクストの当該箇所を読んでおくことが求められる。

●評価方法
授業での発表で評価する。
●受講生へのコメント
現在の視聴覚文化全般に関心を持つ学生の授業を歓迎します。他専修の院生の受講も歓迎します。
前期開講の「表現文化学研究 4」の受講を前提とはしないが、前期からの継続であることは留意のこと。必要であれば前期の授業の要約を配布する。
●参考文献・教材
Philip Auslander: Liveness. Performance in a mediatized culture. Second Edition, London and New York, 2008.

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2510	開講期	単位数
M204	表現文化学研究演習 5 Advaced Seminar in Culture and Representation 5			前水 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 高島 葉子 准教授			

●科目の主題
民間説話の国際性と地域性。
●到達目標
昨年度に引き続き、民間説話研究の古典であるスティス・トンプソンの *The Folktale* を講読することにより、民間説話の普遍性と地域性について学ぶ。
●授業内容・授業計画
毎回、英語文献講読を行うとともに、15 回中 3 回担当者を決めて複数文化圏の類話の報告と考察を行ってもらう。講読は英語文献を用いるが、補足的に翻訳も参照する。最後に、授業で得た知識を活用しつつ各自の関心に基づいてレポートをまとめる。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　文献講読
第 3 回　文献講読
第 4 回　文献講読
第 5 回　文献講読
第 6 回　報告と討論
第 7 回　文献講読
第 8 回　文献講読
第 9 回　文献講読
第 10 回　文献講読
第 11 回　報告と討論
第 12 回　文献講読
第 13 回　文献講読
第 14 回　文献講読
第 15 回　報告と討論

●事前・事後学習の内容
事前に文献を読み込み、事後に学んだ知識を定着させ、それに基づいて各自で考察を行う。
●評価方法
平常点 50%、レポート 50%で評価する。
●受講生へのコメント
物語は様々なメディアを通して発展してきたが、その基本的形態は民間説話である。従って、民間説話の研究を専門としない学生にも民間説話の知識は有用である。
●参考文献・教材
Stith Thompson, *The Folktale*、荒木博之・石原綏代訳『民間説話 世界の昔話とその分類』(八坂書房)
D.L.Ashliman, *Folk and Fairy Tales: A Handbook* (Greenwood Press) いずれもプリントを配布する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2512	開講期	単位数
M205	**表現文化学特殊研究** Advaced Studies in Selected Topics in Culture and Representation			前集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 土居 伸彰 非常勤講師			

●科目の主題

「個人的な」アニメーションについて考える

●到達目標

アニメーションという現象についてその変転の歴史的な経緯と描いてきたものの変容について理解し、幅広い見方を獲得すること

●授業内容・授業計画

アニメーションが表現として何を達成してきたのか、商業作品の基礎を築いたディズニーの達成についての再評価と個人作家・国営スタジオの作家の達成についての再考を行い、その両者の原理が近年においていかに合流しつつあるのかを考えていく。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　「アニメーション」の誕生（1）：1950 年代について
第 3 回　「アニメーション」の誕生（2）：「アニメーション映画」概念
第 4 回　初期アニメーションの達成（1）：アニメーションの自意識
第 5 回　初期アニメーションの達成（2）：アニメーションの産業化
第 6 回　ディズニーは何を成し遂げたか（1）：短編時代の作品
第 7 回　ディズニーは何を成し遂げたか（2）：『白雪姫』革命
第 8 回　アニメーション作家たちの試み（1）：カナダ国立映画製作庁の個人的な作品
第 9 回　アニメーション作家たちの試み（2）：ソ連のアニメーションの逸脱
第 10 回　アニメーション作家たちの試み（3）：アニメーションとユートピア
第 11 回　現代アニメーションの潮流（1）：アニメーション・ドキュメンタリー
第 12 回　現代アニメーションの潮流（2）：デジタル・アニメーションとフレームの「上」
第 13 回　現代アニメーションの潮流（3）：原形質性とフレームの「向こう側」
第 14 回　現代アニメーションの潮流（4）：抽象性が見せる夢
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

授業中に指定したアニメーション作品を鑑賞し、授業の内容をふまえて自分の考えをまとめること。

●評価方法

平常点およびレポートによる。

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

土居伸彰『個人的なハーモニー　ノルシュテインと現代アニメーション論』（フィルムアート社）

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2513	開講期	単位数
M206	**表現文化学総合研究 I** Comprehensive Studies in Culture and Representation I			前金 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野末 紀之 教授／三上 雅子 教授／小田中 章浩 教授			

●科目の主題

表現文化学という新しい領域横断的な学問の成立の過程と、研究の前提となる知識（文化理論等）について総合的な知識を習得させる。また研究にあたって必要とされる方法論についても確認・習熟させる。受講生に研究発表を行わせ、それに基づき討議をすることによって、プレゼンテーション技術をも学習させる。

●到達目標

表現文化学研究にあたって必要とさせる知見・学問的方法論を習得させる。

●授業内容・授業計画

表現文化学を研究するにあたって必要とされる文献を扱い、研究の前提となる文化理論等に関する知識を習得させる。受講生は得た知見に基づいて、研究対象・研究方法等について、討論・報告する。

●事前・事後学習の内容

発表担当者は、各発表のための事前（レジュメ作成を含む）および事後学習に、4 時間程度を要する。

●評価方法

授業中の発表等によって評価する。

●受講生へのコメント

授業参加に際しては、自己の研究領域のみではなく、表現文化学研究全般における基本的概念等についても習得・確認することを常に意識すること。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART2514	開講期	単位数
M207	**表現文化学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Culture and Representation Ⅱ			後金 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野末 紀之 教授／三上 雅子 教授／小田中 章浩 教授			

●科目の主題

表現文化学という新しい領域横断的な学問の成立の過程と、研究の前提となる知識（文化理論等）について総合的な知識を習得させる。また研究にあたって必要とされる方法論についても確認・習熟させる。受講生に研究発表を行わせ、それに基づき討議をすることによって、プレゼンテーション技術をも学習させる。

●到達目標

総合研究Ⅰで習得した知見・スキルの基礎の上に立って、さらに修士論文執筆に向けて総合的知見を獲得させる。

●授業内容・授業計画

受講生の研究分野にかかわる具体的なテーマを取り上げて講じる。受講生は、修士論文で取り組むテーマを絞り込み、研究の方向について報告する。

●事前・事後学習の内容

発表担当者は、各発表のための事前（レジュメ作成を含む）および事後学習に、4 時間程度を要する。

●評価方法

授業中の発表等によって評価する。

●受講生へのコメント

修士論文のテーマについて、教員と相談しつつ準備を重ね、授業での発表にのぞむこと。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3601	開講期	単位数
M208	**表現文化学研究指導Ⅰ** Supervision of Master's Thesis in Culture and Representation Ⅰ			前金 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野末 紀之 教授／三上 雅子 教授／小田中 章浩 教授			

●科目の主題

表現文化学の修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

修士論文作成に必要な知見・方法論等に習熟させる。

●授業内容・授業計画

研究テーマの選択ならびに論文執筆に関して必要な先行研究・関連文献の指示等を行い、さらに論文の構成や論旨の展開についても具体的に助言・指導を行う。

（三上　雅子教授）　現代演劇ならびに映画等を対象とし、そこに現れた様々な問題を種々の文化理論・芸術理論に立脚して研究することを指導する。

（小田中章浩教授） フランス演劇あるいは西洋演劇史に関する研究等を対象とし、論文作成、学会発表に必要な指導を行う。
（野末　紀之教授） 19 世紀以後のイギリスを中心とする言語表現および身体表象、身体を重要な契機とする現代日本の言語文化を対象とし、それらにかんする論文作成、発表、研究について指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

発表担当者は、各発表のための事前（レジュメ作成を含む）および事後学習に、4 時間程度を要する。

●評価方法

授業での発表等で評価。

●受講生へのコメント

修士論文作成にあたっては、指導教員と相談しつつ綿密な計画を立ててのぞむこと。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART3602	開講期	単位数
M209	**表現文化学研究指導Ⅱ** Supervision of Master's Thesis in Culture and Representation Ⅱ			後金 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野末 紀之 教授／三上 雅子 教授／小田中 章浩 教授			

●科目の主題

表現文化学の修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

研究指導Ⅰで習得した知見・方法論の基礎の上に立って、修士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

研究テーマの選択ならびに論文執筆に関して必要な先行研究・関連文献の指示等を行い、さらに論文の構成や論旨の展開についても具体的に助言・指導を行う。
（三上　雅子教授） 現代演劇ならびに映画等の非言語的テクストを対象とし、そこに現れた様々な問題を種々の文化理論・芸術理論に立脚して研究することを指導する。
（小田中章浩教授） フランス演劇あるいは西洋演劇史に関する研究を対象とし、論文作成、学会発表に必要な指導を行う。
（野末　紀之教授） 19 世紀以後のイギリスを中心とする言語表現および身体表象、身体を重要な契機とする現代日本の言語文化を対象とし、それらにかんする論文作成、発表、研究について指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

発表担当者は、各発表のための事前（レジュメ作成を含む）および事後学習に、4 時間程度を要する。

●評価方法

授業中の発表に基づいて評価する。

●受講生へのコメント

修士論文作成にあたっては、指導教員と相談のうえ綿密な計画をたててのぞむこと。

●参考文献・教材

授業中に指示。

アジア都市文化学専攻

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA1501	開講期	単位数
M210	アジア都市文化学基礎研究Ⅰ Basic Studies of Asian Culture and Urbanism Ⅰ			前月 2	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 多和田 裕司 教授			

●科目の主題

アジア都市文化を学ぶための基本概念である「アジア」「都市」「文化」について、定義、アプローチ方法、研究史、現在の研究動向などを、主として文化人類学や社会学の議論をもとに検討するとともに、研究対象としてのアジア都市文化の特質について考察する。

●到達目標

アジア都市文化を学ぶ上での基本概念を理解し、受講生自らがアジア都市文化を対象として研究を展開するための視点を身につける。

●授業内容・授業計画

授業は「アジア」「都市」「文化」についての教員による講義と関連する文献の講読によって進められる。文献の選択は、受講生の研究テーマも考慮した上で、第 1 回目の授業時に決定する。

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　「アジア」概念について
第 3 回　「アジア」研究へのアプローチ (1)
第 4 回　「アジア」研究へのアプローチ (2)
第 5 回　「都市」概念について
第 6 回　「都市」研究へのアプローチ (1)
第 7 回　「都市」研究へのアプローチ (2)
第 8 回　「文化」概念について
第 9 回　「文化」研究へのアプローチ (1)
第 10 回　「文化」研究へのアプローチ (2)
第 11 回　アジア都市文化の特質 (1)
第 12 回　アジア都市文化の特質 (2)
第 13 回　（受講生による発表）私が考える「アジア都市文化学」(1)
第 14 回　（受講生による発表）私が考える「アジア都市文化学」(2)
第 15 回　講義の総括と総合討論

●事前・事後学習の内容

毎回設定される課題文献を熟読し、論点の整理や問題点の洗い出し、自らの研究テーマとの関連の上での評価などを行っておくこと。

●評価方法

平常点（授業中の発表を含む）によって評価を行う。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

授業時に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA1502	開講期	単位数
M211	アジア都市文化学基礎研究Ⅱ Basic Studies of Asian Culture and Urbanism Ⅱ			後火 5	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 野崎 充彦 教授／増田 聡 准教授			

●科目の主題

（増田）　アジア都市文化学を学ぶために必要となる記述・執筆の方法を改めて振り返りつつ再考する。
（野崎）　アジア都市文化を学ぶための基本概念を論じる。とりわけ東アジアを主題とする。

●到達目標

（増田）　自身の研究テーマを適切なかたちで文章化し、論文へとまとめあげるための基礎的な技能を身につける。

（野崎） 日々目の前で起きる韓国社会のトピックを取り上げ、それを通じた韓国社会の理解、および日本や中国との関わりについて考察する。

●授業内容・授業計画

授業は以下のように実施する。第 1 回～第 7 回は増田が、第 8 回～第 15 回は野崎が担当。

第 1 回 ガイダンス
第 2 回 アジア都市文化学における論文執筆の目的
第 3 回 主張と根拠
第 4 回 参考文献の機能
第 5 回 引用の諸相
第 6 回 剽窃と引用の間
第 7 回 ここまでのまとめ
第 8 回 1 韓国社会のトピック
第 9 回 2 韓国社会のトピック
第 10 回 3 韓国社会のトピック
第 11 回 4 韓国社会のトピック
第 12 回 5 韓国社会のトピック
第 13 回 6 韓国社会のトピック
第 14 回 7 韓国社会のトピック
第 15 回 8 韓国社会のトピック まとめ

●事前・事後学習の内容

事前配布の資料には必ず目を通して、授業中の質疑応答に備えること。

●評価方法

平常評価とレポート。出席を重視する。

●受講生へのコメント

熱心な受講を望む。

●参考文献・教材

授業中に随時、提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2501	開講期	単位数
M212	**都市文化学研究** Advanced Studies in Urban Cultures			前水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 増田 聡 准教授			

●科目の主題

都市の現代文化研究のための方法論を学ぶ。都市論、メディア論、文化研究、大衆文化論、芸術学などの分野から、受講生の能力と関心に基づいて選択された日本語あるいは英語文献を講読すると共に、大阪都市圏におけるフィールドワークを行い、都市とそこでの文化実践に対するアプローチ方法を身につける。

●到達目標

都市の現代文化研究のための方法論的視座を身につけ、各人の研究テーマに即しつつ用いることができる能力を獲得する。

●授業内容・授業計画

受講生による文献調査や報告を適宜行う。受講者との相談の上、学外での現地調査を適宜行なうため、下記スケジュールは予定にとどまる。

第 1 回 イントロダクション
第 2 回 文献講読と討論（1）
第 3 回 文献講読と討論（2）
第 4 回 文献講読と討論（3）
第 5 回 文献講読と討論（4）
第 6 回 フィールドワーク（1）
第 7 回 文献講読と討論（5）
第 8 回 文献講読と討論（6）
第 9 回 文献講読と討論（7）
第 10 回 フィールドワーク（2）

第 11 回　文献講読と討論（8）
第 12 回　文献講読と討論（9）
第 13 回　文献講読と討論（10）
第 14 回　フィールドワーク（3）
第 15 回　文献講読と討論（11）およびまとめ

●事前・事後学習の内容
購読テキストを事前に熟読した上で、扱われる概念や理論について理解を得た上で授業に臨むこと。授業内の討論において言及された文献については実際に参照するなどし、授業で扱われた重要なトピックに関して各自で理解を深めておくこと。また、フィールドワークの際には調査地について事前に概括的な知識を得ておくこと。

●評価方法
平常点。報告内容および討議について総合的に評価する。

●受講生へのコメント
授業の進め方についてのガイダンスを行うので初回の授業には必ず出席すること。受講生の報告と議論を中心に授業は進行するので積極的な授業参加が望まれる。単に専門的知識を教授するのではなく、都市文化研究のための学際的な視点を（受講生各々の多様な関心をふまえて）養成することが主眼となる授業であるため、アジア都市文化学専攻所属以外の学生の受講を大いに歓迎する。

●参考文献・教材
授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2502	開講期	単位数
M213	都市文化学研究演習 Advanced Seminar in Urban Environment			後水 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 増田 聡 准教授			

●科目の主題
都市の現代文化研究に関連する諸理論を学ぶ。都市論、メディア論、文化研究、大衆文化論、芸術学などの分野から、受講生の能力と関心に基づいて選択された日本語あるいは英語文献を講読すると共に、受講生が進める各々の研究テーマについて討議を行い、都市における文化的蓄積や文化実践の諸相への適切なアプローチを可能にする方法論的基盤の養成を目指す。必要に応じて大阪都市圏でのフィールドワークを実施する。

●到達目標
都市の現代文化研究に関連する諸理論を身につけ、各自の研究関心に応用できる能力を獲得する。

●授業内容・授業計画
初回受講時に、受講者の専攻や関心、語学力に応じて講読テキストや授業方針を決定し、受講者による発表をもとに議論する。初回の授業には必ず出席すること。「都市文化学研究」を受講しておくことが望ましいが絶対条件ではない。

第 1 回　授業方針と講読文献の決定
第 2 回　文献講読と討論（1）
第 3 回　文献講読と討論（2）
第 4 回　文献講読と討論（3）
第 5 回　文献講読と討論（4）
第 6 回　文献講読と討論（5）
第 7 回　文献講読と討論（6）
第 8 回　文献講読と討論（7）
第 9 回　文献講読と討論（8）
第 10 回　文献講読と討論（9）
第 11 回　文献講読と討論（10）
第 12 回　文献講読と討論（11）
第 13 回　文献講読と討論（12）
第 14 回　文献講読と討論（13）
第 15 回　文献講読と討論（14）およびまとめ

●事前・事後学習の内容
購読テキストを事前に熟読した上で、扱われる概念や理論について理解を得た上で授業に臨むこと。授業内の討論において言及された文献については実際に参照するなどし、授業で扱われた重要なトピックに関して各自で理

解を深めておくこと。

●評価方法

平常点。報告内容と討議を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

授業の進め方についてのガイダンスを行うので初回の授業には必ず出席すること。受講生の報告と議論を中心に授業は進行するので積極的な授業参加が望まれる。単に専門的知識を教授するのではなく、都市文化研究のための学際的な視点を（受講生各々の多様な関心をふまえて）養成することが主眼となる授業であるため、アジア都市文化学専攻所属以外の学生の受講を大いに歓迎する。

●参考文献・教材

授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2503	開講期	単位数
M214	**都市環境学研究** Advanced Studies in Urban Environment			前月 4	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 菅原 真弓 教授			

●科目の主題

「文化」はそもそも、それが生まれた土地に根づいたものである。本授業では、大阪という巨大都市を検討基盤とし、そこで育まれた、あるいは存在している文化資源を研究素材として都市環境と文化との関係を考察する。

●到達目標

都市環境と文化との関係を考察する自らの視点を得ることを目標とする。またこれを各人の研究テーマに応用していける能力を獲得する。

●授業内容・授業計画

近世近代の大阪画壇や近代建築、出版文化、人形浄瑠璃や歌舞伎、など大阪に遺された有形無形の文化資源について概説し、その上で各自の関心を踏まえて文献（論文）を選択、これを講読する。その際、他都市（京都、東京）との比較を行うことを課す。各回、担当者を決めて文献の要約（小発表）を行い、担当者の司会によって討論を実施する。また併せて、実地の見学（フィールドワーク）も実施する。

第 1 回　イントロダクション
第 2 回　大阪の文化資源概説：大阪画壇、出版文化、浄瑠璃と歌舞伎、近代建築など
第 3 回　ブレイク：関連文献の収集方法と講読文献策定
第 4 回　フィールドワーク①
第 5 回　文献講読および討論 1
第 6 回　文献講読および討論 2
第 7 回　文献講読および討論 3
第 8 回　フィールドワーク②
第 9 回　文献講読および討論 4
第 10 回　文献講読および討論 5
第 11 回　文献講読および討論 6
第 12 回　フィールドワーク③
第 13 回　文献講読および討論 7
第 14 回　文献講読および討論 8
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

第 4 回以降は、文献の要約（小発表）および討論を実施するので、各回の対象となる文献を事前に通読しておくことが求められる。また各回の振り返りを各自行い、その成果を授業内で求める。

●評価方法

授業参加意欲および小発表、討論への参加。

●受講生へのコメント

都市環境とその土地の文化を主たるテーマとする授業である。そこで本学が立地する大阪という都市の文化資源、特に芸術文化の独自性（特異性）について、他都市との比較において検討していく。広い意味での芸術文化に関心を持ち、それを研究する方法を学んでほしい。

●参考文献・教材

授業内で指示。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2504	開講期	単位数
M215	**都市環境学研究演習** Advanced Seminar in Urban Environment			後月 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 菅原 真弓 教授			

●科目の主題

都市が育む文化資源（主に表象文化）を中心テーマとし、それらを歴史的、地理的観点から考察する発表を各自行う。ここで言う表象文化とは美術作品や事象を想定しており、かつ担当者の専門分野から日本のそれを想定はしているが、いわゆるファインアート以外であっても、あるいは日本以外の表象文化であっても、受講者各自の問題意識に根差した発表ならば、それは可とする。

●到達目標

1 自らの研究内容を、より分かりやすくプレゼンテーションする能力を培う
2 他者の研究内容に関して、建設的な意見を発することができる能力を養い、かつ他者の研究内容や手法を自らの研究に役立てる能力を培う

●授業内容・授業計画

自らの研究テーマに関する口頭発表を行い、その後、全体でディスカッションを行う。

第 1 回　イントロダクション：授業の進め方について、発表について
第 2 回　発表テーマについて：各自の関心分野発表と研究テーマ策定
第 3 回　研究発表とディスカッション 1
第 4 回　研究発表とディスカッション 2
第 5 回　研究発表とディスカッション 3
第 6 回　研究発表とディスカッション 4
第 7 回　研究発表とディスカッション 5
第 8 回　研究発表とディスカッション 6
第 9 回　研究発表とディスカッション 7
第 10 回　研究発表とディスカッション 8
第 11 回　研究発表とディスカッション 9
第 12 回　研究発表とディスカッション 10
第 13 回　研究発表とディスカッション 11
第 14 回　研究発表とディスカッション 12
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

受講者各自の研究発表に際しては、事前に予告レジュメ（発表内容を要約したもの + 発表に際しての主たる参考文献を記したもの）の提出を義務付けるので、発表者以外の受講者は、授業に先立ち予告レジュメと参考文献を読み込み、実り多いディスカッションとなるよう準備を行う。

授業後は各回の発表内容に関する理解をより深める学びを行い、かつ発表手法等については自らの発表に役立てるようにしていく。

●評価方法

発表内容および授業参加意欲を以て評価。

●受講生へのコメント

いわゆる「文化」は、それが生まれた土地に根づいたものである。またそれらは時代背景にも大きく左右されていく。本授業を通して、広い意味での美術（作品、事象）が、どのような地理的、歴史的環境から生まれたのか、に関心を持ってもらいたいと考えている。

●参考文献・教材

授業内で指示する

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2507	開講期	単位数
M216	アジア地域文化学研究Ⅱ Advanced Studies in Asian Cultures Ⅱ			後集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 野崎 充彦 教授			

●科目の主題

現代韓国に至るまで深い影響を及ぼしている伝統文化の諸相を時代別のトピックを通じて考察する。

文献資料のみならずドキュメンタリーや映画作品など映像資料なども駆使し、様々な歴史・文化的な事象がどのように表現されているかを分析しながら、各時代の朝鮮韓国文化のセルフイメージの形成過程を追う。

●到達目標

通史的・学際的な考察を通じ、韓国を中心に日本や東アジア諸国における文化的な類似性と相違点を総合的に把握することをめざす。

●授業内容・授業計画

Ⅰ．朝鮮・韓国と日本の文化史的考察

第 1 回　(1) 朝鮮の伝統文化①風水思想
第 2 回　(2) 朝鮮の伝統文化②風水思想
第 3 回　(3) 朝鮮の伝統文化③始祖神話
第 4 回　(4) 朝鮮の伝統文化④始祖神話
第 5 回　(5) 朝鮮の伝統文化⑤三国時代
第 6 回　(6) 朝鮮の伝統文化り⑥統一新羅
第 7 回　(7) 朝鮮の伝統文化⑦高麗
第 8 回　(8) 朝鮮の伝統文化⑧高麗
第 9 回　(9) 朝鮮の伝統文化⑨朝鮮王朝・前期
第 10 回　(10) 朝鮮の伝統文化⑩朝鮮王朝・中期
第 11 回　(11) 朝鮮の伝統文化⑪朝鮮王朝・後期
第 12 回　(12) 朝鮮の伝統文化⑫近代
第 13 回　(13) 朝鮮の伝統文化⑬近代
第 14 回　(14) 朝鮮の伝統文化⑭現代
第 15 回　(15) 朝鮮の伝統文化⑮現代

●事前・事後学習の内容

事前配布の資料には必ず目を通し、疑問点があれば授業中に解決するように努めること。

また、授業ごとにないよう整理を行い、レポート作成に生かすことを求める。

●評価方法

出席とレポート。

●受講生へのコメント

東アジアの文化には共通する基盤は多いものの、展開過程は大いに異なり、その影響は現代社会にまで色濃く影を落としている。類型的な既成観念にとらわれることなく、柔軟な思考で見直す必要があるだろう。

●参考文献・教材

参考書『朝鮮の物語』野崎充彦（大修館書店、1998 年）
『韓国の風水師たち』（人文書院、1984 年）

その他、授業中に適宜、指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2508	開講期	単位数
M217	アジア地域文化学研究演習 2 Advanced Seminar in Asian Cultures 2			後火 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野崎 充彦 教授			

●科目の主題

近年、韓国映画は躍進めざましいが、歴史モノにせよ犯罪モノにせよ、実際にあった歴史や事件を題材にした作品の多いことが特徴である。そのような韓国映画の世界を通じ、韓国社会の動向と今後の展開を考察する。

●到達目標

韓国社会を可能な限り、その具体相において把握・理解することを目的とする。

●授業内容・授業計画
多様な映像作品をジャンル別に紹介しながら、韓国映画の全体像を把握する。
第 1 回　(1) 韓国映画の世界①歴史モノ
第 2 回　(2) 韓国映画の世界②歴史モノ
第 3 回　(3) 韓国映画の世界③歴史モノ
第 4 回　(4) 韓国映画の世界④歴史モノ
第 5 回　(5) 韓国映画の世界⑤歴史モノ
第 6 回　(6) 韓国映画の世界韓国①戦争・南北関係モノ
第 7 回　(7) 韓国映画の世界②戦争・南北関係モノ
第 8 回　(8) 韓国映画の世界③戦争・南北関係モノ
第 9 回　(9) 韓国映画の世界④戦争・南北関係モノ
第 10 回　(10) 韓国映画の世界⑤戦争・南北関係モノ
第 11 回　(11) 韓国映画の世界①犯罪モノ
第 12 回　(12) 韓国映画の世界②犯罪モノ
第 13 回　(13) 韓国映画の世界③犯罪モノ
第 14 回　(14) 韓国映画の世界④犯罪モノ
第 15 回　(15) 韓国映画の世界⑤犯罪モノ
●事前・事後学習の内容
予習はさほど必要としないが、従業ごとに内容をまとめ、疑問点があれば次の授業で質疑し、レポート作成に生かすように努めること。
●評価方法
出席とレポート
●受講生へのコメント
漫然と映像作品を見るのではなく、その背後に隠された社会現象に思いを致すこと。
授業内容は多岐にわたり、時間配分はしばしば変更されるので、柔軟に対応されたい。
●参考文献・教材
参考文献
『韓国映画史』(明石書店　2017 年)
その他の参考文献は多数に上るので、授業時に示す。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2511	開講期	単位数
M218	アジア民族文化学研究 Advanced Studies in Asian Culture and Ethnicity			前月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 多和田 裕司 教授			

●科目の主題
「アジア」「民族」「文化」を主題とする基礎的文献の講読やそれをもとにした討論をとおして、国民国家における民族文化、消費社会の成立と発展、グローバリゼーションと民族文化の変容等、現代アジアに生起する諸課題について、主として文化人類学の観点から考察する。
●到達目標
アジアにおける「グローバル化とナショナリズム」および「現代消費社会」を基軸にしつつも毎回の文献の選択や講義テーマはなるべく広範なものとし、受講生各人がアジア研究を進めるための自らの課題と方法論を見つけ出すことを目指していく。
●授業内容・授業計画
上記主題に即した日本語ないし英語の文献を中心に演習形式で読み進める。各回の授業は受講生による文献内容についての報告、教員による解説、全員での討論によって進めていく。文献の選択は、受講生の研究テーマも考慮した上で、第 1 回目の授業時に決定する。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　グローバル化とナショナリズムに関する文献講読 (1)
第 3 回　グローバル化とナショナリズムに関する文献講読 (2)
第 4 回　グローバル化とナショナリズムに関する文献講読 (3)
第 5 回　グローバル化とナショナリズムに関する文献講読 (4)
第 6 回　グローバル化とナショナリズムに関する文献講読 (5)

第 7 回　グローバル化とナショナリズムに関する文献講読（6）
第 8 回　現代消費社会に関する文献講読（1）
第 9 回　現代消費社会に関する文献講読（2）
第 10 回　現代消費社会に関する文献講読（3）
第 11 回　現代消費社会に関する文献講読（4）
第 12 回　現代消費社会に関する文献講読（5）
第 13 回　現代消費社会に関する文献講読（6）
第 14 回　総合討論
第 15 回　授業の総括

●事前・事後学習の内容
毎回設定される課題文献を熟読し、論点の整理や問題点の洗い出し、自らの研究テーマとの関連の上での評価などを行っておくこと。
●評価方法
平常点によって評価を行う。
●受講生へのコメント
「アジア民族文化学研究演習」とあわせて受講することが望ましい。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2512	開講期	単位数
M219	**アジア民族文化学研究演習** Advanced Seminar in Asian Culture and Ethnicity			後月 3	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 多和田 裕司 教授			

●科目の主題
内外の代表的研究論文の講読と討論を通して、文化人類学におけるアジア研究、東南アジア研究についての研究動向を把握する。
●到達目標
「アジア民族文化」を基軸にしつつも毎回の文献の選択や講義テーマはなるべく広範なものとし、受講生各人が最新の研究動向を把握することで自らの課題と方法論をより一層明確にすることを目指していく。
●授業内容・授業計画
上記主題に即した日本語ないし英語の文献を演習形式で読み進める。授業は受講生による文献内容についての報告、教員による解説、全員での討論によって進めていく。文献の選択は、受講生の研究テーマも考慮した上で、第 1 回目の授業時に決定する。
第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　アジア研究に関する文献講読（1）
第 3 回　アジア研究に関する文献講読（2）
第 4 回　アジア研究に関する文献講読（3）
第 5 回　アジア研究に関する文献講読（4）
第 6 回　アジア研究に関する文献講読（5）
第 7 回　アジア研究に関する文献講読（6）
第 8 回　東南アジア研究に関する文献講読（1）
第 9 回　東南アジア研究に関する文献講読（2）
第 10 回　東南アジア研究に関する文献講読（3）
第 11 回　東南アジア研究に関する文献講読（4）
第 12 回　東南アジア研究に関する文献講読（5）
第 13 回　東南アジア研究に関する文献講読（6）
第 14 回　総合討論
第 15 回　授業の総括
●事前・事後学習の内容
毎回設定される課題文献を熟読し、論点の整理や問題点の洗い出し、自らの研究テーマとの関連の上での評価などを行っておくこと。
●評価方法

平常点によって評価を行う。

●受講生へのコメント

「アジア民族文化学研究」とあわせて受講することが望ましい。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2513	開講期	単位数
M220	**アジア比較文化学研究** Higher Comparative Studies in Asian Culture			前水 2	2 単位
	授業形態 講義・演習	担当教員名 堀 まどか 准教授			

●科目の主題

本科目では、「境界の文学・文学の境界」をキーワードに、アジアの都市を題材にした日本語で書かれた近現代文学を読み、アジアの都市文化の形成と歴史をまなび、さらには従来の文学史の陥穽について考える。世界の読者の視点を意識しながら作品を読み、同時にそこに関連していた政策、政治、経済など、諸理論をあわせて理解していくことで、アジア都市文化への理解の幅を深める。文学作品を読むことを通して、日本文化の多様性と特質を学び、文学研究や文化研究の〈可能性〉と〈普遍性〉について、議論し考える。

●到達目標

1. アジア都市を題材にした、幾つかの文体やジャンルの日本語文学に触れ、日本文学や日本文化、日本史に対する理解を深める。
2. 文学理論や比較文化研究の方法分析の基礎を学び、領域横断的な研究に関心をもつ。
3. 講義を通して感じたことや疑問に思ったことについて、適切な質疑やディスカッションを行うことができる。

●授業内容・授業計画

購読と討論が中心。受講者は、日本近代文学の作品を幅広く読み味わいながら、それらテキストや作家を一国文学史観を超えて国際的な文脈の中に位置づけることを学ぶ。横断と越境のダイナミズムを探りながら、同時に、作品の描かれている同時代の政策史や都市形成史、研究史を読み、作品世界の周辺の理解をふかめる。

第 1 回　イントロダクション／「境界者」のまなざし
第 2 回　文学の証言性と象徴①
第 3 回　文学の証言性と象徴②
第 4 回　文学の証言性と象徴③
第 5 回　文学の証言性と象徴④
第 6 回　文学の証言性と象徴⑤
第 7 回　アジアの都市と文学①
第 8 回　アジアの都市と文学②
第 9 回　アジアの都市と文学③
第 10 回　アジアの都市と文学④
第 11 回　アジアの都市と文学⑤
第 12 回　多文化主義の現在①
第 13 回　多文化主義の現在②
第 14 回　多文化主義の現在③
第 15 回　まとめ

●事前・事後学習の内容

取り上げる作品は事前に読んでくること。

●評価方法

平常点（出席・授業内での演習発表／質疑／ディスカッション）（70%） レポート（30%）

●受講生へのコメント

取り上げる作品は、受講生各々の関心や研究内容をふまえて柔軟に変更する可能性があります。
文学にはあまり縁がなかった学生でも、文化や社会、歴史に関心がある学生には好奇心が持てると思います。
アジア都市文化学専攻所属以外の学生の受講も歓迎します。

●参考文献・教材

授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2514	開講期	単位数
M221	**アジア比較文化学研究演習** Higher Comparative Studies and Seminar in Asian Calture			後水 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 堀 まどか 准教授			

●科目の主題

日本語の（もしくは日本語に翻訳された）近現代文学のなかの、都市文化表象をさぐることが主題。

受講者個々人の研究対象に関連する地域を扱っている文芸・芸術表現の作品を選び、歴史や時事問題や地理風土と合わせて分析して研究発表を行う。扱う作品は、おもに戦間期の日本語文学を想定している。だが、受講者の関心や目的に合わせて、文芸作品（小説・詩・評論・戯曲）を中心とした複合ジャンル（映画、舞踊、アニメ・マンガ）からも題材を選んで分析アプローチを試みてもよい。近現代のメディアやツーリズムの発達、植民地支配による異文化接触などの問題を意識しながら、当該地域の歴史や文学についての知識を深める。自分のことばで表現し、他者に解説する技術を培う。（演習の課題や、対象としたい文学作品が見つけられない場合は、教員がテーマを指示し提案する。）

●到達目標

1. 自らが研究する地域や領域に関連する文芸作品について、基礎的な知識を持つこと。
2. 自らが演習発表し、また他者の演習を聞き、意見交換することを通して、さまざまな地域の文学や歴史事情についても関心をもち、比較して考える視点を養うこと。
3. 他者に説明する技術と方法を工夫し、効果的なプレゼンテーションの方法と技術をみがいて、コミュニケーション能力を高めること。

●授業内容・授業計画

演習発表・ディスカッションの形態。

「調べる」「読む」「書く（思考・分析・構成）」「話す（発表）」の能力を養成し、研究発表や実用的なプレゼンテーションの基礎的な練習・訓練をおこなう。互いに演習内容を批評しあい、よりよい発表方法のための改善案や修正ポイントを提案しあい、切磋琢磨して表現技術をみがく。

第 1 回　イントロダクション／演習授業の目的と方法について
第 2 回　演習の課題設定と構想について／講義＆個別相談
第 3 回　演習と討論①
第 4 回　演習と討論②
第 5 回　演習と討論③
第 6 回　演習と討論④
第 7 回　演習と討論⑤
第 8 回　演習と討論⑥
第 9 回　演習と討論⑦
第 10 回　演習と討論⑧
第 11 回　演習と討論⑨
第 12 回　演習と討論⑩
第 13 回　演習と討論⑪
第 14 回　演習と討論⑫
第 15 回　最終的なまとめ

●事前・事後学習の内容

事前に、次の時間に扱う資料や作品は読んでくること。

●評価方法

出席（20%）、発表内容（発表資料の提出をふくむ）（50%）、授業内参加・質疑・討論（30%）

●受講生へのコメント

地域の文学という、誰にでも身近に取り組めるテーマを設定しています。

初めから完璧な演習発表を求めているのではなく、数回の演習発表を経て、よい発表形態を仕上げていきます。

文学研究を中心にして、ハイブリッドな文化現象を考え比較文化研究のダイナミズムを感じながら、自分の専門分野をさらに強化してほしいです。

学生同士の幅広い討論や学際的関心を深めるための演習授業のため、アジア都市文化学専攻所属以外の学生の受講も歓迎します。

●参考文献・教材

授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2518	開講期	単位数
M222	アジア観光文化学研究 Advanced Studies in Asian Culture and Tourism			前木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 天野 景太 准教授			

●科目の主題

現代はグローバリゼーションに伴い国境を越えた人々や資本、モノの移動はますます増加、多様化していますが、その中にあって観光という社会現象は、最も先鋭的かつ具体的に、異なる社会・文化の接触、交流、衝突 etc... がおこる現場といえます。本科目では、そこにおいて展開する観光文化のダイナミズムを捉える理論的枠組みを検討した上で、それらを援用しつつ、日本を含むアジアの諸都市における実際の観光文化のあり方に関して、比較の視点を意識ながら解読を試みます。

●到達目標

◆グローバルな文脈における人々や文化の移動という現象と、ローカルな文脈における観光文化の編成、再編成という現象とを関連づけて捉えられるようにします。

◆「観光」という切り口から、アジア都市文化のアクチュアリティに迫ることで、他の科目とのシナジーを通じて、より多角的に都市や地域の文化の諸相にアプローチ出来るようにします。

◆参加者の修士論文のテーマとも重なり合う形での報告、議論を通じ、各自の修士論文や将来の進路に向けてのブレーンストーミングを行います。

●授業内容・授業計画

ゼミ形式で進めます。前半は、観光学、観光文化論に関する基礎的知識の確認の後、ガイダンス時に提示する観光に関連する（社会学・文化人類学・地理学・都市計画学的視点を中心とする）学際的な文献・論文の輪読を通じ、「ポスト・ツーリスト」「オーセンティシティ」「場のマネジメント」「世界都市」その他の概念を用いて、観光文化を捉える枠組みに関して検討します。後半は自由報告形式とし、前半の輪読の成果を参考にしながら、主に日本を含むアジアの諸都市において展開する観光文化の事例に関して各自で自由に対象と視点を設定し、考察した成果を報告、議論します。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　観光学の歴史と視点（講義形式）
第 3 回　観光文化学の対象と視点（講義形式）
第 4 回　関連論文に関する報告と議論 (1)
第 5 回　関連論文に関する報告と議論 (2)
第 6 回　関連論文に関する報告と議論 (3)
第 7 回　関連論文に関する報告と議論 (4)
第 8 回　関連論文に関する報告と議論 (5)
第 9 回　アジア諸都市の観光文化に関する事例研究の報告と議論 (1)
第 10 回　アジア諸都市の観光文化に関する事例研究の報告と議論 (2)
第 11 回　アジア諸都市の観光文化に関する事例研究の報告と議論 (3)
第 12 回　アジア諸都市の観光文化に関する事例研究の報告と議論 (4)
第 13 回　アジア諸都市の観光文化に関する事例研究の報告と議論 (5)
第 14 回　観光文化の国際比較研究 (1)
第 15 回　観光文化の国際比較研究 (2)

●事前・事後学習の内容

発表者は当然であるが、それ以外の参加者も授業で購読する文献を丁寧に読み込み、疑問点などは関連の文献を蒐集するなどし、自らの力の限り解決しておくことが求められます。また、授業後にも改めて文献を読み直すことで、自らの研究とのかかわりについて省察していくことが求められます。

●評価方法

平常点により評価します。内訳は、全 2 回の報告がそれぞれ 25%ずつ、授業への主体的な関わりの度合いを 50%とします。

●受講生へのコメント

日頃から 観光に関するニュースや調査データを親しんでおくことが望ましい。また、自らの観光経験や旅ロケ番組等の視聴経験を振り返り、それらを観光文化学的な視点から省察する習慣をつけておくことが望ましい。また、観光学は理論と実際(現場)との往復を繰り返してナンボの学問でもあります。昨年度は履修者のテーマに応じて宝塚、住吉大社などの巡検を行いましたが、本年度も観光地域の視察をはじめ、他の教員の科目とのジョイントによる大阪の都市文化視察、講師が担当する学部の演習系科目の取り組みとのジョイントなども企画予定なので、積極的に参加してください。

●参考文献・教材

安福恵美子編『「観光まちづくり」再考』古今書院、2016
D. マキァーネル（安村克己他訳）『ザ・ツーリスト：高度近代社会の構造分析』学文社、2012
E.M. ブルーナー（安村克己他訳）『観光と文化：旅の民族誌』学文社、2007
飯田芳也『観光文化学：旅から観光へ』古今書院、2012
石森秀三編『観光の 20 世紀：20 世紀に於ける諸民族文化の伝統と変容』ドメス出版、1997
井口貢『まちづくり・観光と地域文化の創造』学文社、2005
ほか、授業中に紹介します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2519	開講期	単位数
M223	アジア観光文化学研究演習 Advanced Seminar in Asian Culture and Tourism			後木 4	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 天野 景太 准教授			

●科目の主題

「観光文化の編成、再編成の現場を“あるく、みる、きく”」を、本演習のテーマとします。現在日本の諸地域では、アジア地域を中心とした外国人観光者を含むさまざまな来訪者にとって魅力ある観光経験の提供が課題となっています。特に、かつてのマス・ツーリズム全盛期における事業者、行政主体による観光開発、というアプローチに代わり、住民や地域の組織が主体となり、ローカルな自然や文化を観光対象化し、観光者との直接的交流を通じてそれらを呈示する実践のあり方が模索されています。本演習では、これらの地域の中から複数のフィールドを選定し、それらに関するケーススタディ、および実際に現地に出向いたフィールドワークを行い、これらの実践がもたらす新たな観光文化の生成、展開の可能性について考察すすることで、各自の修士論文作成への足がかりを提供します。

●到達目標

観光文化に関する理論的検討の成果（アジア観光文化学研究）を応用し、フィールド調査（観光文化の展開現場の観察、関係者へのヒアリング等）と、そこで得られたデータの分析を通じて、“観光学的想像力（創造力）”を養います。自ら思考し、試行錯誤し、行動する経験を通じ、観光地調査の基礎や調査データの理論化への流れを体得します。本科目はどんな研究対象・研究方法の修士論文等であってもその作成において重要なプロセスとなるであろう 1 次データの収集・解釈に関する技法やセンスを身につけることにつながりますので、文化と観光・都市・地域・まちづくり・景観などのキーワードに直接関連しない研究テーマをもつ学生の履修も歓迎します。

●授業内容・授業計画

前半は、観光まちづくりや着地型観光の実践例をサーベイし、修士論文のテーマ等と結び合うフィールドの選定と調査の企画と設計を行います。調査を実施した後、後半はそこで得られたデータを整理、解釈し、調査報告または調査レポートを作成します。

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　観光まちづくり、着地型観光、デスティネーションマネジメントと観光文化（講義形式）
第 3 回　観光まちづくり、着地型観光に関する報告・討論 (1)
第 4 回　観光まちづくり、着地型観光に関する報告・討論 (2)
第 5 回　観光まちづくり、着地型観光に関する報告・討論 (3)
第 6 回　対象フィールドに関する文献・論文の検討 (1)
第 7 回　対象フィールドに関する文献・論文の検討 (2)
第 8 回　対象フィールドに関する文献・論文の検討 (3)
第 9 回　フィールド調査の企画・設計 (1)
第 10 回　フィールド調査の企画・設計 (2)
第 11 回　データの整理と解釈 (1)
第 12 回　データの整理と解釈 (2)
第 13 回　データの整理と解釈 (3)
第 14 回　ラウンドテーブル
第 15 回　調査報告書（調査レポート）のまとめ

●事前・事後学習の内容

プレゼンテーションの準備、机上調査や現地調査の成果、およびその分析などの成果を常に演習の場に持ち寄り、そこで議論されたことを参考に、自身の成果を修正し、さらに次のプレゼンテーションに反映していくという主体的な営為が常に求められます。

●評価方法

ゼミにおける報告や議論（34%）、現地調査のプロジェクトワーク（33%）、調査報告書の分担執筆または調査レ

ポートの作成（33%）で評価します。

●受講生へのコメント

フィールドワークを含む演習の運営は、参加者のイニシアティブに基づいて行います。また、観光学は理論と実際（現場）との往復を繰り返してナンボの学問でもあります。前期開講のアジア観光文化学研究との接続を意識しつつ、本年度の履修が予想される学生の関心が高いであろう宝塚、心斎橋、温泉観光地、鉄道駅、森林セラピーの現場への巡検をはじめ、他の教員の科目とのジョイントによる都市文化の視察、講師が担当する学部の演習系科目の取り組みとのジョイントなどを企画予定なので、積極的に参加してください。

●参考文献・教材

安福恵美子編『「観光まちづくり」再考』古今書院、2016
井口貢編『観光文化と地元学』古今書院、2011
大社充『体験交流型ツーリズムの手法：地域資源を活かす着地型観光』学芸出版社、2008
西村幸夫編著『観光まちづくり：まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社、2009
山中速人編『マルチメディアでフィールドワーク』有斐閣、2001
ほか、授業時に紹介します。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2520	開講期	単位数
M224	**アジア都市文化学特講Ⅰ** Special Lecture on Asian Culture and Urbanism 1			前集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 橋爪 紳也 非常勤講師			

●科目の主題

欧米とアジアの諸都市を比較、産業都市の普遍性と文化の固有性について検証する。

●到達目標

都市研究における議論の最先端を理解、アジア都市の可能性について独自の考えを有するに到るに十分な知識を持つことを目標とする。

●授業内容・授業計画

アジアにおける都市形成と都市経営、都市文化について、同時代の世界の諸都市との比較のうえで、多元的に講じる。現在の都市デザインと都市文化の双方に焦点をあてつつ、比較検証を重ねる。世界都市論と創造都市論を概説、とりわけ都市ブランドの意味と、創造都市に関する諸政策について検証する。

第 1 回　概説 1：文化と文明　都市比較の視点
第 2 回　概説 2：世界都市と創造都市 「都市化の時代」から「都市の時代」へ
第 3 回　創造都市の事例研究 1　ナント、ル・アーヴル、メッス
第 4 回　創造都市の事例研究 2　ビルバオ、バレンシア
第 5 回　創造都市の事例研究 3　リヨン、エッセン
第 6 回　創造都市の事例研究 4　ニューヨーク、LA 、ロンドン
第 7 回　アジア諸都市の事例研究 1　ドバイ、シンガポール
第 8 回　アジア諸都市の事例研究 2　北京、上海、杭州
第 9 回　アジア諸都市の事例研究 3　釜山、ソウル
第 10 回　アジア諸都市の事例研究 5　金沢、神戸、大阪
第 11 回　総括　アジア都市の可能性
第 12 回　レポート相談日
第 13 回　レポート相談日
第 14 回　レポート相談日
第 15 回　全体のまとめ

●事前・事後学習の内容

参考文献および教材を購入、講義に備えておくこと。

●評価方法

出席（50%）と報告（50%）で総合的に評価する。

●受講生へのコメント

スケジュールの詳細を告知するので、初回には必ず出席すること。

●参考文献・教材

橋爪紳也『創造するアジア都市』NTT 出版
橋爪紳也『ツーリズムの都市デザイン』鹿島出版会

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2522	開講期	単位数
M225	**アジア都市文化学総合研究Ⅰ** Comprehensive Studies in Asian Culture and Urbanism Ⅰ			前金 1	2 単位
	授業形態 ゼミ形式	担当教員名 野崎 充彦 教授／多和田 裕司 教授／菅原真弓教授／ 増田 聡 准教授／堀 まどか 准教授／天野 景太 准教授			

●科目の主題

アジア都市文化学に関係する個別のトピックについて教員と学生が討論する。

●到達目標

アジアの都市文化に関する課題を認識するとともに、それへの適切な接近方法、研究手法、成果発表の方法などを学ぶ。基本的には修士論文作成に向けての指導を兼ねる。

●授業内容・授業計画

学生による発表が授業の中心となる。担当教員がそれぞれの専門分野の観点から、発表者（学生）の提示する諸観点や論点に基づいて（出席学生を交えて）討論を行うとともに、修士論文作成に関する方法（文献収集・解読、フィールドワーク、語学、情報機器操作等）について総合的な基礎訓練を行う。発表は適宜行われ、年度初めに予定が告知される。

●事前・事後学習の内容

オムニバス所業なので、各教員からの指示に従って事前・事後学習につとめること。

●評価方法

平常点によって評価を行う。

●受講生へのコメント

発表者は十分な準備を行い、それを聴く学生は積極的に討論に参加すること。

●参考文献・教材

授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA2523	開講期	単位数
M226	**アジア都市文化学総合研究Ⅱ** Comprehensive Studies in Asian Culture and Urbanism Ⅱ			後金 1	2 単位
	授業形態 ゼミ形式	担当教員名 野崎 充彦 教授／多和田 裕司 教授／菅原真弓教授／ 増田 聡 准教授／堀 まどか 准教授／天野 景太 准教授			

●科目の主題

アジア都市文化学に関係する個別のトピックについて教員と学生が討論する。

●到達目標

論文、特に修士論文、博士（課程）論文作成に向けての準備を着実に行う。

●授業内容・授業計画

前期に引き続いて、学生の個別テーマに即した内容の討論や指導を各教員が行うとともに、アジア都市文化学を総合的に理解するための方法（各ディシプリンの綜合など）についての議論を活発に行う。定期的に後期博士課程の学生の研究発表会や前期博士課程学生生の中間報告会を開くなどして、各学生の論文作成能力を高める。特に前期博士課程の学生については、M1 時に 2 〜 3 回、M2 時に 3 〜 4 回の発表が課せられる。後期博士課程の学生については発表は不定期であるが、指導教員の判断によって適時行う。

●事前・事後学習の内容

オムニバス所業なので、各教員からの指示に従って事前・事後学習につとめること。

●評価方法

平常点によって評価を行う。

●受講生へのコメント

発表の準備は十分に行い、発表を聴く学生は積極的に討論に参加すること。

●参考文献・教材

授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA3601	開講期	単位数
M227	**アジア都市文化学研究指導Ⅰ** Supervision of a Master's Thesis in Asian Culture and Urbanism I			前水 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野崎 充彦 教授／多和田 裕司 教授			

●科目の主題
アジア都市文化学に関する修士論文作成の指導を行う。
●到達目標
アジア都市文化学に関する高度な内容の修士論文を作成する。
●授業内容・授業計画
1 年次にたてた研究計画に基づき、データの収集、分析を引き続き行うとともに、分析の問題点や結果を明確にし、整合性のとれた論文構成となるよう特に留意して指導を行う。
●事前・事後学習の内容
修論作成に備えて事前に資料を準備して演習に臨み、授業後には指摘されたことを研究内容に迅速に反映させるよう努めること。
●評価方法
平常点によって評価を行う。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA3602	開講期	単位数
M228	**アジア都市文化学研究指導Ⅱ** Supervision of a Master's Thesis in Asian Culture and Urbanism Ⅱ			後水 1	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野崎 充彦 教授／多和田 裕司 教授			

●科目の主題
アジア都市文化学に関する修士論文作成の指導を行う。
●到達目標
アジア都市文化学に関する高度な内容の修士論文を作成する。
●授業内容・授業計画
アジア都市文化学研究指導Ⅰに引き続いて、1 年次にたてた研究計画に基づき、データの収集、分析を引き続き行うとともに、分析の問題点や結果を明確にし、整合性のとれた論文構成となるよう特に留意して指導を行う。
●事前・事後学習の内容
指導教員の指示に従い、授業ごとに資料を作成し、指摘されたことは授業後に迅速に反映して報告すること。
●評価方法
平常点によって評価を行う。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
授業内で指示する。

共 通 科 目

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LXGEN2503	開講期	単位数
M229	国際都市文化論Ⅰ International Urban Culture Ⅰ			前集中	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 レイモンド・ラングリー非常勤講師／ウェイリン・ライ非常勤講師 インターナショナルスクール運営委員長 山 祐嗣教授			

●科目の主題

当科目は文学研究科インターナショナルスクールによる国際発信力育成事業の一環として、人文学・都市文化学の主題を扱いながら、英語による講義視聴とディスカッションの形式で提供される授業である。各回講義（レクチャー）を踏まえたうえでの、演習としての活動も含まれている。

文学部共通専門科目のひとつとして、卒業・修了に必要な単位として算入できる。

なおインターナショナルスクール集中科目には、「比較文化交流論Ⅰ」「比較文化交流論Ⅱ」「国際都市文化論Ⅰ」「国際都市文化論Ⅱ」「国際都市社会論Ⅰ」「国際都市社会論Ⅱ」の 6 科目があり、原則として 1 年に 1 科目ずつ提供される。内容は毎年入れ替わる上、科目名が変えて提供されるので、インターナショナルスクールの集中科目は原則毎年受講することができる。

本年度は、「国際都市文化論Ⅰ」が提供される。講義内容は、LANGLEY 講師は比較文化論、LAI 講師は研究と論証で、詳細については、平成 29 年 3 月下旬に、掲示板やポータルサイト、インターナショナルスクールのウェブサイトに掲載する予定である。

●到達目標

インターナショナルスクール集中科目に共通する目標は次のとおりである。

(1) 英語による講義を聴いて、内容を理解し、考察を深める。
(2) 講義内容に基づいたディスカッションに参加する。
(3) 講師の授業設計に従い、簡単なプレゼンテーションを行う。

●授業内容・授業計画

集中講義の日程は、9 月下旬を予定している。

集中講義期間中は、2 名の招聘講師（Lai、Langley）が 2 日ずつ（計 4 日）担当する。

第 1 回　インターナショナルスクール委員からのオリエンテーション
第 2 回　LANGLEY 講師による講義（文化心理学）
第 3 回　LANGLEY 講師による講義（文化と自己）
第 4 回　レクチャー・ディスカッション／ベーシックプレゼン（1）
第 5 回　LANGLEY 講師による講義（文化と認知）
第 6 回　LANGLEY 講師による講義（文化と言語）
第 7 回　レクチャー・ディスカッション／ベーシックプレゼン（2）
第 8 回　LANGLEY 講師によるまとめ
第 9 回　LAI 講師による講義（アカデミックライティングと論理的思考）
第 10 回　LAI 講師による講義（研究のアイデアの明確化）
第 11 回　レクチャー・ディスカッション／ベーシックプレゼン（3）
第 12 回　LAI 講師による講義（研究のアイデアをより確実に）
第 13 回　LAI 講師による講義（論理的論証の秘訣）
第 14 回　レクチャー・ディスカッション／ベーシックプレゼン（4）
第 15 回　LAI 講師によるまとめ

●事前・事後学習の内容

事前配布資料に基づき、授業開始前までに授業の全体像および概要を把握しておくこと。英語に限らず慣れない言語で学習や発言を行うためには、前もっての下調べが不可欠である。とくにキーワードに相当する語句についてはリスニングの際に障害にならないよう、あらかじめ正しい発音・アクセントのチェック、およびその語彙についての日本語・英語での下調べをしておくことを推奨する。

●評価方法

平常点（毎回の出席、授業への積極的な参加、アンケート）と講師による課題レポートによる。

●受講生へのコメント

当科目は、アカデミックな英語による基礎的な表現力を養成しつつ、それをその場で実践する機会を提供する。英語による知識の習得および自己表現の機会としてだけではなく、英語を通じて参加する外語文化体験の場でもある。研究が世界と共通の水準にあることを求められる中、最も多くの読者を見込める英語による成果発表は効果的

であり、その必要性は高い。しかし、そこには対話の相手、読者や聞き手に配慮しつつ共通語（英語）でコミュニケーションに参加しようとする姿勢・意欲が強く求められていることは忘れないでほしい。各自の英語（力）を見つめ直す意味でも、積極的な参加が望ましい。

●参考文献・教材

配布資料などは開講までにポータルサイトにて提供される予定。
昨年度までの集中科目に関する情報は、以下の URL から参照できる。
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/IS/ja/courses/intensive-course

後期博士課程

・哲学歴史学専攻

・人間行動学専攻

・言語文化学専攻

・アジア都市文化学専攻

・共通科目

後期博士課程科目

科目番号	科目名	科目ナンバー	教員名	単位数	備考

■哲学歴史学専攻

D 1	哲学論文指導	LAPHL4701	仲原・高梨	12単位	
D 2	日本史学論文指導	LAJPH4701	塚田・仁木・岸本・佐賀	12単位	
D 3	東洋史学論文指導	LAWHE4701	平田	12単位	
D 4	西洋史学論文指導	LAWHW4701	大黒・北村	12単位	

■人間行動学専攻

D 5	社会学論文指導	LBSOC4701	進藤・石田・　伊地知・川野	12単位	
D 6	心理学論文指導	LBPSY4701	池上・山	12単位	
D 7	教育学論文指導	LBEDU4701	柏木	12単位	
D 8	地理学論文指導	LBGEO4701	大場・水内・山﨑（孝）・祖田	12単位	

■言語文化学専攻

D 9	国語国文学論文指導	LCJPN4701	丹羽・小林・久堀	12単位	
D10	中国語中国文学論文指導	LCCHN4701	松浦・岩本・張	12単位	
D11	英語英米文学論文指導	LCENG4701	杉井・田中（孝）	12単位	
D14	ドイツ語フランス語圏言語文化学論文指導	LCDFX4701	神竹・福島	12単位	
D15	言語情報学論文指導	LCLNG4701	関・井狩・山崎（雅）・田中（一）	12単位	
D16	言語応用学論文指導	LCLNG4702	関・井狩・山崎（雅）・田中（一）	12単位	
D17	表現文化学論文指導	LCART4701	三上・小田中・野末	12単位	

■アジア都市文化学専攻

D18	アジア都市文化学論文指導	LDASA4701	野崎・多和田・菅原	12単位	
D19	アジア比較文化学特論Ⅰ	LDASA4702	野崎	2単位	
—	アジア比較文化学特論Ⅱ	LDASA4703	（休）	2単位	
D20	アジア都市文化学特論Ⅰ	LDASA4704	菅原	2単位	
D21	アジア都市文化学特論Ⅱ	LDASA4705	多和田	2単位	

哲 学 歴 史 学 専 攻

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAPHL4701	開講期	単位数
D1	**哲学論文指導** Supervision of Doctoral Thesis in Philosophy			前後月 1	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 仲原 孝 教授／高梨 友宏 教授			

●科目の主題

哲学、哲学史、倫理学、宗教哲学、美学の諸問題を主たるテーマとする博士論文の作成に必要な指導を行う。

●到達目標

博士論文の完成を目標とする。

●授業内容・授業計画

授業を研究発表の機会とし、そこで、哲学固有の考え方、論文構成の手法、必要な資料の扱い方などについて、博士論文作成のための具体的な指導を行う。学会発表や論文投稿を通じて業績を積み重ねるためのアドバイスを与えるとともに、具体的なテーマに則しつつ、論文指導を行う。各担当者の指導内容は以下の通り。

（仲原　孝教授）哲学を宗教との関連で考察することに比重を置きながらも、それにとどまらず広く哲学・哲学史・宗教哲学・倫理学全般の研究に関して、文献の精密な読解と最新の研究成果に対する幅広い知見にもとづいた博士論文の作成のための指導を行う。

（高梨友宏教授）ドイツ近現代美学・芸術学、京都学派の芸術論に比重を置きながらも、それにとどまらず広く哲学・哲学史・美学・倫理学全般の研究に関して、文献の精密な読解と最新の研究成果に対する幅広い知見にもとづいた博士論文の作成のための指導を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

学会発表や論文投稿を通じて、積極的かつ着実に業績を積み重ねること。

●参考文献・教材

指導の過程で適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAJPH4701	開講期	単位数
D2	**日本史学論文指導** Supervision of a Doctoral Thesis in History			前後水 1	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 塚田 孝 教授／仁木 宏 教授／岸本 直文 教授／佐賀 朝 教授			

●科目の主題

博士論文の指導を行う。

●到達目標

3 年間の受講を通して博士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

1 年次では、修士論文をまとめて学術雑誌に発表するとともに、博士論文の研究テーマの設定と研究計画の策定を行う。そのため各学生の研究テーマに即した研究分野の専門書や学術論文の体系的かつ批判的検討を行うとともに、研究テーマとする時代の歴史史料の調査・読解・分析のより高度な応用力の獲得をめざす。1 年次終了時には、各自の研究計画書を提出するものとする。

2 年次では、研究計画に基づき、各自の研究を遂行する。具体的には、研究テーマに関わる史料の収集を行い、その分析に基づく研究報告を順次行うとともに、その上に立って、2 年次終了時には、博士論文作成にむけた中間報告書を提出する。

3 年次には、引き続き史料の収集・読解・分析を行い、それらをまとめて博士論文を完成させる。このために博士論文の構成と論述の仕方など具体的な指導を行うこととする。

学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（岸本直文教授） 主に、考古学分野と古代の研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行う。
（仁木　宏教授） 主に、古代から中世にかけての時代の研究テーマに関わる博士論文の研究指導を行う。
（塚田　孝教授） 主に、中世から近世にかけての時代の研究テーマに関わる博士論文の研究指導を行う。
（佐賀　朝教授） 主に、近世から近代にかけての時代の研究テーマに関わる博士論文の研究指導を行う。

●事前・事後学習の内容

受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、研究を進め、随時報告を行い、博士論文の基礎となる個別論文（各章）を執筆・発表し、それらを踏まえて、最終的に博士論文を完成させる。

●評価方法

平常点（出席と研究報告）。

●受講生へのコメント

博士論文の作成は大きな山である。その山頂に向け一歩づつ登ってほしい。

●参考文献・教材

プリント配布。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHE4701	開講期	単位数
D3	**東洋史学論文指導** Supervision of Doctoral Thesis in Oriental History			前後月 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 平田 茂樹 教授			

●科目の主題

歴史学、東洋史学、各自の研究テーマの特徴を充分に理解したうえで、研究に取り組むことを考える。

●到達目標

史料の収集・読解・分析能力、論述能力を高めて、博士論文を段階的に完成させられるようにする。

●授業内容・授業計画

1 年次では、研究目的・方法を明確にし、博士論文の研究テーマの設定と研究計画の立案を行う。そのため基本的専門書・論文を収集・読解・分析し、史料の所在を確認・収集して、より高度な応用能力の会得を目指す。1 年次終了時に、研究計画書を提出するものとする。

2 年次では、研究計画に基づき史料の収集・読解・分析を行う。その際、史料解析の問題点を指摘し、データの整理の仕方を会得するよう努める。2 年次の終了時に、先行研究の問題点、研究テーマの問題の所在、論文全体の構想を明らかにした中間報告を行うものとする。

3 年次では、論文の構成、執筆上の問題点などを指摘しながら、論文の完成を目指す。その際、博士論文の構成と論述の仕方など、具体的な指導を行うこととする。

●事前・事後学習の内容

指導を受ける前においては入念な準備報告資料を用意し報告を行い、指導中に指導を受けた点について次回の指導までにきちんと研究を進めさせる。

●評価方法

出席（30%）と報告内容（70%）

●受講生へのコメント

各自の研究テーマを相対化し、オリジナリティを充分発揮できるようにしてください。

●参考文献・教材

随時紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LAWHW4701	開講期	単位数
D4	**西洋史学論文指導** Supervision of Doctoral Thesis in Western History			前後木 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大黒 俊二 教授／北村 昌史 教授			

●科目の主題

博士学位論文の作成指導。

●到達目標

学界が要求する水準の論文を完成することを目指す。

●授業内容・授業計画

1年次では、研究目的・方法を明確にし、博士論文の研究テーマの設定と研究計画の立案を行う。そのため基本的専門書・論文を収集・読解・分析し、史料の所在を確認・収集して、より高度な応用能力の会得を目指す。1年次終了時に、研究計画書を提出するものとする。

2年次では、研究計画に基づき史料の収集・読解・分析を行う。その際、史料解析の問題点を指摘し、データの整理の仕方を会得するよう努める。2年次の終了時に、先行研究の問題点、研究テーマの問題の所在、論文全体の構想を明らかにした中間報告を行うものとする。

3年次では、論文の構成、執筆上の問題点などを指摘しながら、論文の完成を目指す。その際、博士論文の構成と論述の仕方など、具体的な指導を行うこととする。

学生はそのテーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（大黒俊二教授） 主に、古代から中世に関する研究テーマに関わる博士論文の研究指導を行なう。

（北村昌史教授） 主に、近代から現代に関する研究テーマに関わる博士論文の研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

報告前に資料の作成法について教員の指導を受けること。報告後は報告内容に対する教員の指摘に従って論文内容を再考すること。

●評価方法

平常点（出席と研究報告）。

●受講生へのコメント

論文内容とともに口頭によるプレゼンテーションの方法にも工夫してほしい。

●参考文献・教材

随時指示。

人 間 行 動 学 専 攻

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBSOC4701	開講期	単位数
D5	社会学論文指導 Supervision of a Doctoral Thesis in Sociology			前後木 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 進藤 雄三 教授／石田 佐恵子 教授／伊地知 紀子 教授／ 川野 英二 教授			

●科目の主題

社会学の分野における博士論文の作成に必要な研究上の指導を行う。

●到達目標

社会学の分野における博士論文の作成・完成を目標とする。

●授業内容・授業計画

1 年次は、博士論文の研究課題を考察するために必要な社会学の理論の習得とともに、フィールド・ワークの方法、並びにデータ処理のための分析法に関する広範な知識と技能の習得に努める。このため、学生の研究課題に即した研究分野の専門書や学術論文の批判的検討を行わせ、研究課題に関する計画立案に向けた指導を行う。

2 年次は、博士論文の研究課題に関連する内外の論文の検討を行いながら、立案した調査計画に基づいて、文献収集、フィールド・ワークを実施し、得られた知見の整理とデータの分析を行う。

3 年次は、博士論文の研究課題のために行った調査結果をまとめ、博士論文の構成と論述の仕方などを具体的に指導し、博士論文を完成させる。

学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受ける。

●事前・事後学習の内容

事前学習：レジュメを作成しておく。

事後学習：指摘された点を確認する。

●評価方法

学生による博士論文の内容に関する報告を主な評価対象とする。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

随時指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBPSY4701	開講期	単位数
D6	心理学論文指導 Supervision of a Doctoral Thesis in Psychology			前後水 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 池上 知子 教授／山 祐嗣 教授			

●科目の主題

心理学の各分野のテーマに関する博士論文の作成に必要な基本的事項を指導し、博士論文の完成を目指す。

●到達目標

体系的で一貫性の高い長大な論文を作成する能力を形成する。

●授業内容・授業計画

1 年次は、博士論文の研究課題を考察するために必要な理論的知識の習得、実験・調査などの方法並びにデータ処理のための解析法に関する応用的な知識と技能の習得に努める。このため、各院生の研究課題に即した研究分野の専門書や学術論文の批判的検討を行わせ、研究課題に関する実験・調査の計画の立案に向けた指導を行う。

2 年次は、博士論文の研究課題に関連する国内外の論文の検討を行いながら、立案した研究計画に基づいて実験・調査を実施し、集められたデータの解析を行う。こうした研究遂行の指導を通して、博士論文の完成を目指す。

3 年次は、博士論文の研究課題のために行った実験・調査のデータをまとめ、博士論文の構成と論述の仕方などを具体的に指導し、博士論文を完成させる。

なお、学生は、各自の研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

〔池上知子教授〕 主に、社会的行動の基礎をなす認知と感情、自己と社会的アイデンティティなど、社会心理学並びに関連分野に関する博士論文の指導を行う。

〔山　祐嗣教授〕 主に、思考と推論、認知の文化差など、認知心理学並びに関連分野に関する博士論文の指導を行う。

●事前・事後学習の内容

受講者は、研究テーマに関連する文献や研究計画の発表、研究結果の中間報告を行うため、事前にレジメを準備する。授業時に受けたコメントや議論の内容を次回の発表に生かすように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

主体的に研究課題を遂行することを期待する。

●参考文献・教材

適宜、紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBEDU4701	開講期	単位数
D7	**教育学論文指導** Supervision of Doctoral Thesis in Education			前後月 4	12 単位
	授業形態 講義	担当教員名 柏木 敦 教授			

●科目の主題

教育学の各分野における学識を深め、かつ博士論文作成へ向けて指導を行う。

●到達目標

1 年次は、博士論文の研究課題遂行に必要な理論や方法に関する基礎的な知識と技能を習得する。

2 年次は、博士論文の研究課題遂行に必要な理論や方法に関する応用的・実際的な知識と技能を習得する。

3 年次は、博士論文の研究課題遂行によって得た研究結果をまとめ、博士論文の構成や論述の方法を習得する。

●授業内容・授業計画

1 年次は、博士論文の研究課題を考察するために必要な理論や調査などに関する基礎的な知識と技能の習得に努める。各院生の研究課題に即した研究分野の専門書・学術論文の批判的検討を行い、研究課題に関する調査計画の立案に向けた指導を行う。また、研究成果の学会発表や学術雑誌への投稿について基本的な指導を行う。

2 年次は、博士論文の研究課題に関する内外の論文の検討を行いながら、立案した研究計画に基づいて、文献収集・フィールドワークを実施し、集めたデータや資料の分析を行う。こうした研究遂行を通して、博士論文の完成を目指す。1 年次に引き続いて、研究発表及び論文投稿について指導する。

3 年次は、博士論文の研究課題のために行った調査結果をまとめ、博士論文の構成と論述の仕方などを具体的に指導し、博士論文を完成させる。必要に応じて、研究発表ならびに論文投稿について指導する。学生はその研究テーマに応じて教員の指導を受けるものとする。

●事前・事後学習の内容

個別に指示する。

●評価方法

平常点で行う。特に、学会での研究発表、学会誌投稿への努力や成果を考慮する。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

特になし。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LBGEO4701	開講期	単位数
D8	**地理学論文指導** Preparation for Doctoral Thesis in Geography			前後火 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 大場 茂明 教授／水内 俊雄 教授／山﨑 孝史 教授／ 祖田 亮次 教授			

●科目の主題

博士論文作成に必要な研究指導を行う。

●到達目標

1 年次は、博士論文の研究課題を確定し、課題の考察に必要な方法論の習得とともに、フィールドワークの技法

やデータ処理のための分析手法を身につけることに重点を置く。このため、院生の研究課題に即した専門分野の学術書や論文の批判的研究を行いつつ、研究・調査計画の立案に向けた指導を行う。

2 年次は、博士論文の研究課題に関連する内外の論文の検討を行いながら、立案した研究計画に基づいて資料収集とフィールドワークを実施し、得られた資料・データの整理と分析を行う。こうした研究遂行の指導を通じて、博士論文の完成をめざす。

3 年次は、博士論文の研究課題のために行った調査結果をまとめ、論文の構成と論述の仕方などを具体的に指導し、博士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

受講者の専門分野に応じて指導担当教員を定め、個別指導を行う。担当教員の主たる指導分野は下記の通りである。

（大場茂明教授） 主に地域地理学、都市政策に関する博士論文の指導を行う。
（水内俊雄教授） 主に都市地理学、社会地理学に関する博士論文の指導を行う。
（山崎孝史教授） 主に政治地理学、地域研究に関する博士論文の指導を行う。
（祖田亮次教授） 主に環境地理学、資源論に関する博士論文の指導を行う。

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、指導教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、指導の終了後には、指摘されたコメントをもとに研究計画の修正を行い、次回の報告に備えること。

●評価方法

研究成果の蓄積と発表状況による。

●受講生へのコメント

所定の在学年限内に博士論文を提出できるよう研究計画を立てて、着実に成果を蓄積してほしい。

●参考文献・教材

言 語 文 化 学 専 攻

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCJPN4701	開講期	単位数
D9	**国語国文学論文指導** Thesis Guidance in Japanese Language and Literature			前後木 5	12 単位
	授業形態 個別指導または演習	担当教員名 丹羽 哲也 教授／小林 直樹 教授／久堀 裕朗 教授			

●科目の主題

国語学・国文学の博士論文作成のための指導を行う。

●到達目標

博士論文を完成する。

●授業内容・授業計画

1 年次は、博士論文のために必要な方法論、調査や分析の進め方などに関する知識や技能の習得をはかる。先行の研究理論や研究成果について批判的に検討を加えるとともに、それぞれの研究計画の立案に向けた指導を行う。

2 年次は、各人の主題と方法に応じて先行の研究理論や研究成果について批判的に検討を加えるとともに、それぞれの研究計画の具体化に向けた指導を行う。

3 年次は、各人の主題と方法に応じて、学会の水準と最新の成果を踏まえて、それぞれの研究計画の実現をはかる。

学生はそれぞれの研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（小林直樹教授・久堀裕朗教授） 国文学に関する指導を行う。

（丹羽哲也教授） 国語学に関する指導を行う。

●事前・事後学習の内容

研究テーマについての考察を深め、博士論文を完成させる。

●評価方法

平常点や研究報告による。

●受講生へのコメント

指導教員に指導を受けるのは当然だが、それだけでなく、外部で積極的に研究発表を行い、自らを客観的に見つめる機会を持つようにすること。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCCHN4701	開講期	単位数
D10	**中国語中国文学論文指導** Thesis Guidance in Chinese Language and Literature			前後月 1	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 松浦 恆雄 教授／岩本 真理 教授／張 新民 教授			

●科目の主題

中国語・中国文学に関わる博士論文作成のための指導。

●到達目標

各自が博士論文執筆に向けて解決しなければならない諸課題を取り上げ、3 年間で博士論文を書き上げることができるよう指導する。

●授業内容・授業計画

1 年次は、修士論文で扱った課題の達成状況を確認し、それを踏まえて新たな研究課題を設定し、文献の読解、資料の調査、整理に当たらせる。一方で、修士論文の内容を整理させ、学術論文として公表させる。その作業を通じて、学術論文の書き方の指導も行う。また、関連する学会における口頭発表も行わせる。

2 年次は、1 年次に取り組んだ新しい課題に関して問題点を整理させ、主要なテーマを絞って、学術論文として公表させる。その作業を通じて、新たなテーマに到達するよう指導する。

3 年次は、2 年次に得た新たなテーマについて研究を進め、学術論文としてまとめさせる一方、これまでの研究を総合する形での課程博士論文の執筆に当たらせる。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（松浦恆雄教授） 中国近現代分野の課題に関する論文指導を行う。

（岩本真理教授） 中国語学分野の課題に関する論文指導を行う。
（張　新民教授） 中国文化学分野の課題に関する論文の指導を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、前回の指導内容を踏まえて、論文執筆のための報告内容をしっかり用意すること。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCENG4701	開講期	単位数
D11	**英語英米文学論文指導** Supervision of Doctoral Thesis in English and American Language and Literature			前後水 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 杉井 正史 教授／田中 孝信 教授			

●科目の主題

英語圏の文学・文化に関する博士論文作成の指導。

●到達目標

博士論文の完成。

●授業内容・授業計画

1 年次は博士論文の研究テーマを設定させ、論文作成のために必要な先行研究の評価法、アイデア提示の方法などを指導する。

2 年次は、選択した研究テーマがいっそう明確なものとなるよう指導し、博士論文の構築法と精密な分析法を習得させ、中間発表の場を設けて相互批判の場とする。

3 年次は、博士論文作成の過程を見ながら、草稿の検討や推敲を通じ、個別に綿密な指導を行ない、論文を完成させる。また、学会発表や紀要への投稿等の形で研究発表を行なわせる。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（杉井正史教授） 英文学、特に演劇に関する博士論文作成のための指導を行なう。
（田中孝信教授） 英文学、特に小説に関する博士論文作成のための指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

授業までに、指定された学術論文等の教材内容を詳細に把握し、それに対する自分の意見を批判的にまとめ、ハンドアウトを用いて発表できるように準備しておくこと。授業後は、教員や他の受講生の見解を咀嚼することで、自らの思考方法の問題点を整理した上で、関連文献を渉猟しながら論展開をより説得力のあるものにしなければならない。そうした訓練を積むことで、質の高い博士論文の作成が叶うのである。そのためには、各授業の前後にそれぞれ3時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

研究報告・平常点。

●受講生へのコメント

積極的な学会発表や論文投稿を通じて着実に業績を積み重ねるように希望する。

●参考文献・教材

指導の過程で適宜指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCDFX4701	開講期	単位数
D14	**ドイツ語フランス語圏言語文化学論文指導** Thesis Guidance in German French Language and Literature			前後木 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 神竹 道士 教授／福島 祥行 教授			

●科目の主題

ドイツ語圏およびフランス語圏の文学・語学・文化の分野における博士論文の作成に必要な研究上の指導を行う。

●到達目標
博士論文を完成に至らしめる。
●授業内容・授業計画
1 年次は博士論文の研究テーマを設定し、それに関わる問題意識を熟成させていく。このためにテーマに関わるテクストの精読を行い、関連する文献を収集し検討する。また各種研究方法についての検討も行う。こうして論文の一部をなす、あるいは論文の基礎となるような予備研究を仕上げる。
2 年次は、さらに研究テーマを明確にし、論文の構成について概略を定め、一貫性のある研究方法を取りつつ論文作成の作業に取りかかる。そして博士論文の一部分をなす研究を仕上げる。
3 年次は、1・2 年次の研究成果をもとに研究テーマを体系的な形で論述し、博士論文として完成させる。この間 3 年間にわたって、研究テーマと研究方法、さらに論の構成や論述の仕方に至るまで、論文作成の指導を行う。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。
（神竹道士教授）ドイツ語圏学に関して、言語分析におけるさまざまな理論や視点をふまえた上で、広い視野に立った博士論文が完成できるよう、適切な指導を行う。
（福島祥行教授）フランス語圏学に関して、社会的、文化的、歴史的問題意識をもち、広い視野に立った博士論文が完成できるよう、適切な指導を行う。
●事前・事後学習の内容
事前に発表の準備をすること、および、事後のふりかえり等により、1 回の授業あたり 2 時間以上の自習時間をとること。
●評価方法
平常点とレポートにより、総合的に評価する。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
適宜、参考文献を紹介する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG4701	開講期	単位数
D15	言語情報学論文指導 Supervision of a Doctoral Thesis in Linguistics and Language Processing			前後水 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 関 茂樹 教授／井狩 幸男 教授／山崎 雅人 教授／田中 一彦 教授			

●科目の主題
言語構造論・神経心理言語学・語用論・英語語法研究などを研究する人材育成のため、博士論文の作成指導だけでなく、関連する様々な研究活動についても助言・指導を行う。
●到達目標
各自のテーマに基づいた論文を作成し、指導教員による助言と指導による研究活動を行う。
●授業内容・授業計画
第 1 年次初期には、修士論文などを参考にしながら、学生が後期博士課程において研究すべき内容について指導し、博士論文作成にかかわる 3 年間の研究計画を立てさせる。
第 1 年次の後半および第 2 年次には、博士論文作成に必要な理論、文献などについて指導し、論文作成の過程を見ながら、各要所で学術的な議論構築の方法について助言する。
第 3 年次には論文草稿を読んで長所短所を指摘し、全面推敲させるという過程を繰り返す。その間、論文内容にかかわる先行研究について」さらに学ばせ、充実した論文の完成へ導く。学生はその研究テーマに応じて、下記のいずれかの教員の指導を受けるものとする。
（関　茂樹教授）主に語用論の分野のテーマについて、関連する先行研究と重要な文献について指導し、当該の分野に貢献する論文が完成できるように、指導を行う。
（井狩幸男教授）神経心理言語学の立場から、母語獲得、第二言語習得、バイリンガリズム、失語症、失読症など、さまざまな言語現象を通して、人間にとってことばとは何かという問題を検討し、同時に、ことばの応用を探る研究の指導を行う。
（山崎雅人教授）言語類型論と認知言語学の視点から諸言語の多様性を貫く原理の分布状況を考察し、様々なデータを一貫した論理に基づいて分析する論考を構築できるように指導する。
（田中一彦教授）伝統的な言語理論を考慮しつつ、現代の代表的な言語理論を考察する。主に、小説・新聞・雑誌などを言語資料として、特定の言語現象を意味論、語用論、さらには談話といった多角的側面から分析できるように指導する。

●事前・事後学習の内容
受講に際しては、指導教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、指導の終了後には、指摘されたコメントをもとに論文の改良に努めること。
●評価方法
平常点による。
●受講生へのコメント
各自の研究テーマに関して、できるだけ多様な角度から考察することを目標としたい。
●参考文献・教材
担当教員が個別に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCLNG4702	開講期	単位数
D16	言語応用学論文指導 Supervision of a Doctoral Thesis in Linguistics Applied			前後水 5	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 関 茂樹 教授／井狩 幸男 教授／山崎 雅人 教授／田中 一彦 教授			

●科目の主題
言語構造論・神経心理言語学・語用論・英語語法研究などを研究する人材育成のため、博士論文の作成指導だけでなく、関連する様々な研究活動についても助言・指導を行う。
●到達目標
各自のテーマの設定と今後の研究方針の決定。
●授業内容・授業計画
第 1 年次初期には、修士論文などを参考にしながら、学生が後期博士課程において研究すべき内容について指導し、博士論文作成にかかわる 3 年間の研究計画を立てさせる。
第 1 年次の後半および第 2 年次には、博士論文作成に必要な理論、文献などについて指導し、論文作成の過程を見ながら、各要所で学術的な議論構築の方法について助言する。
第 3 年次には論文草稿を読んで長所短所を指摘し、全面推敲させるという過程を繰り返す。その間、論文内容にかかわる先行研究について」さらに学ばせ、充実した論文の完成へ導く。学生はその研究テーマに応じて、下記のいずれかの教員の指導を受けるものとする。
（関　茂樹教授）主に語用論の分野のテーマについて、関連する先行研究と重要な文献について指導し、当該の分野に貢献する論文が完成できるように、指導を行う。
（井狩幸男教授）神経心理言語学の立場から、母語獲得、第二言語習得、バイリンガリズム、失語症、失読症などにおいて観察されるさまざまな言語現象を通して、人間にとって言語とは何かという問題を検討し、同時に、言語への応用を探る研究の指導を行う。
（山崎雅人教授）言語類型論と認知言語学の視点から諸言語の多様性を貫く原理の分布状況を考察し、様々なデータを一貫した論理に基づいて分析する論考を構築できるように指導する。
（田中一彦教授）伝統的な言語理論を考慮しつつ、現代の代表的な言語理論を考察する。主に、小説・新聞・雑誌などを言語資料として、特定の言語現象を意味論、語用論、さらには談話といった多角的側面から分析できるように指導する。
●事前・事後学習の内容
受講に際しては、指導教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、指導の終了後には、指摘されたコメントをもとに論文の改良に努めること。
●評価方法
平常点による。
●受講生へのコメント
各自の研究テーマに関して、できるだけ多様な角度から考察することを目標としたい。
●参考文献・教材
担当教員が個別に指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LCART4701	開講期	単位数
D17	**表現文化学論文指導** Supervision of a Doctoral Thesis in Cultural Studies			前後金 4	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野末 紀之 教授／三上 雅子 教授／小田中 章浩 教授			

●科目の主題

博士論文作成に関する指導を行う。

●到達目標

博士論文執筆に必要な知見を習得させ、博士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

1 年次は、研究課題を決定し、論文作成のために必要な理論や、文献・資料の調査・研究の方法を学ばせる。また修士論文の内容をさらに発展させて論文にまとめ、学会誌への執筆・学会等での発表を指導する。

2 年次は、1 年次で学んだことをふまえて、博士論文の作成にむけて具体的な計画を提出させる。研究課題に関する多数の論文等を比較検討し、独自の明確な論点を定め、一貫した研究方法で論文作成に取り掛かるよう指導する。博士論文の一部を公表させる。

3 年次は、論文の作成に即して、構成や論述の仕方等について具体的に指導を行う。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（三上　雅子教授） 日本現代演劇と欧州演劇の比較研究、特に戯曲を読むだけでなく、実際の上演・受容に即した比較研究を指導する。また現代日本の表象文化の指導も行う。

（小田中章浩教授） 現代フランス演劇、19 世紀から 20 世紀にかけてのフランスを中心とした現代西洋の表象文化、および日本と西洋に共通した演劇のテーマ的研究（復讐と演劇、アウトローと演劇など）について、研究指導を行う。

（野末　紀之教授） 19 世紀末以後のイギリスを中心とする西欧文化におけるジェンダーおよびセクシュアリティの表現にかんして研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

発表担当者は、各発表のための事前（レジュメ作成を含む）および事後学習に、4 時間程度を要する。

●評価方法

授業中の発表によって評価する。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

適宜指示する。

アジア都市文化学専攻

掲載№	授業科目名	科目 NO.	開講期	単位数
D18	アジア都市文化学論文指導 Supervision of Doctoral Thesis in Asian Culture and Urbanism	LDASA4701	前後月 1	12 単位
	授業形態 演習	担当教員名 野崎 充彦 教授／多和田 裕司 教授／菅原 真弓 教授		

●科目の主題

アジア都市文化学に関する博士論文作成に向けての研究指導を行う。

●到達目標

1 年次は、博士論文の研究課題を考察するために必要な研究方法を確立させる。文献研究、フィールドワークに加えて、感性論的方法、対話的方法などによって自分の研究課題に即した研究の計画を立案させ、立案した計画に基づいて、アジア諸国・諸地域の調査・研究機関のもとで、文献収集やフィールドワークを実施させる。

2 年次は、集められたデータや資料の分析を行わせ、研究発表や学会発表を重ねて論文作成の構想を練る。

3 年次は、博士論文の作成のために行った調査結果に基づき、論文の構成と論述の仕方などを具体的に指導し、博士論文をまとめさせる。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

●授業内容・授業計画

〈比較文化領域〉

（野崎　充彦教授）韓国・朝鮮文化に関する研究テーマを追求するうえで、歴史的・文化的に関わりの深い中国・日本との比較的視野を保持し、現代日本においてコリア文化研究に携わる意義についての自覚を促しつつ、個性的な研究成果をめざす。

（多和田裕司教授）主に、東南アジアの地域文化論、宗教文化論に関する博士論文の指導を行う。

（菅原　真弓教授）主に近現代の日本の芸術文化に関する博士論文の指導を行う。

●事前・事後学習の内容

指導教員の指示に従い、事前にレジュメなどの資料を作成したうえで授業に臨み、指導に従って適宜、内容を修正し、報告すること。

●評価方法

平常点によって評価を行う。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

授業内で指示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	開講期	単位数
D19	アジア比較文化学特論 I Comparative Study of Asian Culture	LDASA4702	後月 5	2 単位
	授業形態 講義	担当教員名 野崎 充彦 教授		

●科目の主題

韓国の宗教文化

●到達目標

韓国文化を宗教の側面からアプローチする。

●授業内容・授業計画

仏教・儒教・シャーマニズムなど、伝統的な宗教文化の過去と現在に対する包括的な理解をめざす。

●事前・事後学習の内容

事前配布の資料には必ず目を通し、質疑応答に備えること。

疑問点は授業中に解決し、レポート作成に反映させること。

●評価方法

出席とレポート

●受講生へのコメント

文献のみならず、フィールドワークも重視するので、全身の感覚を研ぎ澄ますことが求められる。

●参考文献・教材
随時、提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA4704	開講期	単位数
D20	アジア都市文化学特論Ⅰ Study of Urban Culture in Asia Ⅰ			後火 3	2 単位
	授業形態 講義 + 演習	担当教員名 菅原 真弓 教授			

●科目の主題
日本の文化史、主に美術の歴史をテーマとする。その際、対外関係、特にアジア諸国との関係性を重視する。
●到達目標
アジアの中の日本であることを意識した上で、日本文化についての理解を深める。
●授業内容・授業計画
日本美術に関する現在の研究について紹介し、課題論文を提示する。受講者はこれを精読し、各回の担当者が論文内容について報告を行い、これについて教員が解説する。なお受講生の研究テーマも鑑み、なるべく研究に益する方向性の論文を課題とすることにする。詳細は第一回目の授業時に相談。
●事前・事後学習の内容
事前に課題論文の精読を各自行っておくこと。また、各回の受講者による報告に際して質問、意見等が発信できるよう予習をしておくこと。事後は課題論文の内容や方法論を自らの研究テーマに生かせるよう検討する。
●評価方法
出席とレポート
●受講生へのコメント
自らの研究テーマとは離れた分野となるかもしれないが、自らが現在住まう国・日本の文化に関する理解を深めることで、研究に生かしてほしいと願っている。

●参考文献・教材
授業内で指示あるいは提示する。

掲載№	授業科目名	科目 NO.	LDASA4705	開講期	単位数
D21	アジア都市文化学特論Ⅱ Study of Urban Culture in Asia Ⅱ			後火 2	2 単位
	授業形態 演習	担当教員名 多和田 裕司 教授			

●科目の主題
東南アジアにおける宗教についての文化人類学ならびに隣接分野の最新の研究動向を把握する。とくに近年の経済発展にともなう東南アジア都市社会の変容を視野に入れながら、消費社会と宗教実践の相関、市民社会における宗教の制度化、ナショナリズムと宗教実践などについて検討する。
●到達目標
受講者に東南アジア宗教研究の最新の動向を把握させるとともに、先行研究にたいする批判的読解力を身につけさせる。
●授業内容・授業計画
上記主題に即した英語の文献を演習形式で読み進める。各回の授業は受講生による文献内容の報告、教員による解説、全員での討論によって進めていく。文献の選択は、受講生の研究テーマも考慮した上で、第 1 回目の授業時に決定する。
●事前・事後学習の内容
課題文献を熟読し、論点の整理や問題点の洗い出し、自らの研究テーマとの関連の上での評価などを行っておくこと。
●評価方法
平常点によって評価を行う。
●受講生へのコメント
受講希望者は授業についての打ち合わせを行うので、必ず事前に多和田まで連絡すること。
●参考文献・教材
授業中に指示する。

Appendix

●教員名簿

教員研究室電話番号／メールアドレス

●教室見取り図

●杉本キャンパスマップ

教 員 名 簿

平成 29 年 4 月 1 日現在

1．氏名の配列は、専修ごとに専任教員、特任教員とし、非常勤講師は五十音順とした。
2．専任教員の氏名の順は、職階別に年齢順とし、非常勤講師の氏名の順は五十音順とした。
3．備考欄には、研究科長、評議員、教務委員、学生担当委員、専修代表を記入した。

氏　名	職　名	教員研究室 電話番号	メールアドレス	備　考
哲 学 教 室				
専　任				
仲 原　孝	教　授	06-6605-2358	nakahara.nvz@nifty.com	
高 梨 友 宏	教　授	06-6605-2365	takanash@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
土 屋 貴 志	准教授	06-6605-2356	tsuchiya@lit.osaka-cu.ac.jp	
佐 金　武	講　師	06-6605-2361	sakon@lit.osaka-cu.ac.jp	
日本史学教室				
専　任				
塚 田　孝	教　授	06-6605-2390	tsukada@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
仁 木　宏	教　授	06-6605-2391	niki@lit.osaka-cu.ac.jp	研究科長
岸 本 直 文	教　授	06-6605-2395	kishimot@lit.osaka-cu.ac.jp	
佐 賀　朝	教　授	06-6605-2398	a-saga@lit.osaka-cu.ac.jp	
磐 下　徹	准教授	06-6605-2393	iwashita@lit.osaka-cu.ac.jp	
東洋史学専修				
専　任				
平 田 茂 樹	教　授	06-6605-2394	hirata@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
野 村 親 義	准教授	06-6605-2396	nomura@lit.osaka-cu.ac.jp	
上 野 雅由樹	准教授	06-6605-2397	mueno@lit.osaka-cu.ac.jp	
井 上　徹	教　授	06-6605-2399	inouet@lit.osaka-cu.ac.jp	
（大阪市立大学理事兼副学長）		06-6605-2003	t-inoue@ado.osaka-cu.ac.jp	
西洋史学専修				
専　任				
大 黒 俊 二	教　授	06-6605-2401	ooguro@lit.osaka-cu.ac.jp	
北 村 昌 史	教　授	06-6605-2378	kitamasa@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
草 生 久 嗣	准教授	06-6605-2438	kusabu@lit.osaka-cu.ac.jp	

氏　　名	職　名	教員研究室 電話番号	メールアドレス	備　　考
社会学教室				
専　任				
進藤雄三	教　授	06-6605-2368	shindou@lit.osaka-cu.ac.jp	
石田佐恵子	教　授	06-6605-2367	ishita@lit.osaka-cu.ac.jp	
伊地知紀子	教　授	06-6605-2370	ijichi@lit.osaka-cu.ac.jp	
川野英二	教　授	06-6605-2366	kawano@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
笹島秀晃	講　師	06-6605-2371	sasajima@lit.osaka-cu.ac.jp	
心理学教室				
専　任				
池上知子 （大阪市立大学副学長）	教　授	06-6605-2376	ikegami@lit.osaka-cu.ac.jp	
山　祐嗣	教　授	06-6605-2377	yama@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
川邉光一	准教授	06-6605-2380	kawabe@lit.osaka-cu.ac.jp	教務委員
佐伯大輔	准教授	06-6605-2373	saeki@lit.osaka-cu.ac.jp	
教育学教室				
専　任				
柏木　敦	教　授	06-6605-2388	kashiwag@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
添田晴雄	准教授	06-6605-2466	soeda@lit.osaka-cu.ac.jp	
森　久佳	准教授	06-6605-2461	hmori@lit.osaka-cu.ac.jp	
島田　希	准教授	06-6605-2359	nshimada@lit.osaka-cu.ac.jp	教務委員
地理学教室				
専　任				
大場茂明	教　授	06-6605-2402	oba@lit.osaka-cu.ac.jp	
山﨑孝史	教　授	06-6605-2407	yamataka@lit.osaka-cu.ac.jp	
祖田亮次	教　授	06-6605-2453	soda@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
木村義成	准教授	06-6605-2404	yoshi@lit.osaka-cu.ac.jp	
水内俊雄 （大阪市立大学都市研究プラザ教授）	教　授	06-6605-2406	mizuuchi@lit.osaka-cu.ac.jp	

氏　　名	職　名	教員研究室 電話番号	メールアドレス	備　　考
国語国文学教室				
専　　任				
丹　羽　哲　也	教　授	06-6605-2410	niwa@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
小　林　直　樹	教　授	06-6605-2409	kobayasn@lit.osaka-cu.ac.jp	副研究科長
久　堀　裕　朗	教　授	06-6605-2412	kubori@lit.osaka-cu.ac.jp	
奥　野　久美子	准教授	06-6605-2414	okuno@lit.osaka-cu.ac.jp	
山　本　真由子	講　師	06-6605-2413	yamamoto@lit.osaka-cu.ac.jp	
中国語中国文学教室				
専　　任				
松　浦　恆　雄	教　授	06-6605-2421	daaibaanyan@yahoo.co.jp	専修代表
岩　本　真　理	教　授	06-6605-2418	ybzljp@yahoo.co.jp	
張　　新　民	教　授	06-6605-2415	cho@lit.osaka-cu.ac.jp	
大岩本　幸　次	准教授	06-6605-3054	ooiwamot@lit.osaka-cu.ac.jp	
英語英米文学教室				
専　　任				
杉　井　正　史	教　授	06-6605-2433	sugiim@lit.osaka-cu.ac.jp	
田　中　孝　信	教　授	06-6605-2435	tanakat@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
イアン・リチャーズ (Ian, RICHARDS)	准教授	06-6605-2436	richard@lit.osaka-cu.ac.jp	
古　賀　哲　男	准教授	06-6605-2437	koga@lit.osaka-cu.ac.jp	
豊　田　純　一	准教授	06-6605-2428	toyotaj@lit.osaka-cu.ac.jp	
ドイツ語フランス語圏言語文化学教室				
専　　任				
神　竹　道　士	教　授	06-6605-2450	kamitake@lit.osaka-cu.ac.jp	学生担当委員
髙　井　絹　子	准教授	06-6605-2446	takai@lit.osaka-cu.ac.jp	
長谷川　健　一	講　師	06-6605-2447	hasek@lit.osaka-cu.ac.jp	
福　島　祥　行	教　授	06-6605-2454	fukushim@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表・教務委員長
白　田　由　樹	准教授	06-6605-2458	shirata@lit.osaka-cu.ac.jp	
原　野　葉　子	准教授			
特任教員				
ジモン・エルトレ (Simon, OERTLE)	特任講師			
ロラン・バレイユ (Laurent, BAREILLE)	特任講師			

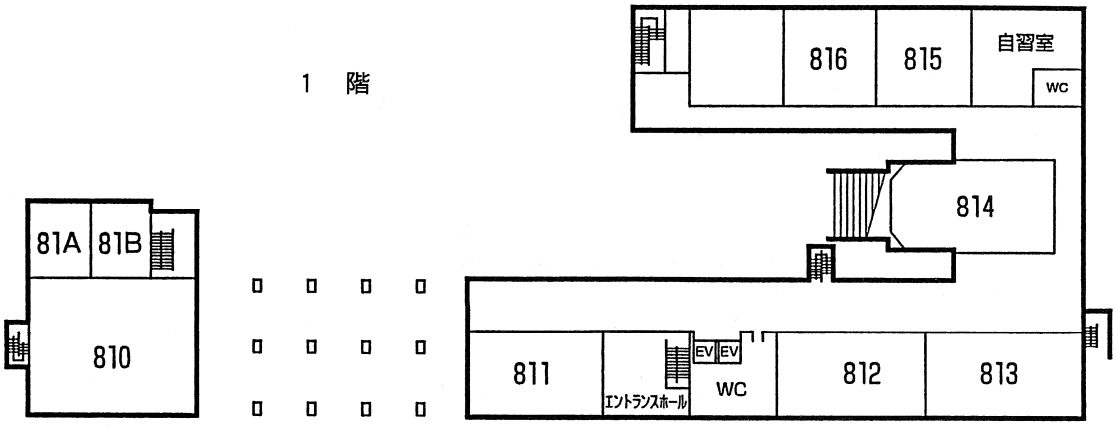
氏　　名	職　名	教員研究室 電話番号	メールアドレス	備　　考
言語応用学教室				
専　　任				
関　　茂　樹	教　授	06-6605-2422	sekis@lit.osaka-cu.ac.jp	学生担当委員
井　狩　幸　男	教　授	06-6605-2423	ikari@lit.osaka-cu.ac.jp	
山　崎　雅　人	教　授	06-6605-2416	yamazaki@lit.osaka-cu.ac.jp	
田　中　一　彦	教　授	06-6605-2467	tanakak@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
表現文化学教室				
専　　任				
三　上　雅　子	教　授	06-6605-2449	mikamimasako@hotmail.com	
小田中　章　浩	教　授	06-6605-2456	odanaka@lit.osaka-cu.ac.jp	
野　末　紀　之	教　授	06-6605-2425	nozue@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
高　島　葉　子	准教授	06-6605-2434	takashim@lit.osaka-cu.ac.jp	
海老根　　剛	准教授	06-6605-2386	ebine@lit.osaka-cu.ac.jp	
特任教員				
江　村　　公	特　任 講　師			
アジア都市文化学教室				
専　　任				
野　崎　充　彦	教　授	06-6605-2465	nozaki@lit.osaka-cu.ac.jp	専修代表
多和田　裕　司	教　授	06-6605-2375	tawada@lit.osaka-cu.ac.jp	教育研究評議会委員
菅　原　真　弓	教　授			
堀　　まどか	准教授	06-6605-2198	horimado@lit.osaka-cu.ac.jp	
増　田　　聡	准教授	06-6605-2457	masuda@lit.osaka-cu.ac.jp	
天　野　景　太	准教授	06-6605-2403	amano@lit.osaka-cu.ac.jp	

非常勤講師

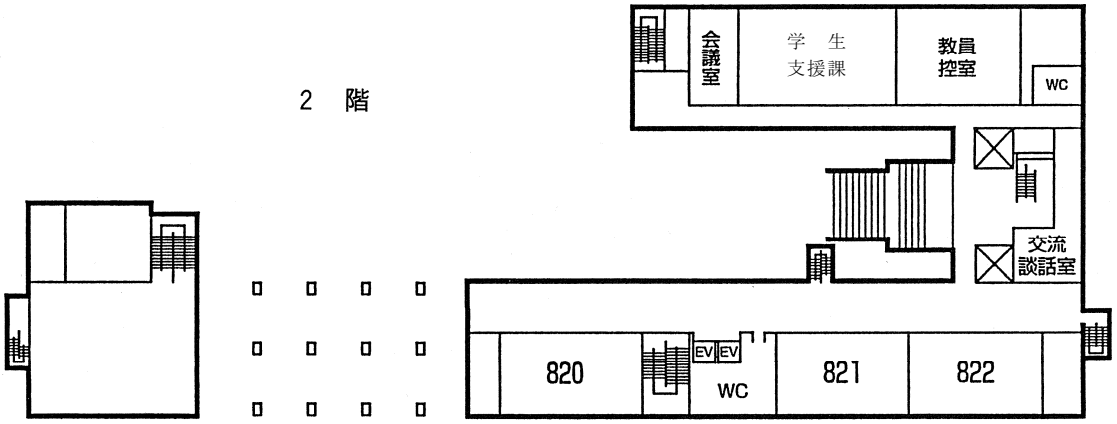
網　　伸　也	近畿大学文芸学部教授 日本史学研究Ⅴ
上　垣　　豊	龍谷大学法学部教授 西洋史学研究Ⅴ
大清水　　裕	滋賀大学教育学部准教授 西洋史学研究演習１
小野沢　あかね	立教大学文学部教授 日本史学研究Ⅵ
粕　谷　雄　一	金沢大学国際関係学類教授 地域社会文化学研究Ⅱ
佐　藤　廉　也	大阪大学大学院文学研究科教授 人間行動学研究Ⅳ
竹　内　　誠	京都外国語大学教授 中国文献文化学研究Ⅱ
辻　野　けんま	上越教育大学大学院准教授 教育学特殊問題研究Ⅰ　教育学特殊問題研究演習１
土　居　伸　彰	株式会社ニューディアー代表取締役 表現文化学特殊研究
永　田　拓　治	阪南大学准教授 東洋史学研究Ⅴ
長　縄　宣　博	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授 東洋史学研究Ⅵ
成　田　健　一	関西学院大学文学部教授 人間行動学研究Ⅱ
橋　爪　紳　也	大阪府立大学21世紀科学研究機構特別教授 アジア都市文化学特講1
廣　瀬　千　一	大阪市立大学非常勤講師 ドイツ語圏文学研究演習2
藤　代　裕　之	法政大学社会学部准教授 社会学特殊問題研究Ⅳ
藤　原　　翔	東京大学社会科学研究所准教授 社会学特殊問題研究Ⅴ
水　谷　　隆	大阪女子短期大学幼児教育科准教授 国語国文学研究　国語国文学研究演習
山　根　　聡	大阪大学大学院言語文化研究科教授 世界史学研究演習
湯　浅　恭　正	中部大学教授 人間行動学研究Ⅲ
脇　坂　真　弥	大谷大学文学部准教授 西洋哲学史研究
LAI Wai Ling	名古屋大学准教授 国際都市文化論Ⅰ
Raymond G.Langley	大分大学准教授 国際都市文化論Ⅰ
渡　邊　克　昭	大阪大学大学院言語文化研究科教授 英米言語文化論

全 学 共 通 教 育 棟

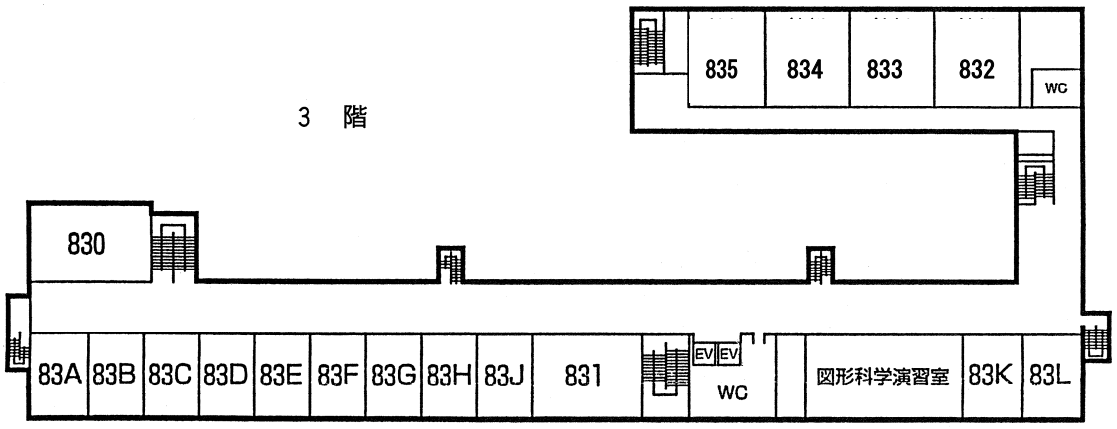
1 階



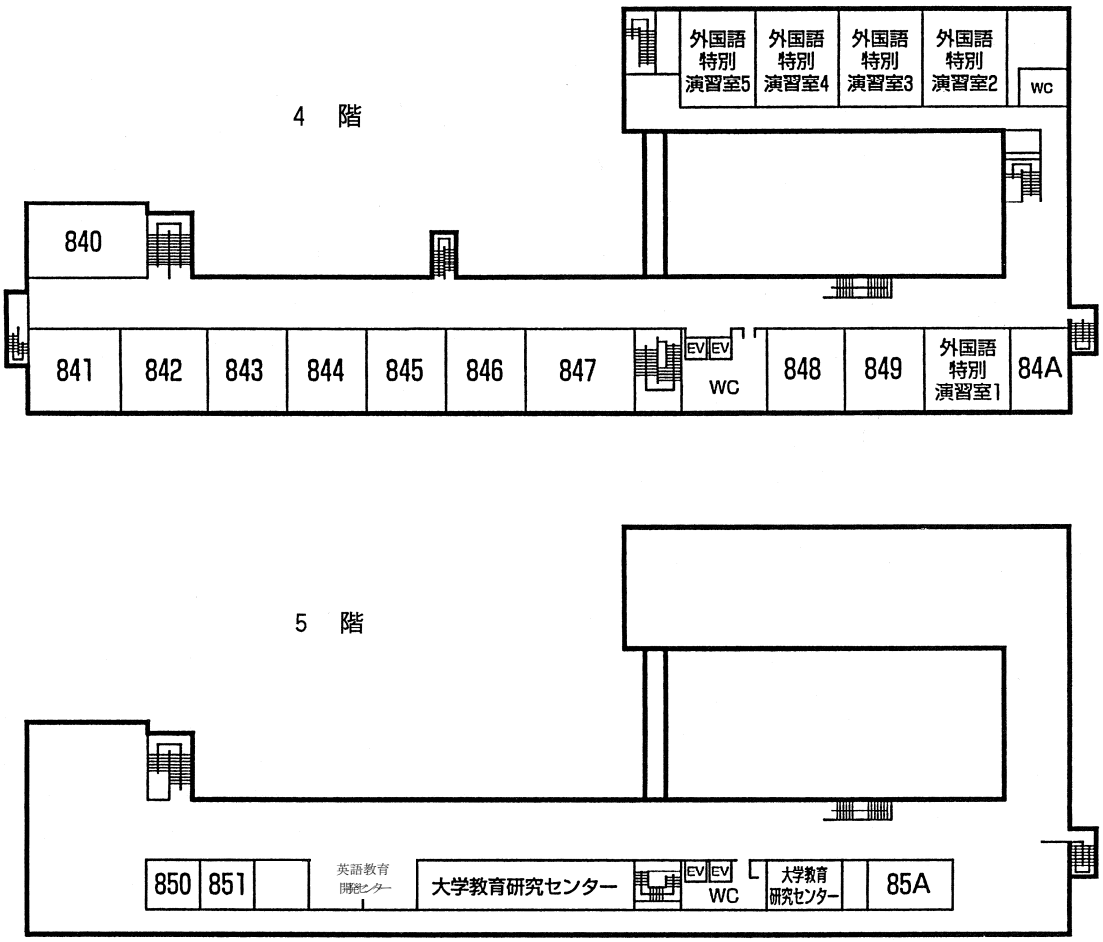
2 階



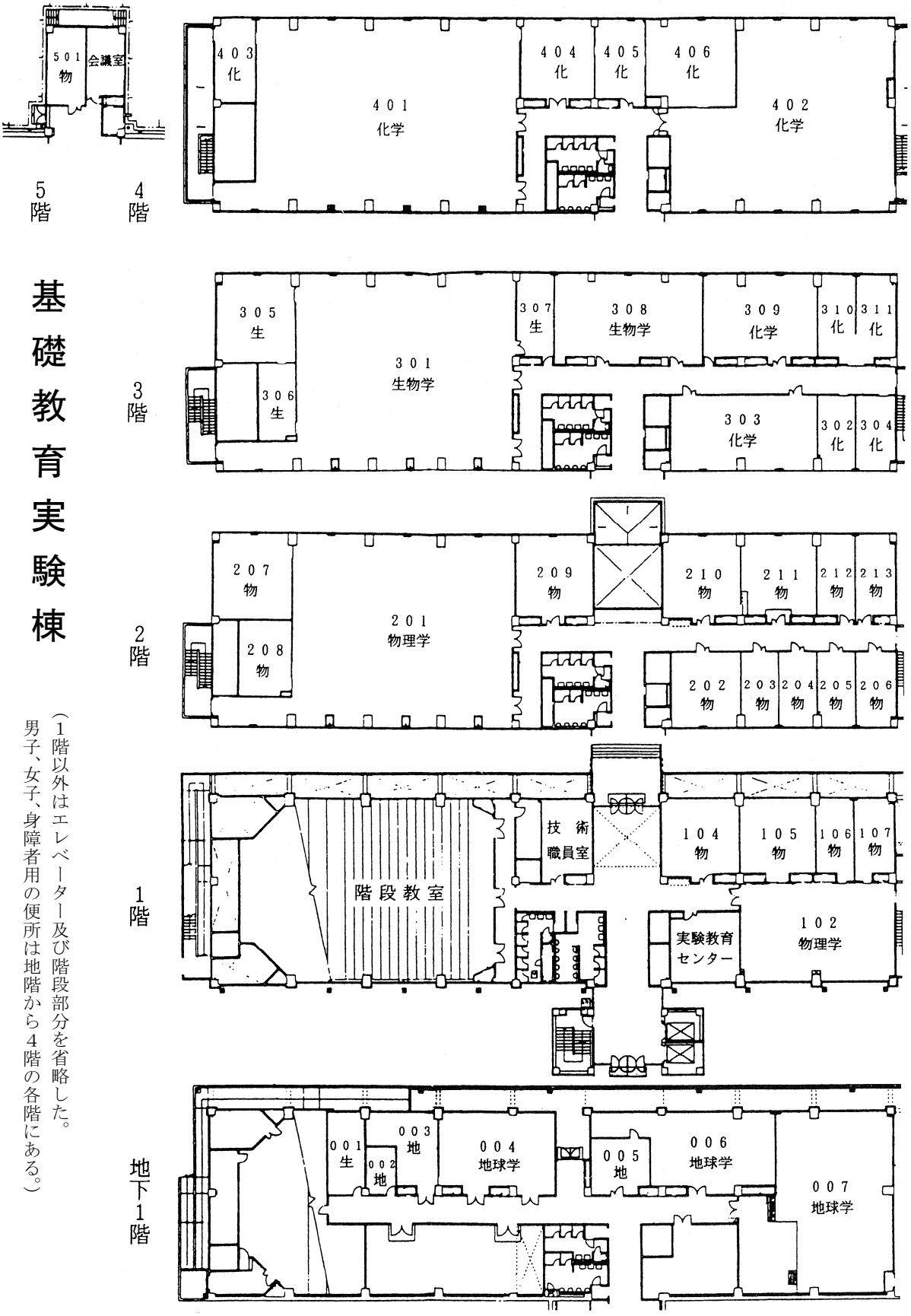
3 階



各　教　室　見　取　図

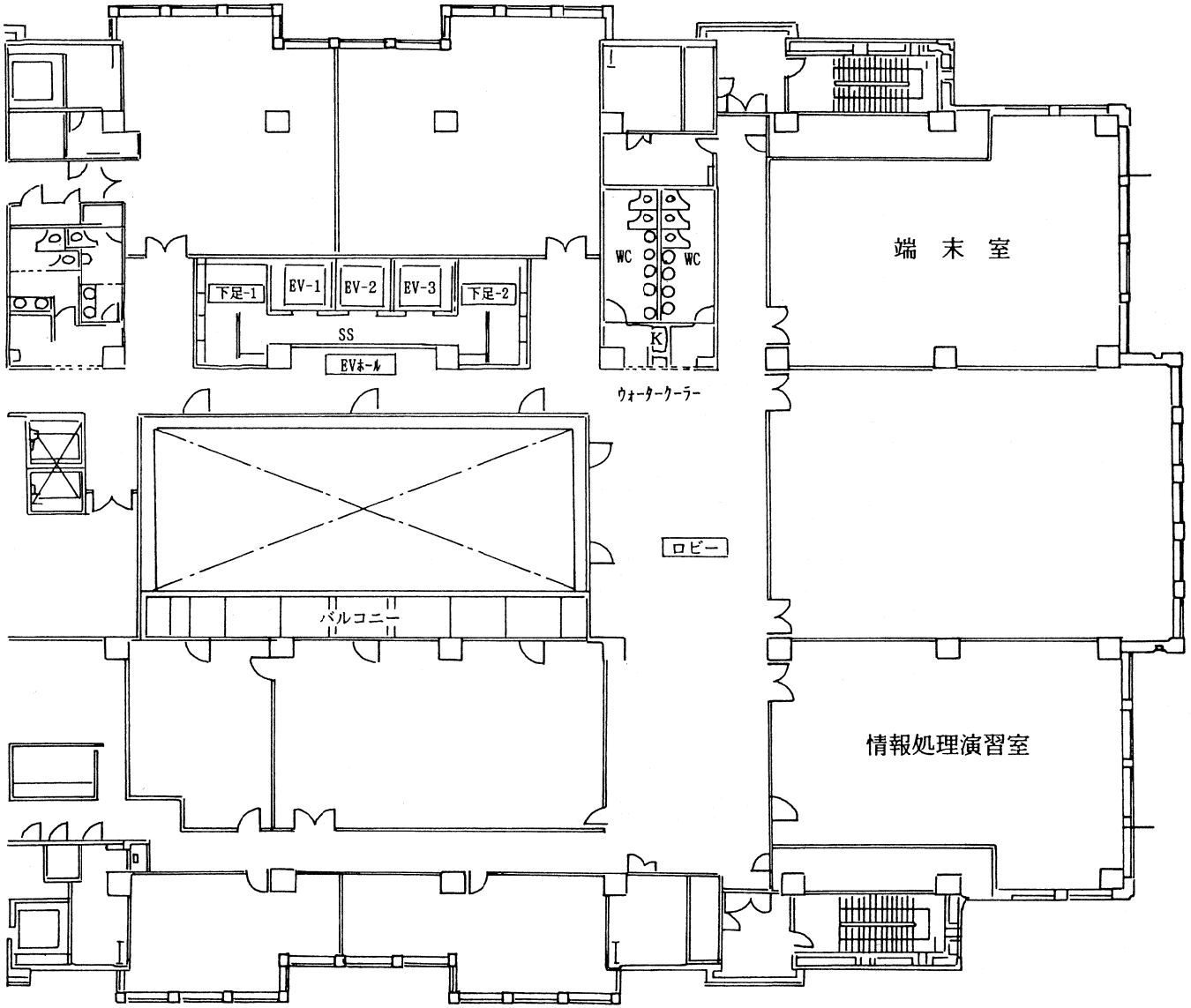

4　階
外国語特別演習室5
外国語特別演習室4
外国語特別演習室3
外国語特別演習室2
WC
840
841
842
843
844
845
846
847
EV
EV
WC
848
849
外国語特別演習室1
84A
5　階
850
851
英語教育開発センター
大学教育研究センター
EV
EV
WC
大学教育研究センター
85A

基礎教育実験棟



（1階以外はエレベーター及び階段部分を省略した。男子、女子、身障者用の便所は地階から4階の各階にある。）

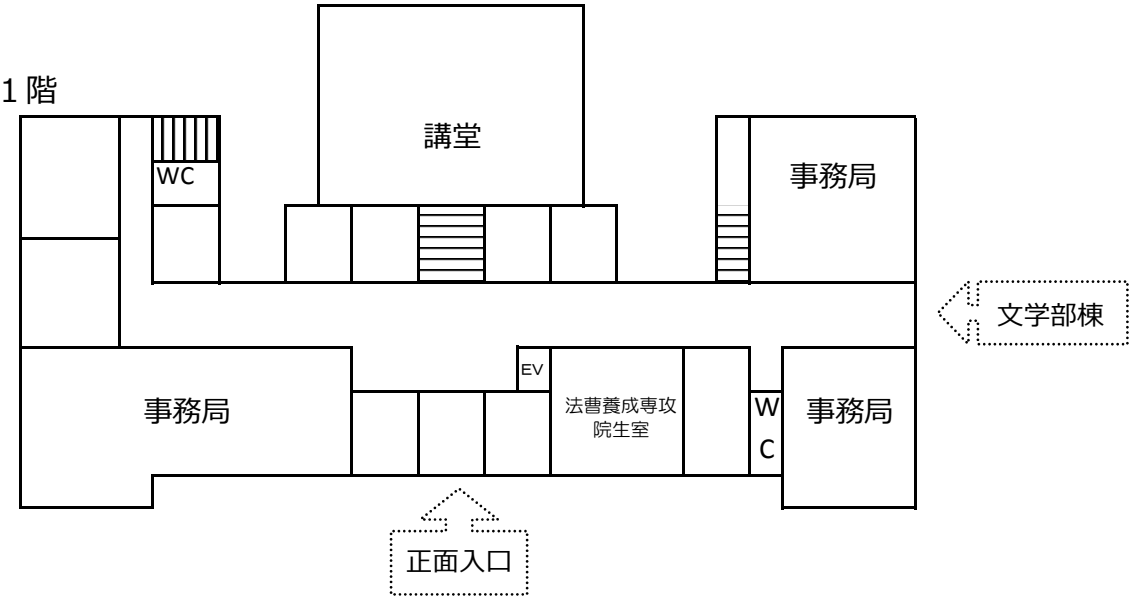
学術情報総合センター　９Ｆ



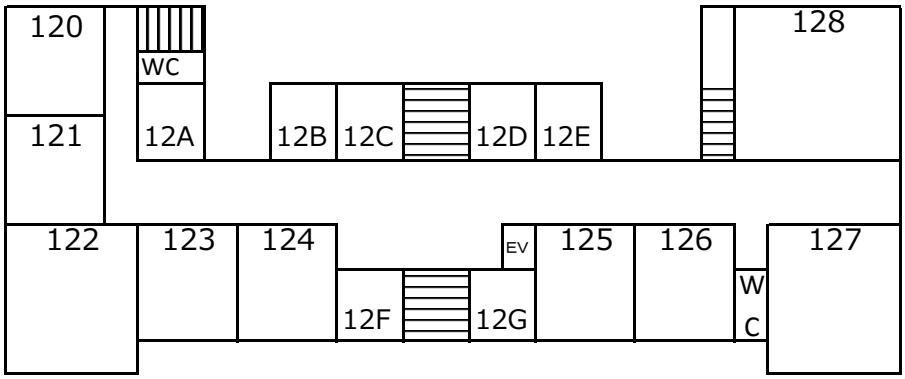
（西側省略）

1号館 教室見取図

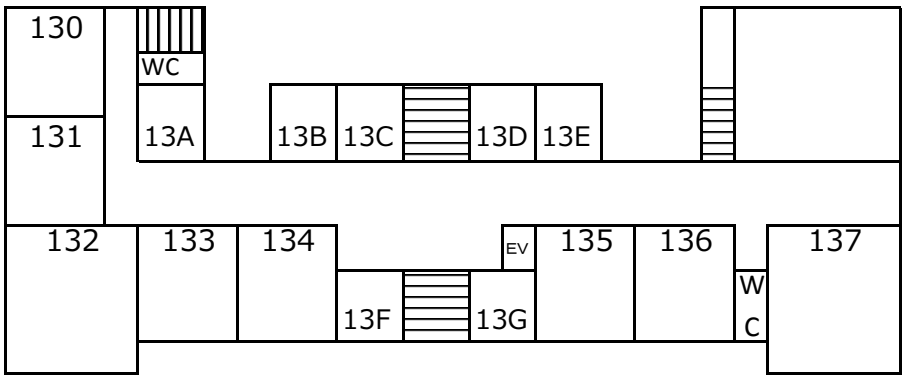
1階



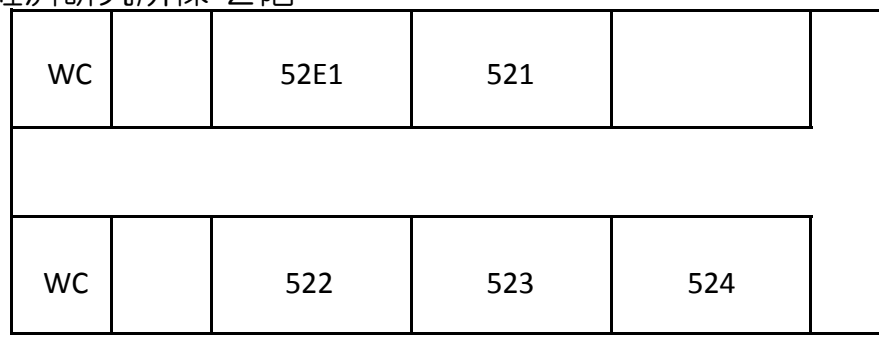
2階



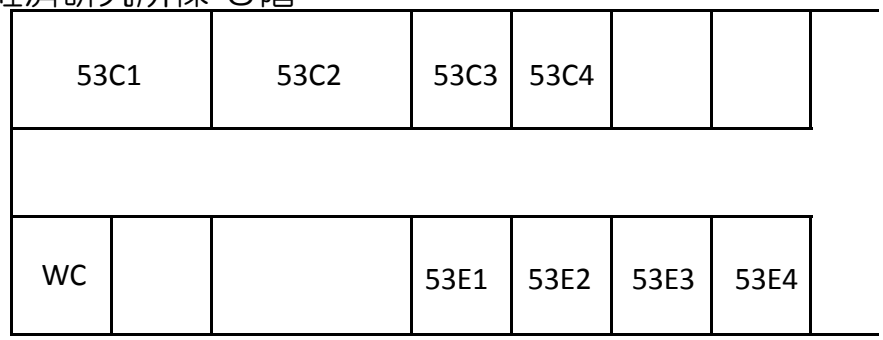
3階



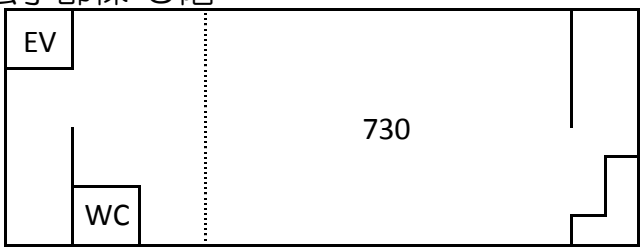
経済研究所棟 ２階



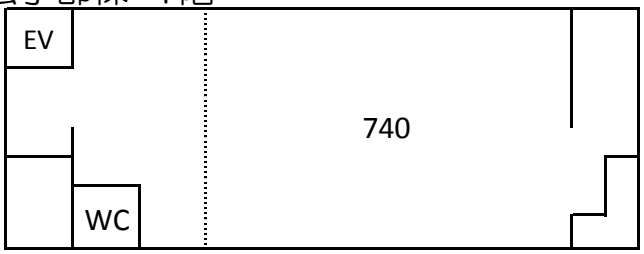
経済研究所棟 ３階



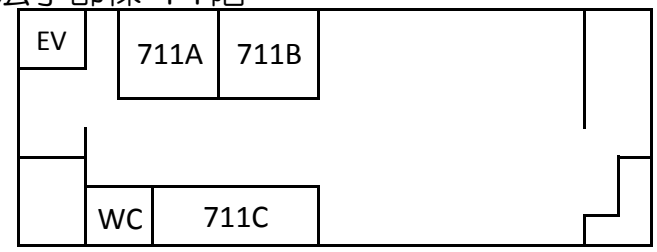
法学部棟 ３階

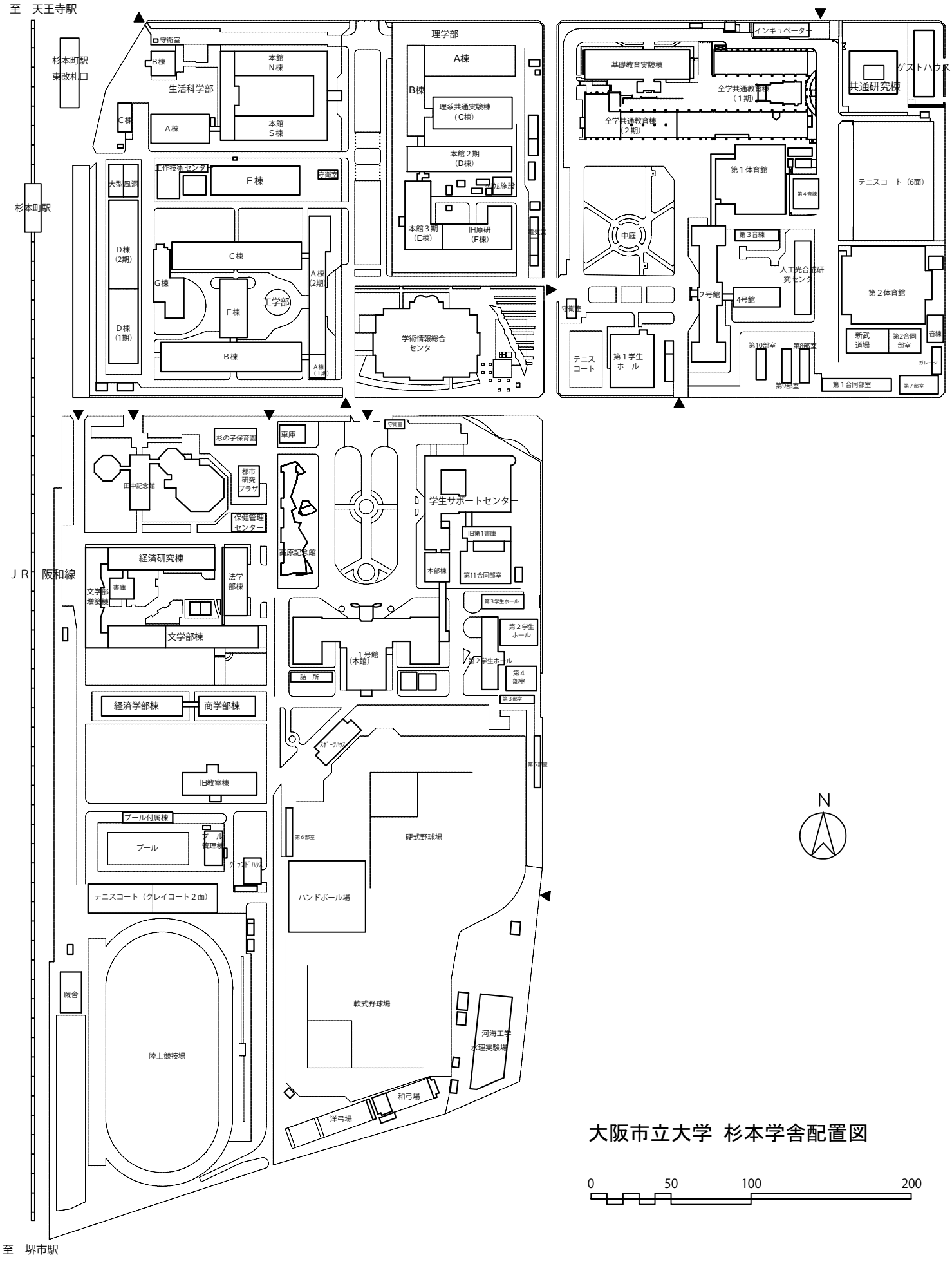


法学部棟 ４階



法学部棟 １１階





大阪市立大学　杉本学舎配置図